

---

# とある転生者の過負荷（マイナス）

クズ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある転生者の過負荷  
マイナス

### 【Nコード】

N1468Y

### 【作者名】

クズ

### 【あらすじ】

一瞬にして死人になった僕。気が付けばそこは死後の世界。そこで僕は、下っ端の死後の世界の管理人みたいなのに会った。ポイントが皆無な僕は天国にも地獄にも行けず、人生をやり直す必要がある。所謂転生だ。下っ端に気に入られた僕は大量チート能力が貰うことが出来るらしい。

・・・くだらねえ

大量チートなんか要らない

そんなの、過負荷一つで十分だよ

悪いことも良いことも、僕がぜーんぶ『無かったこと』にするから

## ブログ（前書き）

悔いはありません

初投稿にして始めてしまいました

駄目文ですが、どうぞ

## プロローグ

人生とは唐突にことが起きるんですね。

突然ですが、僕は死にました。え、いきなりすぎる？ それなら僕を木っ端微塵に爆死させた工事用ダイナマイトに文句を言うてください。

アレは普通の日でした。僕はいつも通り日課の朝の散歩に出掛けました。

外も良い天気で、小鳥などが鳴いており、とても平和な日でした。

僕も

機嫌が上々、まさに最高の朝でした。

僕の家付近には新しくビルが建設されることになって、どのような建物になるのかワクワクしていました。

それなのに・・・

アレは一瞬の出来事でした。

いつも通りビルの前を通ります。それは別になにもおかしくありません。

いつも通りちよつとだけビルを眺めます。それも別になにもおかしくありません。

いつも通りその高い頂上まで視線を泳がせました。それも別に何もおかしくありません。

すると、いつも通りじゃない物が上空に見えました。普通より一回り大きい小石のようで、徐々に迫ってくるのが見えました。危ないなあ、と思い、普通に右へ避けました。

次の瞬間、僕の意識は無くなりました。

最後に感じたのは、とてつもない浮遊感です。

で、気が付けば真っ白な世界に居るわけですよ。上も真っ白、地面も真っ白、壁の存在さえ疑わしいくらい真っ白でした。汚れも一つとついておらず、まさに純白の景色でした。普通の人なら見惚れているところですが、生憎と僕はその様な感情はないのですよ。

ちなみにここが話の没頭部分です。

今は状況を整理しようと、さっきまでの記憶を考え直していただけです。

ホント、どこなんでしょうね。

「ギャハハハハハハ！……！」

すると、突然下品で狂気に満ちた笑い声が聞こえました。

こんな笑い方、今だにする人が居るんですか？

その笑い声は徐々に大きくなっていき、やがては一人の人物がこちらに近づいてきました。

「ギャハハハハハ！！！！ お前、最高だよ！」

その人物は、ジーンズにＴシャツという今時の若い人が着てそうな服装で、

髪は真っ赤で血の色のようにでした。靴は履いておらず、裸足のままです。

「いきなり登場して第一声が”ギャハハハハ”はどうかと思いますよ？」

的確な突っ込み。なのに赤髪あかがみ(仮)さんは大笑いしたままです。

「ハハハハ！！ いやだって、あんな死に様だと誰でも笑うだろ！ギャハハハハハ！」

死に様？ ああ、あれのことですか。

「ギャハハハ！ ああ、悪い。つい面白くてな・・・ククク。はあ、これ毎回説明すんのも面倒だけど、お前は死人だ」

そんなの明白ですよ。貴方は二次小説などを読んだことがあるんですか？

大抵の場合は死んで真っ白な世界に行く 神様に会うというパターンです。

「そんなの分かってますよ」

「へえ、状況把握が早いな。さては相当な妄想癖があるな？」

「馬鹿なこと言っていないで、早く僕を天国でも地獄にでも送ってくださいよ」

僕はもう楽になりたいんですよ。さつさと天国でも地獄でも何でもいいから送って欲しいです。

「まあ待て待て。こっちにも”ステップ”ってのがあるんだよ。まずは・・・ククク、死因からだな」

さつきからなんで死因で大爆笑してるんですか？　なんというか、死に様で笑われると気分が悪くなります。

「お前の死因は・・・ギャハハハハ！！　工事用爆発物投下による爆死だってよ！

ギャハハハハハ！！　それって避ける意味がねえじゃねえか！！」

いい加減にしないと怒りますよ？　僕だって気は長くありません。

「お前の人生経験を調べさせてもらったけどさ、お前、親父が工事現場で爆発物を取り扱う仕事してんだろ？　それなのに爆弾で死ぬって・・・気の毒すぎるだろギャハハハハ！！！！」

そこまで笑われるって・・・



「まあ、話は終わりだ。とつと天国にでも行きな」

あれ？ それで終わり？ こういう展開って”神のミスでした、転生させます”って展開なんじゃないんですか？

「こういう場合って”神のミスでした。お詫びとして転生させます”って展開なんじゃないんですか？」

「はあ？ なに言ってるのてめえ？ 神がミスするわけねえってことぐらい

下っ端のオレでも分かるわ！ なんでもかんでも神のせいにするんじゃないねえ、

この無神論者が！」

この人は下っ端なんですか・・・想像していたのとかなり違いますね。

ま、仕方ないですね。さっさと天国で安らかに暮らしましょう。

「ん、ちよつと待て」

すると、赤髪さんはポケットからなにやらノートのような物を取り出しました。

かなり使い込まれてますけど、なにが書いてあるんでしょうか・・・

「プ、ギャハハハハ！！！」

ノートを見ると再び大笑いを始めました。さつきから笑ってばかりですね。

「お前最高だよ！ うん、実に面白い！」

なにが気に入られたんでしょうか．．．僕はまだ貴方とは初対面ですよ？

「いいか、あの世つつーか死んだ後の世界にはポイントってのがあるんだ」

ポイント？

「ポイント．．．ですか」

「ああ。生まれた時から死ぬ時まで人間は皆ポイントを持って生活してるんだ。

悪いことをすればポイントは無くなるし、逆に良いことをすればポイントが増える。

そして、死んだ後に行く場所がそのポイントによって決まるんだ」

なんというか、ゲームみたいですね。僕はどれくらいあるんでしょうか。

「それがお前と来たら．．．ギャハハハハハ！！」

いい加減笑い声が鬱陶しくなってきました。何回も聞いていると耳障りです。

「僕のポイントになにかおかしい点でも？」

「いや、まったく無いんだよ。でも、逆にそれが面白いんだよ！  
ギャハハハ！」

普通のなにがいけないんでしょうか？ 自惚れているわけではないですけど

僕は人生でなにも悪いことはしてませんよ？

「普通のなにがいけないんですか？」

「いや、だって、お前のポイントは生まれた時から一切変わってないんだよ！

つまり、生まれてから一度も良いことも悪いこともしてねえんだよ

！ それって

ある意味不可能じゃね？ ギャハハハハハ！」

言われてみれば、僕の人生ではあまり良いことも悪いことも起きてませんね。

普通に生まれて、普通に生活して、普通に生きていましたからね。

親戚や親が亡くなったりした時でも泣いた覚えはないですし、ただ寿命が僕より早く訪れたとは思いませんでした。それはある意味

大罪だと思いますけど。

「そしたら僕はどうなるんですか？」

「それが分からねえんだよ・・・これって今まで始めてのことだし、

オレも対応の仕方が分かんねんだよ。ちょっと待ってろ、今調べとくから」

すると、赤髪さんはポケットから小さいながらも分厚い本を取り出し、

ペラペラとページを捲り始めました。

「えーと．．．あつたあつた、”死人の扱い書”」

僕はゲーム機ですか。

「．．．おいおい、マジかよ．．．」

赤髪さんはなにやら驚いた表情になりました。

どうかしたんでしょうか？

「えーと．．．いいか、さっきも言ったと思うがお前のポイントは生まれた時

からまったく変わってない。つまり0のままなんだ。大抵の奴はポイントが0より

多かった時は天国で、0より低かったら地獄に行くんだ。でもお前はポイントが0

のまま。どちら向きでもないからどちら側にも送れない」

うんうん、つまり？

「つまり．．．お前はこれから人生をやり直す必要がある」

．．．はい？

人生を一からやり直す？　なに刑事ドラマの主人公が犯人に言うセリフ

みたいなことを言ってるんですか？

「どういう意味ですか？」

「お前はそのままもう一度生を受けることになる。その年齢のまま、

その状態のまま再び生き返る。所謂転生だ」

へえ、もう一度僕は生きれるんですか。周りにまったく干渉だったのが

この後に及んで役立ちましたね。

「ただ、この場合は幾つか条件がある」

条件？

「取り扱い説明書での条件は三つ。

生き返る世界はランダムに指定される。元々の世界かもしれないし、過去の世界かもしれないし、まったくの別世界かもしれない。

生き返った後はなんとしてでも寿命で死ななければならない。

もし事故や殺人で死んだ場合、お前はそのままずっと生死の狭間を永久に

さ迷うことになる。

死んだ後のポイントで今後が決まる。

さっきも話したがお前のポイントは0のままだ。つまり、良く生きれば天国で過ごせるし、悪く生きれば地獄で過ごすことになる。

再び0のままだと？と同じく生死の狭間に突き落とされる。

以上だ。分かったか？」

うーん、中々と厳しい内容ですね。気をつけないと天国か地獄に簡単に傾くような点数ですしね。

「分かりました」

「そしてだ、これは久しぶりに爆笑させてくれたお前への礼だ。よくある大量チートってのをやるよ。何個でもいいから好きに選べ」

ああ、あのテンプレートの展開ね

うん、でも僕の考えはもう纏まっているよ

「そんなのいらないよ」

「は？」

「僕に大量チートなんてそんな面倒なものは要らない。いや、”必要ない”と言った方が正しいかな」

「必要ないだア？ てめえ、おれ本気で言ってるのか？ お前も健康な高校生男子なら大量チートぐれェ欲しいだろ？」

うつん、全然

僕が欲しいのは”アノ”能力一つだけだよ

「僕が欲しいのはとある一つの能力だ」

「ほオ、それはなんだ、言ってみろ」

間を入れて、僕は笑顔で能力名を言う

「オールフイクション  
大嘘憑き。それがその過負荷マイナスの名前だ」

「おーるふいくしょん？」

なんだ、知らないのか？

週間少年ジャンプの愛読者なら多分有名なチート能力なのに

「オールフイクション  
大嘘憑きの能力は、『現実を虚構にする』すべてなかったこと。人類史上最低の過負荷マイナスです」

「現実を虚構にする？ おいおい、どんなチート能力だよそれ？  
大量チートは要らねえって言った癖によオ。それに、さつきから言  
つてる

過負荷マイナスってなんだよ？ 聞いたこともねえぞ」

「過負荷っていうのは、人間が稀に生まれながらに持っている才能のつらみ  
の呼び名です。自分にとって利益になるのが異常、自分にとって不  
利益マイナス

になるのが過負荷マイナスって呼ばれています」

僕が過負荷について説明すると、赤髪さんは「なるほど」と手を叩いて頷く

「そして、過負荷を持った人間は生まれながらの敗者で、不幸にしか耐えないような人類の屑です。僕にピッタリでしょう？」

過負荷は一見便利そうに見えて実はそうでもない

一度でも過負荷になれば一生幸せになれない、無才能で負けることしか出来ないような人間になってしまっんだ

ま、僕にはそんなの関係ないけどね

「・・・ギャハハハハ！！ 最高だよ！ お前、本当に面白い！

まさか自分の貰う能力が自分を不利にする能力なんて、傑作だ！ うん、気に入ったぜお前！ 分かった、お前にその大嘘憑きとやらをやるよ」

赤髪さんは僕の胸の辺りに手を置いて、目を閉じなにかを唱え始めた

すると、体の中に突然なにかが送り込まれるような感触に陥る

その感触が終わると、僕は自分に騒然とした

自己憎悪、劣等感、世界のくだらなさ

自分は最低だ、無才能だ、負完全だ



これが大嘘憑<sup>マイナス</sup>きの力、なのか．．．

「終わりだ。ついでに一つだけ能力を追加させてもらったぜ。なあに、くだらねえチート能力じゃねえよ。その能力の元々の所持者が使っていた能力だ」

大嘘憑きの元々の所持者が使っていた能力？

それってもしかして．．．

「『ブックメーカー  
却本作り』」

「お？ 知ってるのか？」

知ってるもなにも、それこそ

大嘘憑き以上に最低の過負荷じゃないか

「『ありがとう赤髪さん』『これで僕は負<sup>かんぜん</sup>完全になれた』」

「喋り方が違わくないか？」

過負荷というか却本作りの所為だよ

あの過負荷の効果を受けている人は皆こんな喋り方と思うよ？

「そついえばお前、名前はどつするんだ？」

名前、か．．．

話に夢中になり過ぎて考えてなかったな

「『前世と同じじゃ駄目なんですか？』」

「悪いがそりゃ駄目だ。他を選びな」

でも、過負荷として生きるのなら、  
それに相応しい名前が必要だ

しかも、『大嘘憑き』と『却本作り』を持っているんだ  
となると名乗る名前は一つしかないだろう

「『球磨川』」

「ん？」

「『球磨川<sup>くまがわ</sup>』『そう名乗るよ』」

「オツケー。じゃあ名前は？」

流石に同姓同名は嫌だな

だって、それだと『僕』という過負荷<sup>こしん</sup>じゃなくなるだろう？

”球磨川禊”に取り込まれて”僕”という存在が無くってしまう

「『うーん．．．』『じゃあ雪<sup>ゆき</sup>で』『流石に同姓同名は嫌だから、  
限りなく近い名前を選ばせて貰ったよ』」

「くまがわ そとぎ球磨川雪ねえ。うん、良いんじゃないの？」

決定、だね

「『ところで何時転生するんだい？』」

「今だ」

すると、赤髪さんは間を入れることなく僕を蹴りました。

いきなり不意を突かれたので必然的に僕の体は倒れる。

でも、地面に落ちるはずの背中が突然浮遊感を感じました。

下を見ると、そこには大きな穴。中は暗闇しか広がっていません。

「『せめて合図ぐらいくださいよ．．．』」

ちよつとした愚痴を零し、穴の中へと落ちていく。

「頑張れよー！ー！！」

最後に赤髪さんの声援が聞こえました。

さて、僕は一体どこの世界に送られるんでしょうか．．．出来れば元の世界がいいんですけど、そう都合良く事は運びませんしね。

ああ、ノンビリとした世界に行きたい．．．

まあ、どんな世界でも良いけどね

どんなことが起きても、僕がゼーんぶ『無かったこと』にするから

## プロローグ（後書き）

とても長いプロローグでした

過負荷が好きで始めた小説です

どうぞよろしくお願いします

一話 『んじゃ』『また明日とか!』（前書き）

駄・目・文

自分の駄目文さに本当に呆れます

ああ、誰か文才を分けてください

初めて感想をくださった方、評価してくださった方々、  
ありがとうございます

「話 『んじゃ』『また明日とか!』」

気が付けば僕は、遙か上空へ聳える建物の裏に倒れていた

体中に鈍い痛みが走っていて、頭痛も少々ある

僕は…生まれ変わったのか…

あまり実感が湧かないな

でも、事実僕は死んで、再び生き返った

こんな週間少年ジャンプに出てきそうな展開、  
実際にあるんだね

「『痛たたた…』」

死から開放感から思わず独り言を呟いてしまう

さて、僕の新しく来た世界はどうなんだろう

立ち上がり、辺りを見回してみる

幾つも聳える高層ビルと、隅で道を掃除するロボットのようなもの

そして、僕の世界では見当たらなかった電車などが幾つか見える

この世界はどうやら僕の元の世界と似ているらしい

少々技術だけ進んでいるみたいだけど

「おーい、その君！」

路地裏から観察していると、建物の影から突然声を掛けられた

そちらの方向を向いていると、一人の学生らしき少年が居た

学生服を着ていて、腕には緑色の腕章をしている

誰だろう？

「『ん？ 僕？』」

「ッ…！」

僕もそう少年に言うと、あの子は一瞬怯えたように見えた。

その表情は恐怖から軽蔑と憎しみの目に瞬く間に変わった

僕が他人と会話するだけで恐れられ、嫌われる…か

これが過負荷の欠点<sup>みりよく</sup>なのか…

「この辺りで大きなエネルギー反応があつたと  
通報があつただけど…君はなにか知っているのか？」

丁寧な口調でも表情はかなり警戒している

大きなエネルギー反応ねえ…



完全に僕じゃないか

「『うーん…』 『知らない』 『少なくとも僕は無関係だね』」

「とりあえず一緒に来てもらっていいか？ 見かけない顔だし、少し話を聞かせてくれないかな…！」

そう言っ作り笑いで僕に手を差し伸べてくれる

でも、その笑顔の裏には威圧的な瞳が宿っている

僕を完全に警戒し、軽蔑し、見下すような目だ

これからは過負荷として、いつもこんな目に耐えないといけないのか…

「『…うん、いいよ』 『でもさあ、僕、少し探し物をしているんだ』」

『よかったら君も一緒に探してください』」

そう言っ路地裏の奥に手招きする

友好的な笑顔を作って、できる限りフレンドリーに言っ

「…分かった。見付かったら直ぐ着いてきてもらいますよ？」

それに応じると、少年は僕が居る路地裏の奥に来てくれる

そして、少年が目の前まで迫った時…

「がアツ!!??」

少年の腹に数本の巨大な螺子が刺さり、  
更に両腕にも小さな螺子が幾つも突き刺され、  
壁に縫い付けられていた

うわ、痛そう…

「『あは!』 迂闊だねえ学生くん、過負荷<sup>マイナス</sup>相手に  
無計画に近づくなんて」 『でも安心して、僕は殺したりはしないか  
ら』」

「てめえ…!」

何本も螺子が突き刺さっているのにも関わらず、少年は僕を睨み倒  
している

「『良いのかなあ』 そんな態度をとって?」 『君の命はもう僕の手  
の平の中っていつのに』」

すると、今度はさっきより数倍大きい螺子を取り出して、少年の頭  
に近付ける

その行動に睨んでいた少年は涙目になる

「お願いだ! 命だけは助けてくれ!」

「『そんなテンプレ的な誤り方をされてもなあ…』」 『もう少しオ  
リジナリティのある  
謝り方をしてくれないと、僕も助ける気が失せるなあ…』」

「頼む！ なんでもするから！」

慈悲を悲願してくる少年

そんな少年を、僕はただただ笑いながら見ている

なんだろう、この感じ？

他人の悲痛の表情を見ると、不思議と満足した気分になる…

人を不幸にすることで、僕は満足できる

そうだ… そうなんだよ

過負荷はいつも迫害される、ならどうすれば  
他人に平等に接してもらえる？

他人を自分と同じ位置に墮おとせせばいいんだ

「『ホント？』『なんでもしてくれるの？』」

そう訊くと、少年はブンブンと頷いた

「『うーん、どうしよう？』『他人に命令できる機会なんて滅多に無いからなあ…』」

『あ、そうだ！』『うん、なにを頼むか分かったよ！』

『死んでくれない?』」

そう言つて、僕はその螺子を少年の眉間に  
ぶつ刺した

絶望の表情に染まつた少年はそのまま、  
氣力を無くしたかのように  
喚くのをやめ、目を閉じた

「『…なーんちゃって!』『よく漫画でこつこつ台詞があつたか  
ら、僕も

一辺言つてみたかつたんだあ!』」

そう言つと、僕は一つずつ少年の螺子を抜き取る

全部抜き終わると、僕は意識の無い少年に向かつてこつこつ言つた

「『だいじょーぶ、君のその傷は』『ぜーんぶ無かつたことにして  
あげたから』」

返り血塗れになつた顔で僕は、満面の笑顔でそう言つた

~~~~~

風紀委員第177支部は、大騒ぎしていた

先ほど見回りに向かった同僚の一人が、

路地裏で気を失っていたのだから当然とも言えるが

一部の者は同僚を襲った犯人の行方を追い、  
その他一部の者は精神錯乱状態に陥っていた  
同僚を、静めようと沸騰している

まるで臨死体験から抜け出した恐怖のような  
錯乱状態に陥っており、その惨状は凄まじかった

「一体誰がこんなことを…」

錯乱する同僚を見てそう呟くのは、

第117支部所属の初春飾利

圧倒的なコンピューター技術を持っており、  
そのハッキング技術は風紀委員でも重宝されている

あまりにも様子のおかしい同僚を他所に、  
初春は気分を変えようと路地裏から出た

そこで目に飛び込んできたのは、路地裏の出口の直ぐ後ろ、  
つまり自分の真横に居る少年

その少年の顔を見て初春は戦慄していた

少年の顔は、まさに返り血塗れだった

「『ん？』『あ、やべ！』」

初春を見るや否や、その少年は逃げるように走り出した

「あ！ 待ってください！」

慌てて初春はその後を追いかける

普段は身体能力が低く、逃げる犯人を捕まえることなど到底できない初春だが、なぜかこの少年にはどんどん追いついていった

そして、ようやくその少年の肩を掴んで捕まえた

「『ハアツ：ハアツ：ハアツ：』『やっぱ人類最低の僕が  
他人から走って逃げ切るなんて無理があつたかあ……』」

声を発した途端、初春はかつてにない気持ちに襲われた

ただ声を発しただけ

それだけで、この少年に対して説明しようのない憎しみを抱いた

「この人は気持ち悪い」と心の中で思いながらも、その少年に声を掛けた

「あの、貴方は誰ですか？ どうして逃げるんですか？」

「『だって、僕って証明書とか学生書とかまったく無いんだよ』  
『見たところ君達って警察みたいな連中だろ？』 『それなら捕まりたくないから逃げるのが普通だろ？』」

予想外のことを発した

証明書などが無い場合

つまりそれは不法にこの学園都市に侵入したという意味

学園都市の周りには巨大な壁が張り巡らされていて、  
進入する方法などは殆どなかった

「『あ、やべ』 『僕としたことが、返り血を拭いていないじゃないか』  
『あはは、いけないいけない』 『服は洗ったつもりなんだけどなあ』  
…』」

自分の顔の惨状に気付き、乾いた笑い声を出しながら、  
少年は自分の顔を袖で拭いていた

あまりに堂々と証拠を隠滅しようとする少年に、初春はただ呆れるばかりだった

「あの、一緒に着いてきてもらえませんか？」

「『嫌だ』 『だって今日、ジャンプの発売日じゃん？』」

『僕はこの日のために一週間を生き抜くんだよ』」

「そ、そんなのは後にしてくださいよ！」

馬鹿馬鹿しい理由に怒鳴るが、  
それでも少年は笑みを崩さない

「貴方の名前は？」

「『球磨川雪』 最近ここに来た高校生さ」

「では球磨川さん、一緒に着いてきてください。  
証明書や不法侵入の件では、そちらで訊きますので」

言われるがままに連行される球磨川

元々過負荷の所為なのか、身体能力が  
女子中学生のはずの初春より低いため、  
抵抗せず素直に着いていった

いやいや、ミスったぜ

興味本位での学生くんを放置した場所に行ったけど、



まさか警官で溢れ返っていたなんて

しかも、あの学生くんもまさか警官の一人だったとは…

ついてないぜ

今回は他の警官も多いから、僕は素直に連行された

本当は螺子伏せた後で逃走したいんだけどなあ

「『君も警官なのか？』」

「いえ、私は風紀委員という組織に所属しています。まあ、所謂学生で構成されている警察です」

「『へえ。ちなみにあの倒れていた学生くんも…』」

「風紀委員のメンバーです」

あはは、やっぱそうか

結局こうなってしまうのか…

「ではさっそく、貴方について話してもらえますか？」

風紀委員第177支部つて所の一室に連れて行かれた僕は、そのまま事情聴取という名の尋問を受けた

「『さつきも言ったけど僕は球磨川雪』『ついさつきここに来たばかりの

高校生さ』『よろしく!』『」

「私は初春飾利といいます。さつきですが球磨川さん、貴方はどうやってここに来たんですか?」

初めて自己紹介してくれた初春ちゃん

うーん、見るからに年下の女の子に尋問されるのは少し嫌だけど、しょうがないねこは

「『知らない』『気が付いたらあの路地裏に倒れていたんだ』『」

「どうやってここに来たか知らないんですか? (記憶喪失?)」

まあ、神様に送り込まれたなんて言えないし

「『うん』『だから僕はここが何処なのか、ここでの文化や常識はなんなのか、さっぱり分からないんだよ』『説明してくれば僕は助かるんだけど…』『」

「そうですか…此処は”学園都市”と呼ばれている科学の街です。ここでは科学的に解明された超能力を研究していて、ここに住んでいる殆どの人間は学生です」

おいおい、まるで少年漫画のような世界じゃないか

それに、学園都市か…どこかで聞いたことがありそうなんだよねえ…

僕はジャンプ愛読者だから他ではあまり覚えが無いけど

「『へえ、それはまた僕の少年心を撥るような場所だね』」

「でも、本来ここは正式な手続きをしないと入れないんですけど…」

まあ、僕はあの赤髪さんに落とされてきたからね

正式な手続きなんて一切働いていない

「『そういうのは何処でやるのかな？』『悪いけど、そうと分かれば僕は

一刻も早く手続きを済ませてさっさと平和に戻りたいんだけどなあ』

」

その方が面倒なことにはならなさそうだしね

新しい世界に來た初日で不法侵入者で指名手配されたらそれこそ  
過負荷以上<sup>マイナス</sup>に最低だよ

「あ、でも…（この人って一応不法侵入者だね？）」

「『まあまあ、そういう堅いこと言わないでよ』『そういう人は  
友達が減るぜ？』」

「よ、余計なお世話ですよ！」

僕なりの忠告のつもりだったんだけどなあ

「手続きはここで済ませてください。（記憶喪失なら良い、かな？）

「

そう言つて、なにか住所を紙に書くと、僕に渡してくれた

「『ん』『ありがとう』」

うん、じゃあさっそく

「『じゃあ、さようなら』」

この部屋から出ようとする

「あ、待つてください！ まだ話は終わっていませんよ！」

でも直ぐに扉の前までダッシュされ、出口を塞がれる

あはは、幾ら過負荷とはいえ、女子中学生に  
出口を塞がれて出れないなんて、滑稽な話だぜ

これなら人類最弱の楔さんもビックリする

本来ならここで彼女を螺子伏せてでも突破するけど、  
今日の僕は気分が良いんだ。ここは見逃してあげよう

「『ええ…』『僕は早く週間少年ジャンプを買いに行きたいんだ  
けど』」

「手続きを済ませるって言いませんでしたっけ!？」

あ、それもついでにやっておくよ

「はあ…もういいです。貴方は悪気があったわけでも無いと思いますし、もう帰っても良いです」

あは、とうとうそっちが折れたね

面倒臭かったけど、まあこれで不法侵入者で無くなるのなら、それで良いけどね

「『うん、ありがとう』『じゃあね』」

そう言って僕は扉に手を掛ける

あ、そういえば彼女に言っておかないといけないね

「『君、忘れてると思うから言っておくね?』」

「え、なんですか?」

「『君の同僚を螺子伏せたのって、僕だぜ?』」

そう言った途端に、彼女は動きを止めた

啞然と戦慄した表情のまま僕を見つめている

その惨状に、僕は笑みを浮かべながら背を向ける

「『んじゃ』『また明日とか!』」

一話 『んじゃ』『また明日とか!』（後書き）

駄・目・文

大事なことなので前書きと後書きで合わせて二回書きます

主人公を原作に組み込ませるのがここまで難しいとは思いませんでした

それに、初っ端から思いつきり暴れちゃっていますし

以前は『主人公の身体能力は原作球磨川本人

と殆ど変わらない』と書いていましたが、感想にて

その矛盾点を指摘されたので、『身体能力は球磨川より遥かに劣る』というものに変更させてもらいます

大変、ご迷惑お掛けしてしまいすみませんでした

はあ、もっと文才が欲しい…

二話 『僕は被害者だ』 (前書き)

今回は少し短いです



## 二話 『僕は被害者だ』

風紀委員の支部から離れて数時間が経っていた

今は適当に学園都市を散歩しているんだけど、  
その暇な時間で僕は考えたんだよ

この世界は少なからずとも元の世界とはかなり違う

超能力なんて技術があるんだ、幾ら”科学の街”って  
言われていてもこれはかなり非科学的だ

でも、そこで僕はあることを思いついたんだ

僕はもしかしたら、一人じゃないと思う

この世界は少なくとも僕の世界とは違う。

超常的なことは起こりえるし、非科学的なこともある

それなら、つまり、僕以外の他の過負荷も存在するかもしれないんだ

幾ら世界は違ってもこの世界のくだらなさ是不変

理不尽さも何も変わらない

そんな腐った世界なら、僕以外にも過負荷として  
生まれてきている人が居るのかもしれない

だから僕はもう、この世界でやることは決まった

僕は、この学園都市に住む過負荷を全員纏め上げてみせる

そして、能力者のエリート共に思い知らせてやるっぜ

マイナス  
人類最低の素晴らしさというものを

どうしよっかなあ

幾つものビルが並び、大勢の人で賑わっており、  
ショッピングモールや飲食店なども多数並んでいる  
場所を、僕は一人で歩いている

数多くの建物から発せられている電気などの光の  
所為で、夜とは思えないほど明るく、活発だった

そんな賑やかな道を僕は歩いているんだけど…

金、無いよ

元々僕はこの世界に来た時はなにもなかった

携帯は勿論、お金やパスポート、証明書なんて皆無だ

服装は神様がこの学生の街でも違和感が無いよう、学ランになっていた。赤髪さんなりの優しさかな？

はあ、これじゃあ週間少年ジャンプすら買えないじゃないか

何気に周りを見てみると、僕は面白いものを見つけた

大勢の不良っぽい高校生が、恐らくは中学生の一人の女の子を囲んでいる

どこから見てもカツアゲか、ナンパだね

今時そんなことする連中が居るなんて、ちよつと時代遅れとは思わないのかな？

…あ

あはは、いいことを思いついたよ

ここが漫画の世界だったら、多分”ニヤ”って効果音が出たと思つよ

「『やっほー！』『皆さん、こんばんはー！』」

お気楽的に、友好的に不良たちに挨拶した

突然声を掛けられたのに驚いているけど、あの女の子を含めて全員の視線が僕に移る

「ああ？ 誰だてめえ？」

「『ただの通りすがりの高校生さ』 『それより、僕』  
『君達に訊きたいことがあるんだけど、言っていいかな？』」

一人の不良が僕を脅すかの様に睨んでくる

それにも特に同様することなく、僕は話を続ける

「『女子中学生をナンパするってことはさあ』  
『君達全員ロリコンって意味？（笑）』」

僕の発言に周りの空気が凍ったかのように静かになった

不良たちは微動だにせず、僕を見つめている

やがて、硬直が段々と解けていき、その表情は怒りに染まっていく

「てめえ！ ふざけるんじゃないやねえよー！」

全員が僕に殴りかかってくる

あまりのそれなりに大人数だけど、特に問題は無いね

「あ、危ない！」

さっきまでずっと突っ立っていた女の子が  
心配したような声を上げる

あはは、まあ見るからに貧弱そうな草食系の僕が  
ガラの悪そうな不良に大勢で襲われたらそう思うよね

次の瞬間、不良たちの全員が一人残らず、  
幾つもの巨大な螺子で地面に螺子伏せられていた

「なッ！？　グ、ぎゃああー！！」

体中が螺子で貫かれている惨状を見て、  
不良の男の子たちは全員痛みで声を上げる

「『あはー！』『馬鹿だねえ』『人の危険度を測らず攻撃してくる  
のは

とても浅はかなことだぜ？』『それに、君達から攻撃してきたんだ  
から

正当防衛ってことになれるしね』『」

ついでに僕は全員のポケットから財布を抜き取った

「『じゃあ』『あばよ』『」

そして、用済みになった地面に平伏している男の子たち  
全員の後頭部に、巨大な螺子が突き刺さった

「「「ぎゃあああ！！！！」」」

一声を上げた後、辺りはシーンと静かになった

完全に計画通りじゃないか

過負荷だから自分の思い通りには行かないとは思ったけど、まさかこんなにスムーズに進むなんてね

服は返り血塗れになっちゃったけど、まあ

これは大嘘憑きで直せるけど

お金も手に入っただし、一件落着（？）

「『つて、ワオ』」

某風紀委員長みたいな声を上げると、  
僕の顔面の前をギリギリ雷撃が通り過ぎた

雷撃が向かってきた箇所を見ると、僕に  
向かって手を突き刺しているさっきの女の子が立っていた

「アンタ……！！」

敵意丸出しで僕を睨んでくる

それより雷撃ってなんだよ？

まるっきり漫画みたいな能力じゃないか

これが超能力なんだね

これは凄い、僕の少年心をここまで撥るなんて

「『おいおい』『なにをそんなに睨んでいるんだい？』」

「幾ら私が脅されてたとしても、これはやり過ぎよ！」

地面で血塗れになりながら体中を螺子で串刺しにされている不良たちを指差す

なんでこうなるんだよ…

「『あの人たちが攻撃してきた』『故に正当防衛さ』」

「自分から挑発しといて、何処が正当防衛よ！ お金だつてあいつらから盗んでるし！」

はあ、せつかく気分が良いからついでに助けてあげたのに、この仕打ちはなんだよ？

やっぱり過負荷に対しては理不尽だなあ

「『でも、事実あの子たちは僕に向かって攻撃してきただろ？』『貴方は僕に黙って殴られてボコボコにされろとも言っているのか？』」

「別に、私はそんなつもりで…」

「『僕は大量の高校生たちに袋叩きにされる所だったんだぜ？』  
『それなのに僕を凶悪犯扱いするなんて』 『横暴だよ君は』」

『僕は被害者だ』」

「ッ〜！」

声にもならない怒りの声を上げる中学生ちゃん

それは僕が行った行為に対しての怒りなのか、  
僕に論破されたからの怒りなのかは定かでは無いけど

「ふ、ざけるなア！」

再び電撃をぶっ放してくる中学生ちゃん

いきなりスイッチの入った全力の攻撃で、  
しかも僕を殺す気満々だ

過負荷の貧弱体質である僕にこんな攻撃は避けれるはずも無く…

「『う、うわアア！！！！！』」



僕は思いつきりその電撃を喰らい、  
真っ黒焦げにされた上に血塗れになってしまった

あはは、やばい、マジで死んじゃうよ

「えッ!？」

避けると思っていたのか、驚いている中学生ちゃん

「『あはは』『過負荷相手に手加減無しって』『えげつ無いぜ……』」

痛みと傷、そして出血多量で倒れてしまう僕

「あ、ちよつと!」

でも…

「なッ!？」

中学生ちゃんの頭上から大量の螺子が  
降り注ぎ、当たるか当たらないかのぐらいの  
距離で周りに突き刺さる

「『ふうー、危うく痛みで気を失っちゃう所だったよ』」

『流石に無意識での使用は出来ないし』」

無傷で僕が立ち上がるのを見て、中学生ちゃんは目を見開いた

「そんな!？（幾ら手加減していても、レベル5の電撃を直撃して  
無傷なんて…それにこいつからあふれ出てる負のオーラ…）」

「『はあ、これじゃあ僕が益々被害者じゃないか』『ま、その方が警察にも言い訳できるし、良いか』」

「アンタ、何者？ どうして私の電撃を受けて無傷なのよ？」

「『そんなの簡単さ』」

『君が頑張って僕に放った電撃を』

『君が自分の労力を使って僕を丸焦げにしたっていう事実を』

『無かつたこと<sup>……</sup>にただけさ』」

「は？（無かつたこと？ わけ分からないわよ！）」

僕の無能力の意味が理解できていないようだね  
マイナス

まあ、君みたいな能力者<sup>プラス</sup>が僕みたいな無能力者<sup>マイナス</sup>を理解するなんて絶対にありえないけど

すると、後ろからパトカーのサイレンが鳴り響いている

どうやら僕が不良たちを螺子伏せているのを見て  
誰かが通報したみたいだ

「『あは！』『僕もう行かなくちゃいけないよ』  
『じゃあまたね、中学生ちゃん』」

お別れの挨拶をした後、啞然としている中学生ちゃん

を他所に僕は歩き出した

「アンタは、絶対私が捕まえる！ 捕まえて、半殺しにしてあげるから、覚悟しろ！」

歩き出す僕に向かってそう怒声を放つ

あはは、実に強者ブラスのような台詞だね

でも、なんで僕はかり恨まれるんだろう？

あはは！ 憎まれっ子マイナスだから仕方無いよね！

三話 『僕と居れば、君は世界一不幸になれる』 (前書き)

一人目のオリキャラ兼オリ過負荷です

もし良かったら過負荷のアイデアなどあれば感想欄に書いていただけると嬉しいです

一種の募集ですね

僕の想像力ではあまり良い案が浮かばないので、良かったらどうぞ書いてください

出来る限り採用することにします

三話 『僕と居れば、君は世界一不幸になれる』

「『これください』」

「は、はい！ 625円になります！」

千円札をコンビニの店員に渡し、僕は会計を済ませる

そして、小さな袋を受け取り、そのままコンビニを出る

なにをしてるかって？ あはは、愚問だね

お金がやつと手に入ったんだからジャンプは  
直ぐにでも買わないといけないだろ？

ついでに食べ物も少し買ったし

あの中学生ちゃんとの小さな言い争いから  
一時間ぐらい経ってるけど、まったくすることが無いぜ

まず住居すら無いんだ

ま、それは正式に登録したら学校と共に  
与えられると思うけど、今は行く場所すら無い

それに他の過負荷に関しての情報もまったく無い

こんな学生みたいなお子様で溢れている都市なら  
過負荷みたいな噂も多いと思ったけど、意外と少ないらしい

訊き込みをしても僕が話しかけると皆逃げちゃうし

はあ、確かに大嘘憑きのお陰で死ねない体になったし、  
赤髪さんから与えられた課題は問題無いけど、過負荷が  
ここまで不憫だとはね

あの漫画を読んだ人は殆ど、” 過負荷とか異常性が欲しいなあ ”  
とか思うかもしれないけど、過負荷や異常性なんてとんでもなく不  
憫だよ

その他の人と比べるとかなりの異常性な分、避けられ  
迫害され、化け物を見るみたいな目で見られる

そんなの、常人じゃ耐えられないよ

だから過負荷や異常性を持っている人は少なからず  
性格や考え、理想が破損しているんだ

とまあ話を戻すけど、とにかく僕は訊き込みでも相手にされないんだ  
途方に暮れながら僕は深夜の道を歩く

すると、近くを歩いている二人組の興味深い会話が耳に入ってくる

《ねえねえあの噂聞いた？》

《あの噂ってなに？》

《こここの直ぐ近くにある廃墟に人が住んでるって

噂があるんだけど、その人に近づいた人は皆不運な死に遭ったんだって!」

《うわぁ! こわ〜!》

現代の女子ではもう定番の都市伝説のような噂話

でも、これはひょっとして…

「『ねえねえその二人』『ちょっと話を聞かせて貰ってもいいかな?』」

僕が話し掛けると、二人共ビクッと一瞬震えた

僕ってそんなに気持ち悪いのかな?

それともこの過負荷か、この括弧つけた話し方の所為かな?

「ひッ! えっと、なにか用かな…?」

少し震えた声で答えてくれる片割れちゃん

「『さつき話してた都市伝説の話なんだけどさ』『その廃墟って何処かな?』」

あの噂を聞けば、その廃墟に住んでる人って  
限りなく過負荷かソレに近い無能力のつうよくを持っている人だ

少なくとも過負荷側いすひがわの人間だ

それなら勧誘するのも悪くないだろ？

「あ、あっちです！」

近くにある廃棄された工場を指差して言ってくれた

見るからに”近寄るな”って異様な雰囲気を出している

あの場所は、普通の人なら確実に心霊スポットって呼んでいると思う

あはは、まあヒッキーには丁度良い隠れ家だね

「『ありがとう』『急に話し掛けて悪かったね』」

それだけ言い残して、僕はあの廃墟に歩き出す

この世界に来て一人目の僕と同類の奴

どんな最低か<sup>マイナス</sup>楽しみだよ

ちなみに後ろでヒソヒソと「あの人気持ち悪かったよね？」って話し声が聞えたのは無視しておくよ

さて、廃墟に入ってみたのは良いけど、真っ暗でなにも見えないなあ



せめて月でもいいからなにか明かりがあればなあ

「『おい！』『ここに居るのは分かってるからさあ、出てきなよ！』」

『安心して！』『僕は君の味方だからさあ！』」

試しに大声を出して所在を確認してみる

でも、それは空っぽの工場に響くだけでなにも応答は無い

留守かなあ？

すると突然、僕の後頭部に鋭い衝撃が走った

「『えっ？』」

地面に血が飛び散っていることから、僕は後頭部からかなり出血しているみたいだ

殴られるだけで血が飛び散るって、釘バットかなにかか？

「てめえ、なにもんだ？」

後ろからどこか野蛮な男の子の声が聞える

まあ殴られてるから当たり前だけど、どうやら留守じゃないらしい

「『痛ててて…急に殴るなんて酷いじゃないか』」

「勝手に人ん家に上がり込むてめえの方がひでえと思うが？」

まったく…元気な子だなあ

この子が”近づくとう不幸な死を遂げてしまう”と噂されてる男の子が少し乱暴な箇所以外は至って普通なんじゃないのかな？

「あ、それと、そこに居ると危ねえぞ？」

「『？』『』どういう意味か　『』」

次の瞬間、僕の目の前が鉄棒で埋め尽くされていた

頭は勿論、体中になりに重い鉄棒や工場の器具が落ちてきて、多分全身の骨が骨折してると思う

後頭部どころか頭全体が流血状態だけど…

「ああ、運悪くその器具を留めてる縄が切れちまったみてえだな。ソイツは不運だな」

「『僕が丁度落ちてくる箇所に立っていたのも不運だったって言うのかい？』『』」

瓦礫の中から這いずり出ながら僕はその男の子に訊く

「おッ、物分りが良いじゃねえか」

這いずり出て、どうにか立ち上がった瞬間、今度は

顔をさつき感じた鋭い衝撃が直撃する

ボロボロだった僕の体は更に吹き飛ばされ、壁に激突する

激突した衝撃で壁に取り付けられていた

古い棚が壊れてしまい、上に置いてあった器具も  
全て落ちてくる

その真下に居るのは僕

つまり

「『…まったく…痛く過ぎて笑うことすら出来ないじゃないか』」

ドライバーやカッターナイフが体中に突き刺さっている

痛い

これまでに感じたことに無い痛みだ

激痛で意識が無くなりそうなくらいだぜ

でも、この過負荷を手に入れてから

不思議と痛みに耐性ができているんだよ

打たれ強いって意味かな？

「まだ死んでねえのかよ。いい加減にしてくれよ…」

呆れたように頭を掻きながら僕にスタスタと歩いてくる男の子

僕の目の前まで来ると、胸ぐらを掴みあげて  
目線の位置まで無理矢理持つてくる

「『殺すのかい？』」

「あたりめえだろ。それこそ俺の生き甲斐なんだから」  
ポケットから彼はなにかを取り出した

暗闇の中で輝くそれは、鋭く尖っている  
”凶器”。真夜中の工場に僅かに漏れている月光  
によって露になる男の子の”狂気”

「じゃあな」

そのナイフを、僕の胸に、突き刺した

心臓を貫かれた僕は、力を無くし地面に倒れる

「はあ、まったく手間かけさせやがって」

意識の途切れる少し前に、彼がナイフを  
僕の胸から引き抜き、この場を去っていくのが見えた

「ちッ、また死体の処理かよ。面倒臭えな…  
つかアイツなにもんだったんだよ？ あの喋り方と  
独特な雰囲気、まるで俺と同じみたいな…」

「『同じさ』」

「なッ!？」

男の子の周りに無数の螺子が突き刺さる

勿論、一本も当ててないけど

「『君は僕と同じだ』 『同じ最低で、最悪で、負完全で、屑で、負け犬で、社会の塵で、不幸せ者さ』」

「てめえ…なんで…!」

無傷で彼の前に立っている僕に驚愕の声を上げる男の子

まあ、さっき殺した相手が目の前に立っていたら誰でも驚くよね？

「『おいおい、なにをそんなに驚いているんだい?』  
『君も同類なら分かるだろ』 『僕がなにをしたかぐらい』」

「意味が分からねえよ! てめえはなにをした! 何で生きてやがるんだ! てめえは俺が確実に殺したはずだ!」

曖昧に話を済ませている僕にイライラしたのか、怒りの声を上げる男の子

「『簡単さ』」

『君が僕を切り刻んだり』

『殴ったり』

『ボコボコにしたり』

『刺しまくったり』

『潰したり』

『殺したりしたことを』

『無かったことにしただけさ』

「なんだと…？」

代表的な驚き方をしてるね

何回も言うけど僕はテンプレが大嫌いなんだ

オリジナリティのもの以外は興味が殆ど無い

「『君の能力と同じ種類のものさ』 『僕が見る限り君は他人の運を最低にする能力みたいだね』 『うん、それは十分に最低で最悪な能力だよ』 『気に入った』」

「てめえ、なんで俺の能力を…」

どうやら当たりのようだね

器具が落ちてきたり、柵が壊れたり、

工具が僕に刺さったのも、ナイフが都合よく急所に当たったのも、全てこの子の過負荷が僕の運を低下させていたからなんだ

”運が悪かった”、まさにその通りだね

他人の運を最低まで低下させていたんだから

「『でも』 『僕の無能力は君以上に最低だ』」  
マイナス

そのまま一本の螺子を男の子の腹に突き刺した

「がアアツツ！！」

反撃されるなんて想定外なのか、避けれず痛みの声を上げる男の子

「てめエエエ！！ ぶつ殺してやらアア！！」

そう雄叫びを上げているけど、痛くて動けないのか地面に寝たままだ

「『あはは』 『別にそんなに怒らなくてもいいよ』  
『そんな傷は、僕がぜーんぶ無かったことにしてあげるから』」

僕は彼から螺子を抜き取った

すると、さっきまでの傷が嘘だったかのように綺麗さっぱり無くなっていた

痛みも無くなっている点も含め、男の子はただ啞然とするばかりだった

「そんな…馬鹿な…」

「『あはは』『驚いた?』『君の能力が運を最低にするのなら』」

『すべて  
なかったこと現実を虚構にする』、それが僕の大嘘憑きだ』オールフィクション」

あまりにも驚愕な僕の能力の全貌に、彼はただ啞然とするばかりだった

ちなみに却本作りブックメーカーは使ってないよ?

この過負荷は禁じ手だ、あまり迂闊に使うような代物じゃない

「『まあでも』『僕は別に君と戦うためにここに来たわけじゃないんだけど』」

「あア? 俺になにか用か?」

「『単刀直入に訊くけど』『僕の仲間にならないか?』」

「はア?」

僕の質問に疑問符を浮かべる男の子

今までの戦闘で僕は確信した、この子は過負荷だって

過負荷なら、仲間になろうなんて言われるのは初めてだと思うけど



「なに言つてんだてめえ？　なんで俺がお前の仲間になんなくちゃいけねえんだよ？」

「『君は恨んでいないのか』　『君をこんな場所に住まさせるこの世界に？』」

「ッ……！」

僕の言葉に彼は息を詰まらせた

「『君はなににも悪いことはしていないんだろ？』　『それなのに君はこんな廃墟みたいな場所に住まさせられていて』　『都市伝説扱いされている』　『そんな世界を』　『君は恨まないのか？』」

「……………」

とうとう無言になってしまった

自分を今までずっと恐れ、迫害し、恨んできたこの世界

それについて真剣に考えているんだろう

「『僕はね』　『君みたいな子を集めて』　『とあることを企んでいるんだ』」

「とあること……？」

そして、僕は満面の笑顔で目的を話す

「『君は見下されるのが嫌なんだろう?』」

『なら能力者を全員抹殺すればいいんだよ』  
『そうすればこの学園都市は平等で平和だ』

『君もそう思わないか?』」

「……おいおい、てめえ、頭イカれてるんじゃないのか? 能力者が何人居ると思ってるんだよ? そいつらを全員殺すなんて、できるわけねえだろ」

「『勿論一人で出来るとは思っていないよ』 『僕は世界で一番弱いんだぜ?』  
『そんなラスボスみたいなこと出来ないよ』 『だから仲間を集めるんだ』」

しばらく考え込む男の子

うーん、と唸ったりして相当考えているらしい

僕としてはYesと答えて欲しい

彼のような人材は是非とも過負荷側に欲しいものだよ

「俺になんのメリットがある？」

「『メリットって？』」

「お前のその能力者抹殺計画、それは全部お前の望みなんだろう？  
なら俺への見返りはなんだ？」

「『…僕は過負荷なんだ』 『無論メリットなんか一切無い』  
『ただ僕が出来るのは、一つの保障ぐらいだ』」

『僕と居れば、君は世界一不幸かわいそうになれる』」

「…ときめくじゃねえか」

僕の条件にニヤリと笑みを浮かべる

一見デメリットしかないようなこの条件

でも、彼も過負荷ならこの条件の意味を理解しているはずだよ

「分かったぜ。俺はてめえの  
仲間になってやる。名前はなんだ？」

「『高校三年生の球磨川雪』『よろしくね?』」

「高二の木更津敦だ。一年下だから、アンタの後輩ってことになるな。」

よろしく頼むぜ、球磨川先輩」

「『うん』『こちらこそね』『敦ちゃん』」

この世界に来て初めての仲間

『ミスフォーチュン』  
『負運性』の木更津敦くん

三話 『僕と居れば、君は世界一不幸になれる』（後書き）

まさかの途中まで主人公フルボッコ

まあ、人類最弱なので仕方ないと思いますけど

（オリ、または原作過負荷の説明コーナー）

この作品で新しく登場した過負荷はオリ・原作問わずここで説明します

まずは主人公の過負荷

『オールマイクシオン  
大嘘憑き』

『すべて なかったこと  
現実を虚構にする』能力

それが現実なら、それが起こったという事実を  
嘘として処理し、無かったことにする能力

所持者が死ぬと自動で発動し、所持者は実質  
死ねない体

『ブックメーカー  
却本作り』

作中に能力が使用されるまでお預けです

『ミスフォーチュン  
負運性』

周囲に居る他人の運を最低レベルまで下げる  
過負荷。その範囲は定かとなつては居ないが、  
近くに居るほど効果が強力になる

漢字の由来は不運の”不”を負に変えて、  
運勢を性つて変えただけです

想像力の無い自分ではこれが限界です…

#### 四話 『無才能だ』

「それで、これからはどうするつもりなんだ球磨川先輩？」

廃工場から出てくる敦ちゃんはそう僕に訊いてきた

彼とは行動を共にすることにしたんだ、  
まあ初めての仲間だしね

敦ちゃんはこれから増えていく過負荷の  
副リーダー的な存在になって欲しいからね

僕の思考とかを理解してもらいたい

「『うーん』『どうしよっかなあ』『僕はここにはつい最近  
来たから部屋とか学校とかは無いんだよね』」

「どうするんだよじゃあ！？ 今日野宿でもしろっていつのか！」

僕の現在の状況を知ると、敦ちゃんは  
驚きの声を上げ、僕に怒鳴ってきた

「『部屋を見つけられなかったらそうなるね』『まあ、君も  
似たようなものだろ？』『工場に住み着いてたし』」

「けどなあ、あそこはやっぱり寒くて寝辛いんだよ。  
ま、野宿するんなら俺はかまわねえけど」

工場で寝るのも殆ど野宿じゃないのか？

屋根があるだけマシだけど

「『明日にでも登録するからその時に部屋を貰おうよ』『ついでに学校も』」

「おいおい、俺はガツコなんか行かねえぞ。そもそも俺たち過負荷にガツコなんて必要なのか？」

ちなみに敦くんには過負荷については大体説明した

最初はこんなおとき話みたいな話は信じなかったけど、本人は自分の能力や思想を考えたら納得したそうだ

これで一人目だね

せめて後三人ぐらい欲しいよ

過負荷勢力は僕を含める主戦力の五人とその他のメンバー多数が良いな

ま、そんな都合良く集まるとは思わないし、精々僕を含めて五人で限界かな？

「『ここは学園都市なんだよ？』『学校に行かないと怪しまれるかもしれないじゃないか』『僕はこれでもかなり警戒されているんだよ』」

「警戒？」



「『風紀委員の子を一人螺子伏せちゃった』」

「なにやってんだよアンタは！」

冷たいなあ敦ちゃんは

「『まあ証拠不十分で多分捕まらないと思うよ？』『その子も今は精神科の病院に入院してるから証言なんて得られないし』『なによりに僕に』

関しての記憶も無かったことにしたから一先ずは安心さ』」

傷を無かったことにしたついでに僕への恐怖以外は無かったことにしたから、僕がやったという証拠なんて何一つ無い。状況証拠だけで決められそうで怖いけど

「改めて考えると、球磨川先輩はとんでもねえ能力を持ってるんだな」

「『この能力だつて弱点ぐらいあるよ？』『一度無かったことにしたのを』

無かったことには出来ないし』『気をつけないとこの世界そのものを無かったことに』

しちゃうかもしれないんだ』『ま、つまり僕は自分の中に核爆弾を抱えているんだよ』」

気を抜いて制御が雑になると本気でこの世界が無かったことになるから怖いんだよね

だって、うっかりと世界を消しちゃったらエリート抹殺もクソもないだろ？

「ただけ出鱈目な能力なんだよ、その大嘘憑オールフイクションきつてのは…」

「『あはは』『よく言われるよ』」

~~~~~

「『…ん?』」

朝の日差しが目に照らされ、僕は起きる

夜は明け、辺りはすっかり早朝だ

小鳥の鳴き声が鳴り響き、学校に登校している  
学生達も見える

全員が公園で座ってる僕のことを変な人を見  
るような目で見てるけど、なんでかな?

涼しい朝の風が僕の服を通る

まったく、なんとも快適な朝だ

「『おーい!』『敦ちゃん』『もう朝だぜ?』」

「あア?」

僕の声と共に敦ちゃんも起きる

彼は機嫌が悪そうだ、顔色も優れないし

朝は苦手なのかな？

低血圧はいけないぜ？

「『明日はさっさと起きて登録しようって  
言っただのは敦ちゃんだぜ？』」

「でも流石に七時起きは久しぶりだ…」

これからは学生なんだから、それぐらいガマンしてくれよ？

ちなみに僕は滑り台で、敦ちゃんは砂場で寝ていた

僕は寝癖で髪の毛が所々はねてるけど、  
敦ちゃんは砂塗れだ

なんであそこで寝たんだ？

「『敦ちゃんは馬鹿なんだね』」

「んだとてめえ！」

いけないいけない、つい考えが言葉として出てしまった

僕たちは公園から出て、初春ちゃんがくれた  
紙に書かれた住所へ向かった

「その紙、誰からもらったんだ？」

「『風紀委員の子に事情を話して教えてもらったんだ』  
『ご親切に住所まで書いてくれたしね』」

「風紀委員につて、アンタなにしたんだよ……」

殺人未遂ですけどなにか？

もちろん、それは口には出さないけど

「『着いたよ』」

「早えな！　どんだけ近くにあったんだよ！？」

「『公園の直ぐ近くで助かったね』」

公園の直ぐ近くにあった事務所に僕たちはたどり着いた

二階建ての建物で、小さな会社のような場所だった

こんな所で登録をするんだね

「『敦ちゃんはどこで待ってて』『直ぐ戻ってくるから』」

そう言つて、僕は建物の中へ入っていった

「『敦ちゃんただいま』」

十分ぐらいしてから僕は戻った

僕はただ名前と年齢を教えただけで、  
他の書類とかは全部やってくれるらしい

イメージと全然違うけど、こんなのでいいのかな？

「どうだった？」

「『第七学区で部屋を貰ったよ』『学校は身体検査システムスキャンを受けた後だったさ』」

まあ、結果は分かっているけどね

無才能マイナスの僕が超能力プラスのような才能を持っているわけないだろ？

「身体検査って、俺たち過負荷に検査なんか必要なのか？ 結果なんて確かめなくても分かっているしな」

敦ちゃんも過負荷というのを段々理解し始めているね

「『ま、学校へ行くためには必要だからさ』『面倒だけど受けるよ』」

『検査は一応通う予定の学校ってことになってるし』」

転入生ってこともあってあまり良い学校には行けない

第七学区にある学力が比較的低い高校だったと思うよ

僕は一応高校三年生だからそれ相応のクラスになるけど

「『敦ちゃんはどうするの?』」

「俺は適当に学園都市を彷徨ってるよ。学校にはもう行けねえし、他の過負荷も探しとくよ」

敦ちゃんは元々学園都市に居た存在

つまり一度は学校に行ってるって意味だ

でも、彼は恐らく高校を中退してると思っから、もう学校へ行くのは無理だね?

一度やめると再び学校に入るのはかなり難しいって話だし

「『じゃ』『一先ず別れようか』『じゃあ敦ちゃん』『また後で』『」

「ああ、球磨川先輩も精々ボコられねえようにな」

お互い手を振って、僕は学校へ、敦ちゃんはどこか適当なところへ向かって歩き出した

「やあ、君が球磨川雪くんか？」

「『はい』『そうですよ』」

僕が学校にたどり着くと、校門で教師の一人が待っていてくれた

多分あの登録会社から連絡があつたんだね

なにからなにまでお世話になるなあ

「はっはっは、面白い喋り方だな」

「『括弧つけた喋り方ですよ』『他の人はこの喋り方は気持ち悪いって言ってますけど』」

この先生はどうやら僕の括弧つけた喋り方を気に入ったみたいだ

大抵の人は僕が話すだけで怖がるんだけど、この先生はかなり器が広いみたいだ

「俺は独創的だと思うぞ！ ガハハ！」

教師は豪快に笑ってみせた

なんともテンションの高い人だね

「ま、そんなことより、さっさと済ませるか。着いて来い」

先生は僕を学園の中へと案内してくれた

中は至って普通の校舎だった

普通の教室、普通の生徒、普通の先生

全てが<sup>ノーマル</sup>普通

<sup>マイナス</sup>過負荷の僕が<sup>ノーマル</sup>普通の学校に行くなんて、なんとも滑稽で気の毒な話だ

「ここで身体検査を受けてもらう。なーに、この機械に寝てもらっただけだよ」

僕が案内された部屋に置いてあったのは、大きな機械だった

真ん中あたりに一人が通れるぐらいの穴があって、台に僕を寝かせた後そこを通らせるらしい

それで超能力の有無、そしてレベルが分かるんだって

能力者のレベルは強さ

上から5、4、3、2、1、0とあって、

レベル5が最も強力なんだ

レベル5はこの学園都市では七人しか存在していなくて、その一人一人が

軍隊の歩兵中隊を相手に勝てるらしい



それに比べてレベル0は無能力者

なんの超能力も無く、基本的に普通<sup>ノーマル</sup>な人間のことだ

ちなみにレベルにちなんでそれぞれの能力者に総称がある

レベル0は無能力者、レベル1は低能力者、レベル2は異能力者、レベル3は強能力者、レベル4は大能力者、そしてレベル5が超能力者

それぞれ区別が付くように決められている

ま、僕はレベル0に当て嵌まるんだけどね

「この台に寝転がってくれ」

言われるがままに僕が台に寝転がると、

台が動きだし、僕をあゝ機械の穴へと通した

ゆっくりと通過していく僕の体を、

なにか光のようなものが通る

これだけなんだね

まあ、超能力は脳を調べるだけで分かるらしいからね

「終わったぞ。今結果を検討しているから、少し待っていてくれ」

検査が終わり、僕は再び学ランに着替える

「結果お前は…レベル0、無能力者だ。残念だったな」

ほらね、過負荷に超能力なんか無いんだよ

そんなのを持っている過負荷は、既に過負荷じゃない

フラス  
能力者だよ

「別に超能力なんか欲しくありませんし」

『がっかりというわけでも無いですよ』

「ま、本人がそう言うなら俺はなんにも言わん。それより入学おめでとう。」

もしお前のレベルが高かったら他の学校に移らせるつもりだったんだが、レベル0ならここに通っても大丈夫だろ。じゃ、明日からガンバレよ」

「『へーい』」

今日はもう用済みになった部屋を後にし、僕は教室の廊下で立ち尽くす

現在時刻は朝の九時

まだ起きてから一時間しか経っていない

はあ、どうしよう？

携帯とか無いから敦ちゃんには連絡が取れないし

新しい自分の部屋にも戻るのは面倒臭いし

「『うーん……』」

しばらく顎に手を当てながら考える

あ、なら良いこと思いついたよ

他の教室を見学しようよ

そうすれば他の過負荷を見つけられるかもしれないし

そうと決まればレッツゴー

無駄に高いテンションで僕は学校を歩き出した

「『ん？』」

しばらく教室を転々としていると、僕の目に  
一つの教室が止まった

ここだけが異様の雰囲気を出していた

窓から中を覗いてみるけど、やっぱり中は普通の教室

ツンツン頭の生徒とか、サングラスをかけた生徒とか、  
関西弁を話す生徒とかも居たけど、それでもまだ普通だね

でも、端から端を除いていると、一人の生徒が僕の目を捉えた

教室の隅に縮こもっている一人の女の子

無表情でなにも考えておらず、他とは  
別の世界に居るような雰囲気、そして  
他人を拒絶するような目

でも、そんなことよりも彼女の周りが  
僕の興味を引いた

彼女の周りにはなにも無いけど

そう、何も無いんだ

「『彼女』 絶対に同類ほくたちじゃないか」

決めた

僕は彼女の最低を

底辺を

負完全を

負け犬らしさを

「『受け入れてあげようじゃないか』」

## 五話 『受け入れるんだ』

「『お邪魔します』」

僕はさっそくその女の子の居る教室の中へ入った

今は休み時間なのか生徒たちは席を立って

友達などと話していた

ま、授業中じゃないだけマシかな？

急にこの学校とは別の制服を着た

生徒が入ってきて他の子たちは驚いていたけど、

それに得に気にすることなく僕は女の子の席へ向かった

目の前に立つと、今まで地面に俯いていた

女の子はそっとこちらを見上げた

さっきまで気付かなかったけど、

何気に可愛いじゃないか

ま、その瞳は最低マイナスだけど

「『こんにちは』」

「…こんにちは」

挨拶すると、その子は小さく、弱々しい声で答えてくれた

「『そんなテンション低くして、どうしたの?』 『ほら』  
『そんなに悲しく<sup>マイナス</sup>になったら可愛い顔が台無しだぜ?』」

「……」

これはセクハラ発言だと思うけど、そういうのは気にしないでくれ  
僕に罪悪感なんて欠片も無いけど

だって、僕は悪くないんだもん

「『ま、冗談は置いて……』 『放課后会えるかな?』  
『少し君とお話がしたいんだ』」

彼女の過負荷の能力の確認と、彼女の勧誘だけどね

「……いいですよ」

彼女は興味が無さそうだけど、一応は了承してくれた

うん、これでよし

後はこちらに引き入れるだけ

「おいちよつとアンタ!」

満足気に僕は帰ろうとするけど、一人の  
生徒に呼び止められる

声からすれば男子生徒だと思う

まあ、声質はどこまでも幸せ者<sup>プラス</sup>だけど

「『ん』『なに?』」

振り向いてその呼び止めた子を確認する

僕に声を掛けたのは、さっき窓の外から覗いていた時に何気に見たツンツン頭くんだった

「他所の学校の奴が、勝手に人の教室に入ってなにしてるんだよ！彼女だって困ってるだろ？ ほら、もう大人しく帰ってくれよ」

どうやら彼は僕が突然入って来たのを気に入らなかつたらしい

それか、このクラスに居る全員の生徒が思っていることを代弁したんだろう

まあどっちにしろ、彼は偶に居る正義感が強い子だよ

他人から頼まれたことは断れず、

困っている人が居たら放っておけないタイプだ

あはは、僕だって同じだろ？

見<sup>マイナス</sup>下される人が居るから僕は超<sup>エリート</sup>能力者を

全員殺してこの街を平等にして彼等を幸せにするんだぜ？

対象が違っただけで人を助ける点では同じだ



正義と偽善、どちらが正しいんだろうね

「『うるさいなあ』『もう帰るって言っただから』『いいだろ?』」

マイナス性をむき出しにして彼に笑顔を向ける

笑顔は人間にとっては最大のポーカーフェイスだ

こういう時に笑顔を作れば、誰だって退くんだよ

「ッ……!」

案の定、彼は僕を離してくれた

「『あはは』『君は面白い子だね』『名前は?』」

「……上条当麻だ」

「『僕は球磨川雪』『もしもう一度

会うことがあったら』『その時は仲良く友達になろうね?』」

さっきまで気付かなかったけど、彼はかなり興味深い

彼に掴まれた時、彼の右腕からとてつもない”何か”を感じた

超能力とも、才能とも違う”何か”を彼は持っている

これは興味深い人だね

僕は手を振って、彼に別れを告げた

「『案外時間は早く進むんだね』『まあこれは作者にも都合が良いみたいだし』」

あれから放課後まで僕は適当に  
この学校を彷徨っていた

頭の中で誰かが「キングクリムゾン！」と言った  
気がするけど、気のせいかな？

まあそれよりは、あの子とやつと話せる

「『あ、居た居た』『おーい！』『こっちだよおー！』」

校舎から出てきた彼女を、僕は大声で手招きする

それに気付いた彼女はそのまま僕に向かって歩いてきた

「…会う約束を覚えていたんですね」

「『君みたいな可愛い女の子と会える  
約束を忘れるわけ無いだろ？』」

そのまま僕と彼女は人目の付かない所を探しに歩き出した

まあ、僕は彼女に着いていつてるだけで、  
場所は全部彼女に任せてるけど

「…ここなら誰にも聞かれませんね」

僕たちは校舎裏で向かい合うように立っていた

よくジャンプの青春漫画で不良が  
生徒をボコボコにする場所みたいなものだよ

まあ、過負荷の僕はそういうのには耐性があるけど

「『もしかして人目を気にしてくれたのか？』 『あはは、  
気が利くんだね』 『ありがとう』」

まだ世間に過負荷<sup>マイナス</sup>という存在には気付いて貰いたくないからね

「『ところで君、少し訊きたいんだけど』」

「…なんですか？」

「『君』 『おかしな能力とか無いか？』」

「ッ…！」

僕がそう訊いたら、一瞬彼女の表情が歪んだ

恐らく心当たりがあるみたいだね

「…一体なんのことですか？」

「『僕には分かるんだよ』『いや、過負荷には分かるんだよ』

『ほら、戯言シリーズでも』 零崎は他の零崎を感じられる”って言うたろ？」

『それと同じさ』『過負荷は他の過負荷の存在を感知できる』」

彼女は僕の問いの意味が分からないと言うが、僕は自分の特技というか過負荷の性質を教える

過負荷には過負荷が分かる

つまり、彼女も感じてるはずだ、僕が彼女と同類だっていうことを

「『ほら』『こうして近付けば君だって分かるはず』」

「来ないでください！」

すると突然、僕は後ろに向かって吹き飛ばされた

まるで全身を衝撃波が襲ったようで、そのまま校舎の壁に叩きつけられる

「あ…」

「『いててて…』『これが君の過負荷の力なんだ？』」

「くッ…！」

フラフラと立ち上がりながら僕は  
そう言う

後ろの壁が少し窪んでたけど、修理大丈夫なのかな？

まあ、僕は悪くないけどね

「違います！ そんなものなんてありません！  
とにかく私に近付かないでください！」

そう言い切るが、そう言ってる時にも衝撃波は  
襲ってきて、再び吹き飛ばされる

今度は壁にこそ叩き付けられなかったけど、  
かなり遠くへ飛ばされたよ

でも、これで確信が出来た

「『君の能力の正体が分かったよ』『あらゆる物を  
拒絶すること』『それを周囲から遠ざける能力だ』」

ようするに、嫌いなものは根こそぎ吹き飛ばしてるんだよ

まったく、我が儘な子だな

「ッ…！ それが、どうしたって言うんですか！」

「『いや、別になにも悪くないよ』『見るからに君は制御できていない  
と思うし』『君のせいでは無いよ』『僕はただ君の能力の確認をしただけだから』」

ま、この能力も十分最低で自分勝手な能力だよマイナス マイナス

「『でも僕は』『そんな能力を持っている君が必要なんだ』」

「私が…必要？」

「『そう』『君みたな能力を持っている子を過負荷って呼ぶんだ』『過負荷っていうのは、自分が不利になるような能力の呼び名だね』『この過負荷を持った子はみーんな最低で底辺な人間なんだ』『もちろん僕もその一人だけだね』」

僕がこの子に過負荷について説明すると、彼女は信じられないのか首を横に振る

「違う…！ 私はそんな変な能力は持ってない…！」

「『現実是否定するものじゃないぜ？』『事実君は僕を吹き飛ばして』」

『骨を数個折ったんだぜ？』『まあそれは直ぐに僕が無かったことにしたけど』」

骨が数本折れたことに彼女は驚いていたが、  
”無かったことにした”という言葉に疑問符だった

「無かったことに…？」

「『そう』」

『すべて なかったこと 現実を虚構にするのが僕の過負荷、マイナス オールフィクションのつりよく 大嘘憑きの欠点さ』」

あまりに衝撃的な能力の内容なのか、今まで無表情だった彼女は始めて”驚愕”という感情を見せた

「…私に他の人とは違う”何か”があるのは認めます。でも、なんで私が貴方の仲間にならないといけないんですか？」

彼女が必要という僕の言葉に本人はとても怪しんでいる

まあ、彼女が本当に過負荷なら、必要とされたことなんて一度も無いと思うけど

「『それは』『君が過負荷だからさ』『それ以上に理由は無いよ』『え…？』」

「『僕は君みたいな子を集めて』『この学園都市に存在する<sup>ヘリット</sup>能力者を皆殺しにしたいんだ』『そのために君達みたいな子が必要だ』」

目的をいとも簡単に話す

別に秘密にしなくてもいいしね

だって、もし彼女が仲間にならず、それを敵に報告しようとして

も、

彼女の僕に関しての記憶を『無かったこと』にすれば済むしね

「でも、私が過負荷という科学的根拠は…」

はあ、まだ言ってるのかよ

しょうがないね、ここは一つ本当の過負荷を見てもらわないと

「『いつまで否定するつもりだよ…?』」

「ひッ…!」

マイナス性全開にしたせいか、彼女は少し怯えてる

本当は僕もこれをしたくは無いんだけどね

僕は悪くないけど

「『いつまで現実を否定するつもりだよ?』 『君は間違いなく過負荷だ』 『過負荷の僕には分かる』 『君はただ受け入れていないだけだ』」

「受け入れて…いない?」

「『そう』 『君の身の回りに起こる不幸を全て

”受け入れる”んだよ』 『自分は屑だ、塵だ、負け犬だ、最低だ、幸せになんかなれないって』 『認めるんだよ』」

徐々に、でも確実に彼女を過負荷へと墮としていく



「『受け入れるんだよ』

『不条理を』

『理不尽を』

『嘘泣きを』

『言い訳を』

『いかがわしさを』

『インチキを』

『墮落を』

『混雑を』

『偽善を』

『偽悪を』

『不幸せを』

『不都合を』

『冤罪を』

『流れ弾を』

『見苦しさを』

『みつともなさを』

『風評を』

『密告を』

『嫉妬を』

『格差を』

『裏切りを』

『虐待を』

『巻き添えを』

『二次被害を』

『愛しい恋人のように受け入れるんだ』

『そうすれば』 『僕みたいになれるかもしれないよ』  
「」

言葉の連打を彼女に与え続ける

これが過負荷、これが最低

負の側面を全て受け入れてこそ、  
人間は本当の意味で過負荷になれるんだ

「あああああ…！」

「『だから、君は受け入れるだけでいいんだ』  
『過負荷のことなんて心配しなくていい』」

「あああああああ…！！！！」

「『僕が君の最低<sup>マイナス</sup>を受け入れてあげるから』」

この言葉と共に、彼女は僕に泣きついていた

初めて受け入れられた

自分を、最低<sup>マイナス</sup>の自分を

過負荷として受け入れてくれた人

僕の二人目の仲間

ことうき みさき  
琴吹海咲

彼女の能力名は

『ノイントールド  
絶対禁止』

五話 『受け入れるんだ』（後書き）

〈過負荷の説明〉

ノイントールド  
『絶対禁止』

自分が拒絶したものを遠ざける能力

物、人、動物、植物、液体、気体、

物体、嫌なものは問答無用で遠ざかせる

今はまだ制御が出来ておらず、

少しでも嫌と認識してしまうと遠ざけてしまう

そのため、琴吹は”机”などの自分の

周りにあったものを無意識に遠ざかせてしまった

六話 『これが日常だぜ?』 (前書き)

今回は日常パートです

ちなみに今回をもって過負荷の募集を終了させていただきます

沢山のアイデア、本当にありがとうございました

六話 『これが日常だぜ?』

あれから一週間

至って普通の日々が続いていた

僕も大人しく学校に通えているし、

海咲ちゃんもあれから学校には登校してる

まあ敦ちゃんは未だに学園都市を彷徨っているけど

彼曰く、「誰がそんな面倒なところに行くかよ」だそうだ

それにあれから一人も過負荷が見付かっていないんだ

まあ初日で二人も仲間に出たし、大丈夫かな?

負運性の敦ちゃんと絶対禁止の海咲ちゃん

この過負荷勢力にはこの二人にリーダーになってもらおう

僕はリーダーというよりも下っ端ってイメージだし

「おい球磨川先輩」

「ん?」『どうしたの敦ちゃん?』

「どうしたって、こんなことやっててもいいのかよ!」



こんなこと、って失礼な

僕は今、部屋の布団に座りながら悠長にジャンプを読んでいる

今週のは楽しみだったんだから、別にいいじゃないか

「『別にいいんじゃないの』『毎日他の同類<sup>マイナス</sup>を探し続けるとノイローゼになるぜ?』」

流石に僕も疲れを『無かったこと』にはしたくないし

それ以前に嫌なことを全部『無かったこと』にしたら過負荷の無駄使いさ

そんなのに頼ってちやいざという時に体が鈍っているかもしれないし

「でも、だからってこんなダラダラしてていいのかよ！<sup>エリート</sup>能力者を皆殺しにするつつても具体的にはどうやってこの何万という能力者<sup>エリート</sup>を全員殺すんだよ！」

あはは、大抵の人はこう思うだろうね

頭の良い人はウイルスとかをばら撒けばどうにでもなるって思うけど、それだと無能力者まで殺すことになってしまう

僕たちは弱い者の味方だ

弱者を助け、強者へ敵対する

それが過<sup>ばく</sup>負<sup>たち</sup>荷だ

「『まあ具体的に言つと、レベル5の連中を殺すんだよ』」

「は？ レベル5の連中だけなのか？」

「『うん』 だつて、アイツ等は学園都市最強の超能力者だぜ？』  
『そいつらが無能力者に殺されれば』 『世間は大騒ぎさ』 『超能力は必要なのか？』 って  
思わせれば』 『これから先は二度と能力者が生まれることは無い』 『その後から』 『ゆっくりじっくりと皆殺しにしていこうぜ』 『今度はレベル4だろうと1だろうと』 『少しでも能力を持っている連中全員を』」

これがこの計画の全貌さ

数万と存在する学園都市の能力者たちの頂点に君臨する集団

学園都市レベル5

一筋縄ではいかないと思うけど、  
こちらとて正々堂々戦つつもりなんて微塵も無いさ

だつて、僕は過<sup>マイ</sup>負<sup>ナス</sup>荷だぜ？

最低<sup>マイナス</sup>が最強<sup>プラス</sup>に勝つには、これしか方法が無い

「ほオ、そういうことかよ。でも、本当に俺達でレベル5共に勝てるのか？」

負けることしか出来ない俺達に？」  
マイナス

「『まあ』『事実僕たちは負けることしか出来ない』  
『でも一つ忘れていないか？』」

『これは殺し合いであつて、勝負では無いんだ』

『なにも、勝者が生きて敗者が死ぬわけじゃない』

『時には敗者が生き、勝者が死ぬ場合もある』

『だから僕らは、その場合を起こせばいいんだよ』」

世の中にはこんな勘違いが生まれているんだ

勝者こそ生き、敗者こそ死ぬ

なら勝利のために命を捨てた連中はどう説明する？

命を捨ててまで相手を改心させた連中はどう説明する？

出来ないだろうね

僕たちは過負荷なんだ

醜い勝利と、美しい敗北こそ過負荷だほくたち

「そうですよ。過負荷には勝つ必要なんてありません。わたしたち  
ただ相手を殺せさえすれば、それで十分私たちの勝利ですよ」

僕たちの部屋に入ってくるのは、海咲ちゃん

合鍵を渡してるから彼女は自由に行き来できるからね

まあ、男だけの部屋なんて入りたくないだろうけど

「まったく、ノックぐらいしろつつてるだろうが、このクソガキ」

「貴方こそ、いつまで球磨川さんにタメ口で話すつもりなんですか？

気安く球磨川さんと話すなんて、行儀がなっていませんね」

「ンだとてめえ！ 戦んのかあア？」

ちなみに敦ちゃんと海咲ちゃんは仲がかなり悪い

いつも言い争いなどをしてる

まったく…二人共かわいい後輩だけど、  
こればかりはどうしようも無い

「『二人共やめてよね』『敦ちゃんにはこうやって話してもらいたいんだよ』

『彼に敬語なんて似合わないと思うし』『それに、僕はそんな高位的な人間じゃないよ』

『ただの貧弱な人類最低さ』<sup>マイナス</sup>」

「ほら見る！俺に口出しするんじゃない」

「『敦ちゃんも』 彼女にはこの部屋の合鍵をあげたんだから  
『実質この部屋は海咲ちゃんの部屋でもあるんだから』」

僕がこう言つと、さすがの敦くんも押し黙ってしまった

まったく…この子たちはなんで仲良く出来ないんだろう？

まあ過負荷だからそんな簡単に行くとは思っていないけど

「『そういえば海咲ちゃん』」

「なんですか？」

「『君ってまだ一年生だね？』」

「え？ はい、そうですけど？」

海咲ちゃんはこの中で最年少の高校一年生だ

これから頼むことは、そんな

海咲ちゃんにしか出来ないことだ

「『君のクラスの中に、ツンツン頭の子が居るだろ？』」

「ツンツン頭？ …上条くんのことですか？」

「『そうその子』 『実は君に』 『彼を調査して欲しいんだ』」

僕の言葉に彼女は意味が分からないのか  
首を傾げていた

「調査…ですか」

「『うん』 『同じクラスの君なら簡単だろ？』」

僕は二年も年上だから迂闊に一年のクラスには入れない

毎日一年のクラスに行つて海咲ちゃんと会つてたら、  
僕はロリコンかなにかと勘違いされちゃうしね

人類最弱つて呼ばれるのはいいけど、変態だけはカンベンして

「出来ますけど、彼になにかあるんですか？」

「『実は初めて君に会つた時』 『僕は彼に肩をつかまれたんだよ』  
『その時に僕は変な気分になったんだよ』 『まるで』 『彼に掴まれ  
ている』

時だけ過負荷マイナスが消えていたような感じだった』」

「『過負荷が消えた！？』」

海咲ちゃんと敦ちゃんは驚きの声を上げる

通常、過負荷っていうのは  
生まれ持ったスキルだ

某一京以上ものスキルを持つインフレ野郎  
と交換でもしないと、普通は手放せない

そんな中、彼に掴まれているときだけ無くなっていた

明らかに異様だ

彼の能力を突き止めたい

いわば僕の好奇心みたいなものだよ

「過負荷をも打ち消せる能力なんて……」

「球磨川先輩の大嘘憑き並の出鱈目さじゃねえか」  
オールマイクシオン

「『そう』『超能力なのか、過負荷なのかは分からないけど』

『少なくともどちら側でもない能力を持っている』『海咲ちゃんには  
その実態を突き止めてもらいたい』『出来るかな?』」

「も、勿論です！ 球磨川さん自らの  
頼みなんですから必ず突き止めてみせます!」

あはは、頼もしいね

海咲ちゃんは敦ちゃん以上に僕を慕ってるっぽいし

なんでだろう?

ま、協力的なのは救いさ

「『あ』でも襲ったりとかはしなくてもいいからね?」

『彼は結構正義感が強そうだったから自分で勝手に巻き込まれてくれる』

と思うし』『その時に観察でもすればいいんじゃないの?』

彼は困っている人を放っておけない正義だからね

プラス

「分かりました」

「おいおい、俺に頼み事はねえのかよ?」

さっきまで置いてけぼりになってた敦ちゃんが  
クリームを付けてくる

まあ、彼はあまり他人との関係が無いから  
頼める幅が細いんだけど

「『敦ちゃんには引き続き他の過負荷を  
探してくれ』『見つけたら勝手に勧誘してもいいよ』」

「またその仕事かよ…ったく、俺だって暴れたいんだよ」

「『その時はどつかの不良にでも喧嘩を売ればいいじゃないか』  
『風紀委員に文句を言われると思うけど』」

僕みたいに風紀委員に目をつけられると、  
迂闊に行動できなくなるよ?

僕だってこれまで何度他人を螺子伏せたいと思ったことが…



「血の気の多い人ですね、貴方は。球磨川さんに迷惑ばかり掛けないで、偶には役立つことの一つはやってみてくださいよ」

「ふざけるな琴吹！ なんだったら厄介者のお前を始末してやるよ！ そうすりゃ俺に役立つしなア！」

「フ、貴方なんて私に指一本も触れられませんよ」

「だったら試してみるか、あア？」

同時に二人が殺気立ちながらにらみ合う

はあ、まったくカンベンして欲しいぜ

「『二人共』『喧嘩なら外でやってくれ』」

だが、そんな言葉には耳を貸さず、この狭い部屋で殴り合いが勃発した

まあ殴り合いと言っても、敦ちゃんが一方的に殴られてるだけだけど

「てめえ！ 卑怯だぞその能力！」

「卑怯で結構です。私は過負荷なんですから」

すると、後ろに後退していた敦ちゃんの背中が壁に当たる

その衝撃で棚の上に置いてあった古いダンボールや本などが全て海咲ちゃんに向かって落ち、ガンガンと後頭部を直撃した

「はッ！ 運うん悪くさっきの衝撃で落ちてきたらしいなア！  
そいつア不ふ運だったじゃねえか、えエ？ 琴吹？」

「くッ…！ 私が拒絶きょてつしないといけないのを知ってて…！」

「拒絶にんしきしねえと弾くことは出来ねえよなア？」

二人共、喧嘩はいいけどせめて外でやって…

すると突然、一本のはさみが僕のジャンプに向かって落ちてきた

それは運うん悪く先から落ちてきて、僕の本に大穴を開ける

しかも、丁度運うん悪く本を固定している

箇所を切り、本がバラバラになる

「『…………』」

無言でバラバラになった途中まで読んでいた  
ジャンプを目視する

それを他所に、二人はまだ喧嘩中だ

「殺し…や…！」

「やれるもの…てみて…！」

なにか言い合っているが、僕の耳には入ってこない

「「なッ!？」」

驚愕の声と共に、二人は  
何本もの螺子で服を壁に螺子付けられている

「『ねえ二人共』』 別に喧嘩はいいけどさあ』」

朗らかな声で、僕は二人に話しかける

「『僕の読書の邪魔はしないでくれるかなあ』!』」

何本も細長い螺子を指に挟みながら、  
少しずつ彼等に歩み寄る

「ちよつと…待ってくれよ球磨川先輩!」

「そ、そうですね! 私たちが悪かったです!」

そう、君達が悪かったんだ

つまり

「『僕は悪くない…』」

「う、うわああ!!--!!」

「きやああああ！...！」

六話 『これが日常だぜ?』 (後書き)

色々やんちゃしてしまった主人公(笑)

ちなみに当麻の調査は描写はあまりしないつもりです

いや、番外編で書くかも?

七話 『はあ…憂鬱』 (前書き)

明日の更新は無理っぽいです

ちなみに今話は急展開

七話 『はあ…憂鬱』

放課後、いつも通り三人で集まってる

昨日の事件から二人が僕に冷たい気がするんだ。さっきから全然こっちを

向いてくれないし、僕とも目を合わせてくれない

なんでだろう？

僕、嫌われちゃったかな？

「『おい！』今日は三人で出掛けようか」

たまには友達っぽいこともやってみたいしね

だって、僕たちは仲間であると同時に友達同士だろ？

こういうのは大事だと思うんだ

「出掛けるって、何処へですか？」

「『ま、適当に行こうよ』『歩いてれば面白そうな場所も見付かると思うし』」

ゲームセンターやボーリングぐらい  
ここにはあるんじゃないのか？

それどころか最新のが楽しめるし

流石は科学の街

「はッ、引きこもりのためえには理解できねえだろうな。  
ただブラブラと学園都市を彷徨ってるだけでそれなりに楽しいんだ  
ぜ？」

「引き籠もりなどではありません。シャイと言ってください」

「同じようなもんだろ！」

ああ、うるさいなあ

この二人は会話をする度に喧嘩になるね

僕の苛立ちが通じたのか、言い合いを  
やめる敦ちゃんと海咲ちゃん

最近もの分かりが良いね

急にどうしたのかな？

「『わあ、流石は学園都市』『色々あるね』」

外に出て適当に彷徨っているんだけど、



これがまたカラフルで電気がピカピカ光ってる

ゲームセンター、ファミレス、ショッピングモール、デパート、その他色々

放課後の学生達で辺りは溢れていた

夕方な分、部活の無い帰宅部の子にとっては遊ぶ時間なのかな？

これはまた賑やかだ

「球磨川さんは学園都市に来たばかりなんですか？」

「『先週ここに来たばかりなんだよ』『だからこの文化や常識とかが一切分からなかったんだ』『そういうところはよろしく頼むよ？』」

この学園都市の名物とかに行きたいなあ

まだ観光なんてまったくしていないし

旅行気分だよ

「それならゲームセンターとかどうだ？ 学生と言ったらゲーセンだろ？」

へえ、それはいいね

でも敦ちゃんは学生じゃないよね？

まあ敦ちゃんは始めて会ったときから制服を着ていたし違和感は無いけど

着替えないのかな？

僕もいつも同じ学ランを着ているけど

ちなみに学校に通ってからも

この世界に来てから着ている学ランを使用しているんだ

捨てるのはもったいないし

「『いいねえ』『うん、とても学生っぽくて  
幸せ染みているよ』『じゃあ早速行こうか』」  
フラス

目的地を決めた僕らはそのまま歩き出す

バスとかには乗らないで、この学園都市を見回りながらノンビリと行こうか

その方が僕も地理を学べるしね

「『ちなみに二人のお勧めは？』」

「俺はガンシューティングゲームがお勧めだぜ！」

良い笑顔で僕に言ってくれる

相変わらず攻撃的な趣味だね

戦闘狂って実際に居ると気持ち悪い

「私は音楽系のゲームがお勧めです」

逆に温厚(?)な海咲ちゃんは至って

平和的な音楽ゲームがお勧めらしい

太の達とかかな?

女の子っぽいところもあるじゃないか

「おいおい、なんでそんなもんを球磨川先輩に勧めんだよ!」

さっきは大人しかった敦ちゃんが海咲ちゃんの提案が気に入らなかったのか、喧嘩腰で怒鳴る

「なにをお勧めしようが、私の勝手です」

「でも球磨川先輩がそんなものに興味持つわけねえだろ! 少しは頭を使えよ馬鹿野郎!」

おいおい、僕はどんなイメージを持たれてるんだよ?

僕はこれでもかなり得意だという自身はあるぜ?

まあ自分でも負完全って名乗ってるから  
そんなイメージは持たれないと思うけど

「一応は教鞭を受けているつもりです。少なくとも貴方みたいな単細胞よりは学力や知力は上と自重していますけど?」

ワオ、海咲ちゃんって何気に毒舌だよね?

「ンだとてめえ! ぶつ殺すぞ、ああ?」

「殺せるものなら殺してみてくださいよ。  
ま、貴方には無理だと思えますけど」

「上等だ! てめえのそのちっこい頭を俺が握り潰してやるよ!」

道のだ真ん中で睨みあう二人

まったく…憂鬱だ

仲良くしてくれないかなあ…

「『喧嘩するんなら連れて行かないよ?』『二人も偶には仲良く遊ぼうよ』『同じ過負荷なんだから』」

しばらく睨みあった後、お互いソツポを向く

敦ちゃんは舌打ちをし、海咲ちゃんは  
僕の方に少しだけ寄る

世話のかかる子達だ

「『お、着いたよ』『さ、二人共』『機嫌直して思いつきり遊ぼう』」

ぜ！」

無理矢理テンションを上げて一人中に入っていく僕

それに少し遅れて二人が店に入ってくる

「『わあ、いっぱいあるんだね』『流石は世界最先端の技術だ』」

元の世界からは考えられないようなぐらい  
高性能のゲームが沢山並んでいた

僕にとっては最高の遊び場さ

お金だつて初日にあの男の子たちに  
親切に分けてもらったし

「ここはこの学園都市では特に人気の  
場所で、毎日多くの学生達で賑わっています」

海咲ちゃんがご丁寧に説明してくれる

ゲームも安く、食事もここで  
済ませることからかなり人気らしい

正直並ばず入れたのはラッキーだ

「『あ、これやろうよ』」

僕が指差したのはコインを入れると  
写真が取れる、いわばプリクラ的なものだった

ま、最初は記念写真でしょ？

「『記念に写真撮影でもしようぜ？』」

「いきなりプリクラって、球磨川先輩らしいっちゃらしいが…」

「女の子みたいですね…」

そこ、気分を台無しにしない

「『ほら入って入って！』」

無理矢理二人を中に入れて、コインを入れる

すると、何回か音を鳴らした後、シャッター  
の準備の合図がした

ポジションは僕が真ん中、敦ちゃんが  
右で海咲ちゃんが左

僕は二人の肩に手を回して笑顔

敦ちゃん是不器用で照れ臭そうな笑顔

海咲ちゃんは女の子らしくかわいらしく笑顔

過負荷のはずなのに三人とも笑顔って、  
他の過負荷から見れば滑稽な光景だね

写真を撮り終わり、現像したものを皆で見る

「へえ、上手く撮れてるじゃねえか」

「さすがは学園都市屈指のゲームセンターですね」

二人も満足みたいだ

「『あはは、写真の中じゃ二人共仲良さそうじゃないか』  
『出来れば普段もこんな感じで居て欲しいんだけど…』」

「寝言は寝て言え」

「寝言は寝て言ってください」

声を揃えて二人共拒否している

こういう時だけ何気に合わせないでくれよ

「『ああ楽しかったなあ』」

ゲームセンターから出ながら僕は満足気にそう言う

空はもう夕焼けに染まっていて、  
入ってから結構長い時間が経過している

夕方になつたにも関わらず、  
部活を終えた学生が加わつたのか  
さつきより全然人数が多かつた

色々といっぱい遊んで、生まれて始めて友達と仲良くできた  
本当に楽しかつたよ

「次はもうどうします？ 時刻は遅くなっていますが」

「『じゃあ適当なファミレスに行こうよ』 『そこで  
ご飯でも済ませて返ろうか』 『海咲ちゃんは僕たちが寮まで  
送るから安心していいよ？』」

女の子一人で家に帰らせるわけにはいかないし

海咲ちゃんは結構可愛いんだし、たとえ  
過負荷だろうと心配なんだよ

「そんな…私一人で帰れますって！」

「『これは僕の自己満足と思ってくれよ』  
『その方が僕も安心して帰れ』 『！！』」

突然後ろに気配を感じ、僕は  
一旦会話を止める



ただの気配ならいつも感じ慣れている

僕らに対しての軽蔑と恐怖の眼差し

それならまだ分かる

でも、この視線には、殺気が含まれている

それも明らかに僕らを殺すつもりだ

いや、僕を殺すつもりだ

「『ゴメン敦ちゃん』『先に海咲ちゃんを連れてファミレスで待っていてくれないかな?』」

「はい? いきなりどうした、ツ!」

どうやら敦ちゃんも気付いたらしい

「一人で大丈夫か球磨川先輩?」

「『安心して』『これでも曲者の過負荷の一応リーダーだぜ?』『簡単に勝つ気は無いよ』」

いかに胸糞悪く負けるかが過負荷だ

「『敦ちゃんは死んでも海咲ちゃんを護ってくれ』『現在じゃ君以外に戦闘タイプは居ない』」

「了解したぜ。じゃあ、頑張ってくれよ球磨川先輩」

「『がんばる』」

そう言った途端、僕は近くの路地裏へと駆け出した

それとは反対の方向に敦ちゃんと海咲ちゃんは走る

案の定、あの視線は僕の方へと向かってきた

しかも一つじゃない、四つぐらいの視線だ

路地裏に入りしばらく走ると、行き止まりに差し掛かる

あはは、どうやら僕はここまでみたいだね

ゆっくりと後ろを振り向く

「『やあこんにちは』『僕になにか用かな?』」

目の前には、一人の小学生ぐらいの女の子

殺気の正体って、これか？

「貴方は超気付いてるんじゃないんですか？ これでも殺すっていう雰囲気は超出してるんですけど」

超って、そんなオーバーな表現…

「『君みたいな子に殺されるほど僕は最弱じゃない…よね?』」

「超疑問符になってますよ?」

どうだろう…

人類最弱の過負荷でも、流石に小学生よりは強いよね?

どちらかと言うとあまり自身が無いけど、こんな貧弱体質

「でも、こちららも貴方を殺せって命令なんで…

超殺しますよ?」

突然、彼女の顔が目の前まで迫っていた

さっきまで数メートルは先に居たはずだ

なのに、直ぐ目の前まで迫っている

「『えッ?』」

そのまま吸い込まれるように彼女の拳は僕の顔面に食い込まれた

こんな小さい子からは考えられないような

パワーにより、僕はまるで人形の如く吹き飛ばされた

「『ちょ…』『そんな小さいのにこんな  
パワーって反則だろ…』」

「そんなこと言っても超余裕そうですね」

まあそりゃ余裕はあるよ

「『だいじょーぶ』『だって君の努力なんて、  
僕がぜーんぶ』無かったこと』にするから」

オールフィクション  
大嘘憑きにより、傷がみるみる内に『無かったこと』になっていく

「ッ！？（治癒能力？）」

さっきまで顔面が思いっきりヤバイことになっていたのに、  
直ぐにまた無傷になったことにより女の子は驚いていた

さあ、今度はこっちからも反撃だぜ

僕は両手に螺子を構える

「『君を社会的に殺してやるよ』『もちろん、過<sup>てっいてき</sup>負荷的にね』」

満面の笑みでそう言う

七話 『はあ…憂鬱』（後書き）

主人公を襲った人が誰なのかはバレバレ（笑）

八話 『不愉快かなあ〜!』 (前書き)

二日も空けてしまつてすみません

プライベートが忙しかったです

八話 『不愉快かなあ〜！』

血塗れになりながら、僕は路地の壁に  
寄り掛かるように座っている

それも、今回は返り血ではなく自分の血

両手に持っている螺子に力を加える  
ことが殆ど出来ないまでに、僕は弱っていた

立ち上がるも足が疲労と痛みで震えている

破けている服からは血が滲み出していた

そんなボロボロの状態にも関わらず、  
目の前の女の子は涼しそうな表情で無傷だ

「貴方、超弱いですね」

「『へッ…伊達に人類最弱を名乗っていないぜ』」

大嘘憑きは使っていない

いや、使っても無駄って感じかな

幾ら大嘘憑きで傷を無かったことにしても、  
直ぐまたボロボロにされる



何回も使って、ボコボコにされていくうちに  
気付いてしまった

つまり、僕は詰まれたのかな？

却本作りを使えば話は別だけど

「『君、女の子なのにとても力が強いね』『さっきから  
吹き飛ばされてばかりだよ』」

「そっちが超弱いからじゃないんですか？」

中々心に響くような言葉を言ってくるじゃないか…

って僕に心なんて呼べるものは無いか

「『僕の弱さを甘く見るなよ』『その気になれば  
蟻一匹に殺されることも出来る』」

「なにそんなことを超威張ってるんですか…」

僕の発言に呆れると、再び彼女は  
目の前まで迫ってくる

蹴りを僕の腹に打ち込み、そのまま  
僕は壁に激突する

「『う…ゲホッ…』」

咳に混じって血を吐き出す

さっきのだけで肋骨が数箇所折れたかな？

これは流石に無かったことにしないと不味い

「『だから無駄だつて』 君の努力なんて、僕にとつちや労力を無駄にするだけでしかないんだ」

「…またその治癒能力ですか。超厄介な能力ですね」

「『治癒能力？』 あは、それは勘違いだぜ小学生」  
「僕みたな屑にそんな前向きな能力が備わるはずが無いだろ？」

「…治癒能力じゃないんですか？」

「『おいおい、さっき言っただろ？』 『治癒能力なんてお門違いだぜ』 『まあ、超能力者の君には最低の僕なんて理解できないと思うけど』」

僕の発言に困惑し始める小学生ちゃん

プラスがマイナスを理解するなんて、それこそ荒唐無稽だぜ

僕らは”マトモ”じゃないんだ

論理的な考えじゃ到底理解できない

「例えどんな能力でも、戦闘で役立たなきゃ

超役立たずですよ」

再び僕の顔をぶん殴る小学生

骨が碎けるんじゃないかって思わせる  
ぐらい拳が顔面に食い込むと、僕を遠くへ  
吹き飛ばしていった

さつきからずっと吹き飛ばされるのは疲れるぜ

まあ、最弱だからこれは逆らえないけど

「しかし…アンタ超弱いですね。なんでこんな  
奴なんかに暗殺の依頼が…？」

僕を暗殺って、なんで僕が狙われなきゃいけないんだよ

僕はまだ何もするつもりは無いんだけど

「これなら放っておいてもなんも害になんて  
超なんないと思うんですよ。ただの超雑魚ですし」

へえ

「え!？」

その瞬間、彼女の周りに無数の螺子が突き刺さっていた

さつきとは考えられない攻撃に、  
小学生ちゃんは一ひどく驚愕していた

「『別に貶されるのは気にしない』『いつものことだし』『でも…』『僕はともかく他の仲間の目的を馬鹿にされるのは』」

『流石にちよつと不愉快かなあゝ！』」

自分でも分かるぐらい僕は怒りの表情を露にしていると思う  
僕が貶されるのはまだいい。耐えられる

でも、友達の目標を貶されるのは、  
ガマン強い僕でもすこゝし限界力ナ？

「くっ…！（なんなんですかこの人！？ 超怖いんですけど！？）」

僕の急な表情の変化のせいなのか、少し怖がりながら  
後退りしている小学生

「『どうしたんだい馬鹿力？』」

『急に反撃されて怖くなったのかい？』

『人類最弱の僕に怖がるなんて情けなゝい』」

さらに周りにも螺子を突き刺し、逃げ道を塞いだ

幾つもの巨大な螺子が列を成し、  
行く手を阻む壁のように通せんぼしている

「『あはは』『逃がさねえよ』『僕はこう見えても  
結構優しいんだぜ?』『謝れば今ならまだ間に合ったりするかもよ  
?』」

「超謝りませんよ。球磨川みたいな人に  
謝ることなんて、私の人生で超恥になるんですよ」

間を居れず即答してきた

気が強そうに言ってるけど、僕には分かるぜ?

君は僕にかなり怯えてる

僕のことを気持ち悪くて、気味悪くて、  
怖くて、憎くて、みつともないと思ってる目だ

そんな目こそ、僕は一番慣れていて、一番大嫌いな目だ

「『そうか』『じゃあ教えてやるよ小学生』  
『過負荷相手にルール無用で戦う愚かさを…!』」

徐々に彼女に歩み寄る

僕の手にあるのは一本の - 螺子 マイナス

僕がそれを構えると、その螺子は

急に刀身代まで伸び始めた

手に収まったのは、一本の長い螺子

これこそ僕の第二の過負荷、否

僕が禁じた過負荷

『ブックメーカー  
却本作り』だ

目の前までたどり着くと、僕は歩くのをやめる

彼女は恐怖で動けないのか、抵抗すらしていない

たとえ暗殺者でも、まだ子供か

「『君みたいな女の子を過負荷こふしのは  
心が痛むけど』『許してね？』」

「球磨川に心なんかあるんですか？」

おいおい、最後の最後で痛いところを突いてくれるじゃないか

そういえばなんで僕の名前を知ってるんだろう？

まあ僕って彼女の暗殺対象だから  
名前ぐらい調べてると思うけど

「『あばよ』『過負荷として元気で  
』」

突然、通せんぼしていたはずの螺子が全て弾け飛んだ

まるでダンボールのように無造作に吹き飛ばされる螺子に、僕は思わず却本作りを貫かせるのを忘れてしまった

その隙に彼女は僕を殴り飛ばし、距離をとる

おいおい、一体次から次へなんだよ？

僕、幾らなんでもこんなに恨まれることはしてないと思うんだけど…

煙が晴れると、さらに三人の  
女の子らしき影

僕ってこんな人気者なのか？

あ、”人気者”と書いて”あんさつあたいしょう人気者”って読むか

「麦野…」

中央のリーダーっぽい子に向かってそう言う

どうやら彼女がリーダーらしい

高校生ぐらいかな？

僕と同じか少し下だね

「まったく…一人で任せたのに、なに追い詰められてるのよ」

「だってこの人超卑怯なんでもん。傷とかダメージを全部一瞬で回復されるんですよ」

麦野さん（仮）が小学生ちゃんに呆れていると、すかさず小学生ちゃんは反論している

仲間がまだ三人も居たのかよ

これじゃあ彼女を過負荷<sup>マイナス</sup>にしてもまだ三回も戦わなくちゃいけないのかよ

疲労を『無かったこと』にすればまだ分からないけど多対一はまだ慣れていないし

「『おいおい、こんな展開は週間少年ジャンプだけにして欲しいなあ』『理不尽なんだけど』『」

「アンタみたな漫画脳に人権なんて無いでしょ？」

全世界の漫画愛読者に謝ってくれ

「でも、アンタのその能力、見させてもらったけど、見るからに回復タイプの能力よね？」

なんで皆は僕の大嘘憑き<sup>オルフィクシオン</sup>を見ると回復能力だと思うのかな？

まあ、一番多く使用しているのは傷を『無かったこと』にすることだし、当たり前かな？



「『何回も言わせないでくれよ…』 僕の能力はそんな前向きな能力じゃない」

「まあアンの能力がなにであろつと…」

一瞬

まさにそれぐらいの速さで白い閃光が僕に向かって打ち出された

それは瞬く間に僕を飲み込み、僕を吹き飛ばした

「『え？』」

「回復させる暇さえ与えなきゃ、そんなの大したこと無いわよ」

血塗れな僕に向かってそう言う

回復暇さえ与えなきゃ、ねえ

これは一回死んだかな？

あの能力から見て今回は死体の破片も

残らないと思うから、生き返るのに時間は掛かるけど

「死ぬ最後に名乗っておくわ。学園都市レベル5、メルトダウン原子崩しの  
麦野。レベル5に殺されるんだから、死んだ後は言い訳にでもなる  
んじゃないの？」

心に傷付くことをどうも

やっぱり僕はレベル5には勝てないのかな？

まあ、少なくとも今はだけど

それに、レベル5の素性を一人突き止められたんだ

それで得さ

「『んじゃ』『さよなら』」

「それアンタの台詞じゃないでしょ」

再びあの閃光が僕に向かって放たれる

それは血塗れの僕を消し飛ばす

そこで僕の意識は途絶えた

~~~~~

「死亡を確認するまでもないわね」

麦野は死体となった球磨川を見てそう呟く

ただの路地だった辺りは血飛沫に

包まれ、地獄絵図と化していた

球磨川の死体は無残にも体中が  
バラバラに吹き飛ばされていた

腕や足といった肉体の部分などは判別できないほど  
ぐちゃぐちゃにされ、唯一残ったのは殆ど吹き飛ばされている胴体  
だけ

そんな惨状にも、”アイテム”の四人は得に動揺もしていない

「暗殺完了。目標、球磨川雪の死亡を確認、つと。  
はい、これでお終い。行くわよ」

殺人現場に長く居座るほどアイテムの四人は  
馬鹿ではなく、すぐさまこの場を後にする

「なんだよ…これ…？」

それから直ぐ、現場へ駆けつけた木更津敦は  
その惨状を見て啞然としていた

琴吹海咲をファミレスへ送った後、援護へと  
駆けつけた木更津だが、時は既に遅し

無残に死体となった球磨川を見下ろす

「おい…マジかよ…なあ…？」

ヨロヨロと球磨川だった死体に歩み寄る

「そんな、ふざけるなよ！ おい！球磨川先輩！  
オールフイクション

アンタ、死なないはずじゃなかったのかよ！ 大嘘憑きは  
死をも『無かったこと』に出来るんじゃないのかよ！」

一向に生き返る素振りを見せない球磨川に向かってそう叫ぶ

「球磨川先輩…」

応答を見せない球磨川に、木更津は膝をついた

「球磨川先輩イ！！！」

~~~~~

「『ここは…何処かな？』」

一方、死んだ球磨川はというと

「『またここか』」

周りは真っ白な世界

天井や壁の存在すら疑問視される  
ほど純白に包まれているような世界

球磨川が転生する前に居た部屋だった

「またここで悪かったかよ、えエ？」

「『久しぶりだね、赤髪さん』」

目の前には長い赤髪を持ち、  
少々苛立ち気味の荒い口調の持ち主

「久しぶり、じゃねえよ！ お前なにやってくれてんだよ！」

球磨川に向かってそう叫ぶ赤髪

怒りを露にし、球磨川の胸ぐらを掴んでいた

「『おいおい、なにをそんなに怒ってるんだい？』」

「てめえ、送る前に言ったこと忘れたのかよ！ あっちの  
世界で起こす行動一つでてめえの天国行きと地獄行きを決めるんだ  
よ！」

地獄行きと天国行き

それぞれにポイントがあり、0以上であると天国、  
0以下であると地獄と決まっていた

「『それがどうしたの？』」

「どうした、じゃねえよ！ てめえ、ここままだ地獄行きだぞ！」

「『？』『なんで？』」

「なんでって、窃盗に暴行に殺人未遂！ どれもてめえの点数をジェットコースター並みに降下させてんだよ！」

自身の点数が危うい状況になっていると聞かされても尚、球磨川はあっけらかんな様子をやめなかった

余裕というよりも惚けの色が強い球磨川の間抜けな表情に、赤髪は益々怒りを増幅させた

「『別に点数が減ろうと、僕は自分のやり方を変えるつもりはありません』」

「ふざけやがって！ まったく、とんだ見込み違いだぜ！」

「『いや、僕は悪くないよ』『だって、たとえ他人が悪と認識しようと』」

『過負荷のあの子たちにとっては正しいことなんだぜ？』」

「ッ…！？」

球磨川の発言に言葉が詰まる赤髪

正義と悪

一見明白な違いを持っているその二つの概念は、  
実際はかなり曖昧な関係を持っていた

他人から見れば正義な行為は、  
別の人にとっては悪に感じられる

逆もまた然り

故に自分が正しいと信じ、人間は戦争を行う

「『誰が正義と決めて、誰が悪と決めるんだ？』  
『僕にその基準は分らない』『でも、少なくとも  
僕にとっては自分の行いは正しくは無いけど、悪とは  
思っていないよ』」

「てめえ、本気らしいな」

「『本気じゃなかったらここまでしないさ』  
『おっと、そろそろ生き返る時間だ』『それじゃあ  
赤髪さん、また会おうね』」

白い空間から蒸発するように消えていく球磨川

そんな彼を、赤髪はただ見つめているだけだった

「…とんでもねえ奴だ」

最後にそう彼女は呟いていた

~~~~~

「なッ!？」

死体現場で啞然としていた木更津は驚愕の声を上げた

さっきまで血塗れだったこの路地裏は、

肉塊で溢れていたこの路地が、まるで何事も

『無かったかのように』元の路地に戻っていた

「『あれ?』『どうしたの敦ちゃん?』」

そして、木更津の目の前に立っているのは、

さっきまで無残な死体となっていた球磨川だった

「く、球磨川先輩!？」

「『なにをそんなに驚いているんだい?』『この前も  
言っただろ?』『大嘘憑きは死をも「無かったこと」に出来るって』」

」

あまりにも理不尽で現実離れした球磨川的能力に、  
木更津はただ啞然としていた

「『まあでも今回は死体すら残ってなかったから』  
『生き返るのに時間が掛かっちゃったけど』」

「…カンベンしてくれよ…心臓に悪すぎるぜ…」

無事戻ってきた球磨川を見て、木更津は



拍子抜けしたように地べたに座り込んだ

「『じゃあちよつとゴメンね敦ちゃん』 『僕、少し用事があるから』」

そんな木更津を他所に球磨川は路地を抜け出し、どこかへ歩き出す

「用事？ 用事ってなんだよ？」

「『そんなの決まってるだろ』」

そんな質問をする木更津に、球磨川はクルリと振り返り、笑顔でこう言った

「『僕をこんな目に遭わせたアイツ等に、報復しに行くんだよ』」

九話 『それが過負荷だ』 (前書き)

駄目文注意 (いつものことorz)

## 九話 『それが過負荷だ』

仕事を終えた”アイテム”の四人は、いつも行っているファミレスへと向かっていた

先ほど殺人を犯したにも関わらず、全員が涼しい表情だまるで殺した球磨川など既に忘れたかのように

「今回は珍しく超簡単な仕事でしたね」

「まあ、相手が相手だったから。なんで球磨川なんかに暗殺依頼が入ったのかしら？」

あまりに呆気無く死んだターゲット

実際に戦闘を行った絹旗にさえ一撃も決定打を与えていなかった

予想外の弱さ

誰一人と球磨川の危険性を理解している者は居なかった

「実は、あの球磨川にこんな噂があるんですよ」

「噂？」

「はい。あの超電磁砲に攻撃されたにも関わらず、無傷で立ち上がったそうです」

「無傷で？」

学園都市レベル5第三位、レールガン超電磁砲

第四位の麦野より高位の存在であり、その実力は学園都市で上から三番目

それほどの能力者の攻撃を無傷で受けた

考えられないような内容に、麦野は呆れていた

「まったく…噂にも程がある。あの雑魚球磨川がそんな真似できるわけないでしょ？ あの回復能力は確かに異常だったけど」

鼻で笑いながらそう言った瞬間、後方から突如巨大な螺子が麦野に向かって放たれた

頭部ギリギリを通り過ぎた螺子は、そのまま壁に突き刺さる

突然のことに驚きながらも、戦闘には慣れてるアイテムの四人は即座に警戒態勢に入った

「『回復能力じゃないって何回言えば分かってくれるかな？』」

後ろから歩いてくるのは、学ランを来た少々童顔の高校生

両手に持っているのは巨大な螺子

「く、球磨川!？」

人類最低、球磨川雪

先ほど惨殺されたとは思えないほど  
無傷且つ綺麗な笑顔で四人を出迎えた

「『久しぶり四人さん』『僕だよ』」

「（こいつは私が自ら殺したはず！　なのになんで…!?!?）  
アンタの回復能力、死からも回復できるってわけ？」

「『もう説明するのも面倒だよ』『しょうがないなあ』」

『特別に教えてあげるよ』『僕のコレは、回復能力なんかじゃない』

「

「ならなんだって言うのよ!」

もったいぶる球磨川に、麦野も段々とイラついた様子を見せる

嫌味に、子供の悪戯のように曖昧に答える球磨川

は、「『はあ』」と溜め息を吐いた

「『君が僕を殺したって事実を、『無かったこと』にしただけさ』」

「は？　ふざけんじゃねえよ!」

堪忍袋が切れたかのように激怒しながら

麦野は自身の能力を球磨川に向かって放った

「そんな戯言を訊いてるんじゃないやねんだよ！  
こっちが聞きてえのはてめえの能力についてだ！」

煙が晴れると、そこには無傷の球磨川が立っていた

攻撃が通用していないと分かると、麦野はさらに怒りを増幅させる

「クソがあ！」

先ほどの攻撃を軽く超えるような規模の閃光を球磨川に向かって放つ

くらえば一瞬にして死を与えられるような

攻撃が迫って来ているのにも関わらず、球磨川は笑顔で立っていた

「なッ！？」

だが、球磨川に当たる直前で、その閃光は掻き消されたかのように消えていた

「（演算ミスか？ いや、私がミスするはずが無い。となると……）  
てめえ、なにしやがった！」

「『なにをつて』『僕はこの学園都市に来てから勉強をしたんだ』『超能力はなにか』『どうやって超能力者は超能力を発動してるか』『原理や成り立ち、使用の条件を調べて分かったこと』『それは、超能力が”演算”というもので成り立っているっていうこと』」

「それがどうしたっていうんだよ！」

未だに言っている意味が分かっていない麦野に、  
球磨川は呆れたのか溜め息をもう一度吐く

そして、邪悪の笑みを浮かべながら驚愕の事実を告げた

「『君の演算を「無かったこと」にした』」

あまりにさらりと放たれたこの言葉

一瞬聞き流してしまいそうなほどの戯言に  
感じられるこの言葉は、超能力の常識を破るような発言だった

”演算を無かったことにする”

これはつまり、学園都市全ての超能力者を無力化できるという意味  
だった

「私の演算を…無かったことに…だと？」

「『そう』」

『「現実<sup>すべて</sup>を虚構<sup>なかったこと</sup>にする」、それが僕の「大嘘憑<sup>オールフイクション</sup>き」だ』」

現実を虚構にする

最低で、理不尽で、最悪の過負<sup>マイナス</sup>荷、大嘘憑<sup>オールフイクション</sup>きの能力

そんな球磨川の能力に、アイテムの四人は呆然としていた

全てを無かったことに出来るとはつまり、たとえ何回攻撃しようと、球磨川を殺そうと、それを無かったことにされるという意味

「『この能力って気をつけないといけないんだよね』  
『だって』『気をつけないと世界そのものを「無かったこと」にしちゃうから』」

あまりにも規模の大きすぎる能力だった

自身は起動スイッチを押して、離せば核爆発を起こせる  
と言ってるようなものだった

世界そのものを『無かったこと』に出来る

つまり、その気になれば世界を滅ぼせるような能力を球磨川は持っていた

「『さて、反撃といこうか』」

両手の螺子を構えながら、球磨川はそう告げた

「ふ、ふざけるなア！」

麦野の原子崩しが球磨川に向かって放たれ、  
オフエンスアーマー  
窒素装甲を纏った絹旗が拳を振るう

フレンドは爆弾に火を点け、それを球磨川に向かって投げる



「アンタみてえな雑魚に私たちが負けるわけ」

だが、文章を終わらせることも無く  
彼女ら三人は地面に貼り付けられていた

細い螺子により全員の服が地面に縫い付けられ、  
動ける状態ではなかった

「『うん』『確かに僕は雑魚だ』『だから、弱さという弱さを  
知り尽くしている』『何処をどう攻撃すれば人間は死ぬとか』  
『そういうマイナスな面だけだけどね』」

フレンダが着火した爆弾は”着火という事実”  
を無かったことにされ、炎は消されていた

「『さて』『残りは君一人だね』」

ただ一人攻撃してこなかったアイテムの構成員を見つめる

ピンクのジャージを着た見るからに  
気ダルそうな人物

それに球磨川は少し呆れながらも、螺子を構えた

「くまがわのその能力は超能力じゃないの？」

「『超能力？』『あはは』『全然違うぜ？』『よく分かったね』」

「くまがわからAIM拡散力場を感じない。だから超能力じゃない  
と思う」

「『僕はレベル0』『なんの能力も備わってない』『だってこの能力は』」

だが、文章を終わらせようとした同時に、  
滝壺の周りに幾つもの螺子が突き刺さる

「『あは!』『なに期待しちゃってるの?』『これは  
週間少年ジャンプのバトル漫画じゃないんだ』『僕  
の能力の本質を教えるわけないだろ?』」

「でも大嘘憑きの能力は教えてくるんだね」  
オールライクシヨン

からかう様にケラケラと笑う球磨川に、滝壺は冷静な突っ込みを入れる

「『おいおい、中々痛いところを突いてくれるじゃないか』」

「それに、さっきからくまがわは実際に私たちに攻撃してない。  
まるで戦う気が無いみたいに」

「『君、そんなに痛いところ突くのが好きなのかい?』『でも、  
ソレは事実さ』『今日の僕はとても機嫌が良いんだ』『そんな日に  
人殺しなんて嫌だよ』『僕はただ殺された報復が出来ればそれで良  
いし』」

そう言つと、球磨川は滝壺を後にし、地面に螺子伏せられている  
三人の場所へ行つた

球磨川がたどり着いた瞬間、あの閃光が球磨川を襲う

それと同時に、地面に突き刺していた螺子が吹き飛んだ

「『さすがはレベル5』『これぐらい簡単に抜け出せるよね?』」

「てめえ、絶対に許さねえ！ 殺してやる!!」

だが、球磨川は既に彼女に一度殺されていた

その事実をあえて突っ込まなかった球磨川だった

原子崩しを球磨川に放つが、再び当たる寸前で消える

「『だあかあゝ!』『演算を無かったことにしてるから何回攻撃しても無駄だつて』『まあ、永続的に能力が発動する超能力じゃこの戦法は無意味だけど』『その証拠に小学生ちゃんには使ってなかっただろ?』」

「私って中学生なんですけど？ 超間違えないでください」

「『そんなの大差ないだろ』」

球磨川は螺子を構え、麦野は再び演算を開始する

怒りで球磨川の言葉は耳に入らないのか、演算を無かったことにされるのにも関わらず、高度な演算を開始していた

そして、両者が攻撃を放とうとした瞬間、パトカーのサイレンが辺りに鳴り響いた

今までの戦闘を目撃した一般人が通報したそうだ

「『おいおい、警察に御用つてのだけはカンベンしてくれよ』  
『じゃあねレベル5さん』 報復は出来なかったけど、それでも  
結構楽しかったぜ」

もう一度風紀委員の支部へ向かうのは御免なのか、  
球磨川はサイレンを聞いて早々逃げ出した

「待ちやがれ！」

だが麦野は逃がさんとばかりに原子崩しを放とうとする

「むぎの。もう行かないと私たちもまずい」

たとえ暗部組織であろうと、殺人を犯している  
彼女らは同じく風紀委員とは関わってはいけなかった

目をつけられ、行動を制限されるとアイテムの四人でも不都合な  
ため  
出来るだけ目立った行動を起こさないようにしていた

「ちッ、行くぞ！」

絹旗とフレンダの拘束を解き、球磨川と同じくこの場を後にする

「球磨川を徹底的に調べるぞ。次会ったら  
本当に殺してやる。能力で蘇生できないまでにな！」

殺意を球磨川に抱きながら、アイテムの四人は闇へと消えていった

~~~~~

「『お待たせ敦ちゃん、海咲ちゃん』」

僕は二人の待つてるファミレスにやっと着いた

色々と巻き込まれて遅くなっちゃったけど、

まあレベル5の情報が一つ集まっただけでもいいよね？

「大丈夫なんですか球磨川さん？ 一度死んだって聞きましたけど」

「『うん殺されたよ』『それなのに報復も

出来ないって、酷い話と思わないか？』」

普通は殺されると死んでるから報復できないんだけど

そこは過負荷のお陰だ

「球磨川さんが無事ならそれでいいですよ。まあ、  
その単細胞が援護に間に合っていれば一度死なずに  
済んだと思いますけど」

「てめえを送るのに時間が掛かったんだろぅが！」

どの道死んでたと思うけど

いや、それどころかもし敦ちゃんが間に合ってたら二人とも殺されてたと思うし

僕ら二人がかりでもレベル5には勝てないだろうし

幾ら僕が死に慣れていても、敦ちゃんにとって臨死体験は少し酷い

僕も仲間が死ぬのは嫌だし

「『もう済んだことはいいさ』『それより何か食べようよ』『僕、おなか空いちゃった』」

さっきまで殺されそうになっていたのに、おなか減ったって言う僕も狂ってるんだろうけど

「なんで球磨川さんは笑ってられるんですか？ さっきまで殺されそうになっていたんですよ？」

海咲ちゃんも不思議に思ったのか、ごもつともなことを訊いてくる

「『それはね海咲ちゃん、僕が過負荷だからだよ』」

「過負荷だから、ですか？」

「『うん』」

『思い通りにならなくても』

『負けても』

『勝てなくても』

『馬鹿でも』

『踏まれても蹴られても』

『悲しくても苦しくても貧しくても』

『痛くても辛くても弱くても』

『正しくなくても卑しくても』

『それでもヘラヘラ笑うのが過<sup>ほくた</sup>負<sup>ひ</sup>荷<sup>かり</sup>だ』  
「





九話 『それが過負荷だ』（後書き）

Q： 主人公の容姿って原作球磨川と同じなの？

A： 違います。童顔と学ランだけです。少し似てるなあって  
感じだと思っています

## 十話 『どっちつかず』（前書き）

ようやく応募された過負荷を登場させることが出来ました

現段階の状況で一番使用し易い能力を登場させただけなので、これから先にまだまだ多く出そうと思っています

かなり早めに投稿してくださった方、すみません

ちなみに六話で書いたつもりが上手く伝わっていなかったと思うので、もう一度書いておきます

今話をもちまして過負荷の投稿を終了させてもらいます

皆さん、ご協力本当にありがとうございます

## 十話 『どっちつかず』

僕たちは友達が少ない

唐突にこんなことを言ったけど、事実さ

僕と海咲ちゃんは確かにちゃんと学校も行ってる

授業はそれなりに聞いているけど、やっぱり  
過負荷だから点数なんて言えたもんじゃない

成績も最低

でもなにより言いたいのは、僕たちは  
友達が居ないんだ

まあそれは仕方の無いことだけど

僕はこの学校の制服ではない、別の  
学校の学ランを着ているんだ

思い入れが出来てしまつて学校に無理に頼んだんだ

でも、その所為か部外者みたいになつて、  
誰もあまり話しかけてこない

まあ、この括弧付けた喋り方も理由だと思つけど

そして、海咲ちゃんもまた友達が居ない

無意識に拒絶するあまり、近寄ってきた  
もの全てを弾いていた所為か、誰も話しかけてくれないそうだ

今は僕が過負荷を制御できるように手伝って  
コントロールラブルになってるけど、それでもまだ  
近寄ってこないらしい

過負荷だと気付かれていない以前は友達は普通に  
居たらしい。でも、徐々にその異常性に気付かれて、  
気が付いたら一人だったんだって

酷い話だよ

それに重なり、僕と同じく海咲ちゃんもまた  
ここの学校の制服を着ていない

何故かこの学園都市は男子に比べて女子の制服に  
妙に拘っている

男子はシンプルにワイシャツ

なのに女子は色々と色や生地などに  
気を遣っているらしい

それなのに、海咲ちゃんは男子の制服みたいに  
ワイシャツとスカートというなんともシンプルな姿だった

なんでも、制服は着るのが面倒臭いそうだ

でも普段から僕や敦ちゃんと同じで制服（？）姿だから他の服も買うのが面倒なのかな？

まあ、本人の自由だしいいよね

でもこうやって他の人とは違う格好をしてると、やっぱり部外者のような扱いをされる

別に友達が少ないのは苦じゃない

過負荷だし、慣れてる

でも、一番問題はこうだ

休み時間が暇でしようがない

ボーッと窓から見える学園都市の景色を眺めるだけで一日中過ごしてるけど、そろそろそれも飽きてきた

せめて、気さくに話せる人を同年代に欲しい…

「ほら、全員席に着け！」

授業前、生徒たちが友達と話しているのを、教師が黙らせ席に着かせる

「球磨川！ お前もボーッとしてないでこっちを見る！」

「『はあ…』」

溜め息を吐きながら、僕は視線を先生に向ける

ちなみに三年のクラスの担任は初日僕の  
身体測定を担当してくれたあのテンションの高い  
先生だった

まあ、僕を気持ち悪がらない分気楽だけど

「転校生が来るぞ！　まだ学園都市に来て  
直ぐだから仲良くしろ！」

教室がザワザワし始めた

僕には関係ないけどね

でも僕がついこの間転入してきたばかりなのに、  
また転校生が来ても大丈夫なのかな？

ほら、クラスの人数とか

「入ってこい」

「はぁーい！」

とても元気な声が教室の外から聞えた

本当に純粹で、綺麗で、  
プラス幸せそうな声だった

まるでこの世の悪党、殺人鬼、テロリスト、強盗、

社会主義者など知らないような、そこまでプラスな声

朗らかでも元気のあるその声の主は扉を開けて教室へと入って来た

「新しくこのクラスに入ることになった

きよせ まき  
清瀬真希です！ 皆よろしく願いします！」

入ってきた転校生

女子であると同時に、容姿も良かったためか

男子の連中が小さくガッツポーズをしていた

そんな中、僕は窓の景色をボーッと眺めている

あのプラスのような声が聞えた瞬間、僕は思考を  
シャットダウンして再び窓を眺めるのに戻っていた

だって、プラス幸せ者になんか興味無いもん

この学校に居るってことはレベル0だし、

敵対対象でもない

つまり、本当に無関係者だ

多分あの子は皆から好かれるような人気者タイプだ

嫌われ者の人類最低、マイナスつまり僕とは正反対のような子だ

同じ過負荷かもしれないって期待した僕が悪かった

窓を眺めるのも飽きてきたから、ボンヤリと先生と  
転校生のやり取りを眺めている

「席は  
」

先生が席を決めようとするが、彼女は  
聞かずにどこかの席へ向かう

何故かゆつくりと歩いて、  
僕の席の隣に腰掛けた

さっきまでボーっとしてた僕も意識を覚醒させて、  
無表情だけど彼女をチラッと見る

「よろしくね」

無言で頷く僕

すると、教室がざわめき始めた

《おいおい、アイツの隣かよ…》

《球磨川の隣って、危ねえだろあの転校生》

《席替えないと拙いんじゃないの？》

そんな声がクラスメイトの中から聞える

いかにも近寄りたくないような最低な雰囲気<sup>マイナス</sup>を  
出してる僕に、笑顔で近付いて隣の席に座ったんだから、



当たり前だよな

「全員静かにしろ！ 清瀬がそこがいいって言っんなら、お前等は口出しするな！ 授業を始める。起立！」

そんな感じで、今日の授業が始まった

「ねえねえ！」

授業を適当に聞き流して放課後、彼女は僕に声を掛けてきた

普段、筆記用具なんて机に仕舞ったままで出すことなんて無いから鞆すら持っていない

つまり手ぶらで僕はいつもこの学校に着ている

見るからにやる気が無い

そんな僕にも、彼女は省みなく、それどころか積極的に関わろうとする

僕は不思議ではない

「名前は？ 席が隣同士なのに、自己紹介もしてないのはおかしいと思うよ？」

関わりたくない人には嫌がらせ以外では喋りかけない僕なんだ

そついうところは黙認してくれよ

「『僕は球磨川雪』」

「ハハ、個性的な喋り方だね。もう知ってると思うけど、ボクは清瀬真希。少しお茶目な女子高生でえーす！」

僕、こういうタイプの人は苦手なんだ

なんというか、鬱陶しい

それより、初対面で僕のことを気持ち悪がらないし、この括弧付けた喋り方もただ”個性的”だけで済ませる彼女はある意味すごいと思う

「『じゃあまた放課後…』」

「いやいや！ 折角知り合っただから、一緒に遊びに行こうよ！」

面倒臭い人だなあ…

僕は帰ってジャンプを読みたいんだよ

今週は特に楽しみだったんだから

主に某異常生徒会長の漫画が急展開ばかりだし

「『分からないのか？』 『僕は人類最低だぜ？』 『そんな僕が、正反対の幸せ者である君と遊ぶのは』 『猿とナマケモノと一緒に居るのと同じぐらい違和感があると思うぜ僕は』」

「まったく、堅い人だなあ君は。」「ぷらす」とか「まいなす」とかは何かは知らないけど、ボクと君が遊んじゃいけない理由にはならないと思うよ?」

「『君は別の意味で頭が堅いんじゃないのかな?』」

「それって何気にボクを馬鹿だって言ってるの?」

「『そう聞えるなら訂正しよう』『君は馬鹿だ』」

「今度はハッキリと言っちゃったよ!？」

あれ? いつの間にか僕は彼女と会話を成立させちゃってるよ

なんだろう?

なんだろうなんだろうなんだろう?

分からない分からない分からない分からない分からない  
分からない分からない分からない分からない分からない

僕は過<sup>マイナス</sup>負荷のはずだ

彼女は幸<sup>プラス</sup>せ者のはずだ

なのに、彼女は僕を気持ち悪く思うどころか、  
誰よりもまず先に交流を持つとしている

意味が分からない

頭が痛い

コノコハキモチワルイ

「あれ、どうしたの雪くん？ 顔色悪いよ？」

「『……』 なんでも無いよ』『ゴメン、僕用事があるんだ』」

その場から逃げるように僕は校舎を後にする

フラフラと自室へ戻り、布団へ倒れこむ

先に帰っていた敦ちゃんと海咲ちゃんは  
僕の状態に驚いたのか声を上げてる

「だ、大丈夫かよ球磨川先輩！？」

「顔色が優れないようですが、体調が悪いのですか？」

「『……』 少し頭が痛いかな』」

あまり重い症状ではなく、安心したのか  
二人はホッと息を吐いた

「一体なにがあったんですか？」

「『僕のクラスに転校生が来たんだ』『見たことのないような、プラスの見本のような子だった』」

「そいつがどうしたんだよ？」

「『あの子と会話していると、頭が痛くなる』『気持ち悪い…！』『過負荷の僕にも気持ち悪がること無く接してきた…！』」

「まただ…！」

彼女のことを考えると、僕の頭に激痛が走る…！

「とりあえず落ち着けて！先輩は過負荷のリーダーになるんだろ！そんな奴はしっかりしねえといけねえって！」

「『うん…そうだね』『ゴメン敦ちゃん』『もう大丈夫だよ』」

汗がダラダラと流れていたけど、今は少し落ち着いた

とにかく、彼女には極力関わらないようにしよう

あんな幸せ者、嫌、あんな異常になんか

すると、僕たちの部屋の扉がコンコンと鳴った

誰かがドアを叩いているんだ

「あ、はい！今行きます」

海咲ちゃんが扉を開けに行く

僕たちの部屋を訪れる人？ そんなやつ…

「球磨川さん、お客さんですよ。なんでも球磨川さんと話をしたいと…」

入って来たのは、あのプラスのような瞳の持ち主

「体調はどう雪くん？」

転校生、清瀬真希

「『君のお陰で死に際の夜神月並みに取り乱してしまったよ』  
『僕のキャラをどうしてくれるんだよ』」

「過<sup>マイナス</sup>負荷にもキャラっていうのがあるんだね」

「「なッ！？」」

僕たちは耳を疑った

彼女は過負荷という存在を知ってる

つまり、この前僕を殺したあの四人組みみたいな子かな？

「てめえ…！」

敦ちゃんが警戒してナイフを構える

「『やめて敦ちゃん』『こんな狭い部屋で君の過負荷を使われるとアパート自体が崩壊しかねないから』」

それを僕は制する

彼なら運悪くこのアパートを全壊させられると思う

不運にも全ての螺子が切れ、不運にも

この建物を支える柱が腐って、運悪く皆死んでしまう

まあ僕は死ねないけど

「このアパートを全壊って…他の過負荷はそんなに理不尽な能力を持つてるの？」

「『まあね』『僕の無能力もそれなりに最低だし』」  
マイナス

『だからこんな狭い部屋で暴れてもらうと困るんだよねえ』」

「がはッ!？」

すると突然、先の丸まった、ものを貫くことが出来ないような螺子が清瀬さんを直撃し、部屋の外まで吹き飛ばす

「『暴れるなら、外でやろうぜ?』」

僕も部屋の外へと出る

アパートの外はそれなりに広い駐車場のような

場所があつて、戦うにはそれなりにスペースがある

それなら部屋で暴れるより多少はマシだろ？

「不意打ち、まさに過負荷らしいね」

「『正々堂々の戦いを望んでるならお門違いだぜ？』」

『僕ら最低がそんな公平な戦い方をするとでも思ってるのか？』」

「思っていないよ。君、本当に気付いてないの？」

気付いていない？ なにをだよ？

「『僕は別に気付きたいことなんて無いんだけど』」

「はあ…なら一応言つてあげるね？」

ボクも君たちと同じ過負荷だよ？」

「『え！？』」

思わず括弧を外してしまいそうになるぐらい

僕は驚愕の声を上げた

この子も…僕たちと同類…？

「『そんなわけあるか！』『過負荷は他の過負荷を感じられるん



だぞ！』

『なのに僕は君からなにも感じていない！』 『それは明らかに不自然だ！』

「だって、ボクはどっちつかずなんだもん」

聞き慣れない単語だ

なんだソレ？

「『どっちつかず？』」

「うん。過負荷を持ってるし、無才能だけど、

ボクは世界に絶望してなんかいない。ボクも自分は結構性格が明るいほうだって自重してるし、自分でも過負荷だって信じられないよ。でも、ちゃんと無才能だしエリートも憎いよ？ だから君に近付いたんだ」

過負荷を持ってるのに、世界に絶望していない…か

プラス  
幸せ者であって不幸せ者でもある  
マイナス

そんな曖昧な彼女

だから僕は彼女に対して無意識に拒絶反応を起こしたのか

同じ最低なのに、幸せを掴めている彼女を見るのに  
マイナス  
絶えられなかったんだ

「ネットで君達のことを知ったんだ。学園都市には

過負荷って呼ばれる存在が居るって統括理事会の記事に載ってた。現在はその存在の確認をしようとしていて、進めば調査や実験も始めるらしい」

僕たちの存在は既に統括理事会にばれているのか

学園都市全てを支配するような連中だけあるね

情報力が圧倒的に強い

なら、僕たちのエリート抹殺計画も…

「ボクも君達と同じ過負荷なんだ。初めて会った過負荷なんだ。だから力になりたい。君達の手助けをしたいんだ」

自ら僕らの仲間になる過負荷なんて始めて聞いたよ

でも、彼女のマイナス性を確かめないとなあ…

「『なら僕を殺してよ』」

「え…？」

僕の条件に彼女は首を傾げている

「『だから』『僕を殺してみなよ』『僕たちの目的はこの学園都市に存在する超能力者<sup>エリート</sup>の皆殺しだ』『なら人を殺せないと話にならないんだよ』」

「でも…雪くんを殺すのは…」

怯えながらそう言う

やっぱりまだ純粹すぎる

罪、悪、憎悪、怒りなどの負の感情にはまだ抵抗があるらしい

しょうがないなあ…

「『あはは』『もし過負荷なら僕を普通に殺してくれるのに、清瀬さんは殺してくれないんだね』『それはそれで君の魅力だと思  
うけど、  
僕が能力を確かめる点では欠点かな？』」

『よし、ここは一つ』『僕が悪役になって清瀬さんを挑発してみる  
よ』『よ』」

「挑発？ 幾ら挑発してもボクは君を殺したりなんか…」

『お前、女の癖になに自分のことを”ボク”って呼んでんだよ？』  
『正直男みたいで引くよ（笑）』」

清瀬さんが固まった

虚無の表情のまま、僕をジッと見つめている

あの時の男の子たちみたいだ

で、やはり徐々に硬直が解けてくる

「ふ、ふざけるなよオオ!!」

怒りが爆発した

まあそれでも女の子だからまだ  
やっぱり覇気に欠けるけど

「この一人称だけはスルーしてくれよ！ 男子ばかりの四人  
兄妹の末っ子なんだから一人称は自然とこうなるんだよ！」

へえ、こういうのって理由とかあるんだね

「別にいいじゃないか”ボク”でも！ 昔なんか  
”オレ”って一人称だったんだけど流石に拙いって  
思っで必死で変えたんだよ！」

うわあ、怒り方が理不尽過ぎる

こういうところだけ過負荷なんだから

「『あはは』『うん、良いマイナス性だよ』」

『でも、流石に突っ立つてる相手を殺すのは気が引けると思うからこつちから先に仕掛けてあげるよ』」

僕は螺子を取り出し、彼女に向かって駆け出す

そのまま顔面に向かって螺子を突き刺す

けど、その攻撃は何故かまったく別の場所へと行ってしまった

しっかりと彼女の顔面を意識して突き刺したのに、気が付けた隣の壁を突き刺してた

それに、説明できないような憎悪感を、僕はその壁へ感じていた

壁に憎悪感って…

自分で自分を呆れた

「『あれ？』」

もう一度彼女に向かって螺子を投げる

「うわぁ！？」

それは何故か彼女ではなく、玄関から見守っていた敦くんたちに投げた

なんだろう？

壁の次は敦くんが憎い

いや、なにかもが憎い

空も、雲も、大地も、敦ちゃんも、  
海咲ちゃんも、世界も

なにかもが憎い

なのに、僕は清瀬さんだけは憎めない

「どう？ 意味不明だろ？」

これがボクの過負荷、  
ノットクリアー『偽良性』の能力さ」

コレが過負荷？

「ボクに対しての憎悪などを他の物や人に移す能力さ」

なるほど、かなり他人迷惑で自分勝手なスキルだね

だから彼女は過負荷のように精神に異常が無いのか

誰も彼女を悪くしないんだもん

「『痛いなあ…』」

血塗れになりながら僕はそう言う

彼女は僕になにもやっていない

これは全部、僕が自分でつけた傷だ

彼女への憎悪を僕自身に移して、  
自分を攻撃させてる

ある意味完全無敵な過負荷だ

「ハハハ！ なに自分を攻撃してるの雪くん？ アハハ！」

ケラケラと可愛い顔で、でも狂気の  
声で僕を笑う

もうマイナス性全開だね

つまり、彼女は普段から仮面を被っている

幸せ者のような表、でも裏は相手が  
無関係の人を傷付け喜ぶような狂気を持っている  
女の子

表裏の激しい人だ

彼女の本性こそ、あの狂気だ

「『あはは』『ム力つくなあ……!』」

螺子を彼女の顔面に突き刺そうとする

「じゃあね、雪くん」

でも、その怒りは僕自身に向けられる

自己憎悪、怒り、憎しみ

自分が嫌いだ、憎い、殺したい、死にたい、  
傷つけたい、苦しめたい、呪いたい、惨殺したい

僕は彼女に向かって駆け出すのをやめる

そして

僕はその螺子を

自分の頭に

突き刺した

彼女の目の前に居た所為か、返り血が  
顔に飛んでいた



返り血を浴びて徐々に正気に戻ってきたのか、清瀬さんは青白い顔を始める

「あああああ！　そ、雪くん…！」

だが、そんな声も虚しく、僕の頭を貫いている  
螺子から血が流れ出る

糸が切れたかのように僕は倒れ込んだ

意識を失う前に見えたのは、涙を流しながら  
倒れている僕の顔を揺さぶっている清瀬さんだった

「ボクが…ボクが雪くんを…！」

「『でも死んでいないんだよなあコレが』」

「うわぁ！？」

螺子を頭で貫き、流血状態にも関わらず僕は立ち上がった

死んでいるはずの僕が起き上がったのを  
見て、清瀬さんはゾンビを見るような目だった

まあ、死んでないっていつても一回死んでるんだけど

「そんな…雪くんの心臓は完全に止まっているはずだ！

それ以前に頭を螺子で貫いて生きてるなんて…ありえない！」

「『そうやって常識に囚われてるようじゃ』」

『まだまだ過負荷として甘いぜ？』『僕たち相手に常識を使おうなんて、それこそ荒唐無稽さ』」

と、格好良いことを言ってみるけど、彼女は疑わしい目で僕を見て  
いる

あはは、ノリの悪い人だなあ

笑いながら頭から螺子を抜きとると、彼女を  
僕なりの真面目さで見つめる

まあ笑顔のままなんだけど

「『とまあ冗談は置いて』『うん、実際に死んでるよ？』  
『ただその死を、僕は「無かったこと」にただけさ』」

「…無かったことに？」

「『そう』『すべて現実を虚構にするのが僕のマイナス無能力、オルフィクション大嘘憑きさ』」

何回もこの台詞を言ってるけど、驚く顔がいつも  
見れるから飽きないんだよなあ

まあ彼女は対応が良さそうだから驚いても  
混乱はしないと思うけど

「つまり、自分の死を君は『無かったこと』にしたの？」

「『うん』 その事象が現実なら、僕はそれを虚構として処理できる」

『僕にとつては全てが”フィクション”、つまり絵空事』 『なんでもかんでも』

嘘と信じ、現実として受け入れない』 『それこそ僕の最低で最悪で理不尽で凶悪なマイナス マイナス マイナス 過負荷の無能力さ』

大嘘憑きの能力は『現実を虚構にする』と書いて、  
『現実を虚構にする』って読むからね

まさに書きの通りの能力だよ

嘔吐きの僕にはピッタリな名前だ

「…ボクの無能力もそれなりに理不尽だとは思ってたけど、君の無能力の方がよっぽど理不尽だね」

さつきから”マイナス”って言うてばかりだね

それだと飽きるんじゃないのかな？

「『でも、これでも君はオツケーだ』 『僕を殺せるなら、超能力者だって普通に殺せる』 『それに、一旦人を殺すと最初が辛くても後が楽になるしね』」

「これからよろしくね、雪くん」

「『こちらこそ、真希ちゃん』」

三人目の過負荷

『ノットクリア偽良性』の清瀬真希

## 十話 『どっちつかず』（後書き）

いつもいつも厨二で本当にすみません

入院中、病院から抜け出した厨二病患者です

過負荷を投稿してくださったあら様、本当にありがとうございます

移せる対象を人だけでなく物も、という設定に勝手ながら変更させてもらいました。許可無く変えてしまつてすみませんでした

（過負荷の説明コーナー）

『ノットクリアー  
偽良性』

他人の自分への悪意や殺意などの負の感情を周りの人へ移す能力たとえこの過負荷を使っていると頭ではわかっていても気づけば周りの人へ攻撃をしていて本人への攻撃はできなくなる。むしろそのことを意識して「攻撃をしなければ」と悪意を強めれば強めるほど

周りの人へ負の感情が募り抑えきれなくなり強力な攻撃をしてしまう。

無関係な人へ攻撃をしてしまい、後悔するのを楽しむ性格から生まれた過負荷。その姿を笑い、さらに自分への悪意を増長させ、より強い攻撃をさせるも他人に押し付けられ（以下ループ）

完全無敵の過負荷

相手からの攻撃は通用せず、こちらは

思う存分攻撃できる

負の感情を向けてきた相手に直接返すことも  
できれば自己憎悪のあまり自分を攻撃させることも出来る

原作の『不慮の事故』のような能力です

十一話 「恩返ししてえんだ」(前書き)

前回の前書きでも自分の説明が下手で伝わっていなかったようです

迷惑掛けてすみません

ですのもう一度書きます

今話を持ちまして、過負荷の募集を終了します

沢山の投稿、およびご協力、本当にありがとうございました

## 十一話 「恩返ししてえんだ」

「『皆、今日は出掛けるよ』」

あれから更に数日経っていた

この数日間は新しく過負荷の一人になった

真希ちゃんに僕たちについて説明することで手一杯だった

過負荷の世界観、目的、価値観

まあ、そんな複雑なことじゃないけど

ちなみに一つ豆知識だけど、僕ら過負荷は

偶然にも全員がジャンプ愛読者だ

楔さんのマイナス十三組と同じモットーにはしないけど、それでも偶然は凄いつて思った

で、その後はノンビリしていたけど、今日は違う

「出掛ける？ 急になんだよ？ しかも何処に行くつつーんだよ？」

敦ちゃんが僕にマシンガンのように質問を投げかけてくる



そこまで出掛けるのに不満なのか？

「貴方は黙って説明を待つことが出来ないんですか？」

「うるせえな！ こっちは気になってることを  
言っただけなんだ、イチイチ口出しすんじゃないよ！」

「まあまあ、二人共」

言い争いを始める敦ちゃんと海咲ちゃんを、  
真希ちゃんが落ち着かせようとする

はあ、三年生がもう一人居るだけマシかな？

「『敦ちゃん静かにして』『出掛けると言っても、  
今回は遊んだりしないよ』『真剣なことさ』」

「へえ、ソレはなになかな？」

「『敵状視察さ』」

僕たちの所属する第七学区は、ある意味  
色々と混雑してる場所だった

他の多数の学区と隣接してる所為か、ここには普通の学校からエリート校まで幅広い学校がある

場所によれば綺麗なところもあるし、不良や無法者で支配されてる箇所もある

だからある意味かなりややこしい

その第七学区の中でも屈指のエリート校、常盤台中学のある箇所に、僕は来ていた

常盤台は学園都市有数の名門エリート校だ  
主に超能力者の研究で有名だ

在学するにはレベルが3以上でないと  
いけなく、たとえば大統領の娘だろうが姫だろうが、  
超能力が無ければ入れない

学園都市に七人しか居ないレベル5が二人も  
在学していて、レベル4も多数存在している

そんな学校のある箇所に何故僕らが  
居るのかと言うと、さっき言ったみたいに  
敵状視察だ

唯一レベル5の中で能力の情報や顔写真を公開してるのは  
この常盤台に所属している

学園都市序列第三位のレベル5、  
超電磁砲の御坂美琴

今回は彼女の偵察みたいなものだよ

他のレベル5は顔写真どころか本名も公開していないし、ターゲットとして一番選びやすかった

まだ交戦はしない

あっちから挑まれたら戦うけど、まだ殺さない

今は時期じゃない

レベル5を殺せば、敵に回る連中はかなり多いと思う

そうなると分かっているのなら、まず始めにもっと仲間を集めないといけない

少なくとも対抗できるような

「しかし…綺麗なところですね」

「まあこの学園都市でも有数の女子中学校のあるところだからね。お嬢様たちが住むようなところが汚いわけないだろうし。ボクはこういうところは苦手だけど」

僕たちに住んでいるところとは大違いだね

まあ学力の低い僕らの学校には当然の扱いだけど

「『よし、ここぐらいでいいかな』」

しばらく歩くと、噴水のある広場の  
のような場所を見つけた

集合場所にいいと思い、ここでとまる

「『二手に分かれよう』 敦ちゃんと海咲ちゃんは  
この辺りを調査』 重要な地点とか、どこに人が多くて、  
どこが少ないとか、そういう感じの』 僕と真希ちゃんは  
見学と装って常盤台自体を偵察してみる』」

「ちよつと待て！ なんで俺と琴吹なんだよ！」

僕の提案が不満なのか、クレームをつけてくる敦くん

はあ、こういう時は協力的になろうぜ？

「『均等に人数を分けてるから、仕方ないよ』」

「それなら俺と球磨川先輩でもいいじゃねえか！」

「『はあ、分かっているなあ』 『ここは一応は常盤台女子中学  
の生徒だけでなく、他の女子校の生徒が住む地域なんだぜ？』」

「それがどうしたってんだよ？」

「『だあかあらあ！』 『女子』校の生徒なの！』 分かる？』」

ここに住むのは教師以外は殆どが女子だ

理由は、この辺りの学校の殆どが女子校で、男子なんて殆ど居ない

それはつまり、僕と敦ちゃんが道を歩いてるだけでもかなり珍しいんだ

さつきから物珍しそうに僕たちをチラ見してる人がいっぱい居るしでも、僕たちが一人で歩いたらどうする？

女子が殆どのこの地域で男子二人で歩くなんて、変態だと思われるよ

そんなの僕は嫌だし

だからお互い、女子である海咲ちゃんと真希ちゃんと一緒に行動してそれを回避しようとしてるんじゃないか

「…あ、そうか。なるほどなるほど。球磨川先輩の言うことも一理ある」

「『だろ？』 君だって変態って思われたくないだろ？』」

「でも、それだったら俺と清瀬先輩でも…」

「『年齢だと君と海咲ちゃんの方が近いだろ？』  
『もし高三の僕が一年生の彼女と一緒に歩いてると、僕がロリコンだって勘違いされるじゃん？』」

僕は断じてロリコンではない

楔くんとは違う

僕は出来るだけ同い年か、一番妥協できて二年年下かな？

年上はちよつと御免だけど

「『はい、そうと決まれば即行動！』『なにかあればお互いメールなり電話なりして連絡を取り合つて』」

四人ともお互い携帯は持つてるし

ちなみに僕は先日真希ちゃんに携帯を選んでもらった

学園都市は世界最先端の技術を持つてるから、携帯も最新の機種や、見たことの無い機種でいっぱいだった

まあ、お金が足りなくて普通のになっただけ

「ちッ、精々足を引つ張るなよ」

「貴方の方こそ地に這い蹲ってるゾンビより足を引つ張りそうですよ」

例え方が少し怖いんだけど？

忘れてたね、彼女、僕には音楽系のゲームを進めたくせに自分はガンシューティング系が大好きだって

こういうところだけ何気に敦ちゃんと趣味があつて

二人はギヤーギヤーと争いながら去つていった

「さて、ボクらも行こうか」

それを見届けると、真希ちゃんも僕に行こうと  
腕を引っ張り、常盤台へ向かい始めた

~~~~~

ちッ、なんで俺がこいつと一緒に行かなきゃいけないんだよ  
これかなら清瀬先輩の方がよかつたぜ

しかもこいつの過負荷は厄介で  
殴ることすら出来ねえんだ

ひでえと思わねえか？

「なに嫌そうな顔をしてるんですか？ さっさと歩いてください」  
てめえはいつも俺に突っかかつてるよな？

俺に恨みでもあんのか？

「お前、なんで球磨川先輩に着いて行こうと思ったんだ？」

「はい？ いきなりなんなんですか？」

「球磨川先輩を慕う理由はなんなのかって訊いてんだ」

同じ過負荷として、少しは気になるよな

こいつはこの前、突然球磨川先輩が連れて帰ってきたんだ

最初は俺も意味が分からなかったが、球磨川先輩はこいつが新しい過負荷の仲間だって言ってくれた

俺も最初は同類が増えてよかったって思ったさ

でもこいつと来たら…

『貴方、頭悪そうですね』

俺を見て一言そう言った

信じられるか？ 人を見て第一声が

”頭が悪そうですね”だぞ？

それ以来、俺はこいつが大嫌いになった

「貴方にしては、少しは知的な質問ですね」

「んだとてめえ！」

なんでコイツはそんなに俺を嫌うんだよ！？



「でも、まあなんででしょう？ 正直、私自身も分かりません。でも、気がついたら球磨川さんを慕っていました。先輩は、初めて私を過負荷として受け入れた存在なんです。だから私は先輩の仰ることならなんだってします」

球磨川先輩には、何気にカリスマ性があつたからな

こうなんというか、自分と同じ存在を引き付けるような雰囲気将球磨川先輩は持つてるんだ

「あ、そういえば」

琴吹はポンと手を叩くとなにかを思い出したようなことを言った

「この前は家まで送っていただきありがとうございました」

「はあ！？」

ぺこって俺にお辞儀してる

ってこいつが俺に感謝してる！？

こんなもん、2012年の地球滅亡説よりありえねえことじゃねえか！

「なんの風の吹き回しだ？ お前が俺に礼を言つなんぞ、考えもしなかったぞ？」

「人の親切を切り捨てるなんて…貴方は本当に最低ですね。ほら、

私も涙目になってしまったじゃないですか」

後ろを向いてしくしくと言ってる海咲

嘘吐けてめえ

さっきまで無表情だったじゃねえか

「そんな戯言なんか言ってるんじゃないよ」

「貴方はノリが悪いですね。こういう時は動揺するのが、  
なんか漫画っぽくていいじゃないですか」

「俺はそんな恋愛漫画みてえな展開は知らねえよ」

そもそも俺は球磨川さんみたくそういう漫画は  
好かねえんだよ

気持ち悪いったら仕方無い

「でも、感謝の気持ちは事実ですよ。貴方が送った  
所為で球磨川さんが一度死ぬことになってしまいましたけど」

「俺を責めてるみてえなこと言っなよ！」

さっき俺に感謝してるって言わなかったか！？

「それよりも…」

「俺の発言は無視なのか？」

琴吹は俺のクレームを無言で切り捨てた

ひ、ひでえ…

「それなら貴方はなんで球磨川さんの仲間になったんですか？」

なんだ、俺のことかよ

はあ…なんでだろうな？

ぶっちゃけ、あんま分かんねえ

俺も気が付いたら球磨川先輩と一緒に居たんだ

思えば、あの時から球磨川先輩のカリスマ性に  
俺も引き込まれていたんだな

『僕と居れば、君は世界一不幸せになれる』  
かわいそう

あの一言からだ

俺は球磨川先輩の魅力に魅かれた  
マイナス

自分こそ最低だと自負していた俺よりも底辺で、  
屑だった球磨川先輩

アイツのあの圧倒的な負完全の前に、俺は思わず安心してしまった  
マイナス

”俺より下が居る”

そんな安心感を与えてくれた

今まで俺を化け物としてしか扱っていなかった  
連中を、全員どうにかしてくれそうと思った

まあ実際は何一つしてくれたいんだが

それでもそれぐらいしてくれそうだった

「俺は球磨川先輩の負完全さに引き込まれた。あの圧倒的な  
マイナスイ性。」自分より最低な人間が居る”ってだけでこれほど  
頼もしいやつは居なかった。

なにより嬉しかったのが、球磨川先輩が俺達のことを友達って  
呼んでくれたことだ」

俺は生まれて一度も”友達”なんて存在は出来なかった

この過負荷を持つてる所為で、俺の近くで遊んでる  
連中は転んで怪我をしたり、時には事故に遭って大怪我を  
負ったりする連中も居た

それを気持ち悪がって、大人の連中は自分の子供を俺に近づけな  
かった

本当に孤独だった

両親なんて物心持った時から居なかった

多分俺の過負荷を恐れて捨てたんだろ

そんな中、球磨川先輩は俺を”友達”だと言ってくれた

”家族みたな存在”だと言ってくれた

人生であんなに嬉しかった言葉はなかった

ただの言葉でも、とても温かくて、穏やかだった

過負荷なんか関係なく、負完全なしで本当に温かい言葉だったんだ

俺たち過負荷にとって、友情、家族、努力なんてくだらねえことだ

でも、それでも俺たち嫌われ者マイナスにとって、そういう存在は本当に嬉しい

嘘も、戯言も、仮面も抜きで

「私たちにとって球磨川さんは恩人です。これだけは貴方と賛同できます」

珍しく意見が合うな

俺は琴吹を見直した

こいつだって、俺と同じぐらい球磨川先輩に感謝してるんだ

意見こそ違うが、やりたいことは感謝の気持ちは同じだ

俺もこいつも、球磨川先輩には計り知れないほど感謝してる

「そうだ。だから、俺は恩返しがしてえんだ。俺達に目的を、居場所を、温もりをくれた球磨川先輩に」

プラス  
幸せじゃねえのは分かってる

でも、それでも俺達は嬉しい

「もし球磨川先輩になにかあったら、俺たちで過負荷の連中を支えなくちゃいけねえ。その時は、よろしく頼むぞ」

俺は琴吹に向かって手を差し出す

嫌味とかじゃなくて、嫌がらせとかじゃなくて、

悪意も無く、嫌悪も無い、純粹に手を差し出す

改めて自覚した

俺とコイツは、所謂副リーダーみてえな存在だ

つまり、球磨川さんになにかあれば俺たちが仕切ることになる

その時にこいつと仲悪かったら球磨川さんに顔向けできねえ

これはその始まりだ

「…貴方こそ、突っかってこないでくださいよ？」

あいつはその手を受け取った

お互い握手を交わす

「よろしく頼むぜ、海咲<sup>みさき</sup>」

「そちらこそですよ、敦<sup>あつし</sup>さん」

十一話 「恩返ししてえんだ」(後書き)

次回はくまーと清瀬サイド



## 十二話 『僕は悪くない』（前書き）

連続投稿がストップしてすみません

あの名言、やっと登場です

くまーといえばやはりこの言葉でしょう！

…なのに今話はバトルがありません（おい

申し訳ない！

ちなみに明日も更新できなさそうです

はあ…面目ない…

## 十二話 『僕は悪くない』

「うわぁ…これはすごく広いね」

「『まあ、お嬢様の通う学校だから』」

常盤中学校の校舎は規模が違った

数多くの施設に、巨大な校舎

生徒なんて何百人も受け入れられそうな  
ぐらいの面積を誇り、綺麗な塗装の建物が並ぶ

僕たちの高校とは大違いだね

中学生の分際でこんなに良質な…

まあ僕も大人だ、中学生相手に嫉妬するつもりは無い

そんなお嬢様学校に圧倒されながらも、  
僕と真希ちゃんは校舎を散歩する

ここでの基本的な戦力や生徒たちの実力、  
そしてレベル5の能力についての情報

これらを探し出さなきゃいけない

ここでの基本戦力は大体分かってるけど

基本はレベル3の生徒、少数のレベル4、

二人のレベル5、そして警備員アンチスキルに所属してる教師数人だ

警備員アンチスキルっていうのは、この学園都市というSWATやSATみたいな部隊だ

教師や大人だけで構成されている最新鋭の銃火器や防具を装備した戦闘部隊

主に暴走した超能力者の鎮圧を担当していて、機銃の扱いはかなり優れている

国際的な問題になれば学園都市外にも派遣されるような危険性もある

そんな彼等を相手にするのは少し厳しい

幾ら過負荷のスキルを持っていたても、銃や防具相手じゃなにも出来ない

射殺されて終わりさ

だから、できるだけ教師の少ない日に攻め込みたい

後はレベル5の存在だ

確か御坂美琴さんは二年生だったはずだ

なら二年のクラスを調べないかね

「ここなんじゃないの？」

「『君の勘がそうなら合ってるんじゃないの？』『君の勘はよく当たるしね』」

僕たちが来たのは一つの教室

中には中学生たちが授業を聞いている

「なんか、平日に別の学校に行くのって変な気分だね」

「『まあ僕たちは実質的には学校をサボってるんだから』  
『変な気分になるのは仕方無いよ』『それより、真希ちゃんが良い  
の？』」

今日は平日だ

つまり普通の授業がある

それなのに、僕たちは学校をサボってまで  
ここを偵察しに来たんだ

居ても居なくても同じなんだけど

元々真面目に受けてるつもりはないし、そんな  
生徒って感じでもないし、そこに居るだけの存在

そんな僕と違って、真希ちゃんは一応はプラスで通ってる

皆に明るく振舞って、授業も真面目に聞き、成績もそこそこ良い

そんな彼女が僕たちと一緒にサボるのは、ちょっと変な気分だよ

「その二人！ 待ちなさい！」

廊下の前を歩いている僕らは呼び止められた

何かと思い振り向くと、そこには一人の警備員みたいな人

「一体どちら様ですか？ 今日は何日ですよ？」

やばい

不法侵入って気付かれたら、後に警備が強化されてもう一度ここに入るのが少し厄介になる

かと言って許可なんてもらってないし、見学だって伝えても多分信じてもらえない

そもそも過負荷の僕の戯言を信じる人なんて居ないけど

「『ああ…』『その…』」

「この人不法侵入です。ボクが捕まえました」

なにか言い訳を言おうとすると、突然真希ちゃんが僕の腕を掴んでそう言った

まるでさっき僕を捕まえたって伝えてるかのよう  
え？ なにこれ？

「なに！？ それはご苦労でした。その坊主は  
我々で処分しますので、貴方は気を付けて」

「はい！」

そのまま真希ちゃんは僕を警備員に差し出した

耳元で、「ゴメンね雪くん？」って言った

あはは…僕、身代わりにされたのかな？

「ほら、さっさと歩け！」

どこかへ連行される僕

後ろを向くと、片手でピースサインをして  
悪戯っぽい笑みを浮かべてる真希ちゃん

「『はあ…』 君は色んな意味で最低だよ」  
マイナス

~~~~~

連行されていく雪くんを見つめた後、僕は再び教室の中を覗く

ゴメンね雪くん？

でも、ボクは捕まりたくないの

だって、それだと将来ボクが大変になるじゃないか

君なんてロクな未来が無いと思うし、  
自分でもそう宣言してるんだから許してね？

雪くん風に言うなら、『ボクは悪くない』かな

「あの…なにをしていらつしゃるのですか？」

すると突然教室が開けられ、さっきまで  
授業をしていた先生が顔を出した

さっきのやり取りでボクたちに気付いたらしい

後ろでは生徒達の視線がボクに集中している

「見学ですよ。妹がここに通う予定なんです」

「へえ、それなら教室に入っても構いませんよ？

生徒達の授業の邪魔にならないのなら、幾らでも見学してください」

お言葉に甘え、ボクは教室へと足を踏み入れる

それなりに広い教室

そして、まだ顔から幼さの取れていない  
中学生たちの顔が見える

この中にあの超電磁砲レールガンが居るのかな？

まあ、堂々と名前まで公開していたんだから、  
簡単に見付かると思うけど

「皆さん、見学をしたいと入っただけなので、  
気にせず授業を続けてください」

ボクは礼儀正しくそう言う

それに従ったのか、皆ノートを書くのに戻っていく

全員が真面目な態度で、熱心に勉強に取り組んでいる

あはは、ウチの連中とは大違いだね

「今日は見学ありがとうございました」

授業が終わり、放課後になるとボクはお礼を言う

そこまで役に立つ収穫は無かった



まあ皆の授業態度からの性格とかは得られたけど

「いえこちらこそ。妹さんによりしくお願いします」

そういえばそんな設定だったね

本当は今ただの一人っ子なんだけど

「はい」

そういえば雪くんはあれからどうなったのかな？

連行されてからは連絡が何一つ無いんだけど…

拷問とか？

あは、さすがにそれは無いよね

でもここはレベル5が二人も居る学校だし、  
事情聴取という名の暴力は受けてるかもしれないね

いや、高確率で受けてる

だってボクら、過負荷だもん

理不尽なんて付き物さ

「すみません…」

雪くんの捨てられてる場所を探しにいこうとすると、

突然声を掛けられる

振り向いてみると、ボクに声を掛けたのは一人の中学生だった

茶髪の髪の毛に、どこか気が強そうな目

敬語で話すのがあまり慣れて無さそうな子だ

「ん？ どうしたの？」

「いや、少しお話を伺ってもいいですか？」

初対面だけど、敬語はかなり違和感がある

まあ、それは気にしないでおこうか

流石に初対面でそんなことを言うのは失礼だし

「いいよ。まあボクに用なんて殆ど出来ないし、寧ろ嬉しいくらいさ。喜んで行くよ！」

少し軽い気持ちで彼女に着いていく

そんな軽い話ではないと思うけど

その証拠に、この子のボクを見る目は、  
長年の憎き敵を見るような瞳だった

~~~~~

とある中学生に連れられ清瀬が来たのは、  
人目のあまりつかない校舎の裏

そこで誰も居ないのを察知すると、清瀬はさっきとは違い  
ふざけた態度を改め、友好的な笑みを冷徹で、気味の悪い笑みへと  
変える

一瞬にして豹変した清瀬の表情に、その中学生は若干身震いしていた

「…単刀直入に訊く。アンタ、何者？」

頭部をビリビリと発電させながら中学生はそう訊いてきた

威嚇のつもりか、所々静電気が漏れている

敵意で固められたその瞳に睨まれながらも、  
清瀬はその笑みを崩さない

「何者って、どういう意味？　ボクはただの  
か弱い女子高生だよ？　なんの能力も持たない、  
ただのレベル0の無能力者で…」

「嘘吐くな！」

中学生から電撃が清瀬に向かって放たれるが、  
それは辛うじて意図的に右へ逸らされ、当たることは無かった

後ろではバラバラと壁が崩れる音

威力は通常の発電能力者とは比べ物にならないほど大きい

清瀬は直感した

彼女こそ、この学園に存在するレベル5の第三位、  
レベルガン超電磁砲の御坂美琴だと

「いきなり能力使うつてどんな実力主義者なの？  
もし当たってればボクなんか一撃で死んでたよ？」

「正直に質問に答えれば、当てないわよ」

まるで脅すかのように手を清瀬へ向けた

少しでも怪しい動きをすれば打ち抜かんと  
言わんばかりに突き出されたその手は、まるで  
銃口を突きつけられているようだった

「アンタ、あの螺子の奴とどういう関係？」

「螺子の奴？ 一体なんのことかな？」

”螺子の奴”と言われ、清瀬は一瞬で球磨川だと分かった

螺子なんていうものを特徴として使うのは、  
球磨川以外に清瀬は考えられなかった

だか、学園都市の敵となる存在にその存在を

知られるのは宜しくないと思い、清瀬はその関係を否定した

「とぼけないで！ アンタだって、アイツと同じなんですよ！」

”アイツと同じ”

球磨川のマイナス性と負完全を目の当たりにした

御坂は、同じオーラを纏う清瀬に声を掛けていた

悪夢のようなあの男への報復を、御坂はまだ諦めていなかった

「…わあ、君スゴイね。彼でもボクの過負荷性は見抜けなかったのに、君は分かるなんて」

御坂は無意識に常に一定の電波を回りに張り巡らせている

それのお陰で、リーダーのような作用を施し、他人を感知できるようになっている

清瀬を感知した時、球磨川を感知した時と酷似した気持ち悪さを感じ、御坂は清瀬が球磨川と同類だということを見抜いていた

「やっぱりアンタも…！」

「強いて言うならそうかな。ボクはどちらかと言うと微妙なところなんだけど」

「微妙でもなんでもいいわ。アンタ、あの螺子の奴が何処に居るか知ってる？」

簡単に予想できた問いに、清瀬は慌てることなく、笑顔を崩すことなく答えた

「君、彼になにか恨みでもあるのか？ それの報復のつもりなら、一言だけ言っておいてあげる。やめときな

君じゃ彼には敵わない」

きつぱりと”自分は負ける”と言われ、御坂は少し怒りを感じていた

だが、それを清瀬で発散させるのを抑えながらも、言い返した

「やってみなきゃ分からないでしょ？ これでも私、レベル5なんだから。アイツに負けるなんて思ってないわ」

自信気にそう言った

学園都市最強の超能力者の部類であるレベル5

それに属している自身が負けるはずが無いと御坂は言った

そんな彼女に、清瀬はただ呆れんとばかりに首を振った

「その認識自体が甘いのだ」

彼はそんな君の認識の遙か下を行く」

清瀬も誇るように球磨川のことを話す

「随分自信満々なのね。何者なの、あの螺子の奴？」

「彼の名前は球磨川くん。」

悪でもなく、邪でもく、言うなら澄んだ川のように、濁ってもいない

でも、そんな彼は人間の負の側面を集約したような人だった」

清瀬は始めて球磨川と会った時を思い出しながら、語りだした

「  
負ふ  
」

一言そう告げた

まさに球磨川の特徴を現した一文字だった

「彼は誰に対しても負けていて生まれながらの敗北者で  
だからこそ誰よりも強かった」

奇想天外な人物の説明に、御坂は半分混乱していた

言っている意味が分からなかった

敗北者でありながら強者

強者であり勝者でもある御坂とは正反対な人間だった

「呼吸するように他人を傷付け

食事をするように破壊活動に勤しみ

己を含めた全人類を一人残らず滅ぼそうとか

悪夢みたいなことを至極真面目に企んでいそうな

大胆に破綻した人生そのものが荒唐無稽の破滅型

ありえないほどの影響力を持って周囲を

否応なく巻き込む

それが、ふかんぜん負完全、くまがわ そそぎ球磨川雪だよ」

途切れることなく言い抜かれた球磨川の人物像

まさに人間の負の側面全てを物語るような人物

人類最低の過負荷、それが球磨川だった

「ッ……！」



そんな人物像に、御坂は言葉が詰まった

「まあ、彼は今頃この学校のどこかに居るんじゃないのかな？  
本当はついこの間まで一緒に居ただけで、捕まって連行されちゃ  
ってね。」

未だに警備室で取り調べを受けてるんじゃないのかな？」

それを聞いた瞬間、御坂は駆け出した

警備員が連行した

つまり、あの球磨川に自ら近付いたという意味だった

”警備員が危ない”

そう直感し、御坂は警備室へと全力疾走していた

「ちょ、引つ張らないでよ！」

未だに清瀬を連れたまま走り、警備室の前まで  
来ると止まる

そして、扉を半ば蹴り開けるような勢いで開けた

そこに広がっていたのは、地獄絵図だった

壁や床は血と思われる液体の後が大量に付着している

中の監視カメラを確認するための  
テレビなどはスクリーンが割れ、無残にも  
壊れている

机や椅子は幾つも倒れ、その惨劇を物語っている

そして、壁にはそれぞれ、手や足、胴体などを  
螺子で貫かれ固定されている警備員たち

「なによ…これ…？」

あまりにも悲惨な状態に、ただ啞然とする御坂

「『うわあ』『これは酷い』『うん、こんな  
極悪非道なことが出来るなんて人間の仕業じゃないよ』」

警備室の奥から聞える声

それに続き、こつこつと足音が聞えてくる

「『幾ら超能力者である可能性があっても  
自分で自分を壁に刺せるような能力は無いよ』  
『同士討ちなんてありえなさそうだし』『これは  
明らかに第三者の仕業に違いない』」

段々と声は近付いてきていて、足音も次第に大きくなっていく

「『あれ？』『なんで君は僕を疑わしい目で見てるのかな？』  
『僕が来たときには既にこうなっていたんだよ』『それなのに

僕を犯人みたいに扱うなんて、君は横暴な人だなあ」  
「まあ要するに」

御坂の目の前に現れる男

顔を返り血で汚し、両手には血塗れの螺子

「『僕は悪くない』」

## 十二話 『僕は悪くない』（後書き）

次回は美琴とくまーの対決です

駄目文確定ですが、どうかお付き合いください…

ちなみに美琴のリーダーもどきが本文で登場した  
ような使い方が出来るかはわかりません

作中では出来るって設定にしておいてください…（泣）

十三話 『世の中は決定的に不公平』（前書き）

二日も更新できなくてすみません

連続投稿が段々と無理になってきました…

ちなみにタイトルは分かる人は分かると思います

次回の更新は…明日できるかどうか分かりません

ちなみに伝わっていないようなのでもう一度書きます

過負荷の募集を終了します

皆さん、ご協力本当にありがとうございました

### 十三話 『世の中は決定的に不公平』

「『あはは…』」

僕はこの惨状に、思わず乾いた笑い声を漏らす

目の前には激怒してる中学生と、

苦笑いを浮かべてる真希ちゃん

君は笑ってないで僕を助けてくれよ…

まあ、無理だと思うけど

彼女の過負荷は他人の自分に対しての負の感情を  
別の人に押し付ける能力だから、僕には使用できない

これは彼女のある意味最低<sup>さいこう</sup>の過負荷だから  
穴だつてそれなりにある

自分に憎しみとか負の感情を抱いていなかったら  
効果は無いし、海咲ちゃんみたいに無感情の人には滅法弱い

でも、今回の場合、この中学生ちゃんは僕に  
憎しみや怒りといった負の感情を抱いている

肩代わりできないのがあのスキルの欠点だね

「『わ!?!』『ちょ』『危ないって!』」

さつきからガンガン僕に電撃を放ってくる中学生ちゃん

って、電撃ってこの前会ったあの中学生ちゃんじゃないか

あのことをまだ根に持っていたのかな？

あの時は正当防衛だって言ったのに…

「『はあ…』 『人気者は辛いぜ…』」

あの四人組に恨まれたり、この中学生に恨まれていたり、僕は結構な人気者らしいね

「アンタの所為で、どれだけの人が傷付いたと思ってるのよ！」

僕に向かってそう叫びながら、再び

大きな雷をぶっ放してくる

「『でも実質的には誰も殺してないだろ？』 『全員生きているし』 『傷も残ってない』 『それなのに、なんて僕は怒られなきゃいけないのかな？』」

「たとえ傷が無かったとしても、アンタの所為でアレを受けた人はちゃんと苦痛を感じてるのよ！ そんなことも分らないの！」

はあ、物分りの悪い人だなあ

彼女の言ってることは確かに善だよ、正しいよ。とても善良な<sup>プラス</sup>ことだ

だからそんな君に教えてあげるよ

善良プラスなんて、善悪マイナスでかければ簡単に不幸マイナスになるってね

「『なら君に訊くよ』 『それならそいつらはまったく悪くないって言い切れるの？』 『君の言ってることは』 『あちらにまったく非が無いって言ってるのと同じことなんだぜ？』」

僕の発言に言葉を詰まらせる中学生ちゃん

「『それに、僕たちだって正当防衛みたいな理由ぐらいあるんだぜ？』 『人権って知ってる？』 『人間は全て平等に創られていて』 『決して犯すことの出来ない権利というものがあるって』 『ならなんで僕たちは反論の権利も認められないの？』 『過負荷ほくたちは”人間”に入らないの？』」

僕たちを殴っても、睨んでも、貶しても、暴力を振るっても、誰も文句を言わない

全ての人間が平等に創られているのなら、なんで過負荷はこんな理不尽で最低なスキルを持っているんだ？

人間が平等なんて嘘だ

生まれた時点で僕たちは過負荷マイナスという不利があるんだぜ？

これは平等じゃないよねえ



「人間が平等だっていうのは綺麗言さ」 「人間は才能に恵まれている人と」 「恵まれない人で大きく分かれる」 「君だってそうだろう？」 「才能があるからレベル1からレベル5まで上がれて」 「才能があるから超電磁砲なんてものを使える」 「

彼女の正体は真希ちゃんが連れてきた時点で分かったよ

御坂さんにとって、僕みたいな  
負完全は初体験だろうね

だからイライラや怒り、憎しみが倍増されてる

こんな気持ち悪い僕なんて、さっさと殺したいんだと思う

「枯れない花は無いけど」 「咲かない花はある」

『世の中は決定的に不公平だ』 「

とどめ

そう言わんばかりに僕は笑みを浮かべてそう告げる

彼女は呆然と立ち尽くしてる

「『その不公平をどこまでも受け入れるのが』  
『過<sup>ほく</sup>負<sup>たち</sup>荷だ』」

螺子を取り出し、両手に構える

レベル5といっても、やっぱりまだ子供だね

僕がちょっとだけマイナス性をぶつけただけで、  
まるで耐え切れていない。これじゃあ倒す時は簡単に  
倒せそうだよ

「『もう手加減は無し』『こっちからも攻撃させてもらっつね』」

僕は彼女に向かって螺子を投げつける

呆然として、避ける気配はまったく無い

まあ殺す気なんてまったく無いけど、  
少し威嚇かな？

でもここでありえないことが起きた

うん、僕の螺子は確かに彼女に一直線で向かっていた

だがその螺子は彼女に当たることなく、まるで  
意思を持ったように右へ逸れて近くにあった鉄の門にくっ付いた

ちなみに場所は攻撃を避けてく内に校庭にたどり着いていた

「『？？？』」

「…頭の悪そうなアンタに分かり易く説明してあげる」

キリっとした表情に戻って、僕を睨んでる

「鉄っていうのは電気を送り込んで＋極と－極を纏わせることができる。それである門には＋極を、アンタの螺子には－極を与えた」

「『それがどうかしたの？』」

「＋極と－極はお互い引き寄せられる働きがある。これがどういう意味が分かる？」

…－極を浴びた僕の螺子は全て門に引き寄せられるってわけ？

「『僕の螺子は君には当たらないって意味かい？』」

「そう。もうアンタの攻撃は私には当たらない！」

…伊達にレベル5を堂々と名乗っていないね

磁石の原理を利用して僕の螺子に－極を埋め込むなんて…

電気能力ならではの応用方法だ

でも、そんなことしたって僕が自分で近付けばいいだけじゃないか

あまり肉弾戦は得意じゃないけど、

中学生程度に負けない自信はある

「『でも』『肉弾戦には対応できないんじゃないのかなあ?』」

彼女に向かって走り、螺子を突き刺そうとする

「『最初は少し遊んであげるね御坂さん!』」

だがそれを御坂さんは軽く避けると、僕の  
鳩尾を思いつき殴った

幾ら女子中学生程度の力しかなくても、急所を  
殴られた僕は少々飛ばされ、地面に倒れこんだ

「『ゲホッ…ゲホッ…』」

吐き気を押さえ込みながら、僕は立ち上がる

螺子を放り投げるが、それはやはり  
門に引き寄せられ、くっ付いて取れなくなる

やっぱりまだ忘れていないね

「『くッ…!』」

迫ってくる電撃を辛うじて避け、彼女に接近する

再び螺子を顔に向かって刺そうとする

目の前からの攻撃はさすがに避けられないとは

思ったけど、彼女は不自然なまでにそれに反応し、避ける

避けられた瞬間、僕は大きな雷によって吹き飛ばされた

「言ったでしょ、アンタの攻撃はもう当たらないって」

「『…君』『喧嘩強いんだね』『どこかの不良みたいだよ』」

「人聞きの悪いことを言わないで！　そう思ってるほど強くないわよ」

でも、明らかに反射神経が良い

喧嘩慣れしてるっぽいし、僕が攻撃した後の隙に的確に反応して素早く反撃してる

力だって中学生とは思えないし

「私はただ、自分の脳を活性化させてるだけよ」

脳を活性化？

「人間の体っていうのは電気信号で行動のやり取りを行ってる。私はただ、自分の能力を使ってその電気信号のやり取りをちょろっとだけ早くしただけよ。あまりに早すぎると体が着いて行けないしね」

それでその異常なまでの反射神経か

素早く反応し、俊敏に避け、的確に反撃する

今の彼女には、身体能力の低い僕なんかテレビのスローモーションのような遅さに感じていると思う

なんてチート能力だよ…

僕が言えたもんじゃないけど

「後、人間の体は通常は”全力”の三割程度しか体は動かせないって知ってる？」

確か人体って抑制が掛かっていて、実際に使える力のほんの少ししか出せないんだろ？

それ以上は体に負担が掛かり過ぎて悪影響が出るって聞いたし

「これも電気信号の都合でやり取りされててね、その抑制も少しだけ緩くさせてもらったわ。まあ、ほんの一割程度多くしたただけだね」

つまり、今は実質的に人体の四割の力を出せている

それだけの違いでここまで身体能力が上昇するなんて…

はあ、やっぱり電気能力って応用が広いなあ

羨ましい

なんたってチート能力は少年のロマンだから！

「『…はあ』 君のその能力はとことん有利だね<sup>プラス</sup>」  
『<sup>マイナス</sup>不利の僕がまるで齒が立たないよ』」

溜め息を吐くと、僕は自分の惨状を確認してみる

何度が殴られ口が切れて血が少々流れてる

鳩尾も殴られてるから少し呼吸し難い

雷撃を喰らった所為で体中が痺れ

動かしにくく、さらには傷から血が流れてる

それに対して彼女は無傷

僕のマイナス性に当てられて少し精神が不安定になっていたけど、それも今はかなり回復してる

落ち着きを取り戻し、僕を翻弄してる

はあ、僕の負けかな？

「『また勝てなかった…』」

そう呟く

「は？」

彼女はそれが聞えたのか、意味が分からず首を傾げている

「『僕は素直に勝つことを諦めるよ』 『やっぱりレベル5に勝とう』」

なんて無理があつたかな?」

『僕は素直に』

『フェアに』

『公平に』

『勝利の可能性を捨てよう』」

徐々に傷口が塞がっていく

血も蒸発するかのように消えていき、  
呼吸も次第に整ってくる

「『でもだからって』 『僕は負けるつもりなんて無い』」

そして、服も新品のように綺麗になり、  
傷が全て消える

「ッ…! (どうして!? こいつの能力、回復系だと思ったけど、  
これは異常すぎる! 傷ならまだしも、服まで治るなんて!)」

「『なにもかもゼーんぶ台無しにしてあげるよ』」

そして僕は数本の螺子を取り出し、御坂さんに投げつけた

「なッ!?!」

普通ならそのまま磁力によって門に向かうはずだけど、



なぜか方向を変えず彼女に一直線に向かっていた

だが、強化された反射神経のお陰で間一髪で避けていた

「そんな、まだあの門は磁力を纏っていたはず！  
それにアンタの螺子にだつて投げられた瞬間・極を  
埋め込んだのに！　なんで通用しないのよ！」

「『あはは』『滑稽な光景だぜ』『過負荷相手に戦略的に  
勝とうなんてそれこそ荒唐無稽な話だぜ』『僕たちは理論も  
論理も定理も』『ぜーんぶ台無しにするのに』」

自分の作戦が破られ、混乱する御坂さん

さっきまで門にくっ付いていた螺子は全て  
地面に落ちていて、明らかに磁力が発生していない

「『君は常に演算を行つてあの門の磁力を保っていたんだろ？』  
『そんな脳に負担が掛かりそうなこと』『態々ご苦労さんだね』  
『でも』『そうと分かれば破るのは簡単だ』」

「アンタはなにをしたつていうのよ！」

「『君の演算を「無かったこと」にした』」

そう彼女に告げる

啞然とし、呆然とし、愕然としている

僕の過負荷の場合、原理なんて関係ない

全部一瞬にして台無しにするんだから

「『<sup>すべて</sup>現実を<sup>なかったこと</sup>「虚構にする」、それが僕の大嘘憑きだ<sup>オールフイクション</sup>』」

もはや使い慣れた無能力<sup>マイナス</sup>の正体を明かす

「『ついでに教えてあげるよ』『僕のもう一つの過負荷の正体を』」

僕は懷からさらにもう一つの螺子を取り出す

今まで使っていた+の螺子ではなく、-の螺子を

少しずつ、彼女に近付いていく

「ひッ……！」

負完全の、マイナスの、最低の僕に怯えている

さっきまでの威勢はどこに行ったんだろう？

地面に座り込んで、後退りしてるが、僕は

それ以上に早く歩いているため、少しずつだけど近づいている

「『僕の禁断の過負荷』『この世で一番最低な過負荷』」

校舎の壁にぶつかり、もう逃げ場は無くなってる

そして、僕はその螺子を振り上げる

「『ブックメーカー  
却本作り』」

「『フフーン』『フーンフーン』」

常盤中学校を出ながら、僕は鼻唄を唄う

「あれ、珍しく上機嫌だね。それほど御坂ちゃんを倒せたのが嬉しいの？」

隣を歩く真希ちゃんがそれを不自然に思い、疑問符に僕に訊いてきた

「『いや、あれは僕の負けだよ』『僕たちはどちらも死んではないし』『倒せてもいないよ』」

『だから戦いの展開でいうと』『彼女の大勝利さ』」

「そう？　ならどうしてそんなに上機嫌なの？」

「『だって』『初めて却本作りブックメーカーを使えたんだぜ？』」

『嬉しいに決まってるじゃないか』」

あの過負荷こそ、レベル5の抹殺に一番有効なスキルだ

それを試しにレベル5に使用したんだ、かなり大きな進歩だと思うぜ？

「知らなかったよ、雪くんが二つも過負荷を持っているなんて」

「『僕は特殊だからね』『却本作りブックメーカーの説明はまたいつかするよ』だからその時までこの過負荷の存在は秘密にしてくれよ？』」

あの二人をビックリさせたいし

過負荷なんて一つだけで不便なんだし、

二つも持つのはある意味かなり無謀なんだ

でも、僕は特殊な過負荷だからね

「その却本作りブックメーカーって使ってもよかったの？　まだレベル5を殺すのは時期が悪いって言っただけ？」

「『一応は手加減したからね』『本来の効果の一割も出してないよ』」

『彼女ほどメンタルが強いなら一時間ぐらいで立ち直れるさ』」

たとえ一割程度しか使わなくても、常人じゃ精神が崩壊しかねないスキルだ

それほど凶悪で、理不尽で、最低なスキルだ

効果を試したいから使ってみたけど、散々な結果だった

あのスキルをくらった御坂さんは、ほんのちよつとの時間だけとんでもないぐらい心が折れていた

もし手加減してなかったら、完全に崩壊していたね

まあ、今日の出来事の所為で彼女の僕に対しての憎しみがかなり増幅したと思うけど

「それにしても、もうこんな時間だね」

辺りは日が沈み始めていて、綺麗な夕焼けだった

周りには部活を終えた学生たちで賑わっていて、さつきまで死闘が繰り広げられていたとはとても思えない

「どうする？ 敦ちゃんと海咲ちゃんを探す？」

「『あの二人なら自分で帰れるんじゃないの？』『僕たちだけでも

「このちよつとした休日を楽しもうか」

「それってデートみたいだね。ボク、同い年の男の子と遊ぶのって始めてだよ」

真希ちゃんは何故かこういうのに敏感なんだよね

なんというか、愛情に飢えてるっていうか

まあ、そういうところは可愛らしいんだけどね

「だから、雪くんが全部おごってね」

綺麗で、プラスな笑顔でそう告げた

僕は自分の財布の危機を直感的に感じる

「『はあ...』 『やっぱり君は色んな意味で最低だよ』  
マイナス  
」

### 十三話 『世の中は決定的に不公平』（後書き）

人類最低vsツンデレ、呆気なく終わってしまいました

くまーは本当に扱いが難しいです。勝つてはいけないので、  
いかにどうやって胸糞悪く負けさせるかでかなり苦労します

十四話 「殺して解して並べて揃えて晒してやんよ」(前書き)

タイトルは分かる人は分かると思います

いや、ぶっちゃけ木更津は零崎人識の性格を

イメージして書いたので、一度は言わせてみたかったです

ちなみに今回は本当に今までで一番駄目文です



十四話 「殺して解して並べて揃えて晒してやんよ」

「『もしもし?』」

いつも通りの放課後、僕は自室で寛いでいた

一度も片付けていない布団に座りながら、  
漫画を読んでお菓子を食べる

典型的なニートの生活さ

他の三人はそれぞれ予定があつて部屋には居ず、  
今は僕一人だけさ

そんな駄目駄目な一日を送っていると、僕の携帯が鳴り響いた

《もしもし、球磨川さんでしょうか?》

「『ああ、海咲ちゃんか』 『どうしたの?』」

《上条当麻くんが行動を起こしました》

忘れてた、彼女に上条くんの監視を頼んだの  
だから今日は居なかったんだ

「『へえ』 『行動つてどんな?』」

《彼の住んでいるマンションで火災が発生しました。ただの人災ならまだしも、なんの前触れも無く突然》

なんの前触れも無く？

その言葉に僕は意味が分からず首を傾げた

普通火事っていうのは、タバコの消し忘れやコンセントの不具合によって発生する

そういうのだと小さな炎が段々と燃え移って巨大な火事へと変化するはずだ

でも、海咲ちゃんの話によるとマンションはなんの前触れもなく巨大な火事が発生した

恐らくは発火能力者だろうね

「『直ぐそっちに向かうよ』『だから海咲ちゃんは先に行って見てきてくれないかな？』『もし超能力者だったら直ぐ逃げて』『たとえ君がどれほど最低な能力を持っていても』『超能力者には勝てない』」

たとえ彼女の『絶対禁止』が完全無比の過負荷であろうと、マイナスは勝つことはできない

出来るのは胸糞悪い敗北か、曖昧な引き分けさ  
引き分けなんて僕が許さない

同士討ちなんて僕以外の人間がするもんじゃない

~~~~~

「いきなりの発火…明らかに不自然ですね」

上条くんのマンションを監視していた私は、  
そんな独り言を漏らす

元々は球磨川さんの頼みごとのために監視していましたが、  
監視するにつれ、彼には呆れました

困っている人がいれば助け、自分の身を危険に晒す

とても正義感の強い、プラスの塊のような人です

そんな彼を監視してからそれなりに経ちましたが、  
特に変わった様子はありませんでした

それなのに、今日だけ明らかに不自然です

突然マンションから火の塊が噴出しました

それも、生き物かのような形を保ちながら

現実離れしていて、超能力とも過負荷とも呼べないその

炎は、まるでおとぎ話に出てくる怪物のようでした

さすがにこんなことは球磨川さんには伝えられず、今はまだ秘密にしていますけど…

球磨川さんは見て来いと言いましたし、  
現在私はマンションの階段を上っています

階を一つ上昇するたびに、その炎の熱が徐々に強まってきました

まるで近くに溶岩があるような、  
それほどの灼熱が広がっている

上条くんの階へとたどり着いた私は、愕然とした

目の前に見えるのは化け物

一言で片付ければそうなる

体は溶岩で出来ていて、腕や  
口など動物のような箇所も見える

私がよく遊ぶゲームの敵キャラとして出てきそうな  
ぐらい化け物らしいソレは、上条くと相対している

化け物の後ろ、つまり私の前に立っているのは  
一人の赤い髪の男。見た目はこちら辺ではあまり見かけない  
格好で、背も私よりは数十センチ高いと思います

その人物は気配に気付いたのかこちらを振り向きます

「誰だ、お前？」

疑問符にそう私に尋ねてくる

それはこちらが訊きたいんですけどね…

「名を訊く場合、まず自分から名乗るのが礼儀なんじゃないんですか？」

「それは失礼した。僕はステイル・マグヌス、ただの神父さ」

明らかにただの神父じゃないですよ？

どこの神父が背後に灼熱の悪魔を従わせてるんですか

「貴方は頭がおかしいんじゃないんですか？ どこの神父が背後に溶岩の化け物を従わせるんですか。それに、たとえそれが普通である<sup>ノーマル</sup>と、過負荷である<sup>マイナス</sup>私にとって普通<sup>ノーマル</sup>なんてあまりにも滑稽に見え、聞こえ、感じ、思います」

「へえ、ただの小さな高校生が、随分威勢の良いことだね。逆に感心するさ、コレを見ても取り乱さないなんて。こういう光景に慣れているのか、それかかなり鈍感かい？」

「生憎とそんな化け物程度ではもう驚かないんですよ。私はこれまでそれ以上に出鱈目な過負荷<sup>もの</sup>に会ってきましたからね」

球磨川さんの大嘘憑きの能力を知った後、もう大抵なことでは驚かなくなりました

だって、現実を虚構にする能力ですよ？  
すべて なかったこと

出鱈目にも程があります

「なにやつてるんだよ琴吹！ 逃げろ！  
そいつはただの怪しい奴じゃねえんだよ！」

「いや、そんなの見れば分かりますよ。なんで貴方達は  
分かり切っていることをまた繰り返しに発言するんですか？  
はつきり言つて息の無駄使いですよ？」

ただの怪しいやつならまだ変態で片付けられます

でも彼のあの化け物を見た時からこれは  
超能力なんて生易しいものではないと確信しました

「随分生意気なんだね。僕は彼に従った方が得策だと思うよ？  
もっとも、これを見たからには逃しはしないけどね」

ああ、一般人は見られたら抹殺なんていうお決まりな展開ですか

なんで見逃してくれないんでしょう？

わたしたち  
過負荷にバレたつてもなにも不利にはならないのに

私たちの戯言を信じる人なんていると思いますか？

「素直に見逃してくれないんですね。はあ、  
まったく…プラスというのは皆こんなに面倒な方なんですか？」

マグヌスさんは上条くんから私へと標的を変える

それに従い、あの化け物も私を向きます

「待て！ ソイツは無関係だ！ 手を出すんじゃない！」

それを上条くんが止めようとしますが、彼は耳を傾けません

「貴方は自分の心配をしたらどうなんですか？  
相変わらず呆れるまでの善良者ブラスですね」

「やれ、イノケンティウス魔女狩りの王」

イノケンティウスと呼ばれたその灼熱の悪魔は、私に向かってその巨大な腕を振り上げる

それを一直線に振り下ろしてきます

「『来ないでください』」

私がそう言うと、その腕はなにか透明な壁に当たったかのように弾かれ、近くの壁にぶつかる

予想外のことにマグヌスさんは驚きの声を上げる

「なッ！？ 君、なにをした…！」

「なにって、私はただ痛いのが嫌なので、

来ないでくださいって言っただけですよ?」

曖昧に返答する私に、マグヌスさんは少々苛立ちを見せ始める

「君の超能力かなにか?」

「超能力?」冗談は止してください。私みたいな  
マイナス  
無才能にそんな高位な技術が備わるはずが無いでしょう?」

ただのレベル0です、と付け足す

不思議そうにマグヌスさんは疑問符になり、  
上条くんは驚いた表情のまま固まっています

恐らく彼は私になにかの能力者だと思ったんでしょうね

残念、私は超能力者ではなく、マイナスですよ

「マイナス?」

「はい、マイナスです。この世で一番の負け組であり、  
敗北者であり、屑であり、社会の塵である嫌われ者集団です」

「…マイナスか。興味深いものだね。でも、そのマイナスとやらの  
お陰でイノケンティウスが通用しないみたいだね。なら…」

なにか詠唱のようなものを唱え始めると、彼の手の  
周りに炎が集まり始める

それは徐々に形を成してゆき、固まった



「炎の剣…どこのロープレゲームの武器ですか？」

手に持ったのは、炎で出来た剣

まるでファンタジーゲームに出てきそうなものです

「どこまでも僕を馬鹿にするのが好きらしいね。  
直ぐに喋られないようにしてあげるさ」

剣を振り上げ、私に向かって突っ込んできます

はあ…何度やっても同じだっていうのに…

「やめろ！」

上条くんが取り乱したような勢いで私に向かって走ってきます

途中にあの化け物が居るのにも関わらず、私を  
助けようとしているのか手を伸ばしている

「大丈夫ですよ上条くん。私にこの程度の  
ものなんて」

だが、そこで予想外のことがありました

確かに私は彼の剣を”認識”しました

認識し、拒絶したはずです

にも関わらず、その剣は弾かれることなく私に向かってくる

まるで、私の『絶対禁止』が発動していないかのように

「ッ…！」

間一髪で頭を後方に逸らす

鋭い痛みが頬を駆け巡り、指で触てみると血が付着する

完全に斬られています、私の過負荷がまるで発動していません

「どうしたんだい？ 斬られて不思議かい？」

「くッ…！」

「まあ、僕も実際は分からないんだけどね。イノケンティウスが通用しないなら、恐らくはこれも通用しないとは思ってたけど、良い意味で予想を裏切ってくれたよ」

この人はなにもしていない

ならどうして…！

私の過負荷は拒絶さえすれば弾くことが出来るのに…！

「っ…！」

再び剣を向けられる

このままじゃ…殺される…！

「おいおい、さっきまでの威勢はどうしたんだい？」

一度退き、球磨川さんと呼ばないと…

この場を後にし、階段を駆け下りようと思いますが

階段の正面まで来ると、炎の壁が  
入り口を遮る

「さっき逃がさないと言っただろ？ 本当は  
僕は紳士だ、君のような女性は殺したくは無い。  
でも、彼女の…インデックスのためだ…！」

こちらに向かって歩いてくるのは  
あの炎の剣を持ったマグヌスさん

「勘違いをしている人は…嫌われますよ？」

「君の知ったことではないだろ…！」

斬られ、殴られ、蹴られ、刺される

…痛い…

これが本当の傷、致命傷、苦痛

今まで攻撃は全て弾き、当てられたことのない  
私にとっては気が遠くなりそうなぐらいの激痛

血があちこちから流れ出ているのが自分でも分かります

「くそッ！ 琴吹！」

マンションの廊下の奥から上条くんの声が聞えます

彼は私に駆け寄りたいのに、あの化け物によってそれが邪魔されているようです

恐らく彼はなんらかの方法で能力を無効にする能力を持っているはずです

でも、それをもってしてもあの化け物は倒せませんか…

あれは生き物ですからね

そう簡単に倒せるとは思いません

「なにか言い残すことはあるかい？」

地面に平伏している私に向かってマグヌスさんはそう問う

「…言い残す言葉なんて…なにもありません…私たちマイナスに未練というものは…この世に存在しないのだから…」

最後に、あの球磨川さんの言葉が頭に思い浮かぶ

『もし超能力者なら逃げて』『たとえ君がどれほど最低な能力を持っていても』『マイナスは超能力者には勝てない』  
プラス

あの忠告は、どうやら本当のようですね

それに従わなかった私に非があるんでしょう

この人は超能力者でなくても、なにかしらの  
異能な能力を持っている能力者<sup>プラス</sup>

私は不利になるような能力しか持っていない無能力者<sup>マイナス</sup>

マイナスはプラスに勝てない、球磨川さんが言っていた世界の真理

それは本当でしたね

私はここでプラスに殺され、マイナスに終わるんですから…

「グハッ!？」

突然マグヌスさんがうめき声を上げる

その所為か、間一髪で突き刺そうとしていた  
剣は逸れ、僅かに頭を掠れた

閉じていた目を開けると、そこには  
拳を彼に向かって突き出している人物

「…敦さん…」

マグヌスさんを突き出したのは、同じ過負荷の先輩

ミスフォーチュン  
負運性の木更津敦さん

「『大丈夫：じゃないよね』『生きてる海咲ちゃん？』」

そして、私に駆け寄ってくれたのは私たち過負荷を纏める人

負完全、球磨川雪さん

「先輩方：遅いですよ」

安心と痛みの所為なのか、私の意識は遠くなる

そして、そのまま闇へと落ちていった

~~~~~

「『こりゃ酷いね』『裂傷に打撲』『火傷も酷い』  
『かなりの大怪我だよこれは』」

「そんなのみりや分かる」

僕は海咲ちゃんの介護をはじめ、  
敦ちゃん海咲ちゃんを殺そうとした  
人物と相対する

それにしても、なんで戦ったんだろう？

はあ…あれほど戦うなって言ったのに…

ま、この子の負けず嫌いな性格を考えると、  
あまり期待はしていなかったしね

過負荷なのに負けず嫌いなのはかなり珍しいけど

「誰だよ…アンタら？」

巨大な化け物と相対している上条くんは  
僕たちを見てそう言っている

「『あれ？』『覚えてないの上条くん？』『ほら僕だよ僕』  
『結構前に転校して君のクラスに乗り込んできた球磨川だよ』」

上条くんはなにか思い出したのか苦い表情をする

「ッ…！」

「まったく次から次へと…面倒だ」

あの背の高い男性が僕たちに駆け出す

彼が持っているのは、大きな炎の剣

おいおい、どんな厨二の武器だよ？

まあ、僕はそういう週間少年ジャンプみたいな武器が一番好きなん  
だけど

「おいおい、お前の相手は俺だぜ？」

それを敦くんが顔面を殴り、吹き飛ばす

さすが喧嘩慣れしてるだけはあるね

御坂さんみたいに能力を使っくんじゃなくても、

この敦ちゃんの身体能力の高さは純粹に鍛えてるからだ

僕みたいな貧弱體質の高校生とは大きい違いだ

「くっ……！ 君も僕の邪魔をするわけだね」

その問いに対して敦くんは鼻で笑った

この距離からでも分かる、彼はかなり怒ってる

いや、激怒してる

どうやら敦ちゃんはブチ切れると怒鳴るのではなく、  
テンションがかなり上がり、上機嫌になるタイプのようだね

「はッ！ 人の友達殺しかけてなにぬかしてんだよ？」

悪いが俺は球磨川さんみてえに優しくはねえ、

てめえを殺して解して並べて揃えて晒してやんよ」





十四話 「殺して解して並べて揃えて晒してやんよ」(後書き)

やつと原作に入れた…

これからは急展開がかなり勃発すると思います

主に過負荷勢力が凄い勢いで増えたり…

次回は敦くん大活躍です(笑)

## 十五話 「不運だったな」(前書き)

実はあまり魔術サイドはやらない予定です

くまーの目的はあくまで超能力者<sup>エリート</sup>を抹殺することなので

ですのでこの後はしばらく魔術サイドはやらないと思います

## 十五話 「不運だったな」

自分の殺人の意思を晒した木更津

下品に笑い、満面の笑みでそう告げる

木更津に、ステイルは戦慄していた

たかが高校生がこんな表情を出来るのか…？

そう疑問に思うステイルだが生憎と彼は過負荷だった

”マトモ”に育つてなく、何人もの人間を不運にも殺してる殺人鬼

あの球磨川でさえ、一度は木更津に殺されていた

「（こいつは拙い！）」

素早く炎を木更津に向かって放つが、

それはただなにも無い空間を燃やすだけだった

「何処狙ってやがる？」

「ぐッ…！」

ステイルの直ぐ真横に現れた木更津は、  
その拳を振り下ろす

戦闘慣れしているステイルは辛うじて

その攻撃を回避し、持っている炎の剣で斬りつける

「おっと」

頭を後ろに後退させそれを避ける

そのまま天井へと剣は直撃する

「君も殺し合いには慣れているんだね……！」

「まあな。それより、そこに居ると危ねえぞ？」

瞬間、ステイルの立っている箇所だけの  
天井が崩れ落ちてきた

間一髪で後ろへ逃げその災害を逃れたが、  
炎の剣は瓦礫の中へ埋もれてしまっていた

「おつとわりいな。不運にもお前の刺した箇所が  
天井を崩して、運悪くお前だけが巻き込まれそうになったな」

それを木更津は、ケラケラと笑って見ていた

「ちッ、なにをやったかは知らないが、  
この程度で勝った気にはなるな！」

木更津から見れば、なにか書かれた紙を取り出しているだけだったが、それはステイルから見れば隙に過ぎなかった

「なッ!？」

直後、火球が木更津に向かって放たれる

予想外の出来事に一瞬反応が遅れ、

致命傷にはならなかったものの腕を焼かれる木更津

「どうだい、初めてくらった魔術は？」

挑発的にそう言う

「魔術？　なんだよソレ？」

「君たち学園都市の連中には決して理解できないようなものだ」

再びステイルは紙を取り出す

すると、徐々に炎が手のひらに集まっていき、

灼熱の温度が木更津にまで広がっていた

「はぁ、あっちいなぁ……」

すると、地面に俯きなにかブツブツと言い出す木更津

それを見て、気味が悪いと思ったのか、

顔を顰めるステイル

「ククク……」

不気味に笑い出す木更津

すると、突然顔を上げる

「ギャハハハハ！　おもしれえなあ！

最高だよてめえ！　魔術がなんか知らねえが、おもしれえ！

てめえがたとえ魔術だろうが神の能力を持っていようが、そんな  
高<sup>プラス</sup>位の能力者を殺せる俺は最高にツイてる！」

狂気の箆った目でステイルを見つめていた

まるで、生肉を見詰める獣の如く、

興味深い獲物を見つけたかのように、

木更津はステイルを睨んでいた

その様子にステイルは呆然としていた

これまで何度も殺し合いを経験したステイル

そんな彼にとっても、木更津のような

人間は初めての経験だった

「『おい敦ちゃん！』　『厨二病発言はいいからさ』

『さつさとそいつを倒してよ』　『それに殺しちや駄目だからね』

『殺人とか犯して目を付けられたらたまったもんじゃないよ』」

後ろからこの場に似合わない球磨川の声が響き渡る

「ちッ、なんだよつまんねえなあ…でも

悪いな球磨川先輩、そいつあ負けちまうわ」

この言葉に、ステイルは疑問符になる

自身の実力に自信が無いのか？

そう思っていた

「殺したら駄目なら俺の負けだわ。いや、寧ろそれが良い」

不可解な発言を繰り返す木更津

過負荷として、最低として、殺人鬼としても  
圧倒的なマイナス性を持つ彼の言葉は、ステイル  
にとってはこの上ないまでの気持ち悪さだった

「過負荷は負けることしか出来ねえ。今回の場合  
おれたち  
”勝つ”条件がこいつを倒すことであって、殺すことじゃ  
ねえつつうんなら、好都合だ。

お前を殺して負けれるからなア！」

ポケットからナイフを取り出す木更津

何度も人を殺していながらも、  
殆ど錆びついていないその凶器

それを指の間でクルクルと回すそれは、



まるで木更津の手足のように自在に動いていた

「おら、続けようぜ魔術師。<sup>プラス</sup>てめえを  
殺して解して並べて揃えて晒してやんよ！」

ステイルに向かって駆け出し、ナイフを突き刺そうとする

その速度は、人間とは思えない速さで接近していた

あまりの速さに反応できず、ただナイフが自分の心臓  
に迫るのを見詰めるステイルだったが…

「グフツ！？」

何かに吹き飛ばされ、球磨川の座っている  
位置まで飛ばされる木更津

ステイルは目の前に立っている人物に驚く

「神裂…」

長い太刀を持っている神裂と呼ばれたその女は、  
無言で球磨川ら過負荷を見詰めていた

「『ん？』『どうかしたんですか？』『』」

しばらく呆然としていた木更津に代わり、  
球磨川が話しかけていた

「『ああ』『展開から見れば仲間って感じですね』」

『まったく…』『死亡寸前で仲間が助けるなんて展開は週間少年ジャンプだけにして欲しいですよ』」

呆れたように首を左右に振る球磨川

そんな球磨川を、まるで汚物を  
見るかのように神裂は見詰める

「『おいおい無視はカンベンしてくれよ』『それじゃあ  
僕傷付いて泣いちゃうよ?』」

そんなことを言うが、笑顔の球磨川には説得力が皆無だった

「『ああなんだ』『怪我人の海咲ちゃんを  
心配してくれてるの?』『それなら大丈夫だよ』」

血塗れで気を失っている琴吹の顔を  
球磨川は手で覆うと、みるみる内に傷が消滅していった

傷も塞がり、流血も収まり、血で汚れていた  
制服でさえ元通りになっていた

まるで、今までの戦闘を『なかったことにした』かのように

「ツ…！（馬鹿な！ 魔術による傷は簡単には  
癒えないはずだ！ それなのにこいつは…！）」

「『え?』『君は僕が黒幕かと思ってるの?』『うわあ、

想像力の豊かな人だなあ』 『僕みたいな最低<sup>マイナス</sup>が黒幕なわけないだろ？』

『僕はただの屑で』

『最低で』

『理不尽で』

『塵で』

『低脳で』

『マイナスな偽善者<sup>マイナス</sup>ですよ』

それだけ聞き、神裂は球磨川に背を向ける

そして、階段を下りていった

それに便乗し、ステイルも階段を下りていく

「…なんだったんだよ、アイツ等…」

しばらく啞然とし戦いを見ていた上条がそう漏らす

「ちッ、途中で逃げやがって」

不機嫌そうにナイフをポケットに戻す木更津

「『まあまあ』『皆無事だったからいいじゃないか』」

「それでも俺はアイツを殺せなかった。ちッ、  
やっぱ過負荷でも負けるのは気分がわりいな」

「それ以前にまず、お前等は何者なんだよ！  
いきなり現れやがって！」

球磨川たちに向かってそう怒鳴る上条

急に琴吹が現れ、ステイルと戦闘し敗北すると、  
また直ぐに今度は木更津と球磨川が現れた

あまりの展開に上条は着いていけなかった

次から次へと非日常に巻き込まれる上条

魔術師と接触し、さらには過負荷とも接触する

やはり上条当麻は不幸少年だった

「『僕たちは別に何者でもないよ』『ただの  
理不尽な人類最低』『過負荷だよ』」  
マイナス

球磨川は当麻に”マイナス”と告げる

聞いたことのない単語に、上条は疑問符を浮かべる

「マイナス？　なんかの組織か？」

「おいおい、俺たちをそんなもんと

勘違いするんじゃないよ。そもそもそんな  
ややこしいことなんか出来ねえし」

「単純な奴らだ…」

木更津の発言に呆れる上条

「『ま』『僕らはただ海咲ちゃんを  
迎えに来ただけだから』『色々と変なこと  
になっちゃったけど』」

「ッ…！　そういえば…！」

上条は何か思い出したのか、  
後ろに倒れている一人の人物へと駆け寄る

今までその存在に気付かなかった球磨川は興味深そうに後を追う

「『うわあ…』」

思わず声を上げる

球磨川の目に飛び込んできたのは、一人の人間

純白の修道服を来たその小柄な人間の周りには、  
血が広がっていた

さっきまで致命傷を負っていた琴吹  
に及ぶほどの傷

放っておけば絶命は確定だった

「『誰これ？』」

「インデックスっていうんだ。今日の朝に初めて会ったんだけど、帰ってきた時に血塗れで倒れてたんだ。早くなんとかしねえと……！」

「『まあまあ落ち着いて』『そんなに焦られちゃこつちも対応できないよ』」

そつと上条を落ち着ける球磨川

「お前、治せるんじゃないのかよ！ さっき琴吹の傷だつて元通りに治したじゃないか！」

言葉が詰まる球磨川

確かに、オールフィクション大嘘憑きならどんなこともなかったことに出来る

たとい魔術によつて負われた傷であろつと、神によつて与えられた病であろつと、それが現実であるのなら虚構なかつたことに出来る

だが、それは普通の人間に使えば、の話だった

インデックスは見たところ魔術サイド

なんらかの魔術が体に施されていれば、

大嘘憑きに不具合が生じ暴走してしまう可能性があった

普段他人が傷付こうと構わない球磨川だが、今は違う

後ろには後輩であり同じ過負荷の仲間が二人いる

もし不具合によりなにかあったら、それこそ  
球磨川は許せなかった

たとえ自分が過負荷であろう、同じ  
過負荷である仲間を傷つけるなんてありえない

だが今日の前にいるのはなんの能力も無いレベル0

球磨川のもットーは”弱い者の味方をする”だ

レベル0の頼み言を、そんなもットーを持ってる球磨川は叶えたか  
った

だが、もしその所為で同じ仲間が傷付くとなると、  
少し考えなければならぬ

「『……』」

「お願いだよ、球磨川先輩！」

「『分かった』『君の願いを叶えてあげよう』『』」

表情を笑顔に戻し、そう告げる

それに上条は喜びの笑みを零した

「『その代わり』『なにがあっても僕は悪くないからね?』」

そう言うとき大きな螺子を球磨川は取り出した

そして、その螺子をインデックスに振り下ろそうとするが

「『わつと』」

「なにやってるんだよ!」

上条が刺さる寸前で球磨川の腕を止めた

「『なにつて』『この子を治そうとしてるんじゃないか』」

「ならなんで螺子で刺そうとする!」

「『僕の無能力のためさ』『それとも僕が信じれないの?』」

そう訊かれると、無言になる上条

球磨川の手を放した

「『じゃあ改めて』」

再び螺子を振り上げると

「ッ……!」



インデックスに深く突き刺した

その様子に、上条は思わず顔を顰める

それを見た球磨川は、笑いながら上条に言った

「『安心して』『僕は人なんて殺せないから』」

疑わしそくに球磨川を見詰めるが、

上条はインデックスを見ると驚愕した

なんと、彼女の傷がまるで初めから『なかったかのように』消えていた

「嘘だろ……」

啞然とする上条

球磨川は満足気に立ち上がり、  
木更津のところへ向かう

階段の入り口には、琴吹をおんぶした  
状態の木更津

「『帰ろうか』」

そうつげ、階段を下りていった

「おい球磨川先輩」

「『なに？』」

自身のアパートへ向かう途中、木更津が球磨川に問いかける

「なんでアイツを治したんだ？ あんな  
魔術師の能力者<sup>プラス</sup>なんか…」

「『<sup>弱者</sup>レベル0の頼みだからね』 僕はそれを助けたに過ぎない』」

「でもだからってマンションまで元通りにしなくたってでもいいだろ？」

球磨川はインデックスの傷だけでなく、マンションの  
損害までもなかったことにしていた

火事によって焼けた痕や、崩落によって  
崩壊していた階なども全て元通りだった

すると、球磨川は満面の笑みを浮かべ、片手でピースサインをしな  
がら告げた

「『サービス』」



十六話 『甘えよ』（前書き）

連続投稿です

超急展開連発です

## 十六話 『甘えよ』

明るい朝の道を、僕は歩いている

小鳥が心地よい鳴き声を発し、朝っぱらから  
公園で遊ぶ子供の笑い声が聞える

涼しい風が袖から服を通り、髪の毛も揺れる

穏やかで平和な朝

軽く背伸びをし、辺りを見回す

今日は日曜日だ

日曜日とは誰もが楽しみに待つ最高の休日であり、  
老若男女問わず誰もがリラックスできるような夢の日

子供は友達と遊んだり、終わっていない宿題を終わらせようとする

大人はそんな子供を見守りながら、どこかへ出かけたり、  
家でダラダラと過ごすと一日を送る

勿論、僕も例外ではない

珍しく朝早く起きて、あまりにも心地よい朝だったため散歩している

現在僕は一人暮らしだ

この前は敦ちゃんと一緒に住んでいたけど、今は別の部屋を借りてそこで生活をしている

最初は少し寂しかったけど、次第に慣れてきた

そんなことにより、一人で散歩をしているわけだけど、関係ない

寂しさなんか吹き飛ばぐらい快適な朝だった

あまりの平和と穏やかさに心を癒され、マイナスをも忘れそうになる  
だが、僕のそんな朝も一瞬にしてブチ壊されることになる

「『え?』」

突然の出来事

計り知れないほどの衝撃を受け、  
僕は数メートル吹き飛ばされた

鋭い痛みにつき、激痛が体中を駆け巡る

衝撃を感じた腹の部分が気になる、  
手で触ると、赤い液体が手に付着した

倒れている僕の周りに広がるのは同じく赤い液体

《き、きゃああ!!!!!!》

この惨状を見た近くの女の子がそう叫ぶ

おいおい、こういう展開って大人の女性が  
叫ぶ方が様になると思うよ？

まあ、学園都市だから大人なんて殆ど居ないからしょうがないけど  
僕は後ろに聳え建っている一本のビルの屋上を見る

その箇所だけ、一瞬ガラスに光が反射したかのように明るく輝いた  
戦争に詳しい人なら知っているだろう

そう、狙撃手だよ

スナイパー

それを確認した瞬間、僕の意識は途絶えた

~~~~~

穏やかだった朝は瞬く間にパニック状態に陥った

突然何者かに狙撃された球磨川

腹部を一発撃たれ、それに続き頭を銃弾で貫かれている

即死だった

通報を受けた警備員は、速やかに行動した

アンチスキル

あちこちに警備員が散開し、警戒態勢になる

銃を構え、辺りを搜索する

球磨川は病院に緊急搬送されるが、それも虚しく搬送中の救急車の中で息を引き取った

「なんてことだ…」

救急隊員がそう呟く

見るからにはまだ高校生の少年

この先の人生をこれから決めるといふ時期に殺された少年を弔い、救急車の中に居た隊員全員が血塗れの少年に黙祷を捧げる

涙を浮かべ、目を閉じている

車両に輸送された時、大半の者はもう諦めていた

出血多量に加え、頭部を貫通した銃弾

とても生きているとは思えなかった

だが、それでも少しでも希望を持ち、人工呼吸を続けたが、それも虚しく死亡



尊い命が消えた

悔しさのあまり、涙の呑む隊員たち

その時だった

「「「なッ！？」「」」

全員がおもわず驚愕した声を上げる

「『あれれえ？』『ここ何処お？』『」

なんと、ついさっき死亡が確認された少年が、  
突然起き上がったのだ

「馬鹿な！ 君は頭を撃たれたんだぞ！  
生きてるはずが…ましてや意識があるなんてありえない！」

一人の救急隊員が球磨川に向かってそう言う

「『そんなに焦らないでくれよ』『僕だつて  
いきなりのことですビックリしちゃって』『思わず  
一度死なないといけなかったじゃないか』『」

その言葉を聞いた隊員たちは、益々混乱した

一度死んだ

つまり、死亡したのにも関わらずまた生き返った、という意味だった  
たえここが超能力の、科学の街であろうと死人を蘇生させるのは  
不可能

そのはずなのに、少年はいとも簡単に蘇生を果たしていた

「君は…一体何者なんだ？」

「『球磨川雪』『お茶目な高校生です！』」

笑顔でそう言う球磨川に、冷たい視線を送る救急隊員

「…とまあ冗談は置いといて」

それになにか感じたのか、少し

悲しそうな表情で発言を訂正する球磨川

「『僕は本当にただの高校生さ』『レベル0のね』」

「レベル0！？ なんの能力も無いのか！？」

なにかの能力者だと確信していた隊員は、

球磨川の言葉に驚愕の声を上げる

「書庫で確認しろ！」

隣に座っている隊員に備え付けの  
パソコンを起動させ、確認させる

「本当です…球磨川雪、レベル0の無能力者…」

「馬鹿な…」

”この少年は何者なんだ”

救急車の中の誰もが思ったことだった

~~~~~

うわぁ、ビックリしたなぁ

僕は救急車から降りながらそう思う

あの後、本当に無傷か確認され、  
さらにはレントゲン写真で銃弾も体内に  
残っていないかを検査された

救急車の中でもレントゲン写真が取れるなんて、  
さすがは学園都市の技術だね

で、本当に無傷だったため僕は開放された  
救急隊員全員に感謝する

あの人たちは良い人たちだった

過負荷である僕を恐れず、仕事を  
真っ当して僕を助けようとしてくれた

そんな人たちには賞賛する

しかし、誰が僕を殺そうとしたんだろうね

僕はまだ目立った行動はしていないはずなのに

色々ありすぎて疲れたからなのか、僕は  
そのまま帰ろうとする

でも、そこに一人の人物が立ち塞がった

「ターゲットの生存を確認。生存方法は不明、とミサカは  
驚愕の現状を報告します」

暗視ゴーグルのようなものを頭につけていて、  
茶髪に生気の無い目

まるで、生きた動く人形みたいな人だった

着ているのはいつかの常盤台中学の制服

ってこの人、完全に…

「『常盤台の御坂さん？』」

この前初めて却本作り<sup>ブックメーカー</sup>を試した  
人、御坂美琴さんにそっくりだった

いや、そっくりじゃない。完全に瓜二つなんだ

一卵性双子よりも似ていそうだ

「違います、とミサカは曖昧に返答をします」

「『なにそのナレーション風の喋り方？』『変な喋り方だなあ』」

「貴方の括弧付けた喋り方の方が奇妙です、とミサカは的確に突っ込みを入れます」

なんか話し難いなあ

僕、この子ちよつと苦手かも

「『あはは』『本当に無表情だ』『なんの感情も見せないで…』『きつもちわるゝい!』」

『でも、それも君の個性さ!』

『僕はそれを受け入れよう!』」

すると、僕は一瞬で彼女の目の前まで移動する

そして、顔を真正面まで持っていく

「『無理せず自分らしさを誇りに思おう!』」

『そんなマイナスみたいな表情をするんじゃない！』」

だが、僕のこの行動にも特に動揺することも無く、  
御坂妹さんは冷静に言い返してきた

「気持ち悪いという言葉は一番貴方にお似合いでしょう、  
とミサカは負けじと反論を言います」

気持ち悪い、か

最近はかなり丸くなったつもりだけど？

全然他人を螺子伏せていないしさ

「『それよりさあ』『さっき聞き流させようとしたけど  
僕は覚えてるぜ？』『ターゲット生存ってなんだよ？』」

「そのままの意味です、とミサカは貴方の低脳に呆れながら言いま  
す」

わお、ちょっと毒舌だね

ま、顔は無表情だけど

でも知ってる？

笑顔・って無表情以上に”無表情”なんだぜ？

だからもうちょっと笑おう

「こちらの命令は球磨川雪の暗殺、およびその仲間の抹殺。ミサカはそれを遂行しただけです、とミサカは説明風に貴方に告げます」

「『へえ』』『そうなんだ』」

僕は関心したように首を縦に振る

こんな幼さそうな子がそんな暗殺なんて物騒なことを出来るなんて、凄いじゃないか

それは純粹に賞賛に値する

でもね

「ッ……！」

直後、御坂妹さんの周りに巨大な螺子が突き刺さる

「『僕だけを暗殺するならまだ許せる範囲さ』」

『でもね』 『僕の大切な過負荷しんゆうを殺すのは流石にちよーっとガマンの限界かなあ？』」

笑顔のまま、マイナス性全開にする

僕の直ぐ真正面ってことも重なり、御坂妹さんは始めて無表情から”戦慄”という表情に変わった

「貴方を殺せとの命令です。それを遂行します、とミサカは戦意を表しながら告げます」

「『僕は悪くない……』」

銃を構え、暗視ゴーグルを目に装着する御坂妹さん

それに対応し、僕も両手で螺子を構える

「『うわっと』」

僕に発砲しながら向かってくる御坂妹さん

っていつか中学生に銃って全然似合わないんじゃないの？

物陰に隠れ、辛うじて銃撃をかわす

そして、銃撃が鳴り止んだ隙を見て、僕は物陰から飛び出し、彼女に向かって螺子を突き刺そうとする



リロードしてる最中が一番の隙だ

それを君に教えてあげるよ…！

「『え？』」

だが、僕のその意表を突いた攻撃を  
軽々と避け、僕は顔面を殴り飛ばされた

「貴方の身体能力の低さには呆れてものも  
言えません、とミサ力は色んな意味で愕然とします」

僕、そんなに弱いのか？

ああ、理不尽だなあ

でも…

「『これで銃は無くなったぜ？』」

「ッ！？」

突然御坂妹さんの持っていた銃が  
バラバラに崩れ始める

ヒビによって割れていく、その銃をただ呆然と見詰めていた

「『確かに僕は人類最弱かもしれない』『でも弱いからって』  
『死ぬわけじゃないぜ？』」

あの銃の弱い箇所だけを小さい螺子で貫き、破壊した

これで彼女に武器は無くなった

だが、それにお構いなく彼女はこちらに向かつて走ってくる

今度は銃でなく、手のひらを突き出しながら

「『やっぱりねえ...』」

あの御坂さんのご親族つてこともあつてか、彼女が使ってるのはレベルの低い電撃能力

正式名称は分からないけど、少なくとも御坂さんの超電磁砲よりは全然威力が低い

幾つもの雷撃を避けながら、僕は路地裏へと入っていく

その後を御坂妹さんが追いかけてくる

はあ、人気者は辛いぜ...

「これで逃げ場を失いました、とミサカは勝利を確信しながら貴方にそう告げます」

とうとう行き止まりにまで行ってしまう

だが、これで僕の計画通りだ

「『逃げ場が無い？』」

『それはこっちの台詞さ』」

そう僕が告げた瞬間、彼女の後方は幾つもの螺子によって塞がる

「ぐッ…！？」

そして、彼女の腹にも螺子が突き刺さる

「『僕が無計画に走り回っているとでも思った？』」

『ここなら誰も助けに来ることは無いし』 『君をお仕置きしても怒られない』」

一つ、また一つと螺子が投げつけられ、

御坂妹さんは苦痛で顔を歪める

そして、彼女の目の前に立つ

「『愚かだね』『過負荷相手に”暗殺”なんていうルール無用で戦う愚かさを君に教えてあげるよ…！』」

だが、その時、僕の目の前に手が突き出される

御坂妹さんの手だった

そして、彼女は僕の顔面に向かって雷撃を放とうとするが…

「演算が…できない…？」

「『あははは！』『超能力なんて僕が許すと思ったかい？』」

『その螺子が突き刺さってる限り、君の演算は常に「なかったこと」にされる！』

『だから超能力は使えないさ！』」

今まで何度も演算を『なかったこと』にする戦法を

使ってきたけど、どれも常時使用型の超能力には対応できなかった

そこで僕が考えたのはコレだ

大嘘憑きを浴びた螺子で突き刺せば、

常に演算をなかったことにできる常態だって

僕は啞然とする彼女の眉間に螺子をわざと浅く突き刺す

「ぐウウー！！」

痛みのあまり苦痛で声を上げる御坂妹さん

「『あはは、どうしたんだい御坂妹さん？』『さっきまでの

毒舌の面影もないよ？』『ほら、僕を暗殺してごらんよ』」

『あはは』『まさか、そんな簡単に僕が殺されるかと思ってたの？』

『僕が人類最弱だから、殺すなんて容易いと思ったの？』

『漫画脳で童顔の僕が脅威なんて思ってなかったわけ?』

『 ” 自分は銃を持ってる” 』 『 ” それに比べ相手は丸腰だ” 』  
『 ” だから心配することなんてなにもないって” 』

『まさか自分は死んでも生き返る、なんて厨二なこと考えてたの?』

『甘えよ』

僕はそのまま、眉間に中途半端にさしてある  
螺子を深く突き刺そうと、螺子に蹴りを放とうとするが

「『はい?』」

幾つもの螺子が、一瞬にして吹き飛ばされる  
いきなりの出来事に、思わず僕は呆然とした

出口を通せんぼしていた螺子は後型もなく  
消し飛んでおり、砂埃が辺りに充満している

「おいおいイ、人の実験動物に手エ出すたア嘗めたこと  
してくれてンじゃねエか、あア？」

煙の中から、こちらに向かって歩いてくるのは、  
純白な白髪に、雲のような真っ白の肌の人物

赤い目で、とても細い体形

「今日の実験の奴がいつまで経っても来ねエから  
俺が見てみたら、このザマだア。てめエ、三下風情で俺の  
時間を潰した責任、きちんと取ってもらうぜエ」

攻撃的な表情

何人もの人を平気で殺してきたような顔

「この学園都市最強の俺に殺されんだ、  
てめエもまんざらじゃねエだろオ？」

僕の前に現れたのは学園都市レベル5の第一位

「てめエも一方通行アクセラレータつつウ名前ぐらい知ってるだろオ？」

学園都市最強の超能力者、  
一方通行<sup>アクセラレータ</sup>だった

## 十六話 『甘えよ』（後書き）

まさかの一方通行登場

妹達編がもうスタートしてしまいました

ぶっちゃけ、幻想御手編をやリたかつたんですけど、  
時系列がまったく分からなく、とりあえず先に時系列の  
わかっている妹達編を始めました

ちなみに暗殺を依頼したのはアレ（ry



十七話 『差別するなよ』（前書き）

駄目文注意

## 十七話 『差別するなよ』

学園都市最強の超能力者、一方通行が目の前にいる

僕たちがどれだけ調べても素性も能力も一切  
判明できなかった謎の人物

その本名さえ分かっていない

でも、かなりヤバそうな人だっていうのは分かる

「『うわあ』『自分から最強発言ってある意味凄いな』  
『自意識過剰』『』」

「あア？　なら試してみるかア？」

かなり好戦的な人だね

それ以前に表情が僕を殺したく殺したくて  
仕方がないって感じだし

そんなに僕が時間を潰したのが気に食わなかったのかな？

「『とんでもない』『僕が君に敵うわけがないだろ？』『』」

「敵う敵わねエの問題じゃねエンだよ。てめエは俺の  
時間を潰した、それで俺の機嫌も悪い、よって一方的に殺す。

分かるかア？ てめエの都合は訊いてねエンだ」

殺される

これは確定事項だ

なんか僕の大嘘憑きも役立たずになりそうだよ

殺されるって分かるなら、せめて  
悪あがきぐらいしてやるさ

「『へえ』 君が一方通行なんだ』」

僕は興味深そうに彼を見詰める

「だったらどうなんだよ？」

そして、僕は彼に指差し、笑いながらこう言った

「『お前ってなんか』 『ウサギを擬人化したような姿だよな？（笑）』」

彼の表情が固まった

まるで、一瞬僕の発言に頭が対応できていないかのように

「ぶ…す…」

なにかを呟いたけど、僕は聞き取れなかった

体を小刻みに震えさせて、拳も血が流れるんじゃないかって思わせるくらい強く握っている

「ぶつ 殺す！！！」

殺意丸出しでそう叫ぶ

地面を蹴ると、とんでもない速さで僕に近付いた

そして、その拳で僕の顔面を打ち抜く

モヤシみたいな体形なのに、威力は  
トラックに吹き飛ばされたかのような衝撃だった

まるで玩具のように僕の体はそのまま  
壁に叩きつけられ、血反吐を吐く

顔も殴られた所為か、鼻が折れて血が流れてる

「『あははは…』『やっぱそうだね』」

「あア？」

そんな惨状に、思わず笑い声を漏らす

一方通行はそんな僕を奇妙な目で見てる

「『超能力者のレベル5が一般市民を殺しても良いのかよ?』『それはある意味能力の悪用だなあ』」

「てめエの何処が一般人だよ」

まあ、僕の過負荷と螺子を恐らくは  
見てるだろうから、信じられないと思うけど

「『それなら何で僕たちは殺されなきゃいけないの?』  
『たとえ異能な無能力のうりよくを持っていようが』『僕らだってレベル0  
なんだぜ?』『ただ他の人と違うだけで善良な一般市民である  
僕らを殺すのは高位能力者の横暴と理不尽さ』」

『差別するなよ』」

「…ちッ」

一方通行はなにを思ったのか、後ろを振り向く  
そして、この場を後にするように去り始めた

既に螺子は抜いてある御坂妹さんは大嘘憑きによって  
無傷なため、そのまま後を追っている

「『油断大敵だぜ?』」

僕はその背後を巨大な螺子で突き刺そうとする

これが決まれば、彼のあの正体不明の能力は  
使用できなくなる

その隙に却本作りを打ち込めば今後の  
対決は何倍も簡単になると思う

「喰らうかよオ、三下野郎がア!」

でも、その攻撃は何故か彼に当たることなく、  
まるでボールのように跳ね返された

なんなんだ、彼の能力は?

瞬間移動みたいに速く動いたり、  
僕の攻撃を跳ね返したり…

「一方通行にそのような攻撃は通用しません、とミサカは  
貴方の不意打ちの愚かさを述べます」

そういうことは先に言ってくれよ…

「『グフツ!』」

あつという間に腹を蹴り飛ばされる

吸い込まれるかのように僕の腹に食い込んで、  
体の中で”ボキボキ”という音が数回響く

「『うわあ、これは肋骨が肺に刺さったかなあ？』

『一生後遺症が残ってるかもねえ』」

「知るかなことオ！」

腕をつかまれ、文字通り投げ飛ばされる

あんなモヤシに投げられてるのに、何故か  
彼は異様に力が強い

「三下の癖に俺に騙まし討ちをするとは良い度胸  
じゃねエか。だがなア、これでお前を殺す口実は出来たってわけだ  
ア！」

容赦なしに殴り、蹴ってくる一方通行

苛めだよ、どう見ても…

最終的にはボロ雑巾のようになって  
僕は投げ捨てられた

「けッ、つまんねエな。三下で俺に挑ンで来るンじゃねエよ」

見下すような台詞を吐き捨て、瀕死状態で  
倒れてる僕の腹に蹴りを入れる

不良かよ君は

「『いじめをする人って悲しいよねえ』』『他人を見下さなきゃ自分の存在を確立できないんでしょ？』」

「そうかア？ 少なくとも俺は自分の存在くらいそんなくだらねエことをしなくても確かめられるけどなア」

「『学園都市最強は話が別さ』」

学園都市最強って時点で既に存在意味が確立されてるじゃないか  
そついう点では、君のその最強は不公平さ

まあ、世の中は不公平で出来上がってるんだけどね

「まアいい。てめエをボコるのもそろそろ飽きてきたしよオ」

一方通行は僕の胸ぐらを掴んで持ち上げた

僕は体が小さいから、軽々と自分の視線まで  
持ち上げてる

そして、狂ったような笑みを浮かべた

「死ねよ」

僕の心臓を彼の片手が貫こうとする



真っ直ぐ向かってくるソレは、まるで矢のような  
速さと威圧感を持っていて、とても腕とは思えない  
死を目前にしても尚、僕も笑みを崩さない

「『甘えよ』」

「なッ!？」

彼にとっては信じられないことが起きていた

確かに腕は真っ直ぐ僕の心臓に向かっていた

速さも威圧感も矢そのもの

そして、僕の胸に到達している

でも、それだけだった

一方通行の腕は、貫通することなく、  
た少し殴るだけの衝撃程度で、殺傷なんて出来ていない  
信じられない、という表情になってる一方通行

僕の笑みは広がるばかり

「『あは！』『どうしたんだい一方通行？』『最強らしくないぜ！』」

その隙を突き、僕は自分の腕を振り上げ、力の限り一方通行の顔面を打ち抜いた

「がアツ！？」

貧弱の僕が殴ったにも関わらず、一方通行は声を上げ、地面に倒れこんだ

「『あれえ？』『おかしいなあ…』『学園都市最強の一方通行なら簡単に避けられるような攻撃だったのになあ』『しかも貧弱体質な僕の攻撃で倒れこんじゃうって様子がおかしいぜ？』」

僕は立ち上がりながら、彼にそう言う

さっきまでボロボロだった僕の体の傷は、いつの間にか完全に消えている

瀕死状態の僕が一瞬で無傷になったのに、一方通行はさらに驚愕する

「『まあでも！』『学園都市最強の一方通行さんにはまったく利いてないよねえ、最低の僕の攻撃なんて！』」

「てめエ、なにしゃがったア！」

怒りを露にして吼えてくる

「『言っただろ、「甘え」って』 『君は僕に触れた』  
『それ自体がもう既に甘いつて言ってるんだよ』」

「それがどうしたってんだよ！」

「『僕は戦闘中ずっと考えていたんだ』 『螺子を  
跳ね返してる君には僕が超能力者相手に使う戦法なんて  
使えない』 『常時使用型の超能力者の君なら尚更ね』」

『でも、君が僕に触れてくれたから』 『僕はそれを実行できた』」

やれやれと言わんばかりに僕は首を左右に振る

それに苛立ちを覚えたのか、睨む力をさらに強くする一方通行

「ワケ分かんねエこと言っでンじゃねエ！」

俺が訊きてエのは、そんなことじゃねエんだ！」

ついには僕の曖昧さにキレる一方通行

表情を荒げ、今にも僕を殺したくて  
殺したくて仕方が無いという表情

でも、混乱しているのか向かってこない

「『君が僕に触れている限り』 『僕は  
君の演算を「なかったこと」に出来る』」

「…あア？」

「『だいじょーぶ』 君はその内理解できるところから  
『過<sup>マイナス</sup>負荷にとって”常識”はどれほど荒唐無稽な現実かを』」

僕は螺子を構え、再び臨戦態勢に戻る

彼もそれに対応し立ち上がり、  
警戒し始める

はあ、没頭の繰り返しだね

これじゃあ無限ループになるんじゃないのかな？

「そこまです、一方通行、とミサカは貴方の好戦的姿勢を注意します」

だが、それを止める声が辺りに響く

一方通行は声のした方向、つまり自分の後ろへ振り返ると、  
僕にとっては予想もしなかった光景が広がっていた

一方通行の背後には、何人もの常盤台の制服を着た生徒たち

その全員が、あの御坂さんとまったく同じ姿なんだ

双子なんてレベルじゃない

何人も、最低で七人ぐらいいは居る

そんな御坂さんの集団を、僕はただ唖然としながら見ていた

「なんだてめエらか。俺の邪魔をするンじゃねエよ」

「無意味な戦闘は実験に支障を齎します、とミサ力は貴方のその好戦的姿勢をもう一度注意します」

実験？

これは興味深い言葉を聞いたね

レベル5の第一位がするような実験だ、きっとロクなものではないのは確かだ

「ちッ…」

一方通行はそれに従い、嫌々ながらも彼女たちに着いていく

あの一方通行が素直に従うなんて、よっぽどその実験が大切に、精密なものなんだね

歩き出す一方通行は止まること無く、僕の方を振り返る

その表情は未だに殺気で満ちている

「てめエ、名はなんだ？」

「『ただのお茶目な人類最低』<sup>マイナス</sup> 球磨川雪でえーす！』」

人懐っこそうに明るく挨拶するけど、彼はウザそうにそれを聞いた

なんで僕はこつも空振りをするんだろう？

「そうかよ。なら覚えとけ球磨川ア、てめエは

俺が必ずぶつ殺してやるよオ！ 分かったかア、三下がア！！」

随分とお怒りのようで

まあ、突然現れた奴に能力を無効にされたあげく、

一発殴られたんだからね

それにしても、一方通行の能力はなんだったんだろう？

僕の攻撃を殆ど跳ね返して、パワーも化け物染みていて、

速さなんか目で追えるレベルじゃなかった

でも、何故か僕の大嘘憑オイルフィクションきには効果があつた

大抵の現実になら効果がある過負荷だけど、流石に

僕でも”才能”まで「なかったこと」には出来ないしね

つまり、あの身体能力は彼の超能力から来ているって意味だ

常時使用型の超能力…複雑だね

でも、収獲はあつた

一方通行はどうやら完全無敵ってわけでも無いみたいだ

大嘘憑オイルフィクションきは利くし、攻撃に対しての耐性は皆無に等しい

大抵の攻撃は跳ね返すというなんともチートな能力だけど、穴は少なからず存在する

それなら、実際に戦う時は却本作りだつて効果があるはずだ

ブックメーカー

却本作りさえくらわせば、僕は

一方通行なんて簡単に殺せる

ブックメーカー

つまり、却本作りさえあれば僕はアイツを倒せる…

それが分かったのは、不幸中の幸いかな？

災い転じて福と為す

まさにそのことわざ通りだね

「『もしもし？』」

僕はすぐさま電話を掛けた

《ああ？ もしもし？》

向こうの声の主は機嫌が悪そうに電話に答えた

「『あ、敦くん？』 『ゴメン迷惑だった？』」

《いや、別に迷惑じゃねえんだが、なんというか  
タイミングが悪いつていうか…》

タイミングが悪い？

どういう意味だろ？

「『タイミングが悪い？』」

《そういうところなんだが…うわっと！

悪い球磨川先輩、ちよっと切る！》

銃声が聞え、敦くんの焦ったような声が聞えると、  
電話は通話が終了した

まさかとは思うけど…

他の二人にかけても同じ対応

今まさに暗殺されようとしてるよね？



十八話 「まいっ たな…」

「まいっ たな…」

そう呟くのは、建物の物陰に隠れている過負荷

周りの人間を不幸に陥れ、何人もの人間を  
実際に殺害している殺人鬼、木更津敦

現在は負運性という無能力マイナスを持ち、球磨川雪の仲間である

そんな彼は、苦笑いを浮かべていた

木更津の隠れている建物の向こう側には、  
銃を構えたとある人物

無情、まさになんの感情も表さず木更津を銃撃しているのは、  
球磨川を襲撃した人物と瓜二つ

常盤台中学の制服を纏い、茶髪の短い髪

ミサカと名乗ったそれは、容赦なく木更津に銃弾の嵐を浴びさせて  
いる

一体なにがなんだか彼には分からないのだが、  
一応は敵と認識し、現在は反撃のチャンスを伺っている

木更津はナイフ一本に対し、あちらは突撃銃

新型のF2000R突撃銃だった

殺傷能力、性能、信頼性、その全てが元の銃であるF2000より強化されていた

高性能の銃による銃撃により、木更津はまったく身動きが取れなかった

だが、隙はかならずある

一旦銃撃が止まるのを確認すると、木更津は建物の影から車の影へと接近する

少しずつ接近していった

「まったく…俺がなにしたってんだよ…」

面倒臭そうに呟くが、それは再び再開した銃撃により掻き消された

現在、彼は弾切れを狙っていた

通常の突撃銃のマガジンは一つにつき20発から50発の銃弾が装備可能である

襲撃が開始されてから十五分も経っていた

つまり、それに従い

「（よし…い）」

弾もとうとう底をついた

銃撃が終了したのを確認し、木更津はゆっくりと面影から出て行った

「よお、クソ餓鬼」

ミサカは無言で彼を見詰める

「なに無視してくれてんだ？ まあいい。なにより大事なのは、てめえが俺の命を狙ってるってことだ」

ナイフを取り出し、手で遊ばせながら言う

「俺の命を狙ってるんなら、俺がお前を殺しても正当防衛ってことだよな？」

ケラケラと笑いながらそう問いかけた

「殺して解して並べて揃えて晒してやんよ」

ナイフを強く握り締め、ミサカに向かって走った

それに応戦するべく、体に電気を纏わせ電撃を放つミサカ

「へえ、発電能力者かよ？ それなら殺す理由ももう一つ出来たなあ！」

能力者を殺す目的を持つ木更津にとって、彼女は絶好の獲物<sup>てき</sup>だった

「木更津敦、やはり情報通りの殺人鬼ですね、  
とミサカは貴方のバトルジャンキーに少し引きます」

「言ってくれるじゃねえか！」

電撃を避け、ナイフをミサカに振り下ろした

一方通行との実験用に創られたこともあり、  
とてつもない反応力でかわした

そのまま当たることなく、ナイフは地面に深く突き刺さる

「終わりです、とミサカは武器を失った  
貴方に電撃を放ちながら告げます」

「終わり？ 誰がだ？」

突然、ミサカの立っている道路に巨大な亀裂が入った

それは見る見るうちに広がり、やがて  
巨大な幅の浅い穴が出来ていた

それに足を取られ、バランスを崩すミサカ

「わお、アンラッキーだな。運悪くその地面が  
道路を支えてたみてえだ。残念残念」

足が抜けず、その場を動けないミサカに、  
木更津は少しずつ歩み寄った

ナイフを手に、狂気で満ちた笑顔を向けている

「くッ…！」

「わりいなあ、でもこれでも俺は殺人鬼なんだ。  
自分の命を狙った奴を許すほど、俺は優しくねえんだ」

目の前まで接近すると、ナイフを振り上げる

「じゃあ、あばよ」

そのナイフを振り下ろした

短く声が発せられると、辺りはシーンと静かになった

木更津の顔には、返り血が飛び散っている

「ちッ…折角洗った制服が台無しじゃねえか…」

返り血によって赤い点が付いてしまった  
ワイシャツを見ながら、彼はそう呟く

目の前の死体になど目もくれず、  
とても中学生を殺した後の態度ではなかった

「はあ…説明すんのがめんどくせえ…」

頭を掻きながらそう呟き、彼は帰路へと着いた

この日、何者かによって頭を刺された死体が道路のど真ん中で見付かったという

その頃、駅でも騒動が起きていた

駅で待っていた人間は全員避難され、通常の電車も止められている

車での通行も止められ、警備員への出勤要請が下っている

現在は、特別に配備された電車により近くの警備員の部隊が現場に駆けつけようとしている

そんな閉鎖された駅の中に居るのは、一人の少女

「まいったな……」

自動販売機の後ろで身を隠すのは、過負荷の清瀬真希

電車を乗ろうとしたところ、何者かに銃撃され、現在に至っていた

自身の過負荷である偽良性もまったく  
ノットクリアー  
通用せず、途方に暮れていた

偽良性は自分への負の感情を他人に押し付ける過負荷である

通常ならどんな敵でもその感情を別の人に  
向けさせ、自分は手を下さず倒すことが出来る

でも、今回は違っていた

相手は清瀬を殺そうとしているのにも関わらず、  
まったく負の感情を向けていた無かった

敵意も無く、憎しみも無く、怒りも無い

そんな状態でも尚、清瀬を殺そうという意思はあった

つまり、彼女の過負荷はまったく無意味だった

隠れながら思考を繰り返す

「（いやあ、まいったなあ…この子にボクの  
過負荷が通用しないなんて思いもしなかったよ。過負荷が  
役立たずになるとボクは普通の何の力も無い女の子なのに）」

過負荷が無ければ、清瀬はただの無力な人間

戦闘能力なんて勿論なく、いわば摘み状態だった

球磨川の螺子のような武器も無く、木更津の  
ような戦闘に関する知識や身体能力も勿論皆無だった

丸腰状態で武装した相手に勝つ

清瀬にとってはほぼ不可能なことだった

「（これなんて無理ゲー？ はあ…せめて  
オルフィクション  
雪くんの大嘘憑きみたいな出鱈目な過負荷があればなあ…）」

打開策が見付からず、諦めたような溜め息を吐く清瀬

だが、それを相手が許すはずも無く

「うわあ!？」

隠れていた自動販売機が突然嵐のような弾丸に襲われる

「目標を見つけました、とミサカは隠れていた  
貴方に対し多少イライラしながらも、攻撃を開始します」

「ボクだって死にたくないんだよ…」

益々身動きが出来なくなった清瀬

すると、目の前に大きな物体が落下していた

それは駅の天井に取り付けてあった時計だった

ミサカの銃撃により、鎖が外れ時計が落ちてしまったようだ

「あの銃でも時々は変なところに弾が飛ぶんだね…あ!」

なにかが閃いた清瀬



悪戯っぽい笑みを浮かべながら、彼女は地面に落ちていたジュースの缶を拾う

それをミサカは不思議そうに見詰める

「おりゃ！」

清瀬はジュースをミサカとはまったく関係ない遙か上空へと投げた

意味が分からず、無視して銃撃を続けるミサカ

「ッ！？」

突然、二羽のカラスがミサカを襲い始めた

まるで子を殺された親のようにくちばしを突きつけるカラスを、ミサカはただ振り払おうとしていた

「ビンゴ」

混乱している中、清瀬はミサカに歩いていき、落としていた銃を取り上げ、遠くへ投げ捨てた

そのまま銃でミサカを撃てば終わらせられるが、清瀬は銃の知識がまったく無い

下手に撃てば肩を脱臼させてしまうほど、軍用銃は扱いが難しい

それを理解していた清瀬は、あえて使用せずそのまま捨てていた  
「よっこいしょっと…」

カラスを振り払おうと暴れていたミサカはホームの端に居る

清瀬はそんなミサカに自身の足を突きつけると、  
そのまま駅のホームから蹴落とした

そして、タイミング良く向かってくるのは警備員アンチスキルの搭乗した電車

カラスを振り払ったミサカはようやく  
自分の状況に気付いたが、時は既に遅し

電車は容赦なく迫ってきている

「バイバイ」

笑顔でミサカに手を振るう清瀬

その瞬間、ミサカの体は電車に遮られ、見えなくなった

「まいりましたね…」

過負荷最後の一人、琴吹海咲も同じ眩きをしていた

だが、二人と違い琴吹は逃げも隠れもしていない

堂々と道のと真ん中に立っている

そんな琴吹に銃弾の嵐を浴びさせているのは、  
やはり同じくミサカ

だが、弾丸は当たることなく逸れ、  
周りの建物や物へと弾かれていた

彼女の過負荷、絶対禁止  
ノ・イ・ン・トルド

その以前の能力は、『認識したものを弾く』ことだった

物体液体気体人間動物植物創造物自然物問わず、  
問答無用で全てのものを拒絶し、弾くことが出来た

だが、そんな完全無比な過負荷は、数日前に魔術師によって破られていた

琴吹にとってそれは許せない事実だった

唯一の無才能である過負荷が、破られた

自分のアイデンティティを失ったような  
感覚に陥った琴吹は、球磨川にあることを頼んだ

それは、自身の過負荷をもつと駄目マイナスにすることだった

元々過負荷は自分が不利益になるような能力

それをさらに駄目にすることで、その効力をより荒唐無稽に、理不尽にすることができる

琴吹は球磨川こそ最低の過負荷だと信じていた

出来るかどうかは知らなかったが、それでも球磨川に頼んでいた

それを訊いた球磨川は、軽く「『いいよ』」と言っただけだった

喜びに満ちた琴吹だったが、次の瞬間顔を顰めた

球磨川が了承した瞬間、自身に大きな螺子が刺さっていた

意味が分からず混乱する琴吹に、球磨川は優しく「『安心して』」と言った

次の日から琴吹の過負荷は変わっていた

それは…

「鬱陶しい銃弾ですね、いい加減諦めたらどうですか？」

認識せずものを弾く能力だった

球磨川に螺子で貫かれてから、琴吹の全身には常に絶対禁止が掛かっている状態になった

一方通行の反射や絹旗の室素装甲のような、

自動防御の能力が備わっていた

つまり、今の琴吹にはほぼ全ての攻撃が無意味だった

「しかし…退化した私の過負荷って本当に最低ですね。  
球磨川さんと同じくらい出鱈目だと自負しています」

ミサカに向かってそう告げる琴吹だが、  
答えは返ってこない

無表情のまま自分を無視するミサカに  
少し苛立ちながらも、琴吹は冷静を保つ

冷静さを少しでも欠けば絶対禁止が解かれる恐れがあった

その瞬間、琴吹は蜂の巣にされる

故に琴吹は一時も緊張を解けなかった

「…弾切れですね、とミサカは自分が弾を無駄使いたことに  
自己憎悪を抱きながらも、貴方との戦闘に集中します」

「そりゃ自己憎悪になりますよね、利かないと  
知っているのに自棄になって弾を打ち続けるんですもん。  
貴方意外と馬鹿なんじゃないんですか？」

「他人を見下すような話し方をする貴方よりはマシだと  
自負しています、とミサカは貴方の毒舌に呆れます」

「毒舌じゃありません、事実を述べているだけです」

自分の毒舌を理解できていない琴吹に、  
呆れたため息を吐くミサカ

それにさらに苛立ちを覚えながらも、琴吹はここから去ろうと歩き出す

「逃げるんですか？ とミサカは貴方の行動に疑問を抱きます」

「逃げてるわけじゃありません、ただもう貴方とのやり取りするのが面倒になって立ち去るだけです」

「ですがミサカの命令は球磨川雪および過負荷全員の暗殺です、なので逃がす気はありません、とミサカは貴方の行動を却下します」

立ち去ろうとする琴吹を止めるかのように電撃を打ち出した

それは真っ直ぐ琴吹に向かっていくが

「はあ…話の分からない人ですね」

まるで一方通行の反射のように電撃はその道を変え、真っ直ぐミサカへと引き返した

「ぐう…！」

それを直撃したミサカは、感電し倒れる

「私は敦さんみたいな殺人鬼じゃないので、これで失礼します」

それを見届けた琴吹は、満足気に歩き出す

感電し身動き一つ取れないミサ力は悔しそうに  
立ち去る琴吹を見詰めていた

~~~~~

「『やつほー！ 皆生きているかい？』」

僕はしばらく時間を潰すと、またあの三人に電話を掛けていた

流石にこの時間になると戦闘は収まったのか、  
三人とも電話に出ている

今は四人で元気に通話中さ

僕たちの携帯は新しい学園都市製の携帯で、  
複数の人と一辺に喋れる新機能付きなんだ

こついうのって便利だよね

《生きてなかったら電話に出ねえだろ…》

《いやいや敦くん、敵に携帯を取られる可能性だってあるよ？》

《私も清瀬さんと同意です》

うん、全員生きてるね

まあたとえ殺されてたとしても、直ぐに大嘘憑オールフイクションきで生き返らせていたけど

「『いやいや』 君たちは死なないと思うよ?」 『だって負運性ならまず

戦闘で役立つし』 『偽良性なんてチート級の能力だぜ?』 『絶対禁止なんか

それ以上にチートだし』 『それに比べて僕なんか…』 「

《《お前が言うな!!!》》



十八話 「まいっ たな…」 (後書き)

作者はあやまりましょう

はい、まさか二人もミサカを死なせてしまいました

実験番号は19000以上で実験に支障は  
出ないということにしてください…

十九話 『劣等生も優等生も関係なく』（前書き）

駄目文、強引展開、そして急展開に注意してください

## 十九話 『劣等生も優等生も関係なく』

### 薄暗い路地

怪しげな建物が複数立ち並ぶこの街の地域を、僕は相変わらず一人で歩いている

真っ昼間にも関わらず、光の進入を一切許さないこの暗黒の空間は、まるで真夜中のような風景だ

最近三人の付き合いが悪い

敦ちゃんとは相変わらずどこかを彷徨っていて、真希ちゃんは学校の勉強らしく自分の部屋に籠っている。海咲ちゃんは既に出かけていて電話してみたなら”ゲームを邪魔するな”って怒られちゃうし、本当に寂しいんだ

今回は重要なことなのに、しょうがないなあ

僕が只管この暗い路地を歩くこと数分、一つの空家で止まった

窓は割れ、ドアはほぼ崩れている

電気だけは点いているから、おそらく中には人が住んでいる

でも、そんなことは僕には関係ない

なぜなら、この家から発せられているこの異様な雰囲気こそ、僕の求めていることだからさ

僕は堂々とその扉を開けると、無断で家の中へと進入する

不法侵入？　僕は悪くないよ

中に入るや否や、住人全員の視線が僕に突き刺さる

僕は辺りを見回してみる

うーん…見る限り四人って所だね

男子三人、女子一人

その四つの視線の全てが僕へと突き刺さっていた  
正直少し心が痛いかな

だって、まるで不審者を見るような目なんだもん

「『ええ』『最悪で災厄で最低で理不尽で  
完全なる人類の屑である皆さん』『こんにちは』」

僕は優しくそう挨拶する

だが、ここの住民たちは一向に動こうとしない

硬直したまま全員が瞬きもせず僕を見詰めていて、  
中には口をおかしな子みたいに空きっぱなしの奴までいる

あはは、どうしたんだろう？

「『僕は球磨川雪』『どうぞよろしくー!』」

頭を下げ、礼儀正しくするが、それでも  
まったく反応を見せない四人

はあ、せめてなにか答えてくれよ…

いい加減この状況に僕も飽きてきたし

「『あれえ?』『どうしちゃったんですか皆さん方?』『」

「……」

すると、ようやく硬直が解けたのか一人が無言で  
僕に近付いてくる

やはり学園都市なだけあって制服を着ているけど、  
帽子を深くかぶって表情が分からない子だった

体格からすると男子かな?

その子は目の前まで来ると、立ち止まった

「『うん?』『どうしたん』『」

直後、僕は家の外へと殴り飛ばされていた

彼の拳は容赦なく僕の顔面へと食い込み、  
数箇所を”ボキボキ”と鳴らせながら吹き飛ばした

血を口から少し吐き出すも、この程度の  
暴力ならもう既に慣れてる

「な、なかじま仲嶋くん!？」

家の中からその帽子の少年を呼ぶ声が聞える

仲嶋くんはそれに応答し後ろを振り向いた

「なんだ？」

「い、いきなり殴るのはさすがに拙いんじゃない……」

「こんな怪しさ全開の奴相手にそんな甘えことなんか言ってもらえ  
えよ」

弱々しそくに誰かが彼に注意してるけど、  
彼はそれを否定している

まあ、仲嶋くんの言うことも一理あるけどね

「『怪しいなんて酷いなあ』『僕はただ挨拶しただけなのにさあ』」

「『ッ……!?!?』」

大嘘憑きにより顔の傷が『なかったこと』に  
されているのに驚く二人

最低でも数箇所は骨が折れていたはずなのに、  
無傷で立ち上がったんだから無理も無いけどね

「お前……！」

「やめてください仲嶋くん」

再び攻撃しようと接近してきたけど、それを制する声が響き、いったん止まった

穏やかで清楚なそれは、礼儀正しさの極み

「『君は？』」

「申し送れました、わたしは春木直人はるき なおとという者です。

自分の同僚が無礼な対応をお見せし、申し訳ございませんでした」

礼儀正しいその話し方は、まるで執事みたいだった

制服もちゃんとネクタイを綺麗にされていて、かけている眼鏡には汚れが一つもついていない

見るからに紳士って感じの人

今時こういう人も珍しいんじゃないのかな？

「『別にいいさ』『理不尽なんて慣れてるし』」

「改めて紹介致します。隣の帽子をかぶっているのが仲嶋礼二くんなかじま れいじです。あのような態度を取りましたが、実際はとても友達思いの良い人です」

とてもそうには思えないけどね

だって、警告なしにいきなり殴ってくるんだぜ？

「仲嶋くんを注意したのが雛像ひながたるいさ涙紗さんです。気弱な方ですがとても優しく、争いを好まない方です」

これまた今時は珍しい子だね

最近の子供ってあの御坂さんとか四人組の光線の人とかで好戦的でツンツンしてる子が多いんだもん

だからこんな人も最近恋しくなってくるんだ

真希ちゃんには僕を苛めるし、海咲ちゃんは殆ど無感情で毒舌だから意地悪だし…

「最後に一言も発していないのが二ノ宮このみや和希かずきくんです。基本は無害な方なので、安心してください」

おお、そういえば居たね

さつきからずっと部屋の壁に寄り掛かっているだけで一言も発せず、ずっと俯いてる

最初は具合が悪いと思ってたけど、素なんだね

「『個性豊かな方だねえ』『僕は球磨川雪』」

「個性豊か？ お前が一番そうだろ」



僕って個性的なのかな？

ただの過負荷だし、どこも個性的な所なんて無いと思うけど...

「『そんなことよりさ』『僕はただ君たちに質問がしたくてここに来たんだよ』」

元々の目的を失うところだったよ

本当は殴られた時点でブチ切れてこの場に居る全員を螺子で螺子伏せしようと思ったけど、なんとか抑制を利かせた

「はて？ 我々にいつたいなんの用でしょうか？」

「『君たち全員』『マイナス過負荷って知ってるかい？』」

「なッ!？」

僕がマイナスと言った瞬間、春木くんが驚きの声を上げる

その反応からすると過負荷の存在を知っているんだね

「お前：どこでそれを聞いた!」

敵意丸出しで睨んでくる仲嶋くん

雛像さんは小さく怯えて部屋の隅に走って行って、二ノ宮くんは初めて僕を見上げた

一人を除いて全員が驚愕状態

おそらく過負荷というのはまだ世間じゃあまり知られていない存在で、それを堂々と言った僕を怪しんだんだろう

「聞いたもなにも」『分からないのか？』

「分かるかよ！ 俺たち過負荷を狙ってるっていうんなら、知ろうが知らなかつた関係ねえ！ 敵だ！」

あからさまに突っ込んでくる仲嶋くん

それに呼応したのか、壁に寄り掛かっていた二ノ宮くんもこちらに向かって走り出す

おそらく”敵”という言葉に反応したんだと思う

この二人の過負荷も戦闘能力も皆無だけど、まあしょうがないかな？

「待ってください、二ノ宮くん！ 仲嶋くん！」

だが、それを聞かず止まらない二人

雛像さんは目と耳を堅く閉じて見ないようにしている

「『まったく…』 ただ文章を一つ言っただけなのに、なんでそんな敵意剥き出しで迫られないといけないのかな？」  
『これじゃあ』

『僕が止めないといけないじゃないか』

直後、向かってきた二人を含め家の中の全員が壁や床に貼り付けられていた

向かってきていた仲嶋くんと二ノ宮くんは床に螺子で服を縫いとめられていて、他の二人も同じく壁に縫い付けられている

本当はこの二人でも足りたんだけど、まあついでに春木くんと雛像さんもかな？

万が一攻撃されたら駄目だし

「「「「「！！！！」」」」」

あまりの一瞬の出来事に全員が啞然としている

まあ、二ノ宮くんはまだ黙っていて分からないけど

「『僕は悪くないよ？』』君たちが突然襲ってきたから反撃しただけで』『わざと攻撃したわけじゃない』

『正当防衛だから』」

無関係な人も攻撃してるけど、それは黙認してくれないと

仲嶋くんにはブチ切られると思ったけど、

この状況に啞然としてしまっていて固まってしまってる

でも、まあ友好関係を築くのが僕の目的だから、直ぐに螺子を抜き取る

最初に皆の螺子を抜き、最後に仲嶋くんの螺子を抜き取った

一番最後に抜き取った理由は、彼が一番好戦的でちよつと怖かったからね

「『ガアッ！？』」

抜いた瞬間、突然僕は”殴られた”

いや、正確に言うと”殴られていない”

彼は一切手を出していない、なのに

僕の鳩尾には拳が食い込むような感触があった

衝撃波じゃない、ちゃんと殴られたって感触なんだ

「やられたままじゃ俺の気が済まないんだよ！」

仲嶋くんが僕に向かってそう叫ぶ

一体なんなんだ、彼のスキルは…？

「へ、驚いたか？ お前、過負荷を知ってるんだろ？  
だったら教えてやるよ。俺の過負荷は最低労働<sup>スカルファクション</sup>。」

”過程を飛ばして結果だけを残す”スキルだ」

過程を飛ばすスキル？

僕はその能力に疑問符を浮かべる

イマイチ理解できない…

「『結果だけを残すスキル？』」

「そうだ。俺はかなりのめんどくさがり屋なんだ、  
わざわざ途中のことをするなんてやりたくねえんだ。」

まあいわば、行き過ぎた結果主義者か？」

結果主義者ねえ…

要するに、結果だけが発生させるスキルか

さつきは僕を殴ったけど、その”殴る”という  
過程を飛ばして”殴った”という結果が発生させたんだ

自らは手を出さなくても、相手を攻撃できる

刃物で”斬る”という過程を飛ばせば、  
”斬った”という結果だけを残せる

つまり、戦闘においてはかなり強力なスキルだ

”努力”なんて無視して”結果”だけを残せる  
ようなスキル、ある意味かなり最低<sup>マイナス</sup>な過負荷<sup>マイナス</sup>だ

「『ぐツ…！』」

頬に衝撃が走り、床に倒れこんでしまう

またあの攻撃か…

絶対に避けられない攻撃って、どんなチート能力だよ？

「やめてください仲嶋くん。これ以上の戦闘は無意味です。  
我々もこれ以上目立つと後が厄介になります」

追撃しようとしている仲嶋くんを、春木くんが止める

「『なにが遭ったのかい？』」

フラフラと立ち上がりながら僕は彼に訊く

ここまでしてでも過負荷の存在は知られたくない理由、  
それは迫害や軽蔑なんて優しいレベルじゃない

この雰囲気からすると、もつと重大なことだ

「見たところ貴方も過負荷ですし、お教えしても良いでしょう。わたし達は追われているのです」

「『追われてる?』」

「貴方も知らないのですか? 統括理事会は既に”過負荷”<sup>マイナス</sup>という存在を知っています」

へえ、なるほどね

でも、何で知られたんだ? 僕たちはあまり暴れていないし、どちらかと言うと結構大人しくしていたつもりだけど?

まあ、時々騒動を起こしてるけど

「『なんで統括理事は過負荷のことを知ってるの?』  
『少なくとも僕たちは情報なんて重要なことは一切話していないよ』」

「どうやって知ったかは不明です。ですが、知っているのは事実ですし、現在は我々にとってはかなり厄介な連中です」

厄介だって?

統括理事会は基本、表の世界に関わらないはずだ

いつもは裏で暗躍していて、そもそも僕たち過負荷には無関係のはずだ

「統括理事会は、過負荷の捕縛を開始しました」

「『……』」

過負荷の…捕縛？

「我々の過負荷は彼ら統括理事会にとっては未知の能力、研究対象としては裏ではとても注目されています。ですので、固体を捕縛し研究

するのを目的として行動を起こしています」

なるほど、確かに厄介だね

統括理事会は巨大な組織だ

それこそ僕らでは相手にならないほど

その組織が動き出した今、僕たちはかなり  
危険な立場に居る

僕たちを何度も殺そうとしたのも、多分  
死体の解剖などが目的なんだろう

クソ、統括理事はもう既に動き出していたのか…！

なら僕たちももたもたしてられないね

「この場に居る全員はかつて統括理事によって派遣された部隊に  
追われた人です。我々は監視から逃れ、現在は居場所を転々としな



がら

なんとか生き延びています」

「『…うん』『君たちも大変なんだね』」

「貴方も同じなのでしょう？ 本当に過負荷なら」

まあ、僕たちは基本やばい状況にならない限り過負荷の使用は控えてるから

あまり知られていないし、魔術師の連中ぐらいだよ、僕以外の過負荷の能力を実際に目の当たりにしているのは

まあ、他の三人は分からないけど、僕と一緒に居た時はそうだったな

でも、多分僕の方が過負荷としてのインパクトが大きかったと思うから僕しかまだ狙われないと思うけど

「『ま』『命は何度か狙われたさ』『実際に二度以上は死んでるし』」

「ッ…！」

死んだことがあるという事実に関を引攣る春木くん

それに呼応して仲嶋くんと雛像さんも

少し驚いている

まあ雛像さんは益々怯えたただけだけど

二ノ宮くんは相変わらずポーカーフェイス

「死んでもなお生きているとは、貴方は何者なんですか？」

「『ただの劣等な人類最低さ』」

でも、僕はそれだけ言つと話を切り上げる

まだ決まったわけじゃないから、彼らにはあまり情報を与えたくない

「もしよろしければ我々と共に来ませんか？ その方が貴方も命の安全が保たれる確立が上がるかもしれないよ？」

へえ、あつちから訊いてくれるんだ

それはちよつと予想外かな？

でも、僕はその提案に笑みを浮かべる

「『知らねえよ』」

「…はい？」

僕の言葉にキョトンとする春木くん

まさか、断れるとは思っていなかったんだね

「『知らねえよ君たちの都合なんて』『なんで僕がまだ会って数分しか経って

いない他人にそんなことを言われなきゃいけないのさ?』『うざいんだよ偽善者』」

「お前…!」

仲嶋くんが僕を殺気を込めた目で睨んでくる

「『おいおい』『でもだからって僕はこの提案を断るわけじゃないぜ?』『」

「どついう意味ですか?」

「『君たちが僕の仲間になればいいじゃないか』」

「はあ? ふざけんな! なんで俺たちがお前の仲間にならなきゃいけないんだよ!」

とうとうブチ切れる仲嶋くん

まあ、ついさっきあんなことを言われた後に僕が  
”仲間になれ”って言ったんだから当たり前だけどね

多分敦ちゃんでも怒ってるよ

「『僕には目的があるんだ』 『そのために君たちの手助けが必要だ』 『既に仲間は三人居る』 『人数は丁度二倍になるんだ』 『悪い話じゃないだろ?』」

「その目的とは…お聞きしても宜しいでしょうか…?」

「『統括理事に追われるのが嫌なんだろ?』 『なら殺せば良いんだ』」

『僕は学園都市の超能力者や高位権力者を抹殺しようとしている』  
『だから』

そのために君たちの力が必要だ』」

言葉を失う四人

この学園都市には何百人も超能力者が居る

その全員を殺すなんて考えられないと思っているんだろっ

正直、皆そう思うだろう

「……お前、頭がぶっ飛んでるんじゃないかねえのか?」

「『なら逆に問うよ』 『君たちは許せるか、このプラスで溢れている学園都市を?』」

「ッ……」

言葉が詰まる中島くん

「『この学園都市は僕たちをこんな境遇にまで落としたんだぜ？』  
『こんな薄暗い路地のボロボロの家に住まされ』 『実験動物のように  
僕たちを追いまわし』 『毎日ビクビクしながら過ごさないとイケな  
い』」

徐々に、彼らの仕舞いこんでいた気持ちを解き放とうとする

「『表に出れば迫害され』 『貶され』 『差別される』 『理不尽な  
暴力も

当たり前』 『そんな腐った都市を君たちは許せるのか？』

『僕は出来ないね』 『憎くて恨めしくて堪らない』

『だから僕は超能力者<sup>エリート</sup>を殺すんだ』

『こんな腐った世の中を生きているあの上がり調子の  
連中なんて』 『全員死ねば学園都市は等しく平等な所なんだ』

『嫌われ者の僕たちにとってそれほど難しいことはない』

『でも、アイツ等は知らないんだよ』 『数学と同じでプラスは  
マイナスでかければ簡単にマイナスになるって』

『つまり、あの連中はただの思い上がりで強くも無い』

『だから、屑で塵で最低な僕らが証明しようぜ？』

『差別格差理不尽不条理不平等底辺下位なんて関係ない』

『<sup>マイナス</sup>劣等性だっ<sup>プラス</sup>て優等生に勝てるんだよ』  
「

十九話 『劣等生も優等生も関係なく』（後書き）

今回は最低労働が登場しました

（過負荷の説明コーナー）

スカルファッション  
最低労働

”過程を飛ばして結果だけを残す”過負荷

物事の起こすときの途中過程をスキップして  
その結果だけを引き起こす過負荷

つまり、努力を完全に無視した最低の過負荷

鉛筆を持つだけで”書く”という過程を飛ばし、  
”書いた”という結果を発生させられる

刃物を持つだけで”斬る”という過程を飛ばし、  
”斬った”という結果を発生させられる

拳に力を込めるだけで”殴る”という過程を飛ばし  
”殴った”という事実を発生させられる

このように、努力もせず結果だけが出せる

攻撃になれば絶対に避けられない

凶悪な攻撃にもなる

投稿してくださったマックスさん、本当にありがとうございます

他の三人も能力は登場するので、お楽しみください



二十話 『それが現実なら』 (前書き)

今回は短いです

それと、読者様の過負荷も登場します

中途半端な話の終わりになってしまってますみません

\*後半は微グロ注意

二十話 『それが現実なら』

「『うつ…』」

相も変わらず血塗れで倒れている僕

ちなみに僕はマゾじゃない、どちらかと言うとサディストだと思う

それでも、いつも通り僕は瀕死状態になってる

理由はというと…

「やっぱり無理あったんじゃないのか？」

倒れている僕を見下ろしている中島くんがそう言う

呆れたようにポケットに手をつ込んで、態度悪くしてる

彼がそうになっているのも無理は無いね

仲嶋くんのほかに周りには春木くん、二ノ宮くん、そして雛像さんも居る

雛像さんは若干は血を見て引いてるけど

本当に気が弱いんだね

「無謀を通り越して馬鹿だと思います」

春木くんもそう告げる

少しはフォローしようぜ？

「す、すみません！　ま、まだ手加減できなくて……」

おろおろしながら雛像さんは謝ってくる

無理も無いね

今回、僕は雛像さんの過負荷を調べている

出来れば他の二人の過負荷も確かめておきたいけど、それはまたの機会で待っておくよ

既に皆は僕と一緒に来ることを受け入れたし

で、雛像さんを最初に選んだ理由はというと、彼女が一番難関に感じるからだ

見たところかなり気が弱い

人を傷つけるのを嫌がり、とてもじゃないけど最低マイナスには見えない

しかもそれは真希ちゃんみたいに仮面でもなく、本気に素であんな性格なんだ

それは少し迷惑かな…？

僕らの目的はエリートの抹殺だぜ？

人を殺せなくちゃ意味が無い

だから、過負荷を確認するついでに他人を  
傷つけるのに慣れさせるためだ

そのために態々ボロボロになるのが僕なんだけど

はあ、やられ役はいつも辛いぜ…

「きゃ！？」

途方に暮れながらも僕は螺子を彼女に投げつける

不意打ちに驚いてまったく身動きが  
出来なかったのか、その攻撃を直撃している

でも…

「『がはッ！』『くッ…』『』」

腹から血飛沫が上がり、大きな穴が開く

調べるとは言ったけど、まさかこんなに  
出鱈目で最低な過負荷なんて…

「相変わらず顔に似合わずえげつない過負荷だよなあ、  
涙沙の『無実殺人』は…」

彼女の過負荷、無実殺人

文字通り、無実でありながら殺人を犯せる能力だ

その能力とは、『自分の受けたダメージを殺意を抱いている相手に  
二倍にして跳ね返す能力だ』

肉体精神問わず、あらゆるダメージを殺意の抱いている相手に与える

一見完全なる平和主義者の彼女とは縁遠い能力でも、そこが性質が  
悪いんだ

雛像さんは無意識に他人への殺意を常に感じているんだ

本人は自覚が無い、でも事実彼女は僕に殺意を抱いている

無自覚で無意識に無意味に殺意を抱き、貰ったダメージを  
そのまま相手に与えて跳ね返す

傷付くのが嫌で他人を傷つけるのが嫌な雛像さんらしい能力

名前通りまったくの無実

「『ゲホッ…』『なんで過負荷はこんなにチートが多いんだよ…』」

「だ、大丈夫ですか球磨川くん!？」

「『僕を名字で君付けで呼ぶのは君ぐらいたよ…』『でも』  
『これは僕の自業自得だから』『君はなににも悪くない』」

「で、でも…」

跳ね返しているため、彼女はノーダメージ

つまり、この子には殆ど攻撃が利かないんだ

唯一の弱点は完全に無視することだけど、  
そんなことしたらこの戦闘が無意味になってしまう

基本、こちらから攻撃さえしなければまったく無害だしね

だって跳ね返すダメージが無いんだもん

「『これは君に人を傷つけるのを慣れさせるためだから』  
『僕がボロボロにならないと意味が無い』」

オールフイクション  
大嘘憑きも使っちゃ駄目だしね

それだと彼女の他人を傷つける実感が減ってしまうし、  
傷付いても直ぐ治ると勘違いしてしまう

「そ、それでも別に球磨川くんじゃなくても…」

尚も僕を攻撃するのを嫌がる彼女

そんな様子には僕は深い溜め息を吐く

「『はあ…』 君にはもうお手上げだよ』 『もう駄目だこりゃ  
『僕は諦めるよ』 『なにをどうやっても君は僕を殺さない』」

首を左右に振りながらやれやれと呟く

「『ここは一つ強引な手段を用いて』 『続行させてもらつよ』」

直後、彼女の腹部には巨大な螺子が刺さっていた

それも、彼女の無実殺人では効果を  
表せないような特殊な螺子を

「なッ！？ 球磨川、どういうつもりだ！」

血反吐を吐かない僕を見て、

予想外の出来事に仲嶋くんが叫ぶ

「『彼女は自分の殺人衝動を無意識で心の奥底に仕舞いこんでい  
る』」

『だから僕はただその壁を少し取り外す努力をしただけさ』」

螺子は外れるが、刺された箇所からは血がまったく流れていない

それどころか傷も一つ無い

「『ほら』 『彼女の殺人衝動が来るぜ』」

僕がそう言った直後、なにかが高速で僕の顔面にめり込んだ

拳銃から打ち出された巨大な鉄球のような

出鱈目な速さで突っ込んできたのは、雛像さんの拳

生身の人間からは想像もできない力

それは容赦なく僕に直撃する

一方通行に殴られたみたいに吹き飛ばされる

別の秋やの壁まで吹き飛ばされ、  
辺りに瓦礫や木材などが散乱する

そこから這いずり出ると、目の前に立っているのは一人の少女

目は冷酷そのもので、以前の彼女からは想像も出来ない

「球磨川先輩…貴方いったい何をしたのですか！」

黙って見守っていた春木くんも、この  
豹変には声を出さざるを得なかった

あその他の仲間たちにとっても、雛像さんの  
この豹変っぷりは初めて見たらしい

「『さっき言っただろ？』 僕は彼女が仕舞いこんでいた殺人衝動  
の壁を撤去した」

『今はもう雛像さんの殺人衝動を抑えるものは無い』 『つまり暴走  
状態だ』 『だから』

僕への殺意も比較的に上がって』 『彼女を縛り付けるものも無くな  
ったから』

あれほど身体能力が向上したんだ』



主に大嘘憑きで彼女のその心の壁を『なかったこと』にしたんだけど

「なんてことを…!」

「『でも』『僕だって黙って殺られるほど負け慣れていないさ』『悪いけどこつちも殺す気で戦わせてもらっぜ?』」

雛像さんから返答は無い

恐らく言葉はなにも入っていないだろう

「『え?』」

本気になった僕だけど、次の瞬間思いもしない  
光景が目に見えこんだ

さっきまで僕と彼女の距離の間には数メートルぐらい差があったはずだ

それが今は、目の前に立っていて僕の  
顔を驚愕みにしている

正直、ちょっとやばいと思う

「『あはは…』『ここは穩便に』」

文章を終わらせることなく、僕は意識を失った

~~~~~

誰もがその光景に絶句していた

顔を驚掴みにされていた球磨川

彼の頭は一瞬にして雛像に握り潰されていた

骨など意味を成さないかのように

簡単に握り潰され、辺りに大量の血が広がる

頭を潰された球磨川の体は、力を無くし地へ倒れる

地獄絵図と化したこの路地裏は、血の海によって

埋め尽くされている

鉄の匂いが強く広がっている

殺した本人は、大量の返り血を浴びながらも

未だに無表情のままだ

罪悪感はまるで無い

それこそが、『ノットキリング無実殺人』の本質だった

「雛像…お前…！」

帽子の少年、仲嶋が呆然とし呟く

だが、それに目もくれず雛像は血塗れの  
手を払った

手に付着している大量の球磨川の血が  
地面に流れる

高校二年生の学生とは思えない光景だった

だが、直後、糸が切れたかのように雛像は  
その場で倒れこんでしまった

電池の切れた玩具のように動かなくなった  
雛像に三人が駆け寄り

「安心してください。眠っているようです」

穏やかな寝息を立てている雛像に、  
春木は安心した息を吐く

「それより、コレはどうするんだよ？」

仲嶋が指差したのは首の無い死体となった球磨川

新しい仲間をいきなり一人失ったという事実  
に三人の思考は着いていけなかった

あれほどのマイナスイ性を持つている彼が、  
こんなにも簡単に死んでいる

少し失望しながらも、彼らは残念そうにする

「とりあえずは放置しておくほうが妥当でしょう。  
下手に弄れば我々が不利になってしまいます」

「ちくしょう、また警備員とかに目を付けられるのかよ……」

面倒臭そうに仲嶋は地面を蹴る

ただでさえ狙われている彼らにとって、風紀委員や警備員にも  
行方を追われるのは非常に面倒なことだった

益々捕まえられる可能性が上がってしまう

そんな思いを持ちながら、誰一人球磨川を  
弔う者は居なかった……

「『ちよつとちよつと』『せめて一秒でもいいから僕が死んだのを  
悲しもうぜ?』」

背後から突然そんな声が聞える

括弧付けた台詞

聞いているだけで憎しみや苛立ち、憎悪を  
抱かせるその声質と口調

「『ま』それは先輩として許してあげよう』」

球磨川雪、そこに彼が現れていた

当然握り潰された頭は綺麗についており、  
血塗れだったこの路地も新品のように綺麗になっている

あの惨劇が一切起こらなかったみたいだった

「馬鹿な！？ なぜお前が生きているんだよ！  
さつき頭を潰されるところを俺たちが見てるんだぞ！」

いきなり生き返っている球磨川に驚きの声を上げる仲嶋

「そういえば仰っていましたね、既に二度も死んでいると…」

先ほどの球磨川の自己紹介をようやく思い出した  
仲嶋は納得したかのように頷く

「……」

二ノ宮は眉を少しビクつかせただけで  
無表情を貫き通している

「『僕の過負荷のお陰さ』  
オールフィクション『大嘘憑きつていつて』  
マイナス『現実を虚構に  
すべて なかったことできる無能力さ』」

「すべてをなかったことにする能力だと！？ そんな出鱈目なもんがあつてたまるかよ！  
大体、どうやってそれを死後に発動させんだよ！ 発動する本人が死んでるのによ！」

「『話の分からない人だなあ』  
『たとえ死だろうが神の  
奇跡だろうが悪魔の病だろうが』  
」

『それが』現実』なら』  
『僕はそれを』なかつたこと』に出来る』  
」

## 二十話 『それが現実なら』（後書き）

今回は骸っちさんのノットキリング無実殺人の登場です

（過負荷の説明コーナー）

ノットキリング  
無実殺人

どんな些細なことでも他人に殺意を感じてしまう過負荷  
それどころか、相手見るなり殺意を抱いてしまっている

そして、肉体精神問わず自分がダメージを受けると、  
その殺意を抱いている相手へ跳ね返す

跳ね返しているので、自分にはダメージは無い

オリジナルより少し変更させてもらいました

最初はただダメージを殺意の抱いている相手へ  
”与える”だけであって”跳ね返す”能力では  
無かったのですが、話の都合上変更させてもらいました

骸っちさん、許可なしに変更してすみません

過負荷の提供、本当にありがとうございました

他のオリキャラの過負荷はあと二つです

オリキャラはこれ以上増えないと思うので  
読者様が考えた過負荷の登場が厳しくなって  
しまいますが、なんとか登場させ続けられるよう  
頑張ります

ちなみに過負荷の募集は既に終了しています



## 二十一話 『僕たちはとつくに終わってる』

「『今から君たち全員にやつてもらいたいことがあるんだ』」

早朝、僕の自室は人で溢れていた

この前加入したほかの四人と元々仲間だった三人、そして僕自身も合わせて八人の人間だ

こんな狭い部屋に大勢の人が居るのは正直暑苦しいんだけど、仕方が無いね

「『君たちは超能力の研究について知っているかい？』」

この学園都市は常に新たな能力を発掘しようと研究を行っている

元々ある能力もさらに奥深く研究して進化させたり、より良く理解できるなど

この学園都市の人間にとっては常識レベルの研究

もちろん、僕の問いに全員が頷いた

「『この研究は新たな超能力を生み出すとても利益な<sup>プラス</sup>なものなんだ』『もしこれが進むと』『超能力者はより厄介になる』」

つまり…

「『僕たちはここを叩く』」

「でも球磨川先輩よお、この学園都市には何百もの研究所があるんだぜ？ それを一つ残らず潰すっていうのか？」

敦ちゃんが不満気に言った

「『勿論そんな非現実的なことはしない』 『超能力者を抹殺するのと同じ方法だ』 『一番大事で大きな研究施設を先に潰す』 『そして後から少しずつ他の研究所を潰そうと思ってる』」

そろそろ僕たちも本格的に活動を始めないといけない

統括理事会、いや、学園都市が過負荷ほくたちの存在を知っているのだとしたら、攻め込まれるのも時間の問題だ

人数も十分集まった

ここからはレベル5との戦いだ

「でも、そんなので間に合うのですか？」

「『問題ないよ』 『あそこの研究は門外不出さ』 『それこそ』 『同じ学園都市の研究所であっても渡さないと思う』 『つまりコピーや複製などをまったくしていないはず』 『大事なデータならかなりの痛手で研究も格段に遅くなるはずだ』」

元々同じ学園都市の研究であっても、やはり成果を公表する人はあまり居ないらしい

特に僕たちが襲撃しようとしている施設はね

あそこの研究は学園都市にとってかなり重要なはず

そこを潰せば多大な痛手になるだろうし

「なるほど、かなり友好的な初手になりますね」

海咲ちゃんも納得したように頭を振る

他の人も理解したみたいだ

「『今回襲撃する施設は二つ』『確か超能力の研究が初めて行われた

二箇所だったはずだ』『その施設のデータを全て削除』『施設自体も破壊だ」

もし研究員を見かけたら再起不能にしておいてもらう

今回は研究に加担してる連中ならレベルを問わない

研究に加担しているっていうことは、

それなりに高位、または知能の高い奴だ

エリートなら、僕たちの敵

これは学校で良い成績を取ってるとかそういう問題じゃない

「『まず一番大きな施設を君たち七人で襲撃してくれ』」

『あの施設は警備も厳重で大掛かりな仕事になりそうだ』

「残りの一個はどうするんだよ？」

「『僕が出る』」

時刻は午後四時半

既にあの七人は施設を襲撃し終えたところだ

もちろん、正確な時間なんて僕は分からないけど

ぶっちゃけると今朝別れた後はまったく連絡を取っていない

指揮は一番冷静な直人ちゃんに任せた

彼はリーダーシップもあって冷静な判断力もあるから  
一番指揮官として適任だと思う

それに全員は納得だったし

ちなみに新しく入った四人を元々居た  
僕以外の三人は意外にも友好的に迎えてくれた

海咲ちゃんも突っかかっていたし、最初の頃の敦ちゃんとはかなり違う

それに何気に敦ちゃんは落ち込んでいたけど

話を戻そうか

既に数時間は経っている

恐らくあの施設は廃墟と化していると  
思うけど、僕の襲撃する施設はまだ無事だ

まあ、僕がまだ突入していないただけど

二箇所を同時に襲撃するのが普通なんだけど  
僕はそんなことはしない

一箇所を襲撃すると自動的に他の施設にも警報が鳴る

それだと一人だけの僕は不利だ

だからしばらく経って、少し落ち着いてきたのを  
またダメ押しで襲うって寸法だ

時間が経ち油断した隙を狙うんだ

「『よし』『じゃあそろそろ行こうか』」

ゆっくりとフェンスに囲まれ立ち入り

禁止になっている研究所へと向かった

フェンスをよじ登り、建物へと入ろうとする

「『カードキー……』」

研究所へ入るためにはカードキー式の  
ロックを解除しないといけなかった

勿論そんなハッキング技術なんて僕には無く、  
打つ手なんて殆ど無い

無闇に過負荷を使うと監視カメラとかに写って  
能力が割れてしまう

鍵の存在をなかったことにする方法も使えない

はあ、誰から盗もうかな？

「そこでなにをやっている！」

鉄の扉をガチャガチャ弄っていると、

その物音を聞いたのか巡回中の警備員に見付かる

襲撃の速報を受けたのか銃で武装している

「『あ』『すみませーん！』『』」

頭を下げて謝罪する

「ここは立ち入り禁止だぞ！ 直ぐに立ち去れ！」

「『いやあ』 『あまりにも立派な研究所だったのでつい』」  
プラス

二本の螺子が警備員のヘルメットを貫き、  
眉間を貫いた

「『滅茶苦茶マイナスにしました』」

今回はできるだけ隠密に済ませたい

だから一切の猶予も与えず、叫び声も上げずに  
警備員は倒れた

まあ、ただ意識を失っているだけだけど

意識を失っている警備員の懷を弄っていると、  
やっとの思いで一枚のカードを見つけた

僕はそれをドアに付いているロック装置に入れる

「『ポチつとな』」

一度は言ってみたい言葉

すると、しばらくしてドアの鍵が外れる音がした

やっと研究所に進入できた…

この建物は意外にも小さい研究所で、

中には数十人しか入れなさそうだった

勤務時間が過ぎているのか、他の過負荷の襲撃を警戒したのか、研究員が見当たらない

そう、研究員は見当たらないんだけど

「誰だ！」

警備員はいーっぱい居るんだよね

「『あはは…』 『すみませんトイレ貸してください』」

「ふざけるな！」

廊下に居た全員の警備員が僕に銃口を向ける

自信のあった嘘だったんだけどなあ

まあ、後ろに螺子が刺さってる警備員が倒れてるんだから説得力なんて殆ど無いんだけど

「『うわつと！』」

咄嗟に僕は物陰に身を隠した

その瞬間、銃弾の嵐が降りかかる

僕の隠れている銃弾が当たるたびに火花が散る



まるでアクション映画のシーンみたいだよ…

少し銃撃に間が出来た瞬間、僕は物陰から文字通り飛び出す

警備員に思いつきり飛び蹴りを喰らわせた

幾ら貧弱体質の僕でも顔面に思いつきり蹴りを入れたため一人の警備員が豪快に地面に倒れこむ

「ぎゃああアアア!!」

その彼の後頭部に巨大な螺子を捻じ込むと、悲鳴を上げて気を失った

他の警備員にはこれが殺されたように見え、さらに激しくなる銃撃  
急いで別の物陰に隠れた

これで一人

残りは後…二人だね

「『ん?』」

すると、足元になにか転がってきた

一見するとジュースの缶のような物体

でも、それは僕の足にコツンと当たると

煙を噴出し始めた

その動作に、僕は激しく舌打ちする

「『ふざけんなよぉー！』」

眩い光が炸裂する

それと同時に、形容できないほどの  
物音が超大音量で放たれる

「『うぉー……』」

それに僕は思わず目が回ってしまい、  
地面に倒れこむ

目を開けてもまったく見えず、なんにも聞えなくなっている

そう、閃光手榴弾だよ

しかも学園都市製の思いつきキツイやつ

海咲ちゃんがくれた学園都市の警務を任されている

武装部隊の装備品の中にそれが載っていたから分かったけど、  
まさかこれほどの威力だったなんて…

幸い触覚は消えていない

「『がアアー！』」

でも、今回はそれが不運だった

その所為で殴られる痛みも感じてしまった

恐らくは投げた直後に突入してきた

警備員たちに殴られたんだと思う

はあ、最悪だ…

「貴様：二人の警備員も殺しやがって！」

警備員は僕を何度も殴る

他所から見れば高校生に暴行を加える職権乱用の警察官だね

徐々に視界と聴覚が戻ってくる

目の前にはヘルメットとゴーグル、防弾チョッキに  
短機関銃を持った警備員が二人

…しょうがないなあ

「「なッ！？」「」

急にこの廊下の明かりが途絶えた

二人が声を揃えて驚愕する

「『これ以上殴られるのは僕も嫌なので』『この廊下を照らす  
電球の残りのエネルギーを「なかったこと」にしました』」

これでもう真っ暗だ

「『こつちだつて能力とか使いたくないのに』  
『序盤からボコボコにするとか止めて欲しいよ』」

他の二人同様、この警備員たちも頭部に螺子を突き刺す

オールマイクシヨン  
大嘘憑きによって意識を『なかったこと』に  
してるから無駄な殺傷はしなずに済むんだ

これって便利なんだけど、不憫でもあるんだよね

目的であつた正面の廊下を再び歩き出す

色々とあつたけど、本来の目的に戻らないと

メインコンピューターに行つてこの  
研究のデータを全て『なかったこと』にすれば終わる  
それか、この研究所自体を破壊すればいいんだけどね

「『げッ……！』」

しばらく廊下を歩くと、再びあの警備員たちが現れる

しかも、三人や四人じゃない

十人ぐらいは居てもおかしくはない

あんなに大勢なんて相手にしてられないよ…

とりあえず他のところへ逃げるべく、僕は来た道を振り返り、逃亡を図ろうとする

でも、その作戦は一瞬でぶち壊された

反対側にも正面とほぼ同じぐらいの数の警備員が行く手を阻んでいた

その光景に僕は笑わざるを得なかった

やっぱり理不尽だ…

ここは穩便に済ませたかったけど、もう強硬手段しかないね

こうして思考してる間にも、警備員たちはジリジリと間合いを詰めている

…無理だあ！

こんな大人数は無理だ！

諦めかけた時、僕の目に一つの物が飛び込んできた

それは、堅くて頑丈そうな扉

分厚さは軽く五センチは超えて居そうなくらい頑丈なその扉が、何故か開いていた

しかも、パスワードロック付きだから  
出勤した警備員でも開けられない

…ラッキー！

過負荷にも運は向いてくれるんだ！

咄嗟に僕はその部屋に飛び込み、ドアを堅く閉じた

閉じた途端、鍵の掛かる音がして僕は一安心する

幾ら警備員でもこんなに分厚い

ドアは壊せない…よね？

実際のところ学園都市の技術がどれほどのものか  
まだ分からないから自信が無い

超特大威力の爆弾を持ってこられても不思議じゃない

「結局はまだ安心できないって訳よ」

背後から声が聞える

後ろを振り向くと、そこには一人の人物が立っていた

外国人なのか、金髪に碧眼というイギリス人っぽい

見た目の所為で日本語で喋ってきた事実には僕は少し驚いた

っと、そんなことを考えるんじゃないくて

「『うわあ』『実際に金髪とかつて居るんだね』『いやまさかそんなRPGのキャラクターみたいな見た目の子が実際に居るとは全然思わなかったよ』『でも』『落ち込まないでも良いよ?』『それも君の個性なんだから!』『』」

「くッ…！ 結局は地味に傷付くことを言ってるじゃない！」

「『別に傷付くことは無いぜ?』『だってそれは君の立派な個性なんだから』『無理せず自分らしさを誇りに思おう!』『君は君のままで良いんだから!』『』」

「良い台詞みたいなこと言ってるけど結局はこつちが余計に傷付く台詞ってわけよ！」

素直に僕は自分の気持ちを言うと、その女の子は怒りながら言い返してきた

感想を述べただけなのになんで怒られるんだろう？

「『それより君だれ?』『』」

「自分を殺そうとした相手も覚えてないわけ？  
結局はただの馬鹿って訳じゃない…」

僕を殺そうとした…

多すぎて分からないなあ

…あ

僕はポン、と手を叩いた

この子、あの四人組の一人だ

確か僕に爆弾とか投げつけてきて他の三人と比べてあまり目立たなかった可哀想な人だと記憶してる

「『ああ、あの連中の一人か』 『ってことは…』」

「麦野たちも此処に来てるわよ」

あの四人組がまた…最悪だ

しかもその麦野さんに僕はかなり恨まれているからね  
今頃僕を殺そうとこっちに向かっているはずだ

「『はあ』 『一度倒した敵と再会とか』 『そういう展開は週間少年ジャンプの中だけにしたいよ』」

「安心して。結局は此処に居るのは  
球磨川と私だけなんだから」

つまりねえ

「球磨川、結局アンタはここで終わりってわけよ!」  
手榴弾を取り出しながらそう言った



彼女が言うには、他の三人は樂觀するだけで

実際には来ず、この金髪さんだけしか相手しないらしい

ここの研究所に警備の依頼をされて、

到着してしばらくすると僕が侵入してきた

つまり、恨みを晴らすのに絶好のチャンスらしい

麦野さんが居ない分マシかな？

あのレーザーみたいなので殺されるよりはご免だからね

でも、この人は僕が殺せる気で居るし、  
しかもやる気満々だし

流石に僕もここまで言められちゃ、少し  
イライラするかなあ、なんて

「『僕がここで終わる？』『あはは』『面白いことを言うね』

『僕らマイナスはとづくに終わってゐるんだよ』」

二十一話 『僕たちはとくに終わってる』（後書き）

アイテムの再登場

理由に関しては、次話で

ちなみにフレンダの口調は超適当です、すみません

二十二話 『それでは皆さんご唱和ください!』 (前書き)

現時点では『僕は悪くない』に次ぎ一番書きたかった回です

出来の良さと悪さを問わず、かなりやりたかった展開です

二十二話 『それでは皆さん、唱和ください！』

「『ワオ！』」

迫り来る爆撃を避けながら感心した声を上げる

野球のボールのように手榴弾が何個も投げられてきて  
手前や直ぐ真横で爆発していたりする

それを必死に全力疾走で避けてる

爆弾を何個も投げつけられるのは中々できる体験じゃないよ

まあ、そんな体験なんてしたくないけど

「どうしたの球磨川？ 結局はこんなに弱かったってわけ？」

直撃すれば腕が一本ぐらいいは持つていかれそうな  
までの威力の爆弾をずっと避け続ける僕の身にもなってくれよ…

「『油断大敵って言葉知ってるかい？』」

丁度手榴弾が切れた頃に螺子を投げつける

一直線にそれは彼女の頭を貫こうと  
放たれるが、何もない空間を通り過ぎる

「『ぐッ！？』」

目の前まで迫って来ていた彼女は  
一直線に腹へ食い込んだ

数メートル飛ばされると、地面に引き摺られながら倒れる

「『肉弾戦は苦手なんだけどね…』」

汚れた服を払いながらそう呟く

実際に僕って体力とかはあまり無いから  
肉弾戦はまったく向いていない

運動神経だって最低レベルだし

それに比べてあっちは学園都市の暗部組織

人は両手じゃ納まらないくらい殺してる

そんな実戦経験豊富な人たちになんか敵うはずがない

普通に戦えばそうなってしまう

「なッ！？」

でも生憎と僕は普通に戦うつもりなんてまったく無い

彼女が優勢で戦うつもりなら、僕は  
マイナス  
劣勢で戦ってあげるよ

部屋の反対側まで逃げていた僕は、一瞬にして彼女の真正面に立っていた

あの距離からはどれだけ早くても一瞬で近付くのは無理

でも、過負荷にそんな常識なんて通用しないさ

「くッ……！」

辛うじて突き刺そうとした螺子を避けていた

だが急に動いた所為か、バランスを崩し倒れこんでしまう

「『あは！』『驚いた？』『いやあ今まで試したことないから分からなかったんだけど』『まさか本当に出来るとはね』」

「なんなのよ！ 結局アンタの能力は何なの！？」

納得できないようで怒りながら僕から距離を取る

はあ、この前説明したはずなのになあ……

「『僕すべての能力は現実なかったことを虚構にすることだ』『つまりさっき僕は一歩も動いていない』」

『君との間にある距離を「なかったこと」にした』」

距離がなかったことにされるなら、僕は必然的に彼女の直ぐ真正面に来ることになる

でも、これはかなり扱いが難しいんだ

勢い余って攻撃が逸れてしまえば大きな隙は出来てしまうし、なにより肉弾戦の苦手な僕には自分から相手に近付くのは出来るだけ避けたい

「なんて出鱈目な能力なのよ…」

「『そこそが過<sup>マイナス</sup>負荷さ』」

常識に囚われているようじゃ過負荷を相手にすることなんて出来ないぜ？

「ッ！？ 次から次へと何よ！？」

一難去つてまた一難

今度はこの部屋を明るく照らしていた電球が一つ残らず消えた

窓も無いこの部屋は明かりの源を失い、漆黒の闇に包まれる

僕も彼女も、周りが一切見えない状況になった

「『この部屋の電球のエネルギーもついでに』なかったこと」にしました』」

「結局それじゃあアンタも見えないって訳よ！ それなら  
広範囲に攻撃できる私の方が有利！」

なにかを取り出す音が聞える

爆弾か手榴弾を取り出したんだろう

彼女は何故こうも爆発物に頼るんだろう？

おそらく彼女はレベルの高く戦闘能力のある  
超能力者だ、そんな彼女は超能力を一度も使っていない

使っているのは爆弾や手榴弾といった武器だけ

今時珍しい”自分の力で戦いたい”人かな？

爆弾を着火させようとしているのか  
一本のマッチが炎を灯している

「『甘えよ』」

だが、その炎は一瞬で途絶えてしまった

「そ、そんな！？ 何でマッチが…」

「『炎は辺りに酸素が無いと直ぐに途絶えてしまう』 『なら消す  
のは簡単さ』」

『そのマッチの周りの酸素だけを「なかったこと」にすれば済む話  
だしね』」



珍しく僕は頭を使った

でも後味悪いなあ…

やっぱり慣れないことはするものじゃないね

「そんな…マッチは使えない…手榴弾も全部使い切ったし…」

”摘み”状態だね

武器を失った彼女は反撃の手段なんて無い

それに対して僕は螺子がある

武器の有無の差はかなり大きい

「『あれ?』」

すると、突然この部屋が再び明るくなった

僕が電球を消す前と同じぐらいまで明るくなっている

電球のエネルギーは僕が消したはずだ

電気は点くはずが無い

となると…

「『麦野さんが何かしたみたいだね』」

おそらくこの部屋のシステムをハッキングして強引に緊急用の電気を作動させたんだろう

レベル5はその能力の強さ以前に、知能の高さも特徴的だ

演算が高いとはつまりそれだけ高いって意味

序列が高いほど演算能力が高くなっていて、第一位の一方通行の知能はスーパーコンピューター並みだと聞いている

それほどの演算力があれば、この部屋をハッキングするなんて容易に出来るはずだ

「ぐフツ!?」

しばらくそう思考していると、突然顔面を殴られる

突然の攻撃に思わず地面に倒れこんでしまう

「結局アンタは馬鹿以上に間抜けって訳よ。爆弾が無くなったからって戦えなくなったわけじゃないしね!」

さらにその上に彼女が座り、何度も殴ってくる

パンチの連打を顔面に喰らい続け、  
口から血が大量に流れている

鼻の骨も折れたのか血が流れ出ている

「元々素手でもそれなりに戦えたしね！」

それでもなお収まらないパンチの連打

段々と気が遠くなってくる

「甘えよ」？ それはこっちの、台詞よ！」

重い一撃を最後に、僕の意識は完全に途絶えた

~~~~~

「へえ、フレンジも結構やるじゃない」

球磨川とフレンジの戦闘を監視カメラから  
眺めていた麦野は感心したように呟く

裏での研究に加担していたこの研究所を護るため、彼女等

”アイテム”は派遣されたのだが、それが彼女にとって吉と出た

自分が堪らなく恨んでいる球磨川がこの施設に侵入してきたのだ

球磨川を見つけたことにより復讐の意思が再び燃え上がり始めた

直ぐに絹旗とフレンドをそれぞれ研究所の  
一室で待機させた

麦野も一応は部屋で待ち伏せしていたが運悪く  
球磨川はフレンドの部屋へと入っていく

落胆こそしたものの、フレンドが負けるはずが無いと思った  
麦野はそのまま交戦を許可した

結果は予想外のもの

フレンドは球磨川に対し圧勝を納めていた

まるで相手にならなかった球磨川に、麦野は少し落胆する

溜め息を吐きながら、連絡を入れる

「フレンド、お疲れ様」

《あ、麦野。そんなに疲れてないわよ。結構弱かったし》

「こっちも見てた、かなりガツカリだったけど、  
まあとりあえずはオッケーよ。直ぐに戻って」

《了解、と》

電話を切るフレンド

監視カメラにもう一度麦野は目をやると、そこには  
部屋を出て行こうとするフレンドの姿があった

ドアの前まで行くと、フレンドは不自然な表情をする

まるで、なにかに困惑しているような表情

だが、次の瞬間、思いもしなかった光景が麦野の目に飛び込んできた

「なッ!？」

スクリーン越しで麦野は驚愕の声を上げる

だがその瞬間、監視カメラの映像も途絶えた

時は少し戻り…

「ふう、結局は手間の掛かる奴だったって訳よ」

気を失った球磨川を見詰めながらフレンドはそんな声を漏らす

未だに球磨川は生きていた

だが、ターゲットの生還を暗部の人間が許すはずも無く、  
着々とフレンドはある物の準備を進めていた

「本当はこれは使いたくなかったんだけど…こいつ相手にはこれが

「一番よね？」

組み立てたのは一つのブレスレット

だが、着飾りのためにつけるものではなく、

そのブレスレットはとて太く四角い物体が装着されてある

そのブレスレットを球磨川に嵌めると、外れないように装着させ、開けるための鍵をきっちりと閉める

そう、その装置は爆弾だった

学園都市製のその爆弾は、その小さな外見からは考えられないほどの威力を誇っていた

少なくとも、この研究所を吹き飛ばすまでのレベル

元々アイテムはこの研究所を護る気などまったくなかった

ただ依頼されたから引き受けただけであって、

実際は近日に襲撃し壊滅させるはずだった

それに都合よく球磨川が襲撃し、壊滅させるついでに

球磨川も殺そうとしている

その目的を終え、研究所諸共球磨川を爆破させようとしている

「さて、帰ろつと」

装置を発動させ、直ちに逃げるため急いで部屋から出ようとする

麦野たちには作戦前に既に連絡が行っており、  
今頃逃げているはずだろう

そう考えると、ドアを開けようとドアノブに手を掛ける

「あれ？」

だが、そこで違和感を感じた

まるで、そこにあるべき物が無いような

「ど、ドアノブが無い！？」

部屋の分厚い扉を開けるはずのドアノブが、  
その部分だけ綺麗に消えていた

切除された後などまったく無く、まるで  
予めそこに『なかった』かのように

「え？」

そして、そんなフレنداに覆いかぶさるように  
真後ろに影が現れた

なんの前触れも無く現れたその影に、恐る恐る後ろを振り向くフレ  
ンダ

その刹那

「がアツ!？」

巨大な螺子が突き刺さる

「『ハロー!』『僕を倒したつもりかい?』」

フレンド諸共自分の腹を螺子で貫き、抜けないように壁へ固定しているのは、先ほど倒れていたはずの球磨川雪

「な…なんでアンタが…」

「『僕が気を失ったかと思ったかい?』『何度も言うけど甘いねえ』」

『あの程度じゃ眠気も払えないさ』『まあそれは冗談だけど』」

気軽に話す球磨川だが、フレンドと同じく自身の腹部には巨大な螺子が刺さっていて内臓も幾つか貫いているはずだった

血反吐も口から大量に吐いているが、それを痛む様子もなかった

「なにを…するつもりよ?」

「『君分らないのか?』『なら見せてあげるよ』」

球磨川は自身の左腕を掲げた

そこに記されているのは、”残り10秒と表示された球磨川に装着されている爆弾

「ッ…!」



それに言葉を詰まらせるフレンダ

「どういっつもりよ…！ アンタも死ぬつもり…？」

「『死なば諸共ってことさ』『ついでにこの分厚い扉を開けるドアノブをなかったことにしました』」

『つまり時間内に爆弾から逃げる術はありません』」

その絶望的な現実を突きつけられ、顔を真っ青に染めるフレンダ

「『これにてこの戦闘！』『相打ち以外の結末が無くなりました！』」

『あ』『それでは皆さんご唱和ください！』」

「く、球磨川アアアアアア！！！！！！！！！！」

怒りの雄叫びを上げるが、それも虚しく爆発のカウンターは0を示した

「『It's All Fiction!』」

巨大な爆発が、辺りを包み込んだ

## 二十三話 『初めてだよ』

「嘘…だろ…？」

レベル5第四位、原子崩しこと麦野沈利は啞然としていた  
目の前には変わり果てた研究所の残骸

いや、もはや研究所と判別できるかすら怪しかった

建物など爆弾によって跡形も無く消し飛んでおり  
最早瓦礫の山と化しているそれには、所々警備員の死体が倒れている  
おそらく爆発に巻き込まれたのだろう

そんな悲惨な光景に、麦野はただただ呆然とするだけだった

「大丈夫ですか、麦野？」

目の前で背を向け立ち塞がるように立っている  
のは同じ”アイテム”の絹旗最愛

自身の能力、室素装甲により爆発から護っていた

そんな絹旗の問い掛けに、麦野は答えない

「『うひゃあ…』『あの外人さんも派手なことやるね』」

この場に似合わないような朗らかな声が響く

まるで子供のように、悪意すら感じさせないような

その声質と共に瓦礫の下から這い出てきたのは、球磨川雪

埋もれていた所為か埃だらけになってしている制服を  
パンパンと払うと、笑顔で二人を迎えた

「『幾ら僕が相手でもこんなにやるかよ？』」

乾いた笑い声を発する球磨川

「てめえ……！」

それを見て、怒りを露にしながら演算を開始する麦野

「『おいおい何をそんなに怒っているんだい？』『僕は

ただ彼女が襲ってきたから戦った訳で』『完全なる正当防衛なんだ』

『それに爆弾なんていう無差別な武器を使ったのはあの外人さんだ  
し』」

『僕は悪くない』」

「ク、クソがアアア!!!」

利かないとは分かっていても、原子崩しを  
球磨川に放つ麦野

自分の同僚であるフレンドが殺された

こんな男により、殺されていた

彼は罪悪感も、責任感も、かと言って  
悪意も感じていない

つまり、球磨川にとってフレンドはどうでもいい存在だった

そんなことを麦野は許せなかった

「『うわぁ殺気とかマジカンベンしてよね』『僕って弱虫だから  
そういうの向けられると凄く怖がっちゃうんだよ』」

やはり、それは球磨川に届く前に消されてしまう

演算を『なかったこと』にされる限り、  
この男に超能力はまったく利かなかった

それに加え、笑みを浮かべながらそう告げる球磨川に  
説得力など皆無であり、麦野の怒りを増幅させるのを助長していた

「ふざけやがって！ ぶっ殺す！」

「『これは一応先輩からの助言だけど』『女の子が

そんな乱暴な言葉使いをしちゃいけないぜ?」

超能力での戦闘を捨て、真っ直ぐと球磨川に走る麦野

元々フレンダでも倒せたほど球磨川は身体能力が低い

それに加え、戦闘のセンスも接近戦では

まったく言っていないほど無い

その点を考慮し、麦野はあえて肉弾戦に持ち込もうとしていた

「ぐ…! あアアア!!!」

だが、球磨川に近付く前に麦野の足には  
螺子が突き刺さっている

それにより、地面に倒れてしまう

あと数十センチという距離まで近付いたにも  
関わらず、その場を動けない

「『レベル5と言っても無様なものだね』『能力が  
使えなかったらこんなにも相手にならないなん』」

途端、球磨川の体が吹き飛んだ

隙を伺っていた絹旗が飛び上がり、球磨川の  
後頭部に蹴りを放っていた

室素装甲によって室素で攻撃したため、威力は格段に上がっている

攻撃の手を休めず絹旗は転がっている球磨川に追い討ちをかける

腹部にも蹴りを放ち、瓦礫の山に衝突した球磨川

なんとか立ち上がり螺子を振り回したが、それは宙を空振りするだけであって、戦闘慣れしている絹旗には当たっていない

「いい加減に死んでください！」

真っ直ぐ顔面を捉えたその拳は、吸い込まれるように頬へ食い込む

「『痛い…』」

今日何度吹き飛ばされたかは本人も分かっていないが、それでも笑顔を崩さず立ち上がる

血を流し、目も片方は最早半開きになっているのにも関わらず、笑顔を保っている球磨川を絹旗は気持ち悪く思っていた

たった一言そう告げると、口を閉じた

「『痛いなあ…』」 『本当に痛いよ』」 『こんな痛みを感じて意識を保っていられる人間なんて』」 『そうは居ないと思うんだ』」 『そう思わないかい？』」

賛同を求める球磨川を悉く無視する

今は目の前の彼を倒すことだけを考え、  
麦野の回復までなんとか粘らせたかった

「『実は僕』 君たちの中に過<sup>ほくた</sup>負<sup>おな</sup>荷<sup>じ</sup>と同類の子が居ないかなあ  
『って期待していたんだけど』 期待はずれだったよ」

そんなことを告げる球磨川に、絹旗は首を傾げた

自分たちの中に過負荷が居なかった事実になからず喜びを抱いた絹旗だが、それでもその発言の意味を理解できない

「どついう意味ですか？」

「『はあ…』 分かっていないなあ」 君たちは  
それが格好良いとか思ってるかもしれないけど」

『君たち全員全然笑わないんだよ！』 『まるで人形みたいだ！』

あっけらかんにそう告げる球磨川

” 笑わない”

それがどう過負荷と関係があるのか、まったく  
想像もしていなかった

” 笑い” という幸せを感じさせる言葉など、  
不幸とはまさに正反対、縁遠い言葉だと思っていた

「笑う、ですか。それこそ貴方たちに超似合わないでしょう？」



「『分かっていないなあ』『笑顔こそ過負荷の象徴だぜ?』  
『例えどんな時でも醜く笑う』『それが過負荷マイナスさ』」

徐々に球磨川の傷口が塞がっていく

破れて血まみれになっていた服も段々と綺麗になっていく

「『そんなことも分からないんじゃない』『君たちは過負荷なんかじゃない』」

無傷の状態に戻る球磨川

今までの絹旗の努力を、攻撃を、労力を

その全てを否定し、台無しにするかのような無能力

「『僕の大嘘オルフィクション憑きの前じゃ』『努力なんていうプラスなんか  
なんの輝きにも光にもならないんだよ』」

最早絹旗の表情に勝利を狙う目はなかった

勝機を捨て、投げ出している

「『とりあえず君は置いといて』」

そんな絹旗に情けをかけるかの如く、球磨川は  
素通りすると、倒れている麦野の正面に立つ

「『僕の目標は一応レベル5の連中を殺すことだから』  
『君は流石に放っておけないね』」

懐から螺子を取り出しながら、そう言う

その螺子は今まで球磨川が使っていたプラス螺子とは打って変わって、マイナス螺子だった

その螺子を取り出すと徐々に長さが伸びていき、やがて等身大になる

「『レベル5にはこれを使って殺すことを決めてるんだよ』  
『無能力者の気持ちを味わせるためにね』」

「無能力者の気持ちを…だと…？」

そう訊き返す麦野

「『君たち超能力者はいつもレベル0を差別してきた』

『僕はそんな人たちのずっとやりたかったことを自らが

やってあげているんじゃないか』『無能力者の気持ちを感じる…！』

」

その螺子を振り上げる球磨川

しかし

「やめろ！」

「『ガフッ！？』」

それは一つの拳によって遮られた

突然現れたその拳は真っ直ぐ球磨川の頬を捉え、  
全力で打ち抜いた

突然の攻撃に少し驚愕しながらも、球磨川は体制を立て直した

「『次から次へとなんだよ…？』『なんで僕だけこんな目に…』」

「えらく大層なこと言ってるじゃないか…！ いったい  
なにをやってるんだよ、球磨川先輩！」

彼の目の前に立ち塞がっているのは、  
ツンツン頭の高校生

敵意を込めた瞳に、球磨川は少なからず落ち込む

「『…久しぶりだね』『上条ちゃん』」

イマジンブレイカー  
幻想殺し、上条当麻

レベル0でありながら、あの球磨川を  
人助けするのに説得した人物

「近くで大きな音がしたと思ったら…何やってんだよ！  
球磨川先輩、これはアンタがやったのか？」

「『やったのって』『何を？』」

「この研究所を滅茶苦茶にしたのか訊いてるんだよ！」

再び上条の拳は球磨川を捉え、それにより

よろめいてしまっ

「『違っよ上条ちゃん』『この研究所を爆破したのはあそこで倒れてる

彼女の仲間で』『その所為で警備員が死んだんだ』『僕にも襲い掛かって

きたから正当防衛で反撃した』『つまり僕は悪くない』」

「ふざけるんじゃない！」

右腕を振り上げると、何度も球磨川を殴る

打っては胸ぐらを掴み、引き戻せば打つ

その繰り返しだった

「お前は一体…何人殺したと…思ってるんだよ！」

「『数なんか…』『数えちゃいないさ…』」

やって手を離す上条

打撲を何度も受け、球磨川は軽い脳震盪を起こしていた

「『無駄だよ上条ちゃん』『僕の大嘘憑オールフィクションきじゃそんなことをしても無駄だって…』」

再び傷を『なかったこと』にしようとするが、  
球磨川は異様な違和感を感じた

「『…傷を「なかったこと」に出来ない!?!』」

初めて驚愕の表情を浮かべる球磨川

「どうだ、痛みを消せねえ気分は？ 痛いだろ？ それが…」

啞然とする球磨川に上条は真っ直ぐ走っていく

「お前の傷つけた人の痛みだ！」

「『グフツ!?!』」

顎を突き上げるように殴られた球磨川の身体は、  
宙へと舞う

そして、ドサッと地面に倒れた

「はあ…はあ…」

凄まじいテンポで攻撃を繰り返した上条は、  
疲労によりそのまま地面に座り込んだ

「『…凄いね上条ちゃん』『うん』『君の  
攻撃は確かに僕に届いたぜ』」

起き上がる球磨川

「ッ…!」

彼は、涙を流していた

高校三年生には似合わないほど、涙を流す球磨川

そんな奇妙な光景に、上条は  
言葉を詰まらせた

「『僕をここまで真面目に叱ってくれたのは君が初めてだった』  
『いつも僕を恐れて逃げるばかりだったのに』『君だけは違った』  
『うん』『思い知らされたよ!』『やっぱり悪さはいけないね!』

『だから君を巻き込まないように』『僕は自分のイライラを  
何の関係も無い通行人Aに全部ぶつけようと思います』」

「なッ!？」

予想外の返事に驚愕する上条

「『なに驚いているんだい?』『ま』『僕も傷を』なかったこと  
に

出来ないから結構驚いちゃったけど』『やっぱり君にもなにか不思議な

力があつたんだね』『だからもう君とは戦わない』」

「ふざけるな! 逃げるのかよ!」

「『だから僕は君と戦いたくないんだよ』『君が言ってくれたじゃないか』」

「『その痛みこそが他人の感じた痛みだ』って』『ならそれを教訓に』『今度は

痛みも感じさせないぐらい一瞬で片付けようと思います』」

マイナス螺子を仕舞い、再びプラス螺子を両手で取り出す球磨川

その顔からは涙は消え、貼り付けたような笑顔が支配している

この場を去るように球磨川は歩き出した

「『それじゃあ上条ちゃん』『またね』『レベル5の御坂さん

にもよろしく言つといてよ』『』』いつか過負荷が来るぞー』』って』『』」

背を向けながら手を振る球磨川

それをただ上条は哑然と見詰めているだけだった

「『んじゃ』『また明日とか!』『』」

そう言い残すと、球磨川の姿は見えなくなった

あとに残された上条

「ッ! そういえばアイツ等は!」

倒れていた女たちを思い出し、

上条は慌てて辺りを見回した

だが、そこには誰の姿もなかった

おそらく球磨川とのやり取りの最中に逃げたのだろう

一人取り残された上条は、しばらく思考する

「マイナス過負荷…か」

活動がより活発になり始めた過負荷勢力

上条はそれを危険視し始めた

このままじゃ学園都市は滅茶苦茶にされる、と悟る

拳を握り締め、決意を固めたかのように表情を強める

「エリートを殺す…ならその幻想をぶっ殺してやるよ！」

この日、上条当麻は過負荷との全面对決を決意した



二十三話 『初めてだよ』（後書き）

妹達に加えさらに過負荷の事件への介入を決意してしまった上条さん

忙しい人ですね（苦笑）

ちなみにアイテムのご一行は本文で書いた  
ように主人公とのやり取りの最中撤退しました

裏設定ではこの騒ぎでまだ登場していない  
滝壺が二人を連れて行ったってことにしています

絹旗はまだ動けるので、二人係で麦野を運んだということにしています

今話から原作への介入が増えると思います

二十四話 『台無しにしてやるよ』 (前書き)

あまり進展なし

というよりつまらないかもしれません

戦闘なしなのも理由だと思いますが

## 二十四話 『台無しにしてやるよ』

「『シスターズ  
妹達、ねえ……』」

僕は今、ある人物を探しに学園都市中を彷徨っている

研究所の破壊こそ出来たものの、レベル5を殺せる絶好のチャンスを見失ってしまった先日

目的は一応果たしたけど、総合的には負けだ

敵組織の構成員を一人殺せたのはまだ良い

でも、肝心の幹部っぽい人々を取り逃がしてしまった

あのビームみたいなのを撃ってくる人はどうにでもなるけど、馬鹿力の子を取り逃がしたのは少し痛手だった

彼女も再起不能に出来ていればこの先さらに戦いは楽になっていたはずだ

麦野さんの仲間ならおそらく僕の邪魔をしてくる

厄介な人は真つ先に始末しておくべきだったよ……

ま、過去を悔やんでも仕方無い

プラスみたいに言うんなら、僕たちは未来を見て、

過去なんか気にしちゃいけないんだ！

とまあふざけるのはそこまでにして

僕は現在、新しく入った情報を調べている

衝撃的な情報

”絶対能力進化実験”

それがその名前だ

内容はこれはまたまた馬鹿げたもの

”学園都市レベル5序列第一位、アクセラレータ一方通行による  
同じくレベル5第三位、御坂美琴のクローンを二万人  
虐殺し、新たにレベル6へと進化させる”という実験

何とも馬鹿げた実験だよ

RPGで言うんなら雑魚初級モンスターを永遠と倒し続ける、  
途中で投げ出しそうなくらい退屈なことだ

まず、春木くんのハッキングによると出来上がった御坂さんの  
クローンはレベル5どころかレベル3程度の能力しかないらしい

この程度じゃあ学園都市最強である一方通行は倒せないよ

しかも、さらに情報を進めると、一方通行の能力が判明した

”ありとあらゆる『ベクトル』を操作する能力”

それが彼の『アクセラレータ一方通行』の正体だよ

ベクトルっていうのは向き

大抵の存在には向きがあり、力の働くためには  
その”向き”というのがあるんだ

その”ベクトル”を操作する一方通行に普通の攻撃は一切通用しない

僕みたいに接触している間に能力を『なかったこと』に  
しなきゃ攻撃はまず通用しない

たとえ核弾頭であろうと一方通行には傷一つ負わせることなんて出  
来ないんだ

そんな異常者にレベル3程度が勝てると思うか？

答えは否、だ

たとえ何人集まろうが、どんな作戦を練ろうが、  
どんな兵器を使用しようが、一方通行には勝てない

それはつまり、彼に無料で経験値を与えているのに等しいんだ

彼がレベル6に到達するまでに殺害する必要のある

クローン、通称”シスターズ妹達”の人数は二万人

既に一方通行は一万人以上の妹達を殺害している

あと半分、か

それだけの時間があれば十分だ

レベル6なんて堪ったもんじゃない

なら、僕たちがその実験をゼーんぶ台無しマイナスにしてあげるさ

現在は過負荷全員が学園都市各地に散開して妹達の  
搜索にあたっている

誰でも良い、一人でも見つけ出して実験へ不参加に  
させれば演算式に誤差が生じる

それでも止めるまでには行かないけど、そこで  
僕たちが来る

実験に協力して、何もかも駄目マイナスにすれば実験もクソも無い

それでも一方通行本人は殺せない

現在は彼を殺すのは僕たちでは不可能だ

あの時攻撃が通ったのは彼が僕に触れていたからだ

触れている間は常時使用型の彼の超能力を  
『なかったこと』に出来る、つまり攻撃が通る

でも、彼はそんなヘマを何度もするわけが無い

だから何か彼を倒す作戦を考えないと、今後殺すのは不可能だ

今のところ一方通行が一番最後に殺して、最初に

他のレベル5を全員殺すと決定しているんだ

その間にじっくりと対策を練れば良いだけさ

「『あれは…』『上条ちゃん？』」

しばらく歩いていると、僕はツンツン頭の高校生、

上条ちゃんを発見した

今は彼じゃないんだけど…

でも、彼の隣の人物が僕の注意を引き付けた

茶色い短髪に常盤台の制服、そしてそれに

ミスマッチな軍用ゴーグル

そして、以前見たのとまったく同じの無機質で無感情な目

あれは完全に御坂美琴さんのクローン、妹達の一人だった

すぐさま接触したいんだけど、運悪く彼女は

上条ちゃんと行動を共にしている

これじゃあ上条ちゃんが邪魔して接近できない

一度はあの女の子を助けたけど、今彼は僕の

ことを警戒し、敵として見ている

そんな風に思われてるのに堂々と近付くのは馬鹿のすることだ

「『ね、猫？』」

そんな上条ちゃんが抱いているのは、一匹の黒猫

黒猫と言えばアメリカでは不幸の象徴であり、イギリスでは逆に幸福の象徴でもある

黒猫が前を通り過ぎると何か不吉な出来事の前兆といわれ、結構可哀想な境遇なのである

こつこつ豆知識も意外と習うのは楽しい

遠くで話している二人は仲が良さそうだ

あの御坂さん…紛らわしいから  
御坂妹さんと呼ぶけど

とにかく、感情の無いはずのあのクローンは笑っている

とても楽しそうに、幸せそうに笑っている

元々感情の無いクローンに感情を芽生えさせるなんて、上条ちゃんはやっぱりある意味凄い子だ

そのまま二人は一つの本屋へと立ち止まる



何かを買いに行こうとしているのか、上条ちゃんは御坂妹さんに猫を渡し、本屋へと入っていった

待っている御坂妹さんはそのまま猫を愛でるように撫でている

「『あ…』」

僕はそんな御坂さんの後ろに立っている存在に、思わず声を漏らしてしまった

周りを歩いている人はおかしい目で僕を見ている

御坂妹さんも気付いたのか、猫を下ろし  
ゆっくりと後ろを振り向く

狂気染みた笑みを浮かべながら立っているのは、白髪の青年

実験の対象である学園都市最強、アクセラレータ一方通行だった

二人は一言ほど言葉を交わすと、別の方向へ歩き出した

僕はすぐさまその二人のあとを追う

なるべく気付かれないように、できるだけ遠くから観察している

見付ければ元も子もない

一方通行は僕に対してかなり大きな逆恨みを  
していて、正直見付かったら殺されると思う

はあ、何とも行動し憎い環境だね

二人は人気の少ない路地裏へと入った

「…い…始め…か？」

少しだけあの二人の会話が聞えてきた

「ではこれより、第10031次絶対能力進化実験を開始します。  
一方通行は指定された位置へと移動してください」

無機質な声で言うそれは、実験開始の合図

そう宣言した瞬間

「そうかよオ。なら、行くぜ三下ア！　せめて少し  
だけでも俺を楽しませてくれよオ！」

一方通行は相変わらず凄まじい速さで接近した

それに応戦するべく御坂妹さんは銃を取り出し、  
撃ち始める

だが、一方通行にとってそれは玩具のようなもの

通用するはずが無く、御坂妹さんは吹き飛ばされてしまった

路地裏の奥の辺りまで戦闘が広がってしまったため、  
彼らの姿は見えなくなってしまった

この後銃撃が数回鳴るが、しばらくするとそれも聞えなくなる

そして、最後に”グシャ”という生々しい音、

そして何かが飛び散るような音が聞えると完全に静かになる

急いで僕は路地裏の入り口から離れる

そこから出で来たのは戦鬪を繰り広げた後とは

考えられないほど無傷かつ埃一つ付いていない状態の一方通行だった

予想通り、今回の実験は10031号の殺害という結果に終わった

「『ここからが僕の仕事だ』」

一方通行が帰ったのを確認すると、僕はすぐさま

あの路地裏へと侵入した

壁には所々削れた痕や銃の破片などが落ちている

そして、奥からは大量の血痕

その血痕の元へと歩くと、地面に横たわっているのは

血塗れになっている御坂妹さん

大量の血で覆われている彼女は、文字通り惨殺されていた

何をどうすればこうなるのかは分からない、でも

一方通行はその能力を使ってまた一步、レベル6へ近付いた

「『そんな事を僕がさせるわけが無いだろ?』」

僕は彼女の死体の顔に手を覆い被せた

そして、それをそーっと引かせた

引かせた瞬間、他所から見れば  
衝撃的な光景が広がっている

御坂妹さんの周りに飛び散っていたはずの  
血痕は全て消えている

大量に流れ出ていて血の海となっていたこの場は  
元通りにされ、銃弾によって破壊された壁も修復されている

肝心の御坂妹さんは無傷で倒れている

無残に惨殺されていたその身体はまるで  
何事も『なかった』かのように綺麗で、呼吸もしている

死亡していたはずの彼女はただ気を失っているという程度になっ  
ている

穴の空いていた制服も新品のように綺麗になっており、  
一方的な虐殺を受けた後とは到底思えない

そんな状態にまでなった彼女を、僕は満足気に見詰める

何故僕が彼女を生き返らせたかというと、

それはやっぱりこの実験の邪魔だよ

もし殺したはずの10031号が生きていたらどうする？

研究を担当している連中は大騒ぎさ

一方通行が態と生かしたと勘違いし、実験をする気じゃないと決め付ける

そして、扱いも悪くなるし一方通行のモチベーションも下がる

とても小さなことだけど、この実験を潰すのにあたってはどんなことでも重要だよ

それに、この御坂妹さんは実験のことをもっと詳しく知っているはず

救うメリットは十分あるはずだ

「何をやっているのですか、とミサカは同僚を連れ去ろうとする変態のような行動を起こしている貴方に問いたします」

僕を危ない人のように言うのはカンベンしてくれよ

後ろを振り向くと、やはりそこに立っているのはその他数十人の御坂妹さんたち

クローンがこんなに多く居ると少し気持ち悪いね

「『何って』『死んでたから生き返らせただけじゃないか』」

「10031号の生存はこの実験にあつてはならない結果です、とミサカは少し心を痛めながらも同僚の返却を求めます」

心、ねえ

君達に”心”なんて呼べるものはあるのかよ？

まあ僕も人のことは言えないけど

「『やだよ』『これは僕の大事な情報源だ』」

背中でおんぶしていた御坂妹さんを地面に  
下ろすと、僕は彼女らと対峙する

「戦闘の意思を確認。これより、ミサカ十一名は  
貴方との交戦を決定します」

交戦、ねえ

「『やなこつた』」

「なッ!？」

彼女たち全員が銃を構える前に、僕は全員の手足や  
鞆、銃などを全て螺子で壁に固定させた

突然の不意打ちにまったく反応できず、十一人全員がまったく反応できていなかった

「『僕がフェアに戦うとでも思ったかい？』『そういうのは正義の味方にでも期待しなよ』『僕はそんな連中じゃないからね』」

「くッ…！」

「『悪いけど』『またね！』」

細い螺子で全員の頭を貫き、情報が『伝わってしまう』前に記憶を『なかったこと』にした

彼女達の”ミサカネットワーク”という情報回路は非常に厄介だ

でも、唯一の救いはこの子たちの記憶さえ『なかったこと』に出来れば情報の拡大を阻止できる

無意識に色々と情報は拡大しているけど、こういう大事な情報などは自分の意思で伝えないといけならしい

それなら伝える前にそれを忘れさせるんだよ

僕は意識の無くなっている彼女達に向かってこう言う

「『またね！』」

氣を失っている御坂妹10031番さんを  
背負いながら、僕は夕方の表の世界へと戻った



二十四話 『台無しにしてやるよ』（後書き）

現在原作も漫画も手元に無いので記憶はしていますが  
念のためにアニメで確認しています

少しアニメ寄りになってしまつのがしばしばありますが、  
それは少し記憶が曖昧になっているからです

今回も少し記憶が曖昧でしたのでアニメで確認しながら執筆しました

原作と違う箇所があつたらすみません

二十五話 「生きる権利」(前書き)

臭い台詞が多数

正直書いていても恥ずかしいです

あまり自身はありませんが、どうぞ

## 二十五話 「生きる権利」

「雪先輩よお、そいつは誰なんだ？」

自宅に帰ると、珍しく中では礼二ちゃんと和希ちゃんが寛いでいた。まあ、和希ちゃんは無言で俯いているだけだけど

僕は自室へと入り、背中で背負っている御坂妹さんを下ろす

それを見た礼二ちゃんは奇妙な目でこちらを見て、そう訊いてきた

「『礼二ちゃんは一日中なにをしていたんだい？』『この人が僕たちの探していた人物』『妹達の一人だよ』」

「そつえばそんな奴を探してたな」

僕は彼の記憶力の無さと不真面目さに少し呆れながらも、話を続けた

「『さつき実験で殺された個体なんだけど』『僕がオイルフィクション大嘘憑きで生き返らせたんだ』『情報源にはなるだろうし』」

礼二ちゃん是不機嫌そうに御坂妹さんを見詰めていた

敵意を込めながら、真っ直ぐ見ている

彼女はクローンでも、一応は超能力者で、プラスだ。つまり、僕たちの敵

それなのに、態々生き返らせたことに不満を感じたのだろう

自分達を実験動物のように追い回し、いつ殺されるか  
分らずビクビクしながら生活してきた礼二ちゃん

その人物達の同類である超能力者を会うのはまだ抵抗があるらしい  
今はガマンしてもらいたいけど

「『この子は貴重な情報源だから』『ガマンしてよ?』『」

「分かつてる…」

下唇をかみ締めながら言っている

相当悔しいみたいだね

「う…?」

気を失っていた御坂妹さんが目を覚ました

少し顔色は悪く、少し頭痛がありそうだけど、  
まあ一度死んだから仕方無いよね

僕は目を覚ました彼女に話し掛けた

「『おはよう』『どう?』『気分は?』『」

「……貴方は誰ですか、とミサカは見知らぬ部屋で  
気を失っていたことに動揺しながらも問いかけます」

当然の質問

一方通行の実験との末に絶命してしまったあの路地裏こそ、彼女の最後の記憶のはずだった

でも、気が付けば見知らぬ家で寝かされている

混乱するのは当たり前だと思う

「『過負荷の一応リーダー』『球磨川雪』『君も他の固体から聞いていないのかい？』」

僕がそう言つと、御坂妹さんは驚いた表情を見せた

クローンのはずなのに表情豊かなんだね

彼女は僕の経験から言つと他の妹達より人間らしい感情がかなり濃く芽生えてきているみたいだ

改めて上条ちゃんの凄さを思い知らされたよ

彼は感情の無いクローンに感情を芽生えさせたんだ

「球磨川雪…過負荷のリーダー的存在であり現在は統括理事会で最も危険視

されている人物、とミサカは予想外の人物が目の前に立っていることに若干引きます」

驚くのは良いけど引かないでくれよ

それに、僕は統括理事会ではそんな扱いを受けているんだね

「『おいおい』『せっかく助けてあげたのにそれはあんまりなんじゃないのかな?』」

「ッ…！　そういえばミサカは…」

何かを思い出したのか、険しい表情になる御坂妹さん

おそらく一方通行との実験を思い出したんだろうね

自分が吹き飛ばされた瞬間、地面に叩きつけられた瞬間、そして、殺された瞬間

その全てが脳裏に浮かんできているのか、怯えたような表情になっている

「『知つてると思うけど』『君は一方通行に殺された』『どうだった?』『一度死ぬ気分は?』『痛々しかっただろうけど』」

「

「なら何故ミサカはこうして生きているのですか、とミサカは貴方の発言の矛盾について適格に質問をします」

死んでいるのに今この場で僕と話している

彼女にとってこれは矛盾に感じれるらしい

僕はその発言に軽く笑った

「『あはは』『うん君にとってこれは矛盾なんだね』『殺されたはずの

自分が今こうして僕と会話をしている』『それは君にとってはかなり疑問に感じれるんだね』『当然の反応だよ』『でも』

『僕たち過負荷にとって”矛盾”なんて言葉は荒唐無稽な戯言に過ぎないんだ』」

呆れたように呆然とする御坂妹さん

「『僕たちの無能力は理不尽で不条理で不公平で最低だ』『それは常識にも囚われず』『理論にも歯止めされない』『自然の摂理を壊すのが過負荷だよ』」

絶えず笑みを浮かべながら僕はそう告げる

僕たち相手には常識も定理も論理も無意味だ

そんな複雑なことをしなくても僕たちは自滅するような

連中なのに、勝とうとするから悲惨な結果になってしまうんだよ

僕たちはなにもかもぜーんぶ台無しにするんだから

「『君が生きている理由は至って簡単だよ』『僕の過負荷はオールマイクシオンすべてなかつたこと』『大嘘憑き』『現実を虚構にする』『スキルだ』『そのスキルで僕は

君の絶命を「なかったこと」にしたんだ」

驚くことさえ出来ないほど僕の過負荷の正体に驚愕している

今まで統括理事会にとつてはまったくの謎で

想像も付かなかったような能力が、こんなに単純だったなんて

”すべて  
なかったこと現実を虚構にする”

実に単純明快で、シンプルで、それなのに理解し難いその全貌

難関の演算式も無ければ、複雑な思考回路も必要としない

でもそんな能力こそ、超能力者の連中は誰も  
理解できず、混乱してしまう

無意識に複雑に考えすぎて、もっと明解なことに気付かない

それが超能力者の弱点であり、欠点みりよくでもある

「…長い間ずっと謎だった貴方の能力のあまりにも  
呆気ない正体を知り、ミサカは少し愕然とします」

「『たとえ混乱しようが愕然としようが』 僕が君を  
助けたという事実は虚構きょこうではないぜ？」

「でも、過負荷である貴方がなぜ科学側のミサカを助けたのですか  
？」

確かに、僕が彼女を助ける理由なんて何も無い



あつたとしても、それは情報源として利用する以外は  
何も無い。事実、僕は最初はそのつもりで連れて帰った

でも、今は違う

彼女も僕と同じなんだ

他人勝手に創られ、理不尽に勝ち目の無い敵と  
戦わされ、不条理に実験に参加させられる

マイナスであり、底辺であり、弱者でもある

超能力者であろうと、そんな境遇に陥っている彼女

「『これは完全に僕の気まぐれだよ』『なにより』  
『僕は別に君なんかを敵として見ていないよ』」

「ミサカを敵として見ていない、つまりミサカなど敵ですら無い  
ほど

甘く見ているのですか？とミサカは少し怒りを抱きながら言います」

こちらを睨みながら言っている

それに対応し礼二ちゃんは臨戦態勢に入ったように  
構えの体勢になり、和希ちゃんは寄り掛かっていた壁から離れる

まだ彼女は未だに僕たちを警戒しているみたいだ

「『おいおいそれは違うぜ？』『僕は別にそんな意味で

言ったわけじゃないよ」

両手を上げ、攻撃の意思が無いことを示す

それでも警戒を緩めない彼女に僕は優しく微笑んだ

マイナス感情も敵意も込めず、できるだけ  
朗らかにそんな表情を見せる

「『安心して』『僕は弱い者の味方だから』」

「……」

言葉を失う御坂妹さん

「『信じられないかい？』『僕たちは弱い人の味方だよ』」

『劣等で屑で最低で底辺で塵の過負荷ほくたちは誰よりも弱者の気持ちを知っている』『だから僕たちは弱者きみたちの味方なんだよ』

『僕たちは全員恐れられ』『差別され』『理不尽な暴力を受けながら人生に何の希望も

無く存在してきた』『君も同じだろ？』『事実』『その所為で君は一度命を落としている』」

御坂妹さんは言葉を返せなかった

今まで感情が無く、狂気染みた思想を持った無法集団だと思っていた過負荷にも、ちゃんと目的があるという事を知った

僕たちも彼女達と変わらない人間なんだって

それに対して御坂妹さんは頭の中では混乱してるんだろう

「『でも』 『僕たちはそんな馬鹿みたいなことをしないよ』

『あんな連中と違って』 『僕は君の立場になって考えてあげる』

『もう殺されるための実験なんてしなくて良いんだ』」

僕は徐々に、押し殺していた彼女の感情を引き出していく

基本的に無表情な彼女にも、少しずつ感情を見せるようになっていく

困惑、戸惑い、傷心

プラスでなくても、クローンの彼女が感情を持っているのは確かだ

それを引き出すのを僕はただ援助すれば良いだけだ

「『君だって怖かったんだろ？』 『連日連夜仲間が一人ずつ

減っていくのが？』 『いつか自分の番になる、って』 『でも安心して』

『ここなら誰も君を傷つけないさ』 『誰も殺そうとしたりしないさ』

」

動けない身体をブルブルと御坂妹さんは震わせ始めた

恐怖による身震い、一方通行に殺された時の怖さを  
今になって思い出したらしい

毎日少しずつ減っていく同僚たちも

ミサカネットワークを通じて、他の妹達が惨殺  
される寸前の情報がいつも送り込まれている

それが10030回も続いていた

普通なら頭が狂いそうになるはずだ

ただでさえ人間らしい感情をこの御坂妹さんは持っているんだ

尚更怖かったんだろうね

「『嘘付かず』『君は自分の本音を言ってみなよ?』『だいじょ  
ーぶだから』」

『僕も礼二ちゃんも和希ちゃんも笑ったりはしない』『だから』『  
そんな無表情を  
貫くんじゃなくて』

『自分に嘘を吐かず』『言ってごらん?』『君はどうしたい?』『』

僕は優しく問いかける

すると、ずっと俯いていた御坂妹さんは  
顔を上げ、徐々に口を開いた

「ミサカは…生きたいです…」

「『ん？』『なあに？』『聞えないぜ？』」

「ミサカは生きたいです！！！」

この部屋を震わさんとばかりに大声で叫ぶ御坂妹さん

ようやく彼女の本音を、本性を、感情を引き出すことが出来て、僕は満足気に笑顔を広げた

「死にたくないです！ 殺されたくないです！ もうあんなに怖い思いは嫌です！」

ミサカだって人です！ たとえクローンであろうと、ちゃんと生きている人間なんです！

ならミサカにも生きる権利はあると思います！ だから、ミサカは死にたくないです！

ちゃんと朝起きて、学校へ行つて、友達と談笑し、家に帰って、家庭学習をし、

笑い合える人たちと夕飯を食べ、布団へと潜り、またその一日を繰り返したいです！

実験動物ではなく！

ミサカたちだつて生きているんです！」

涙を流しながら、人工的に創られたクローンとは考えられないほど感情を曝け出し、主張している

御坂妹さんの一番の願いは、何気無い幸せだったのかもしれないね

今までは研究所でしか生活できず、学校にも行けず、ただ他人が幸せそうにしているのを眺めるだけ

そんな御坂妹さんが無意識に心の内側に秘めていた思い

それが一気に出たんだと思う

肩から息をしながらミサカさんは主張を終了した

そして、彼女は不思議そうに自分の頬に触れ、瞳をゴシゴシと拭いた

「なんですか、コレは…?」

「『知らないの?』『涙だよ』『人間の最も強い感情表現の方法であり』

『最も思いの籠った物さ』『君からそれが出るなら』『君は立派な人間さ』」

感情データがインプットされていないはずなのに、涙が出ている

データ無しでも感情が発現されるって、

あの上条ちゃん並みに凄いことをやったんだね、僕

我ながら感心だ

「『僕達と一緒に来ないかい?』」

「な…!？」

この言葉に驚愕する御坂妹さん

同じように礼二ちゃんも驚き、呆れたように  
こちらを見ていた

それでも尚和希ちゃんはこちらを向かず、  
再び壁に寄り掛かりながら地面を見詰めていた

彼はある意味御坂妹さんよりクローンっぽいんじゃないのかな？

「良いのかよ雪先輩？ こいつは一応は超能力者だぞ？」

「『愚問だぜ礼二ちゃん』 『僕は構わないよ』 『それを受け入れるか』

どうかは君次第だし』 『僕はそれに文句を言う筋合いは無い』」

そう言つと、礼二ちゃんは「そうかよ」と言つて口を閉じた

彼も受け入れてくれたらしい

ま、後は他の五人が受け入れてくれるかどうかだけだ

「『君はどうする御坂妹さん？』 『これは勿論君の判断だよ』  
『強制なんてしないし』 『断つたつて僕達に關しての記憶を  
「なかったこと」にするだけで危害も加えない』」

「いえ、ミサカはあなた方に付いて行きます。クローンである  
ミサカに行く場所など無く、迂闊に外を出れば直ぐ捕まってしまう

ます、

とミサカは貴方の提案に了承します」

喋り方は通常に戻ったけど、表情が幾分か柔らかくなっている

目にはちゃんと生気が宿り、声質だつて一定だけではなく  
上中下などの高さや強弱のような力だつてある

完全に個人の人間として出来上がっている

「ですが、ミサカネットワークから他のミサカにこの  
ことが伝わってしまうのでは？」とミサカは貴方の安否を心配します」

「『大丈夫』『君の傷を』なかったこと」にした時にネットワー  
クとの

接続も「なかったこと」にしたから」

万が一のためにやっておいたけど、正解だったね

もししていなかったら次の瞬間で警備員の連中や  
他の『妹達』によって襲撃されていたかもしれない

「『じゃあ』『<sup>マイナス</sup>人類最低の世界へようこそ』」





二十五話 「生きる権利」(後書き)

ミサカ10031号がまさかの『過負荷化』(苦笑)

ちなみに10031号の心境や感情などは全部  
作者の想像と妄想で構築されています

実際にそう思っていたかどうかは不明です

二十六話 「勝ち目がない」(前書き)

少し長めです

後書きにてちょっとしたアンケート

## 二十六話 「勝ち目がない」

「何だ何だ何ですかア？ 大口叩いた癖にこの程度かよ？ 嘗めてンじゃねエぞ三下ア！」

とある工事現場のような場所を、一人の青年が歩いていた

純白の白髪と獣のように紅い目、そして透き通るように真つ白な肌を持つその異様な風貌の人物は周りをキョロキョロと見回しながらそう叫んでいた

辺りは既に半壊状態になっており、鉄骨や木材などが破壊されている

大きな地震が去った後の如く崩壊しているその場所に居るのにも関わらず、その青年は無傷で汚れ一つ付いていない

狂気染みた目で何かを探すように見回している

そんな青年から逃れるように隠れているのは、  
幼い顔立ちの少女

頭に軍用ゴーグルを装着したミスマッチな風貌の彼女の直ぐ隣にはまったく同じ格好のもう一人の人間が壁に寄り掛かるように座っている

いや、正確にはまったく同じ格好ではない

瓜二つの格好だった

顔も体形も格好も全てがまったく同じ

その人物、御坂美琴のクローンであるミサカ10031号は、隣の同僚である10032号を庇うように立っている

彼女等を追っているのは学園都市最強のレベル5、序列第一位の一方通行

二人のこの境遇までには少なからず経過があった

事の始まりは数時間前

~~~~~

「『ねえミサカちゃん』『君、本当の意味で過負荷になる気は無いかい？』」

10031号が過負荷へと加入してから一日

他の過負荷である木更津、琴吹、清瀬、春木、雛像からは球磨川が説明し、当初は不満だったものの次第に受け入れていったそれでも馴染み難くなっていたのは事実

途方に暮れていた10031号に球磨川が唐突にそう問いかけたその問いにミサカは首を傾げた

「ミサカが過負荷に…ですか？」

「『うん』『困ってるみたいだし』『君が望むなら僕はそうして上げられるよ?』」

10031号は一応は過負荷勢力の一員となっていた

しかし、事実上彼女はレベル3の強能力者であり、実際に過負荷という訳ではなかった

その理由こそ、未だに馴染めていない理由だったりする

しばらく腕を組み思考すると、10031号は口を開いた

「もし過負荷へと変化すれば、ミサカはどうなりますか？とミサカは自分の身体の変化を気にしながら貴方に問います」

「『別に性格がぶっ壊れたりとかはならないよ?』『確かに僕たちは過負荷の

所為で破綻した思考と世界観を持っているけど』『それは世間の妨げ故のもので

初めからこうなっている訳じゃないんだ』『ただ超能力は失ってしまっけど』」

この言葉に10031号は更に疑問符を浮かべた

”超能力を失う”

元々超能力というのは、能力開発により脳へインプットされた科学技術であり、脳にダメージを負わない限り失われないはずだ

だが、過負荷を得ると超能力が失われる

不可解な現象に10031号は首を傾げた

「超能力を失う？ そのような事が起こり得るのですか？  
とミサカは過負荷の及ぼす現象に疑問を述べます」

「『簡単に説明するよ』『超能力を”プラス”とすれば』『過負荷は当然

”マイナスだ』『数学ではプラスとマイナスをかけるとマイナスになる』『それと同じで過負荷を持つと超能力を失う』『理由は僕の使うスキルの所為だ』」

子供に算数を教えるように球磨川は説明した

プラス マイナス  
超能力と過負荷、二つの異能が交わる時に起こる現象

超能力者は魔術を修得できず、魔術師は超能力を使えないのと同じ原理であった

プラスとマイナスは共存できない

それこそ、絶対に変わることの無い事実だった

「貴方のスキルは『オールマイクシオン大嘘憑き』だけではなかったのですか？」

「『主には大嘘憑きだけど』『別の機会で説明するよ』」

曖昧に返答を済ませた球磨川

それに少し不満を抱きながらも、10031号は決断を下した

「ミサ力は過負荷を選びます。超能力側とは既に繋がりを断ち切っています、

故にミサ力は超能力ではなく過負荷の使用を希望します」

決意を固め、超能力を捨てた

これで10031号は既に超能力者でなく、一人の過負荷として  
出来上がってしまった

一人の過負荷であると同時に、一人の”個人”

個性、10031号の求めたものだった

「『…良い判断だね』」

ニヤツと不気味に笑いながら、球磨川は螺子を取り出した

大きな螺子を一本、片手で掲げた球磨川は、  
ゆっくりと10031号へ歩き出す

そのあまりの様子のおかしさに恐怖を抱き、後退りし始める100  
31号

だが、背中が部屋の壁に当たり後退できなくなる

「『安心して』『前に言っただろ?』『僕はアイツ等と違ってる』」



そのまま球磨川は、10031号の胸元に螺子を突き刺した

「ッ……」

予想外の行動に、表情を顰める10031号

しかし、あることに気付いていた

「痛みが…ありません」

「『当然だよ』『これは攻撃目的の過負荷じゃないからね』」

全く痛みがなかった

その螺子は確かに刺さっていた

胸を貫き、後ろの壁へと突き刺さっている

だが、それにも関わらず血は一滴も流れておらず、  
苦痛すら皆無だった

そんな奇妙な状態に10031号は目を見開いた

「『これでしばらく放置すれば』『君は完全に  
過負荷側に墮こたろとされるよ』『でも途中で抜いたりしたら  
駄目だからね?』」

そう言うと、球磨川はその場を去って行った

部屋の玄関を開き、自室を出た

取り残された10031号は、しばらく呆然と  
辺りを見回していた

人を一人残し自室を出る

つまり、球磨川はもう完全に10031号を仲間として見ていた

”信頼されている”という安心感から、溜まるに溜まっていた疲労  
が徐々に出てくる

螺子が外れないよう気をつけながら、10031号は  
横になり、重い目を閉じた

時刻は深夜

辺りは既に暗闇に包まれており、明るい月が夜空を照らしている

明かりも点いていない所為か、窓から差し掛かる僅かな  
光以外はこの部屋を闇に包み込んでいる

そんな中、10031号は目を覚ました

起き上がり、辺りを見回すと球磨川の姿が無い

おそらくまだ帰ってきていないのだろう

身体を解し、背伸びをすると、違和感を感じた

胸元に触れてみると、そこにあったはずの物が消えていた

いつの間にか、自分に深く突き刺さっていたあの螺子が綺麗に消えていた

まるで、そんなものなど存在していなかったかのように無くなっており、何の傷跡も残っていなかった

そんな不思議な感覚を振り払い、10031号は状況を整理した

今は自分が死んでから一日

その死をもつて第10031次絶対能力進化実験は終了した

つまり、今まさに次の実験が始まろうとしていた

”また一人の同僚が亡くなってしまう”

一方通行に殺される時に自分の感じた苦痛、恐怖、悲しみ、それがまた繰り返されてしまう

「…させません」

ドアを開け、深夜の歩道へと出た

「ッ……！ やはり……」

10031号が工事現場のような場所へとたどり着くと、目の前では激しい戦闘が繰り広げられていた

次の対象である10032号はレベル3相当の  
レディオノイズ  
欠陥電気で攻撃しているが、それは悉く避けられていた

一方通行の攻撃もかわしているが、それがいつまで持つかは分からない

しかし、10031号からすれば勝ち目は皆無に等しかった

自分自身で対峙したからこそ分かるのは、一方通行に攻撃と呼べるものはまったく通用しない

ベクトル  
たとえ電撃であろうと、炎であろうと、銃弾であろうと、向きの存在するものは必ず反射される

しかし、10032号は何かを狙っているかのように見えた  
すると、辺りに異臭が漂い始めている

「……！！　そうか、空気中の酸素を分解してオゾンに変えるのか。

この俺を酸欠状態に持っていこうとするたア大層なことじゃねエか。  
でもなア、それまでにてめエが持つかア？」

一方通行は策略に気付き、笑いながらそう言った

その間にも、10032号は一方通行から逃げている

このまま攻撃をかわし続ければ酸素不足になり、  
一方通行は気を失い、窒息死してしまう

だが、それは10032号がそれまでに生きていればの話だった

もし能力の使用に少しでもタイムラグがあれば、一方通行は  
酸素の濃い場所へと移動し作戦が全て台無しになってしまう

学園都市最強のレベル5から最低でも数分間逃れなければならない

それは身体能力が普通の中学生レベルの妹達にとっては  
不可能に近いことだった

「良いねエ！　ちゃんと俺の相手やってンじゃねエか！」

地面を激しく蹴ると、一方通行は凄まじい速さで  
10032号に接近した

突然自分の後ろに現れた一方通行に10032号は驚いたような表情を見せる

「なに驚いてンだよ？　足元のベクトルを操作すればこれぐらい  
出来てもおかしくねエだろ？」

一方通行の拳が吸い込まれるように10032号へめり込んだ

運動量のベクトルを操作され、自分の腕への衝撃は  
皆無でありながら、相手には二倍のダメージを与えられる

一方通行の打撃を受け、吹き飛ばされる10032号

その所為か演算をする余裕が無くなり、酸素分解が行えなくなっている

「少し浅知恵働かせたみてエだが、所詮はこの程度か。まったく…何回殺せばお前等はマシなんだよ？」

態とトドメを刺さず、何度も腹部をけり続ける一方通行

一撃で球磨川の全身の骨を砕いたような攻撃が何度も腹に突き刺さり、血を吐き出す10032号

それを見て、10031号は激怒していた

「ッ…！　こうなったら…！」

脳で演算を開始し、自身の欠陥電気を放とうとする10031号

だが、演算を開始しようとした時、予想外の事態が起こった

「演算が…出来ない？」

演算をしようとする10031号だが、使い慣れたはずの能力がまったくと言っていいほど使えなかった

まるで方法を忘れたかのように、静電気すら発生させられないほど

欠陥電気が完全に消えていた

「まさか…」

10031号は今朝球磨川の言った言葉を思い出した

『過負荷になれば超能力は失ってしまう』

この言葉をようやく理解した10031号だった

「くッ…！」

そのまま隠れていた建物の影から飛び出すと、  
10032号へ一直線に走っていった

一方通行は腕を振り上げ、顔面目掛けて腕を突き刺そうとした

「なッ…!？」

だが間一髪で10031号が10032号を突き飛ばし、  
その腕は地面へと深く突き刺さった

「なんだア？ 誰だてめエ？」

特別焦る様子も見せず、一方通行はそう問いかけた

「先日の実験の10031号です。このような実験は  
とても許し難いもので、続けさせる気ありません」

それを聞いた一方通行は、驚愕していた

先日の実験とはつまり、殺したはずの妹達だった

自分自身で血流操作を行い、全身の血の流れを逆流させ殺したのを一方通行は覚えている

生きているはずの無い者が目の前に居るといふ事実、一方通行は激怒したように吼えた

「ふざけンじゃねエ！ てめエは昨日ぶっ殺したはずだ！」

「ミサカはとある人物により助けられました。もう貴方のために殺される気などまったくありません、とミサカは敵対心を丸出しにしながらそう告げます」

一方通行は混乱していた

妹達は元々レベル5量産のための第一歩として作り出されたクローンであり、感情はインプットされてないはずだった

その量産計画が失敗に終わった今、現在の使命は絶対能力進化実験へ加担すること

クローンは与えられた使命を忠実にこなすことで量産されたが故に、

敵対することなどまずありえなかった

それなのに、目の前の死んだはずの10031号は明らかに敵対心をむき出しにしている

明らかに様子もおかしく、他の妹達と違って生気の宿した瞳は、人間のそれと殆ど変わらない



「ふざけンじゃねエぞ三下アア!!」

怒りを露にし、その拳を10031号へと振るった

それを避けると、10031号は10032号を  
抱えたまま走り出した

それを見ると、一方通行は狂気の籠った目で笑いながら見ている

「なんだよ、結局は逃げるだけかア？」

ゆつくりと一方通行は後を追った

話は没頭に戻る

10032号を助けたのは良いが、二人の  
危ない状況は変わらなかった

元々10031号にこれと言った策略はなかった

超能力も失い、銃も持っておらず、対抗手段は皆無

たとえ所持していようと、効果はまったく無い

逆に一方通行からすれば一瞬でも触れれば血流操作により

殺せるという、何とも簡単な状況

もし一方通行に見付ければ、”死”は確実

球磨川がこの場所を知っているとは考え難い

つまり、死んだらその時点でゲームオーバーということ

「いったいどうすれば…」

途方に暮れる10031号だった

「ミサ力を…置いていってください」

そんな10031号にそう言ったのは、隣で  
座り込んでいる10032号

「ミサ力は貴方を助けるために来たのです。見捨てる気など  
ありません、とミサ力は貴方の馬鹿馬鹿しい提案を却下します」

即答だった

これでは自分の来た意味がない、と付け加え、再び辺りを警戒し始  
めた

「…10031号、殺害された固体である貴方が何故生きている  
のですか？」

ましてやこれほど強く感情があるのは異常です、とミサ力は貴方の  
不自然な状態に  
疑問を抱きます」

10032号は10031号を見上げながらそう問いかけた

”感情”など、クローンにとっては到底得られないもの

過負荷が”幸せ”を得るのと等しく、クローンが”感情”を得るのは

荒唐無稽で滅茶苦茶で支離滅裂のようなことだった

元々10032号にも他の固体と比べ感情はかなりある方だったが、

目の前の10031号はそれ以上に感情があり、表情豊かだった

目はクローン特有の無機質で無感情な目ではない

ちゃんと生命を宿し、必死に生きようとしている

「見つけたぜエ、クソ野郎共がア！」

瞬間、隠れていたコンテナが盛大に吹き飛ばされる

その後ろに立っていたのは、狂気染みた笑顔で二人を見詰める一方通行

「三下の癖にこんなに俺の労力を使わせるンじゃねエよ。さアて、もう万策尽きたのかよ？」

もはや10031号に為す術など無かった

超能力も失い、抵抗手段はまったく無い

肝心の手に入れた過負荷の能力など知るはずもなく、  
いつ殺されてもおかしくはない

「手間掛けさせやがって…じゃあ、そろそろ死ね」

ゆっくりと二人へと歩き出し、腕に触れようと一方通行は手を伸ばした

一瞬でも触れれば殺せる

また自分は殺されるのか、という恐怖で10031号は  
震えだした

糸が切れたかのようにその場へ座り込んでしまう

「まずはてめエからだ。でけエ叩いた割には呆気ねエな」

倒れている10032号を無視し、真っ直ぐ10031号へと向かった

だが

「がアツ!？」

突然、一方通行の身体が盛大に吹き飛ばされた

まるで何かに殴られたかのように首を捻らせ、  
そのまま数メートル吹き飛んでいく

一瞬なにが起きたか分からず混乱する10031号

そこへ、安定した速度で響く足音が辺りに木霊した

「つつかさあ、何で俺がこんな奴を助けなきゃいけないわけ？俺は別にこいつがどうなるうが知ったこっちゃないんだけどさあ」

覇気を感じさせないだらけた声が響いた

それに比例し、響く足音も段々と大きくなっていく

「雪先輩の頼みで来たんだけどさあ、何で俺なんだよ？これだったら敦先輩でも良かったんじゃないの？」

10031号と一方通行に対峙するように立つのは、一人の青年

赤い帽子を深く被り、表情を伺えないが、まったくと言って良いほど

気迫感無く、見ているだけでイライラしそうな雰囲気を感じていた

それと同時に広がるのは、圧倒的な『負』の感情

近くにいるだけで自分の努力を全て否定されそうなその”オーラ”

そして、あの特有の説明のつかない気持ち悪さ

「しょうがないな…おいお前等。どいつが一方通行だ？」  
アクセラレータ

「あア？俺に何の用だ？」

フラフラと立ち上がりながら一方通行はそう問いかけた

「お前が一方通行で良いんだな？ まったく、学園都市最強が丸腰のチビ中学生二人と戦うとは…随分大人気ないんだな」

「勝手に現れて俺にケチ付けるだけか、あア？ 文句あんならかってこいよ」

やれやれとその青年は首を振った

「俺がお前に勝てるわけないだろ？ それこそ弱い者いじめさ」

「前にもそんなことを言った奴が居た。同じ答えになっちまうが、ためエの都合は訊いてねエンだよ！」

地面を蹴り、高速移動でその青年に接近する一方通行

「哀れだな…まあいいか」

スカルファッション なかしま れいじ  
最低労働、仲嶋礼二が相手してやるよ」

学園都市最強と底辺の集団、過負荷の戦い

それが今、開始された

## 二十六話 「勝ち目がない」(後書き)

スカルファッション  
次回は最低労働の大活躍？(笑)

ちなみに超能力が消える理由は作者の独自解釈です

実はアンケートを実施したいと思います

期限はこの”妹達編”が終わるまでです

く内容く

10031号の別の名称を募集したいです

毎回毎回10031号と書くのは読者様は  
鬱陶しく感じてしまうと思うのですが、自分で  
はまったく思いつけませんでした

そこで、読者様はどんな名称が良いですか？

どんなものでも構いません

作者の国語力は低いので、できれば  
読み方も書いてくだされば嬉しいです(苦笑)

では、よろしく願います

## 人物紹介　く球磨川雪く（前書き）

クリスマスも近いので、何気にやってみました

気が付けばかなり長くなってしまいました（泣）

つまらないかもしれませんが

形式はwikiを参照しています。というよりwikiの人物紹介を引用しました。

なお、この箇所は物語が進み次第変更を予定しています

ネタバレは今のところ含まれて居ませんが、よろしければどうぞ



## 人物紹介　く球磨川雪く

### くプロフィールく

身長：　163cm

年齢：　17歳

出身地：　不明

家族構成：　自分一人

サイド：　過負荷サイド

所属：　学園都市第七学区のとある高校の三年生

職業：　高校生

住居：　第七学区の小さなアパートの一室

レベル：　無能力者<sup>レベル0</sup>

能力：　<sup>オールマイクシヨン</sup>大嘘憑き  
<sup>ブックメーカー</sup>却本作り

### く人物く

元の世界では唐突に事故死した転生者。過負荷を得てからは性格がやや破綻気味になり、狂気染みた発言が目立つようになる。過負荷の仲間に対しては思いやりを見せ、弱い者の味方と豪語している。高位能力者やエリートにはとことん敵対し、戦闘中であっても言葉による暴力は欠かさない。自分の目的や行動は正しいとは思っていないがそれでも自分のやり方は変えないとも言っている。括弧付けた話し方は本人曰く『この方が本音と嘘の見分けがつかない』と語っている。口癖は『僕は悪くない』

〈容姿〉

少し低めの背とその童顔っぽさから中学生ほどの年齢にしか見えな  
い。短くもなく長くもない、微妙な長さを保っている黒髪もそれを  
引き立てている。元々が貧弱体質であり、過負荷の働きもあつて筋  
肉などは皆無という虚しい体形だった。それと同時に脂肪もあまり  
ついておらず、平均体重を余裕で下回っている。普段は学生服姿だ  
が、極稀に私服姿になることがある。

〈性格〉

人類最低と称されるほど性格が悪い。基本他人に対しては嫌がらせ  
や貶しの意味を込めて話し、二重括弧の所為で本音が嘘なのかが分  
からない。相手の心を折ることが得意であり、戦闘中であつてもそ  
れを欠かさず行おうとしている。だが同じ過負荷に対しては良き先  
輩として接し、思いやりも見せるなど、人間的な面もある。瀕死に  
なっていたインデックスを上条の頼みで治したり、燃えていたアパ  
ートを元通りにしたりなど、下位の人間い対してはかなり優しく接  
している。だが能力者などのエリートには冷酷に接し、何の罪悪感

もなく文字通り螺子伏せたりしている。

〈生活〉

主に学園都市を潰す予定などを考案しており、案が浮かべば即座にメンバーを集め行動に移す。だがそれ以外は比較的ダラダラと生活しており、漫画を読んだりして休日を過ごしている。運動も勉強もせず、お菓子を摘みながら漫画を読むそれは浪人のような生活であり、本人曰く『最低のニート』だそうだ。

〈知能〉

”過負荷”という劣等性でもある球磨川は基本的に勉強が出来ないが、だからと言って頭が悪いわけでもなかった。研究所を二箇所同時に襲撃したり、戦闘中では相手の弱点を的確に突くなど知力や想像力は高い方であった。根っからの漫画脳であり、言動の中にそれらしきネタが偶に出てくる。

〈戦闘〉

螺子を主体とした武器での戦闘。自身の過負荷である大嘘憑きの能力も応用して相手の作戦を悉く崩すことで精神的動揺を誘うなど、戦闘センスはそれなりに高い。しかし、身体能力は最低レベルでありその所為で基本的には相手を倒すことはなかった。一度だけ却本<sup>ブック</sup>作<sup>メカ</sup>りを使用した<sup>メカ</sup>が、その時以降は使用を控えるようにしている。言葉による動揺なども戦闘中に行い、上手く行ったときは相手の心を折れるほど。だが過負荷なため、基本的に勝つことは出来ない。

～人間関係～

学園都市側の人間には要注意人物と判断され、度々球磨川の抹殺を試みている。過負荷サイドも科学サイドとは基本的に敵対関係にあるため、衝突を何度か繰り返している。レベル5第三位の御坂美琴や第四位の麦野沈利、第一位の一方通行にはかなり憎まれており、共に抗争を経験している。クラスではあまり目立たないようにしているが、それでもその独特な気持ち悪い雰囲気故に周囲から避けられている。仲間からは良き先輩であり、尊敬できるリーダーとして認められ、仲はかなり良好になっている。抗争ばかり考えるのではなく、偶には仲間達何人かと一緒に遊んだりもし、ちゃんと友好関係を築いている。だが、同じ過負荷の清瀬真希が少し苦手だったりしている。

～能力～

球磨川は大嘘憑きと却本作りの二つの過負荷マイナスを持っている。どちらも恐ろしい能力とされ、度々学園都市サイドを翻弄している。

大嘘憑きは事象の因果律を操作し、存在そのものを消す能力。『オールドフィクション実を虚構にする』ベて なかったことのが本人の正式な能力の説明。その出鱈目さと理不尽さは相手を度々驚かせ、本人はそれを見て楽しんでる。

本作では傷の存在をなかったことにし、無傷の状態に戻ったり、超能力を使う相手の演算をなかったことにし能力を無効化したり、相手との距離の存在をなかったことにし急接近するなど応用は様々。死亡した時は自動で発動し、『死』そのものをなかったことにして

いる。そのため本人は実質死ねない身体になっている。

弱点として一度なかったことにしたものは二度と戻って来ず、一生失ったままになる。それ故に”取り返しの付かない”能力であり、本人もかなり気を配って使用している。一歩間違えれば世界そのものをなかったことにしてしまうことから『自分の中に核爆弾を持っている』と称している。”才能”などもなかったことに出来ず、少なからず制限がある模様。

ブックメーカー

却本作りの詳細は作中では不明だが、本人曰く”攻撃用の過負荷ではない”。一割程度の使用だけで御坂美琴の精神を崩壊させたことからかなり強力な過負荷の模様。だがそれと同時に自分でもその程度を操作でき、本人の意思で解除可能なこともあり、一時間経った後は御坂も元通りになっている。10031号を過負荷へと変化させた際にもこの過負荷を使用している。

人物紹介 〱 球磨川雪〱 (後書き)

長い…

自分の安心のためにもう一度書きます

今話はwikiからの形式を引用しています

二十七話 「生きたいと思ってる」(前書き)

あと五時間でクリスマスですね

皆さんも良いクリスマスを

## 二十七話 「生きたいと思ってる」

「めんどくせえ……」

そう呟きながら、仲嶋は振るわれる一方通行の猛攻を避けていた

元々は木更津と同じく数少ない戦闘タイプの  
一人である仲嶋は身体能力の低い一方通行の攻撃を易々と避けている

だが、やはり学園都市最強の超能力者である一方通行の  
攻撃をいつまでも避けられるはずが無かった

次第に息は上がっていく

そんな中、能力により労力をほとんど使っていない一方通行は涼しい表情だった

「何だア？ さっきまでの威勢はどこに行ったんだよ三下ア！」

「血の気の多い奴だな…そういう奴は嫌われるぞ？」

再び仲嶋は拳を振るう体制を取る

だが、一方通行は特に慌てる様子ではなかった

ベクトルを操作できる彼にとって打撃など一番  
通用しない攻撃の一種だった

向かってくる拳のベクトルを操作し無力化でき、攻撃は当たること



すら出来ない

ほぼ絶対の壁である一方通行の反射

だがそれに対し、仲嶋は逆に笑みを浮かべている

「台詞をソックリそのまま返してやるよ、三下！」

「ぐアッ！？」

一方通行の身体は突然吹き飛ばされた

その顔面には何かがめり込んだ後のような状態になっており、口からも少量の血が流れている

明らかに殴られた痕だった

「まだまだあ！」

仲嶋は蹴る体制を取った

それに即座に反応し、反射の膜を張る一方通行

「がアッ！？」

だが何の効果も表さないまま、一方通行は再び何かによって吹き飛ばされていた

腹部に衝撃が走り、何かが突き刺さったような感覚

しかし、仲嶋は足をまったく動かしていない

「どうしたんだ学園都市最強？ らしくないぜ！」

仲嶋は嫌味っぽくそう告げた

「嘗めてンじゃねエぞ、三下がア！」

それに対し一方通行は怒りの咆哮を上げ、地面を蹴る

まるで生物かの如く地面は捲り上がり、波のように仲嶋へ向かった

「ちッ……！」

強襲が避けられず、そのまま仲嶋はそれを直撃し、  
背中を壁へ強く打ちつけた

「なんだア？（攻撃が通用した！少なくとも能力無効化能力  
じゃねエっつーことだな。ならこいつの能力は何だ？）」

攻撃が当たったことに一方通行は疑問符を浮かべる

反射の膜が利いていないことから能力無効化系だと考えていた一方  
通行

だが、仲嶋はしっかりと攻撃を直撃し、ダメージを受けている

自分の反射は利かないが、攻撃は当たる

この不自然な現象に、学園都市第一位の脳はフル活用された

今までの攻撃方法、あの不思議な現象、そして彼の今までの言動

その全てを考慮しながら、一方通行は仲嶋の能力の解析を始める

「なに考えてるんだよ？ 余裕じゃないか」

それを黙って見過ごすはずもなく、仲嶋は真っ直ぐ一方通行へ駆け出した

「ちッ…！」

それを見た一方通行は解析を中止し、足にかかる運動量のベクトルを操作して距離を取った

その程度で逃れるとは思っていなかったが、追撃は不思議となかった

「（奴の遠距離打撃、どうやら射程は無限って訳じゃねエみたいだな。

甘く見積もって俺とかなり距離が縮まねエ限りアレは出来ねエってことか）」

その情報を元に、さらに解析を進める一方通行

「距離を取ったからって逃げられると思うのか？ 甘いぜ第一位」

仲嶋は石を拾い上げ、一方通行に向かって投げる体勢を取る

全演算能力を仲嶋の能力解析に注いでいたため、現在は

反射の膜が無い。つまりどんな攻撃も普通に当たるという意味だった

「クソがア……」

再び解析を一旦中止し、反射の膜を張った

「グハッ!？」

反射の膜を無視し、石は瞬間移動したように一方通行の顔面を直撃した

口の中が切れ、血が少し流れてしまう

「（何なんだこいつの能力はア!? 俺が目視できねエほどの速さで石を投げ、反射の利かねエ攻撃を放ってくる…待てよ）」

一方通行は何かが閃いたような表情を見せた

「（こいつ、何で態々石なんてモンを使ったんだ? 俺の推測した射程範囲の中に居るのに、あの遠距離打撃ではなくこんなふざけた攻撃をしゃがった。

今のところこいつは自分のリーチ分の長さの範囲しかアレをやっつてねエ。つまり…）」

ようやく解析が終わる、ニヤ付いたような表情を見せる一方通行

それに仲嶋は怪奇そうに見ながら首を傾げた

「おい三下」

ようやく口を開く一方通行

「てめエの能力、結果だけを残す能力だろ？」

その言葉に今までダルそうな表情を貫いてきた仲嶋の表情は  
一気に強張った

何故自分の過負荷の能力がばれたのかが分からなかった

それと同時に、レベル5第一位の頭脳を仲嶋は侮っていた

彼は知るはずもなかった、一方通行の演算能力が  
スーパーコンピューター並みの高性能だったと

「自分が行動を起こす時、その”過程”を無視して  
”結果”だけを発生させる能力。俺の反射が利かねエわけだ。  
向かってくるベクトルが無エんだからしょうがねエな」

完全に自分の能力はバレていた

少し動揺しながらも、なんとか表情では平静を装った

しかし、能力の正体がバレてしまい、実際には  
かなり焦っていた

「すごいじゃないか。伊達にレベル5の第一位やってないな。

正確に言うとな俺の能力、スカルファッション最低労働は能力は”努力しなくても良くなる”ことだ

何の労力も使わず、何の努力もせず結果を残せる、最低で理不尽な過負荷なんだよ」

”努力する必要が無くなる”

元々結果だけを残せるスキルであり、その過程である”努力”をまったく必要としていない

それ故に仲嶋は生まれた時から努力したことがなかった

良い結果と言えるのかすら微妙であり、必要最低限の結果だけしか残せなかった仲嶋は特別得意なものがなかった

その名の通り、最低労働をこなす人物

それが仲嶋礼二という人物であった

「理論はどうなってるのかは知らねエが、そっちの攻撃は利いても俺の攻撃は防げねエと分かったなら話は早エ」

一方通行は勝ち誇ったような笑みを浮かべ、拳に力を入れた

「てめエの両手足を？げば解決する話なんだよ三下ア！」

地面を蹴り、中島に向かって突進する一方通行

足元の運動量のベクトルを操作し、常人の目では追えないほどの速度で接近してくる一方通行に為す術がなく、仲嶋は吹き飛ばされた

「ぐッ……！」

「まだまだこんなもんじゃねエぞ！ 精々虫みたいに足掻いて五分は持つてみる三下ア！」

わき腹に蹴りを入れ、吹き飛ばされていた仲嶋は地面に叩きつけられた

「調子に乗ってるんじゃないぞ！」

仲嶋は拳を振り上げた

それは動かず、気が付けば一方通行を吹き飛ばしていた

「<sup>プラス</sup>超能力者風情が<sup>マイナス</sup>過負荷を嘗めんじゃねえぞ！」

足も振り上げると、一方通行の頭部に衝撃が走り、元々はまったく鍛えていなかった所為なのか簡単に吹き飛ばされる

一方通行は普段能力で身を護り、相手が勝手に自滅するためマトモな殴り合いなどしたことがなかった

そのため勿論鍛えておらず、それどころか逆に攻撃に対して耐性が脆かった

その二つの欠点のため、仲嶋の攻撃をくらい大きなダメージを負っていた

勿論それは表情に出していないが、一方通行は内心かなり焦っていた

「ちッ…！（三下風情がア…！）」

「無様じゃないか、学園都市最強。超能力者<sup>プラス</sup>つてのはこの程度なのか？」

「ほざくんじゃねエぞ、劣等性<sup>マイナス</sup>風情がア…！」

「過負荷風情？ は！ 滑稽な言葉だぜ。過負荷<sup>おれたち</sup>は確かに  
お前等プラスには勝つことなんか出来ないし、劣等性で人類最低の  
マイナスにはエリートに対して勝利を収めることなんて到底無理だ  
でもなあ、だからって殺されかけてる同類<sup>なかま</sup>を放っておくほど腐って  
ないんだよ！」

一方通行に向かって走り出し、拳を振り上げようとする

それに対し、一方通行は高度な演算を開始した

「ふざけンじゃねエぞ、三下がアア…！」

演算を終了させると、一方通行は全霊の力で地面を蹴り上げた

「なッ！？」

そのまま蹴り上げられた地面は想像を絶する速さで  
捲りあがり、天を突き上げるような形を成した

バランスを崩してしまった仲嶋に避ける術などなかった

「グフアッ！」



頭部を直撃し、仲嶋はそのまま地面に倒れこむ

激しく顎の部分を直撃し、脳震盪を起こしたのか身体が動かせなくなっていた

そんな仲嶋に、一方通行はゆっくりと歩み寄った

「分かったか三下ア？ マイナス風情のためエが超能力者に勝とうなんて百年早エンだよ」

「だから…言っただろ…？ 絶対負けるって…」

乾いた笑い声を漏らしながら仲嶋は弱々しく呟いた

元々仲嶋は自分が勝てるなど微塵も思っていなかった

だが、たとえ元が能力者であろうと10031号は現在と同じ過負荷であり仲間でもある

見捨てるという選択肢など端から考えても居なかった

「欠陥品なんかを庇ってヒーロー気取りか？ オマエ、それは偽善者と変わりねエぞ？ そういうのは他所でやりな」

「偽善者…か。ま…解釈次第じゃ…確かにそうなるかもな…」

だがそこで一旦言葉を区切り、仲嶋は力強く続けた

「たとえば俺が偽善者だろうと正義だろうと悪魔だろうと天使だろうと、」

屑だろうと有能者だろうと正しかろつが間違つていようが

この二人が生きたいと思つてるのは虚構フィクションじゃないんだよ……！」

衰えることの無い眼差しで一方通行を睨み、そう告げた

それに対し一方通行は表情を歪めた

とうの昔に自分が失つた感覚、”妹達は生きている”という感覚、自分の力を他人のために使うこと

頭の中でそれを認めず、実験のためだと言い聞かせ、何人もの妹達を殺してきた

だが今日の前で倒れている青年は、それを真正面から否定している

妹達だつて内心では生きたがつている、生命を欲している

仲嶋は目の前で見ていた、10031号が建前を脱ぎ捨て、本心で自分の内情を明かした瞬間を

そこにはクローンの面影はなく、一人の個人として、人間として、”生きようとしていた”個人が居た

仲嶋自身も命が惜しく捕らえようとする追っ手から逃れていた

命を狙われる恐怖は人一倍知っている

だからこそ、目の前でそんなことも無視して殺戮を行おうとして  
いる

一方通行がなによりも許せなかった

過負荷も劣等も最低も関係なく、一人の”個人”として許せなかった

「けっ…くだらねエ。そういう台詞は俺みてエな悪党に言うことじ  
やねエぞ」

「くだらなくなんかねえ！」

そんな一方通行の言葉を遮ったのは、一人の人物

大音量というわけでもない大きさのその声、だがそれは

不思議とこの空間をマイクで話しているかのように響いていた

「あア？」

そんな声の主を見ようと、一方通行は後ろを振り向いた

「フゴッ!？」

その瞬間、大きな拳が一方通行の顔面を打ち抜いた

仲嶋の最低労働とは違い、しっかりと顔面を捉えているその  
拳は、一方通行を人形のように吹き飛ばした

「こいつが今言ったことは綺麗言かもしれない、お前から見れば  
滑稽かもしれない。でも、誰かを護ろうとする気持ちをお前が  
踏みにじっていいわけがねえんだよ、三下！」

ツンツン頭を激しく震わすその人物は、過負荷をも打ち消す右腕を  
持つ人物

上条当麻だった

二十八話 「無視していいわけがない」(前書き)

元々は一話に纏める予定がかなり長くなってしまったため、  
二話に分けてしまいました

上条はかなり書きにくいとこの話を執筆していて分かりました  
どうやってあの上条っぱさを出そうかとかなり苦労しましたが、  
結局ただの臭い厨二の台詞しか出てきませんでした

駄目文ですが、どうぞ

## 二十八話 「無視していいわけがない」

数分前

上条は平和な夜道を散歩していた

鼻唄交じりに右手には買い物袋をぶら下げ、  
上機嫌で自分の寮へと帰ろうとしていた

二人分の食事を作るためか、材料は多めだ

以前より少し重たくなっている袋に苦笑いを零しながらも、  
安定した速度で歩道を歩いている

以前とは言っても、本人にはその”以前”の記憶が無いのだが

とある事情により、上条は記憶を完全に失っていた

”以前”のことなど何も覚えておらず、  
自分の身の回りを覚えるのがやっとだった

だが、そんな上条には、一つだけ記憶に残っていた人物が居た

「アイツ…なにを企んでるんだ…？」

そのことを思い出し、独り言を呟いた

家族も友人も知り合いも何もかも忘れた上条が唯一覚えている人物

「球磨川先輩……」

球磨川雪

独特な雰囲気を放ち、目的や思想などが上条にとってはまったく理解不能な謎の人物

記憶があると言っても、かなり曖昧であった

覚えているのは名前とあの異様な雰囲気、そして、現在同居しているインデックスという少女を救ったという事実

何故覚えているのかは本人もわかっていなかった

だが、球磨川だけ記憶に残っていたのは確かだった

そんな上条は、数日前に球磨川と遭遇した

学校の居残りの帰りに騒ぎを聞きつけ、駆けつけたところを遭遇した

記憶ではインデックスを助けた優しい人物だったが、そんな面影など微塵も感じさせない惨状だった

目の前に広がっていたのは幾つもの死体と倒れている二人の人間

その中央には螺子を片手に突き刺そうとしている球磨川

交戦の後、球磨川は撤退し、その意も伝えた

そして、上条は同時に球磨川の狂気を目の当たりにした

記憶とは違う人物

それに僅かな混乱を抱きながらも、現在はその  
目論みを止めようと行方を追っている

そんな上条は、向かい側の歩道で一人歩いている人物に気づく

「アレは…ビリビリ中学生？」

先日遭遇した見覚えのある人物を発見した

ビリビリ中学生こと、レベル5第三位の御坂美琴

記憶を失った上条は昨日偶然再会し、なんとか  
消失がバレないよう話を合わせていた

ちなみにネーミングセンスが記憶喪失以前と  
まったく一緒なのは本人も知らないことだった

そんな御坂の様子がおかしく、不思議に思い上条は後を追った

先日の双子の妹と思わしき人物との遭遇以来、彼女の様子がおかしくなったのは上条も知っていた

「複雑な家庭であまり仲が良くないのだろう」と勝手に解釈し、あまり気には掛けていなかった

だが、今日はさらに様子がおかしかった



その瞳は感情を宿さず、無気力にただ歩いていた

そんな彼女の後を追うこと数分、二人はとある橋へ辿りついた

初めて来る場所だったが、上条はそれが懐かしく思えた

「おいビリビリ」

「ん？　なんだ、アンタか…」

声を掛けると、一瞬驚いたような素振りを見せたが  
上条の姿を確認するとまた無表情に戻っていた

「どうしたんだよ、そんな顔して。まるでこれから  
死に行くみたいな顔だぞ？」

「ッ…！」

何気無く放った一言だったが、御坂は酷く動揺していた

それを不信に思った上条はカマを掛けることに決めた

「そういえばお前の妹に会ったぞ？　昨日の夕方までは  
一緒に居ただけど、途中で逸れたけど」

「…へえ、それは良かったわね」

声は冷静を装っているが、明らかに動揺したような  
仕草を見せていた

「お前、御坂妹と何かあったのか？」

意を決して上条はそう問いただした

「くッ…！ うるさい、別になににも無いわよ！」

威嚇のつもりで身体をビリビリと発電させるそれは、  
やはり上条のあだ名も納得させてしまっている

「嘔吐け！ そんな死に行くような顔してる奴が何も無いわけない  
だろ！」

「うるさい！ アンタには関係ないでしょ！」

他所を向いていた御坂は上条へと向きなおし、無表情から  
怒りに表情を変化させていた

「関係ねえよ！ たしかにそっちの事情に俺は関係ねえよ！

でもだからって、それを俺が無視しても良いことにはならねえんだ  
よ！」

それに対応し上条も劣らないほど声で力強くそう告げた

「何が起きてるかは知らねえよ。お前に何かあったのかは知らね

え。

でも見るからに死にそんな表情の奴なんか放っておけねえよ！」

まったく妥協する様子も見せない上条に、とうとう御坂が折れた

そして彼女は全てを話した

自分のクローンが作られていること、またそれが欠陥固体であり、現在は絶対能力進化実験という実験に参加させられ、何体も理不尽に惨殺されていること

その相手が学園都市最強のレベル5第一位、一方通行であることも

それを聞くと、上条は一言「そうか」と呟き、歩き出した

「待ちなさい！ どこへ行くつもり？」

そんな上条を、御坂が引き止めた

「決まってるだろ」

「駄目よ！ アンタなんか直ぐに殺されるに決まってる！」

自らが相対したことがある御坂だからこそ言えることだった

一方通行の圧倒的な力を目の当たりにし、まったく太刀打ちできなかった自分

レベル5である自身でも赤子のように扱われた故に、上条が勝てるとはまったく思っていなかった

「一方通行の能力はベクトル操作！ 運動量、熱量、光量、電気量、ありとあらゆるベクトルを操ることの出来るの！ つまり、アイツに攻撃なんて一切通用しないし、逆にあっちはこっちに触れるだけで殺すことが出来る！ 核弾頭でさえアイツに傷一つ付けることが出来ないの！ そんな奴相手にアンタが勝てるわけじゃない！」

「それがどうしたっていうんだよ？ まだ直接会っても居ないのに俺が負けるとかそう決め付けるなよ。こんなもん、やってみなくちゃ分からねえだろ！」

「無駄だつて言ってるでしょ！」

感情任せに御坂は上条に向かって電撃を放った

それを上条は右手で受け止めると、電撃は一瞬にして打ち消された

上条の能力、イマジンブレイカー幻想殺しは”異能な能力を打ち消す能力”だった

どんな異能も彼の右手の前では無力であり、たとえ神の奇跡であろうと

それを打ち消せる能力だった

球磨川が肩をつかまれた時に過負荷を失っていたのも、この能力の作用の所為であった

「確かにアンタは不思議な能力を持ってるけど、それでも一方通行アイツ

の前じゃ無駄なのよ！」

「やってみなくちゃ分からねえだろ！ まだ起きてすらいないことに  
なにビビッてんだよ！ お前が挑戦して負けたからか？ そんな理由で諦めてるんじゃないよ！  
たとえ何百回失敗しても、それが諦めて良いことにはならねえんだよ！」

上条は力強くそう言い切った

他人事にここまで必死になれる上条を、御坂は呆然と見詰めていた

元々は一般人の上条が、裏の事情である絶対能力進化実験に自らの意思で関与しようとしている

レベル0の彼がレベル5の一方通行に挑もうとしている

最強と最弱

他所から見れば虫と戦車が戦うようなものだった

なのに、上条はまったく希望を失っていない

それどころか、勝つ気で居た

「本気で勝てるって思ってるの？」

「当たり前だ」

~~~~~

「誰だてめエ？ 次から次へと俺の邪魔をしゃがってよオ。  
今時のガキは全員ヒーロー気取りなんですかア？」

突然現れた上条に、一方通行は機嫌悪そうに問いただした

だが、表面では平静を装ったが、内心ではかなりの焦りを感じていた

仲嶋の最低労働スカルファクションの能力ならまだ攻撃が通るのは分かっていた、  
だが上条の攻撃は見るからには普通の打撃

ただの拳が自分の顔面に突き刺さり、少々混乱していた

また仲嶋のような特殊な能力かと思い、脳の中で  
あらゆる能力の可能性を照らし合わせたが、どれも当て嵌まらない

ただの拳にしか見えない攻撃が自分に通っていること自体がおかしい現象だった

反射の膜を常時展開している一方通行にとって、打撃など  
無意味に等しく馬鹿馬鹿しい攻撃方法だった

唯一反射の膜を外すのは高度な演算を行う時、または

高度な計算や思考を頭の中で開始する時だけだった

しかし、現在の一方通行はそんなことを一切していない

反射の膜が展開されたまま一方通行は攻撃されていた

そして、一方通行はある結論にたどり着いた

仲嶋との戦闘の所為で脳に乱れが生じ、一時的に反射の膜が消えてしまっていた、そう自分に言い聞かせていた

再び上条に意識を向ける一方通行

「それに俺に向かって三下だア？　どこの口が言ってやがる、三下風情がア！」

一方通行は直ぐ側にあった線路を蹴り上げると、それは鞭のように上条に向かっていった

必死に避けながら上条は少しずつ一方通行に接近している

だが、一方通行がそれを許すはずもなかった

高速移動で接近しようと足に力を込め、運動量のベクトルを操作した蹴りを放とうとしていた

「俺を忘れるなよ……！」

後頭部に衝撃が走り、その所為で演算が中止された

後ろには拳を突き出している仲嶋

上条に気を取られ過ぎてしまい、その存在を忘れていた

「どいつもこいつも実験の邪魔をしゃがってよオ、そんなにこのモルモット共を助けてエのかよ？」

「モルモットだと？ こいつらはそんなのじゃねえよ！ ちゃんと命があつて、生きてて、死にたくないって思ってるんだよ！」

再び自分の考えを否定される

仲嶋と同じことを告げる上条に、一方通行はさらに激怒した

「こいつらは欠陥品の出来損ないなんだよ！ ただの作り物のガラクタを殺してなにが悪いンだよ、あア！？」

そんな一方通行の言葉に上条は拳を強く握り締めた

そして、強い眼差しで一方通行を睨んだ

「お前にはまだ何を言っても無駄だな。まだこいつらが生きてねえって思ってるんなら

まずはその幻想をぶち殺す！」



二十八話 「無視していいわけがない」 (後書き)

なんというご都合主義：すみませんでした

しかし、上条を介入させるにはこれしか  
思いつきませんでした

作者の技量不足です

ちなみにこれ以降の描写はしないつもりです

原作と同じ展開になるので

ですから、次回は戦闘終了直後に飛びます

そつえば今気付きましたけど主人公の出番が  
最近ありません (笑)

実はこの方がまだ飽き難かったりします (おい)

## 二十九話 「俺たちの最弱は」(前書き)

今までで一番の難産

それに災いしたのか、執筆途中のこの話が  
四度にわたって消されてしまいました

鬱です…

ちなみに今回で実質的には『妹達編』は終了です

次回で実際には終了しますが、実質的には  
今話で終わりです

それにより、次話で10031号の名前の募集を終了させてもらい  
ます

沢山の素晴らしく素敵な名前を書いてくださって  
本当にありがとうございます

この中から一つを選ぶのは、正直かなり苦渋の選択です(泣)

次話で募集を終了するので、あと一話だけ  
よろしくお願いします

長々と話してすみません、本編をどうぞ

## 二十九話 「俺たちの最弱は」

「ぐッ…！」

再び一方通行に打撃を加えようと接近した上条だが、一方通行は足元の地面のベクトルを操作し吹き飛ばした

だが、それを持ち堪え再度接近しようとする

「遅エよ」

それに一方通行は軽く対応し、再び地面のベクトルを操作した

「おっせエなア」

すると、一方通行は足元に敷いてあった工事用の線路を軽く足で蹴った

その線路はまるで吹き飛ばされたかのように直立した

「そんな速度じゃ100年遅エよ！」

一方通行がその線路に触れると、銃弾のようにそれは上条に向かって吹き飛ばされた

もちろん生身の人間である上条にそれを避けることは出来ず、そのままそれを直撃してしまった

「まだまだこんなモンじゃねエぞ…」

追撃しようとして一方通行は再び足元の線路を手当たり次第  
操作し、上条に吹き飛ばそうとした

「調子に乗るんじゃないぞ！」

だが、後ろで辛うじて立っていた仲嶋が拳を振り上げた

仲嶋の過負荷、最低労働により”殴る”という”過程”を  
飛ばし、”殴った”という”結果”を発生させていた

一方通行は後ろからの不意打ちにより、演算が乱される

すると、さっきまで直立していた線路が一斉に  
糸が切れたかのように倒れた

能力が乱れ、ベクトルが正常に戻った所為だった

「ちッ、オマエを先に殺す方が妥当らしいな」

一先ず上条を後にし、一方通行は仲嶋へ駆け出した

「ぐッ…!？」

仲嶋の方向へ振り返った瞬間、今度は後頭部から  
衝撃が走り、一方通行は前へ吹き飛ばされた

そこには拳を突きつけている上条が立っていた

「（またかよ!! なんなんだこいつはア!?!）」

一方通行は訳が分からなかった

今度は一方通行も気を抜かず、反射の膜をしっかりと展開しているにも関わらず、上条の拳は一方通行の後頭部を捕らえている

つまり、反射にまったく関係なく一方通行を攻撃していた

「クソがア！」

一方通行は闇雲に能力を使用した

辺りのベクトルを根こそぎ操作し、コンテナやレール、鉄骨や鉄柱などが玩具のように吹き飛ばされていく

一本の鉄柱がコンテナへ直撃し、白い粉が辺りに散らばった

「中身は小麦粉かよ…今日はなんか無風っぽいし、ちつとやベエかもしンねエなア」

一方通行は辺りに散らばった物体に気づくと、何かを思いついたように邪悪な笑みを浮かべた

口を吊り上げ、綺麗な弧を描いている

「よオ三下共、粉塵爆発って知ってつか？」

近くのコンテナを上空へ吹き飛ばす

コンテナはそのまま重力に従い、倒れている別の粉へと直撃する

そして

「なッ!？」

「やべえ……!」

二人がそう呟くが、時は既に遅し

二つのコンテナが衝突した瞬間、辺り一面を多い尽くすほど  
巨大な爆発が発生した

その衝撃により仲嶋は吹き飛ばされ、すぐ近くに居た  
上条は背中に重度の火傷を負っていた

二人がそんな状態の中、煙から一方通行が無傷のまま現れた

「ああ死ぬかと思った。いくら衝撃を反射しても、酸素消されち  
やあ

こっちだって拙いんだっつウの。こりゃ核弾頭を発射されても死な  
ねエっていう  
レッテルは外れかア？　まア、確かに核弾頭自体には死なねエけど  
な」

一方通行は基本、どんな衝撃や爆風であろうとベクトルを操作して  
反射できる

しかし、爆発により消し去り酸素が無くなった状態には  
自身の能力では対応できない

故に酸欠状態などには対応できなかった

核弾頭自体には死なずとも酸欠状態により一方通行は死んでしまう

それは彼の弱点でもあったが、同時に最も  
役立たずな弱点であった

球磨川のように酸素を『なかったこと』にしたり、10032号  
のように

空気を分解してオゾンに換えたりなどしない限り、そのような状態に  
持つていくことなど有り得ないことだった

活用できない弱点

この一点を除けば一方通行にほとんどの軍事兵器は通用しなかった

猛毒兵器などが唯一の例外であるが、もちろん二人は愚か、  
妹達の誰一人もそんな兵器は所有していなかった

「でもまあ、オマエ等はそれなりに頑張ったと思うぜ？ 人類初  
じゃねエの？ 俺に攻撃を当てるなんてことをしたのは？」

フラフラと立ち上がっている上条に、一方通行はそう告げた

仲嶋は先ほどの衝撃で頭を強く打ったのか、気を失って  
倒れたまま起き上がっていない

「でも」

気を失っている仲嶋の方へ一方通行は向きなおした

「イイ加減楽になれエ！」

高速移動で仲嶋に接近し、わき腹を蹴り上げていた

「ヒーロー気取りもイイとこだぜ！　ちっと珍しい能力持ったところだ

学園都市最強の俺に齒向かおうなンぞ1000年早エンだよ三下ア  
！」

身体を宙へと蹴り上げ、そのまま腹部へと拳をめり込ませた

気を失ったままの仲嶋はそのまま人形のように吹き飛ばされ、  
近くのコンテナへと激突した

「ハハ！　オマエは確か自分が劣等性だとか抜かしてやがったなア。

まったくその通りだア！　オマエがどんだけ俺に齒向かおうが  
一生俺には勝てねエンだよ！　三下は三下らしく劣等<sup>マイナス</sup>のまま這い蹲  
つてろ！」

仲嶋を嘲笑するかのように一方通行は笑い始めた

正常とは思えない狂気の笑いに、この場に居る者は  
誰もが戦慄していただろう

しかし

「もう一遍言ってみろ！」



背後からの気配に、一方通行はすぐさま振り向いた

目の前には、拳を振り上げ、怒りを露にしている上条

上条の拳は真っ直ぐ一方通行の頬を捕らえ、その拳で打ち抜いた

「こいつだって、御坂だって、『妹達』だって、全力を振り絞って生きてるんだよ!」

その拳は何度も一方通行を捕らえ、学園都市最強の姿はそこにはもう無かった

一方的に相手を倒してきた一方通行が、今度は一方的にやられている最強と最弱の立ち位置が変わろうとしていた

「なのになんで、こいつらはお前の食い物にされなくちゃなんねえんだよ!」

「ぐはアッ!」

顔面を殴られ、一方通行はそのまま飛ばされ、地面に倒れこんだ

一方通行は愕然とした

今まで自分は『妹達』を人形だと思っていた、否、思おうとしていた

当初はそうでなくとも、今までの実験から一方通行は妹達を実験動物だと

自分に言い聞かせ、たとえこれが間違っているとしても止めようとは思おうとしなかった

だが、上条はそれを真っ向から否定している

上条だけでなく、仲嶋も、妹達本人の10031号にも否定されていた

自分に言い聞かせていたことがバラバラに崩れていく

「クソがアアアアア！！！！！！」

辺りを震わすような咆哮

一方通行は立ち上がり、両手を突き上げた

「なッ！？」

学園都市中の”風”のベクトルを操作し、その全ての”力”を上条へと向けた

無風状態にも関わらず、巨大な面積を誇る学園都市全ての風力を向けられた上条は、そのまま吹き飛ばされてしまった

「圧縮、空気を圧縮。圧縮？ 圧縮ねエ」

何かが閃いたように一方通行は再び上空へ腕を突き上げ、

風のベクトルを操作し始めた

高度な演算を行っているのにも関わらず、一方通行は余裕の表情だった

「なんてザマだよ三下ア！ 立てよ！ テメエにはまだ付き合ってもらわねエと割に合わねエンだよ！」

アクセラレータ  
「一方通行！」

そんな一方通行を一人の声が遮った

今度は誰かと思い、後ろを振り返った

「動かないで…！」

コインを指に置き、超電磁砲をいつでも放てる状態の御坂美琴が立っていた

「（なんだよ、誰かと思えばオリジナルの三下かよ）」

その人物を確認すると、一方通行は興味無さそうにそれを見殺し、演算を継続させた

そして、思いもしない光景が広がった

「何よ、コレ……」

一方通行の頭上に広がっているのは、巨大なエネルギーの塊

プラズマエネルギー

学園都市中の風を一点に凝縮させ、一方通行が作り出した、高電離気体

そのエネルギーが放出されれば、この辺りを消し飛ばせるほどの威力を持っていた

無論、それほど巨大なエネルギーに御坂は愚か、仲嶋も対抗できず、

唯一打ち消せる能力を持っている上条は倒れてしまつて動けない

絶望的な状況だった

だが、そこであることに気付いた

「（もしかして…学園都市中の風を集めてるなら、街中に置いてあるアレが使えるかも……）」

だが、自分の力ではどうしようもなかった

御坂はある場所に駆け寄った

「！！ お姉さま、どうかなされましたか？」

そこには、一方通行から隠れるように座り込んでいた10031号が居た

その両脇には、共に気を失っている10032号と仲嶋が寝かされている

「アンタ…！」

10031号の姿を見るや否や、信じられないように目を見開いた

御坂の無意識に放出している電波のレーダーのような  
役割により、御坂は周りに居る人間を感知できる

そして、目の前の10031号を見て驚愕していた

彼女は、以前遭遇した球磨川や清瀬とまったく同じ  
反応を見せていた

しかし、時間が一刻と迫っているため問わないようにした

「アンタにやって欲しいことがあるの！」

その発言に、10031号は返す言葉がなかった

「……すみません、ミサカはお姉さまの力にはなれないと思います」

「は？ そんな訳ないわよ！ だってアンタ」

「ミサカに超能力はありません」

その言葉に、御坂は一瞬意味が分からなかった

「ミサカは超能力を失ってしまい、さらにミサカネットワークへの  
繋がりを断ち切られています。今のミサカには何も残されていま  
せん」

それを聞いた御坂は絶句した

最後の希望、それが途絶えてしまった

欠陥電気とミサカネットワークが無ければ、  
御坂の案は実行できない

そして、とんだ行動だと理解しながらも、御坂は  
気を失っている10032号へ向きなおした

「お願い起き……（冷たい!?!）」

10032号の腕に触れると、凍えるように冷たくなっていた

容態は最悪

だが、そんな状態の中、罪悪感を押し殺して  
10032号に呼びかけた

「今アンタにお願いするのは間違っているのは分かってる。  
これがとても酷いことだっていうのも分かってる。でも、アンタには  
やって欲しいことがあるの！ ううん、アンタにしか出来ないこと  
があるの！」

必死に起こそうと、10032号を揺さぶった

「私じゃ…皆は守れないから…」

その瞳に涙を溜めながらも、懸命に声を絞り出した

「私の代わりに…アイツの夢を守ってあげて…」

元々は完全なる一般人の上条

だが、自らが学園都市の闇に関わり、最強のレベル5と倒そうとしている

自分が引き起こし、自分が止められなかったこの実験を、他人であるはずの上条が請け負った

そんな上条に、御坂は生きて欲しかった

まだ未来もあり、将来もある上条に

「…その言葉の意味は分かりかねませんが…」

突然、気を失っていたはずの10032号から声がした

御坂は驚いたように見詰め、10031号は目を見開いている

「…不思議と心に響きました」

頭を上げ、身体を起き上がらせながら、10032号はそう言った

「ン？　なんだア？」

プラズマのエネルギーを開放しようとしている一方通行に  
奇妙な事が起こった

今まで一点に凝縮していたはずの風のベクトルが、突然乱れ始めた  
次第に不規則なベクトルを取っている風を一点に維持できなくな  
り、  
それによって構成されていたプラズマは消え去ってしまった

そんな不可解な出来事に、一方通行は首を傾げている

「演算ミスか？ いや、俺の演算に狂いは無い。待てよ…この不規  
則に移動している風、  
明らかに自然のモンじゃねエ。それに、急に動き出した風車…まさ  
か！」

一方通行はあることに気付き、すぐさま後ろを振り向いた

そこには、風車へ能力の使用を終え、一方通行を睨むように立っ  
ている

10032号と、彼女を守るように横に立っている10031号が  
居た

10032号はミサカネットワークを通じ、全ての妹達に  
風車の起動を要請し、欠陥電気により生じる不規則な風で  
一方通行の風のベクトル変換を乱していた

それに気付いた一方通行は酷く舌打ちし、彼女たちへ歩き出した



「テメエ……！ 殺す……！」

「この子達には手を出させない！」

10032号たちに歩き出す一方通行の前に御坂が立ち塞がった

オリジナルがクローンを守っている

そんな光景に、一方通行は呆れたように溜め息を吐いた

「はッ！ 調子に乗ってンじゃねエぞ格下ア。オマエじゃ俺は止められねエよ。それはテメエが身をもって知ってンだろ」

御坂は初めて一方通行と相対した時を思い出す

まったく相手にならず、一方的に攻撃していた  
自分がまったく歯が立たなかった

「知ってつか？ 筆記テストつてのは百点満点が限度になってンだよ。それと同じだア。」

能力者のレベルは5までが限度になってンだよ。だから俺は甘んじてこの場所に居座ってンだよ。

分かるかア？ テメエと俺には超えられねエ壁つてのがあるンだよ」

超えられない壁

それは確かに御坂と一方通行の間にはあった

もしレベルの限度が5ではなかったら、一方通行は間違いなく自分とは格上の次元に居る

それは御坂は百も承知していた

だが、そんなことで彼女は退けなかった

妹達のためにも、上条のためにも

「手を……出すな……！」

「ッ……！？」

そんな一方通行の背後から、彼を戦慄させるような声が響いた

御坂はその声を発した人物を見て目を見開いている

一方通行は信じられないように愕然としながら  
その人物を見ていた

「そいつらに……手を出すな……！」

フラフラと立ち上がったのは、ボロボロになりながらも  
力強くそう告げる、上条当麻

「学園都市最強……ねえ。そんなめんどくせえ肩書きを持つてるの  
に、

過負荷一人も再起不能にできないのは呆気ないな」

別の箇所からも、声が響く

一方通行がさらに混乱する中、その声の主はゆっくりと

コンテナの間から姿を現した

そこには、頭から血を流しながらも、はっきりと目を見開いている仲嶋が立っていた

お互い肩を並べながら立つ中、一方通行は二人を見て笑いを零した

「はッ！ 面白エ…イイねエ！」

お前ら…最ッ高にイイねエ！」

そんな二人に、一方通行は狂ったように走り出した

手を突き出し、上条と仲嶋を殺そうと迫っている腕

上条は仲嶋の一步手前まで出ると、向かってくる一方通行と対峙した

「クソがアアアアア…！！！！！！！」

攻撃をかわすと、一方通行はその手で拳を握り、上条に突き刺そうとしている

「なッ…！？」

だが、一方通行のその攻撃を上条は右手で受け止め、外へ弾いた

その所為でから空きになるのは一方通行の身体

それを見た仲嶋は静かに上条の隣へと立った

「歯を食いしばれよ最強」

二人とも、拳を振り上げる

「俺たちの最弱は」

一方通行に向かって走り出す

「ちつとばつか響くぞ!」「」

二人の拳が一方通行の顔面へ突き刺さった



二十九話 「俺たちの最弱は」(後書き)

だ、駄目文過ぎると思います

ほとんど原作通りになってしまいましたし、  
オリキャラもあまり活躍していません(泣)

自分の文才の低さを許してください

今年もあと少しで終わりますね

来年もよろしくお願いします

新年度になるので、自分のプロフィールも  
公開してみようと思います

皆さんにとっては意外なことがあるかもしれません

笑わないでくださいね？

## 三十話 「勝った」(前書き)

この小説の2012年初投稿です！

皆さん、これからもよろしく願いします！

……なのに今回は普段に増して駄目文です(泣)

今回で10031号の名前の募集を終了させていただきます

沢山の応募をして頂き、本当にありがとうございます

全部素晴らしい名前だったので、選ぶのは本当に大変です。まさに苦渋の選択です(泣)

決定した名前は10031号の再登場時に発表させていただきます

### 三十話 「勝った」

「ハアツ……ハアツ……ハアツ……」

肩から息を切らしながら、上条は拳を下ろした

目の前の一方通行は空を見上げるように倒れており、  
ピクリとも動かなくなっている

おそらく気絶したのだろう

それはつまり

「勝った……」

レベル0の上条当麻が、レベル5の一方通行に勝った

多少仲嶋の手を借りたものの、無能力者が超能力者に勝っていた

御坂や妹達を救い、上条は深い溜め息を吐いた

「はぁ……これで一安心だ……」

緊張状態に陥っていた上条がそれを解くと、ぐったりと  
地面に座り込んでしまった

元々はボロボロの状態だったため、その疲労は凄まじい



それに対し、同じく一方通行にトドメを刺した仲嶋は、まるで気絶していたかのようにピクリとも動かなかった

それを不審に思った上条は、彼の顔を除きこむ

仲嶋は啞然としていた

「勝った……のか……？ 過<sup>おれ</sup>負荷が、勝ったのか……？」

絶対に勝利できない、人生の負け組、過負荷であるはずの仲嶋は、一方通行に対して確かな勝利を収めている

最低が最高に勝った

自分の人生で一度も勝ったことのなかった仲嶋は啞然としていた

それと同時に、張り裂けるような笑みを零してしまった

仲嶋は変わりたかった

今まで過負荷としての自分を受け入れ、勝つことや幸せになることなどつくの昔に諦めていた仲嶋

しかし、目の前のレベル0はそれを真っ向から否定していた

たとえ劣等性<sup>レベル0</sup>であろうと、度胸を見せ、優等生<sup>レベル5</sup>に勝利していた

以前球磨川の言った言葉

『劣等性だつて優等生に勝てるんだよ』

最初はまったくと言って良いほど信じておらず、  
馬鹿馬鹿しく思えたその言葉

しかし、先ほど”勝てそう”だと思つと、彼は思わず上条と一緒に  
飛び出した

そして、自分の拳を振り上げ、一方通行に向かつて突き刺した

今まで何の努力もしていなかった仲嶋は、初めて自分から  
”何かが欲しい”と思い、”勝とうと”努力をした

最低労働のようなスキルを使うのではなく、自ら努力して得たいと  
思つたのだ

それが、この上条当麻を通して彼が感じたこと

「たとえ過負荷マイナスだろうが、努力すりゃあ勝てるんだよ……！」

自分に言い聞かせるように仲嶋はそう呟いた

「そついえばお前……」

上条はそう言い寄りながら仲嶋へと近付いた

その顔は少し強張っており、警戒しているようだった

仲嶋の隣に立つと、真っ直ぐ彼の目を見詰めた

「もしかして……過<sup>マイナス</sup>負荷なのか？」

その言葉に仲嶋は静かに頷いた

「じゃあお前、球磨川のことを知ってるのか!？」

その名前を聞いた仲嶋は驚いたような表情を見せた

「おいおい、何でお前が雪先輩を知ってるんだよ？」

「じゃあやつぱりお前、球磨川の仲間なのかよ……?」

信じたくないと言わんばかりに、上条は悲痛な表情で

仲嶋を問い詰めた

まるで、過負荷に対して特殊な嫌悪感を抱いているように

「雪先輩は俺を拾ってくれたんだよ。元々逃げ隠れしながら生きてきたんだが、この前俺に手を差し伸べてくれた。少なくとも恩人としては見てるし、感謝だっしてしてるさ」

そんな上条にまったく気にすることなく、仲嶋はそう言い切った

元々はそこまで球磨川を慕っていなかった仲嶋だが、他の過負荷と同様に感謝だけはしていた

自分に手を差し伸べてくれた球磨川は仲嶋も10031号も例外なく全員が恩人だと思っている

それを伝えると上条は信じられないように目を見開いた

あの球磨川にここまで人望があつた

人間の負の側面の全てを集約し、他人の幸福を破滅させられるようなマイナス性

それほどの男を仲嶋が少なからず慕っていた

「ちよつと待てよ、お前の話が本当なら……」

何かに気付いたように上条はそう呟いた

それを聞いた仲嶋は、口を開いた

「ああそうだよ」

「ミサカも過負荷です、とミサカは貴方の疑問を確証させます」

仲嶋の言葉を遮り、話題の本人である10031号が二人に向かって歩いてきた

その後ろでは10031号と距離を開けながら同じく歩み寄っている御坂と10032号が居る

本人の肯定に上条はさらに目を見開いた

「全てお話ししましょう。ミサカたちは貴方に救われたようなものですから、とミサカは貴方へ恩を返そうとします」

普段はこういうものを断る上条だが、今回だけそれを受け入れた

球磨川雪の、過負荷の情報が少しでも得られると思った  
上条はあえて話を聞いた

御坂も同じ考えなのか、同じく10031号の話を興味深そうに聞いている

「貴方は覚えていないかもしれませんが、ミサカは  
貴方と初めて会ったクローン体。シリアルナンバー検体番号10031号です」

「10032号以下！？ ふざけないで！ 1号から10031号までは

一方通行に一人残らず殺されたはず！ アンタのそれはありえない  
！」

10031号の発言を御坂は真っ向から否定した

すでに絶対能力進化実験は半数は終了していた

実験は10032次実験の失敗により中止されるはず

つまり、10031号は殺されているはずだった

なのに目の前にはその本人がちゃんと息をしながら生きている

その矛盾点を指摘し、御坂は否定した

「はい、確かに一方通行は10031号までの妹達を殺しました。  
それは

ミサカも例外ではありません、とミサカは悲痛な記憶を思い出しな

がら貴方に告げます」

「ならアンタは何で生きてるのよ!」

「球磨川さんのお陰です」

彼女は短くそう告げた

その言葉にこの場に居る全員がキョトンとした

「アイツのお陰?」

「そうです。ミサカは球磨川さんのスキルにより生き返ることが  
出来ました、とミサカは信じ難い事実を告げます」

その言葉に全員が驚愕していた

元々球磨川的能力を知っていた御坂は、あの  
時の却本作りの効力を思い出し、苦い表情をした

そして、同時に思考を張り巡らせた

オールフィクション  
大嘘憑きの能力を思い出し、その可能性を全て考慮させ、  
ある結論にたどり着いた

すべて なかったこと  
”現実を虚構にする”

つまり

「……アンタの死を『なかったこと』にしたとでも言うの?」

「お姉さまのご察しの通りです、とミサ力はお姉さまの結論を肯定します」

10031号は静かに頷いた

その事実の上条はただただ愕然とするばかりだった

死をもなかったことにするほどの能力

一種の治癒能力と上条は推測していたが、死からも回復できるほどの能力だと思い込み、愕然とした

「尋常じゃない治癒能力だっていうのかよ……」

「いいえ違うわ。あいつの能力はそんなに前向きな能力じゃない」

もつとドロドロとした黒い能力だ、と御坂は付け足した

「流石はレベル5第三位だな。過負荷つてのを早くも理解してるじゃないか。」

そうだ、俺達のマイナスにそんな前向きな能力はないよ。雪先輩だって例外じゃない

『すべて なかったこと現実を虚構にする』、それが雪先輩のオールフィクション大嘘憑きだよ」

「マジかよ……」

そう呟きなら、上条は溜め息を吐いた

その圧倒的な理不尽に、彼は驚きを通り越して呆れていた

「あの……」

この場に似合わない、気弱そうな声が響き渡った

その声の方向へこの場に居る四人全員が顔を向けた

「仲嶋さんとミサカさんのクローンのお迎えに来たんですけど……」

弱々しくそう言うのは、一人の少女

見るからに中学生低学年ほどの背丈しかないその人物

その所為か長い黒髪は腰まで届いており、まるで  
子供のような幼さに見えていた

「なみだ涙紗……」

過負荷サイドの高校二年生、雛像涙紗だった

「まさか……お前も過負荷なのか？」

「あ、うんそうだけど……」

上条の問い掛けにオロオロしながら答えていた



かなり気まずそうな顔になると、そつぽを向いた

自分の過負荷、『無実殺人』を思い出してしまい、その自分の凶暴性を嫌悪してしまっていた

自己憎悪に浸っている所為か、自分が過負荷だと言いたくなかった

「じゃあな上条」

仲嶋はそれを見ると上条に軽く手を振り、雛像へと歩き出した

その後ろを10031号が追いかける

「待て！ 何で俺の名前を知ってるんだ？」

「雪先輩から聞いたんだよ。お前には手を出さなって言っていた」

それだけ告げ三人はこの場を去っていった

残された上条、御坂、10032号はしばらく立ち尽くしている

「過負荷……そろそろ本格的に考えないといけないわね」

御坂はそう呟いた

あの一方通行相手に攻撃を通らせた過負荷

その脅威を改めて認知していた

「アンタはどう思う？　少なくとも、私は実力行使してでもアイツ等を相手にするわよ？」

上条にそう問いかけた

元々争いを好まない上条は、通常なら話し合いで解決させようとする

それを知っていた御坂は自分の意を伝え、上条にそう訊いていた

「……分からない。少なくとも、球磨川とは話し合いは出来ないと思ってる」

「球磨川とは？」

明らかに球磨川を強調している上条に、御坂は首を傾げている

「でも、俺は今日で確信した。たとえ球磨川がまったく救いようのない  
ような最低野郎でも

他の連中なら助けられる気がするんだ」

そう強く言い放った

先ほどの仲嶋の態度、それは明らかに不自然だった

いや、一方通行を倒したこと自体がおかしかった

仲嶋の話からの”過<sup>マイナス</sup>負荷”の特徴が本当ならば、  
一方通行を倒すことなど出来なかったはず

だが、目の前には気絶している一方通行が倒れている

”勝利”を得られないはずの過負荷が”勝利”を得ていた

「幸せに”なれない奴”と”なろうともしない”奴では全然違う。  
球磨川はなろうともしてねえんだよ。それはもう平和的に解決できるはずがねえ」

そこで上条は言葉を区切った

「でもな、まだ”幸せになりたい”って思ってるんなら、  
俺はそれを手助けしてやりてえ。球磨川は間違ってる

たとえ過<sup>マイナス</sup>負荷だろうが、最低だろうが、最弱だろうが

人間には幸せになる権利があるんだよ」

力強く、そう言った

幸せを”諦めた”過負荷たちと幸せを”求めない”球磨川との違い

似て非なるその連中を、上条は救おうとしていた

どんなに理不尽で出鱈目な能力を持っていようと、過負荷も

同じ生きている人間

人間なら誰にでも生きる権利もあり、価値もある

今朝の10031号と同じことを言っていた

「もし球磨川がアイツ等の幸せになれる権利を奪ってるんなら、俺は球磨川と戦うつもりだ。たとえインデックスを治してくれた人でもな」

決意を込めた目で御坂にそう告げた

覚悟を決め、球磨川を相手にすると誓った

唯一救いようの無い人物の球磨川とは話し合いではなく、暴力で解決させるという方法しか思いつかず、上条は内心ではかなり悔しがっていた

球磨川とは戦いたくなかったが、状況がそれを許してくれない

まだ幸せになれる人物が、救える人物が目の前に居る

正義感の強い上条はこれを見過ごせるはずがなかった

「そう……ならお願い、あの子も助けてあげて……!」

御坂が言おうとしている人物は、やはり妹達の一人である10031号

過負荷となってしまう、”最低”の一員へと加わった彼女

不幸しか行き先が無い道を、上条に正して欲しく、恥を  
僣んでお願いしていた

自分では球磨川に勝てない

だが、この男なら勝てる

再び他人に頼ることになってしまい、御坂は  
拳を強く握り締めていた

そんな彼女に、上条は微笑みながら告げた

「アイツは俺が必ず救い出してみせる

これも約束だ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1468y/>

---

とある転生者の過負荷（マイナス）

2012年1月8日20時45分発行